
激愛

Lavia

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

激愛

【Nコード】

N74680

【作者名】

L a v i a

【あらすじ】

高校の入学式 引き寄せられるように 絡まった視線。

まるで魔法にかかったように

彼のことで頭が一杯になった。

禁断の恋……

彼は先生……………

そして…………

もうひとつの真実を知った時

「ねえ…誰を見てるの？」

「恵美を見てるよ…………。」

「うそつき…………。」

私の恋は 悲しい恋へと変わっていく…………。

出会い 一話

よく晴れた日だった。

私の名前は 小山内 恵美

「めぐり用意はできたの？」下からママの声がした。

「待ってもう少し」

私は鏡の前で 新しい制服に身を包んで
ニッコリ微笑んだ。

「うん!! オッケ!!」

めっちゃ可愛い」と 自画自賛……。

じゃないと誰も私を褒めてはくれないから
でも…絶対に可愛いでしょ…

薄茶色の髪の毛は もう学校に違反じゃないこと
登録済みだし 多少ぽっちゃりだけど……
まだ許される範囲だと 自分は思っている。

中学の時は 内申に響くから 大人しくしていた
スカート丈も 今日から ちゃんと短くできる。

「今日から高校生なんだ…。素敵な出会いがあるかな。」

鏡の中の私は 希望に満ち溢れていた。

絶対に行きたかった学校だった。

だから必死な受験勉強……内申あげるための努力

頑張った自分が今 その高校の制服に袖を通す。

だから楽しくない訳がない」

「でも もうすこし痩せた方がいいかな」

背中越しの自分を確認

「きっと恋でもしたら 痩せるよね……」

「めぐぐ何してんの……!?」

ママの声」

私は階段を 駆け降りた。

リビングでは 両親が待っていた。

二人は目を細めて 私を見つめた。

「ごめんね…今日一緒に行ってやれなくて。」
ママが申し訳なさそうに言った。

うちは自営業で 両親とも多忙だったから
学校行事は 運動会以外はなかなか参加が難しかったけど

それでも時間を見つけて 来てくれるのが
とっても嬉しかった。

「いいよ、今日は平日だもん。
それに高校生なんだし……いつまでも子供じゃないよ。」

「高校生か……。
早いもんだな……。」
パパの細い目がなおさら細くなる。

「千夏にソックリになってきた……。」

「あ……そうそう
おねえちゃんに挨拶していかなきゃね」

私はいつも美しい花に囲まれた仏壇で
お線香をあげた。

「おねえちゃん めぐ高校生になったよ。
おねえちゃんが通ってた学校
おねえちゃんと同じ制服……
似合うでしょ？」

私は くるっと 回った。

遺影には 本当にそっくりな おねえちゃんが
微笑んでいる。

私よりは やせてるけど……
そしてもっと悔しいけど 美人

おねえちゃんは 高校三年生の時
交通事故でこの世を去った。

私は その時五歳だった。

記憶はとても曖昧だけど……

時々 その記憶が頭をよぎることがある……。

それがとても不思議だった……。

二話

おねえちゃんの笑顔は優しかった。

私が強烈に覚えている記憶が
二つあった。

大きな一本の樹木によしかかり 男の人が立っていた。

私はその人に向かって走っていく。

その人は私を高く抱き上げて
何かを言っている。

振り向くと 優しい笑顔のおねえちゃん
とっても幸せな気持ちになった。

それからもうひとつ
外のベンチに雪をかぶった男の人がいた。

私はその人に抱きしめられた。
その人は泣いている……。

冷たい体に抱きしめられて

言葉は覚えてないのに…ひとつだけ…覚えてる。

「大丈夫だよ…。めぐがいるから…」

それが本当の記憶なのか 夢なのかは私の中ではわからないけど
きっと私を抱き上げてくれた人と

ベンチで私を抱きしめた人は
同じ人なんじゃないかと思う……。

根拠はない……。

だってそれが 夢なのか現実なのかわからないから……

おねえちゃんが死んでしまった年頃が
私に近くなると

毎日手を合わすおねえちゃんの笑顔に

「幸せだったの？」と問いかけることが増えた。

おねえちゃんを知るにはあまりにも 記憶が幼すぎて
私はほとんど覚えてない……。

おねえちゃんの部屋はそのまま

毎日ママが片づけているから
多分両親の中でも 時が止まっているような気がする。

だから・・・
たまに・・・たまにだけど

私を見てる？ そう聞きたくなる時があるんだ。

私を見ながら まだおねえちゃんを見てる
そんな気がする と 無性に寂しくなる……。

そっくりという言葉は 本当は大嫌いで…………

私は 恵美 だから!!

そう叫びたくなる。

おねえちゃんが悪いわけじゃないけど・・・
いい子にしていなと

両親は私のことなんて 愛してないのかな って
心の底で問いかけている。

ここ的高校に行きたいと思ったのも
正直 小さい頃からの両親の暗示も大きかった。

でも両親を喜ばせたい

両親に一番に愛されたい

私はいつも屈折している心を 隠してきた。

いい子でいたらきつと 愛してもらえるんだ……

おねえちゃんの遺影を見つめた。

きつとね…おねえちゃんの死んだ歳を超えたら
私はやっと両親の愛情を

一人占めできるんじゃないかなって思ってる……。

千夏にそっくりな 恵美じゃない。

私は 恵美 誰がなんて言っても 私は私なんだよ……。

両親が私をかえして おねえちゃんを思い出すのが一番切なかった
……。

後もう少し 我慢したら……
おねえちゃんの歳を追い越したら……。

それまでの我慢だよね…私はそう言い聞かせていた。

三話

学校に向かう道を

歩きながら そんなことを考えていた。

でも……

きっと高校生になったら 何かが変わるかもしれないから

楽しむんだ!!!

私はいつものように 元気に走り出した。

陸上部に入ろうか

バスケットしようか

考えることは希望に満ちている。

「めぐる」

呼ばれた声に 振り返った。

「あゝ志摩ちゃんゝゝ」

同級生の志摩ちゃんが 走ってきた。

「同じクラスになるといいねゝ」

志摩ちゃんが言った。

「ホントだねゝゝ。」

親と一緒に生徒たちをかき分けて 私と志摩ちゃんは
クラス表に集まる人たちをかき分けて
一番前に行った。

「うわゝゝ!!!」

「同じクラスだよゝゝ!!!」

私たちは ピョンピョンと飛びあがった。

なんとか知ってる顔も数人いて ホツとした。

よかった……

「みんな頭がよさそうだね。」

志摩ちゃんが言った。

「うん：なんかほんとよさそう……」

おねえちゃんは学年二位だったってママが言ってた。

私はどんなに頑張っても ここでは50番に入るか 入らないか

いいよ 入っちゃえばこっちのもんでしょ……

席が一番前だった。

うわ……なんで お から前がないんだ……

古さが歴史ある由緒正しさを物語る。

おねえちゃんは どの教室で勉強してた？

どんな男の子と恋をしたの？

教室におねえちゃんの姿を 想像する。

「このクラスの担任の佐藤 敏夫です。
教科は数学 一年間仲良く やっていきましょう。
それでは 入学式が始まるから
出席番号順に廊下にならんでおけ。」

怖そうな ゴリラのような先生……。

先が思いやられる……。

「一番前〱小山内 恵美〱！！！！」

「あ……!! はうい!!」

慌てて廊下に飛び出した。

四話

なんでよりによって 一番前とか・・・最悪だよ・・・。

ゴリラにもう名前覚えられたし……

それに一組だから……

吹奏楽部の演奏が流れた。

誰も来てないけどドキドキしてる。

「一組が入場します。」アナウンスが聞こえた。

扉が開いて 体育館のステージが視界に入る。

深呼吸して 会場に入っていた。

その時だった……。

吸い寄せられるように 私の 視線が一人の若い先生に集中した。

それに気づいた先生と目が合った。

なんで・・・？

どうして私は　あの先生のこと見てるんだろう……。

私の視線はそこから動けなくなっている。

きっとあの人　私がおかしな生徒だっと思ってるよ…

でもぶつかった視線は　なぜか先生の視線もとまったままだった。

行進して進んで行っても

私と先生の視線は　絡みついている。

誰？あの先生　知ってる人？

いや…知らない…全然知らないもん

私と彼の時間が 止まった。

彼は 先生だった。

そして私の初恋の人になった。

魔法にかけられたように 一瞬にして私の心の中に
彼が住み着いた。

なんで…全然知らない人なのに……。

担任のゴリラがクラスの生徒の名前を
呼び始めた。

そして

「小山内 恵美」

私は席を立って

「はい」と立ち上がった。

彼の視線を一身に受けながら……………

心臓がキュンとして 私は思わず胸をおさえた。

まさか…先生に恋をするなんて

私の高校生活のプランには出てきてない……………。

彼のこと…知りたい…………

私と先生の視線は　まだ　絡み合っていた・・・・・。

五話

吸い寄せられるように 見つめあった

溝端 陽之介 28歳 独身

3年1組 担任
担当教科 英語

3学年生活指導主任

女子生徒に絶大な人気があるけど
性格はどちらかと言えば
冷たいらしい……。

どうしてあんなに 長い時間見つめあったんだろう。

私は彼が 自分の担任じゃないことにホッとしていた。

ゴリラを見ながら・・・
これがあの彼だったら

私は授業どころではなかっただろう……。

なぜ彼も私を見ていたんだろう……。

一目ぼれは私だったかもしれないけど
間違いなく彼と 見つめ合った時間があった。

変な生徒だ

そう思われたら恥ずかしいな……。

学校で彼に会うことはめったになかったから

こっそり職員室前に行っては彼を探した。

その姿を見ると 胸が張り裂けそうになる。
後姿を 抱きしめたい騒動にかられて
自分が変態なのかと 心配になった……。

なんだろう…

この胸の高鳴り

一目惚れ・・・

何も知らない人なのに…それも先生なんて…

先生と生徒 禁断の恋が許されるわけではないから
とりあえず…この恋は誰にも秘密にしよう。

恋をすると 毎日が楽しいことを知った。

1日何回 彼を見たとか…

彼に会うための努力をしたり

それから鏡を見る時間が長くなって

私は 恋する楽しさを…知った……。

「めぐ 最近可愛くなったよね。」

志摩ちゃんがそう言ってくれた。

「そう？」と言いながら 嬉しくなった。

誰にも話せない恋をして……

私は帰ってくると おねえちゃんの遺影に話しかけた。

「今日はね……3回すれ違ったの。
目は合わせてくれなかったけど……」

それでもよかった……。

「好きです…」そういつか 胸を張って告白できる女の子になりた
い。

そう思えるだけでも
毎日が楽しくて 嬉しくて仕方がなかった。

私の初恋・・・

禁断の恋のはじまり はじまり ……。

六話

「おねえちゃん……
めぐねえ…先生探すのめっちゃうまくなったよ。」

話す相手のない恋バナを
微笑むおねえちゃんにしている。

「んでね〜今日はやっと
目が合ったの〜でもほんと一瞬だけだね。
どうしてあの日はずっと見ててくれたのに
最近は私の視線に気づいてくれないんだろう…」

そうなんだ……。
私は相変わらず 吸い寄せられるように彼を見つめても
彼は私の視線を そらすようにうつむいた。

「先生ってなんか…悲しい顔してる気がする……。
何かね…何だろ…遠くを見てるの……。
気のせいかな……。
おねえちゃんは恋してた？
彼氏いた？私の覚えてる人はきつと
おねえちゃんの彼氏だよね？」

そして雪の日 泣いてた人も……
私は先生に好きになってもらいたい。」

返事のない一方的な 恋バナだけど
それでも話す相手がいるだけでよかった。

「そういえば：おねえちゃんのアルバムとか
どこにあるのかな。」

私はきれいに片づけられたおねえちゃんの部屋をあけた。

ママは毎日 どんな気持ちでこの部屋の掃除を
しているんだろう……。

壁にかけられたたくさんの賞状が優秀さを物語り
読書が好きだった本棚には
あまり興味のない分野の本がびっしり並んでる。

「漫画の方がおもしろいんだけどね。」

一冊の本を手にして パラパラめくっていたら
一瞬 何か書かれていた。

ん!?

私は慎重にそのページまで戻るけど
なかなか開けず

しまいには一枚一枚めくって探した。

あつた…!!

そこには

『7時にいつものところで……
ずっと俺のそばにいてください。
結婚しよう。』

日付は 3月2日 Konta と書かれてあつた。

結婚!?! Konta!?! って彼氏の名前!?!

おねえちゃんに結婚を誓い合った人がいたんだ。

でも…でも…おねえちゃんの命日は 3月3日 雛祭りの日…

「めっちゃ…悲恋じゃん…」

その日から私はおねえちゃんの恋を知りたいと思うようになった。

七話

「ママ」

いつものように仕事から帰ってきたママの手伝いをしながらキッチンに立った。

「学校どう？ 慣れた？
カッコいい人見つけた？」

「ううん、ガリ勉が一杯だもん」

先生のことなんて絶対言えない。

「進学校だからね。高校時代はもう少し我慢して教育大出て めぐには教職についてもraitたいわ。おねえちゃんの果たせなかった夢なの。めぐがやりたいこと見つからないならママもパパも先生になってほしいんだけど…」

小さい頃から聞かされていた。

おねえちゃんの夢を引き継いでほしい

愛されたい私は　まだ幼かったから
それを素直に聞いてたけど……
でも…最近

違うだろ？

と思っている。

またおねえちゃんと私を重ね合わせて……
私を何だと思ってるの？

そうはつきり言えたら　どんなにスッキリするだろう。

でも私には言えないんだ……。

両親をガツカリさせたくないから
愛されたいから

「見つからなかったらそうするよ。」って答える。

「おねえちゃんってどうして
そんなに先生になりたかった？」

「子供が大好きでね 小学校の先生になりたいって
小さい頃からの夢だったのよ。
それに向かって頑張ってきたのに……」

ママの顔が曇ってきた。

「あ…おねえちゃんって恋人いたの？」
慌てて話しの方向を変えた。

ママがもっていたスポンジをシンクに
叩きつけた。

え！？

私もママの態度に ビックリして渡そうとしていた
コップを落とした。

「いないわよ！！千夏はそんなチャラチャラした娘じゃないから！

「！」

あきらかに変なママに私は茫然とした。

しばらく間があって……

「あ……ごめんね……。なんかちょっと思い出して……。気を悪くした？ごめんね。」

慌ててママは手を洗って

私の頭をいつものように撫ぜた。

「ごめんね」

「いいよ、大丈夫だよ」

そう答えながら 私はもっと知りたくなった。

おねえちゃんの恋……

おねえちゃんの死…

そして私の記憶に残るあの人は……

「千夏…死んじゃったのよね…。

みんなみんな あいつのせい……。」

ママの一人言が 呪いの言葉のように聞こえた。

あいつ……。

八話

あいつ・・・

ママが言った あいつって
おねえちゃんの本に書いてあった

結婚しよう

って言ってた人のこと……？

「おねえちゃん…おねえちゃんの恋って
めっちゃめっちゃ悲しい恋だったの？」

微笑むおねえちゃんには
そんな悲しい顔なんて想像できないけど……。

私はまだほんとの恋を知らないから……。

おねえちゃんのアルバムを探しだした。

だけど恋人のこの字も写ってない。

たくさんの友達に囲まれて中心で笑うおねえちゃんが

自慢の娘だったのは わかる気がした。

ママが許せないという あいつ に会ってみたい。

きつと優等生だったおねえちゃんに恋人ができて
パパとママは猛反対をした。

そしておねえちゃんの事故は
あいつが関わっている……。

結婚しようってプロポーズした次の日
おねえちゃんは死んだ。

私は幼すぎて 事情が全くわからない。

だけどいつも忘れられない自慢の娘が
両親をどういう風に

悩ませたのか…それも知りたい……。

おねえちゃんだって反抗したなら
私だっていい子でいる必要はないじゃない……。

ママが隣のおばさんと立ち話してた。

「めぐちゃんの制服姿見た時
ちーちゃんが戻って来たような錯覚したわ。」

「なんだかね……。
親でもドキッとするくらい千夏と恵美はよく似てるわ。
性格はあんなに違うのに……。」

「ちーちゃんが生きてたら今頃28歳くらいで…
きっと美しい娘さんだったんだろうね……。」

隣のおばさんの言葉に
ママが涙ぐんでいる。

いつまでおねえちゃん
の存在に縛られて
ママは生きていくんだろ
う……。

私は絶対 大学は地方に行
こうと誓った。

九話

「小山内!!!!」

ゴリラに声をかけられた。

「は……はい!!!!」 私はあまりの大きな声にびっくりした。

「おまえは陸上部に入らないのか？
足が速いんだろ？」

もったいないなく陸部の須藤先生が 考えてくれって言ってたぞ。」

「あ……部活は入ろうとは
思っただけど……まだ決めてないんです……。」

「暇を弄ぶから部活はしたほうがいいぞ。
大学の推薦とれるしな……。
考えておいてくれな。」

「はい……。」

あんなに入学したらはいると思ってたのに
私の頭の中は

違うことでいっぱいだったりする。

今日はまだ先生に会ってなかった。

「あ…そうだ小山内
おまえのおねえさんはうちの学校だったんだって？
理事長が会いたがってたぞ。」

「理事長？」

「入学式の時 校長先生の前に話してただろう？」

「あ…はい…」

なんでおねえちゃんを知ってるのかな…」

「うちは私立だから…先生たちは歴史が古いんだよ。」

おねえちゃんを知っている……

「どこに行けば会えますか？」

「たまにしかこないけど

今日はいらしてたなく確か……

放課後 職員室に来なさい。

もし俺がいなかったら 誰か先生方に声をかけて

理事長先生に会いに来たって言えば

連れていってくれるから。」

「はい！！！！」

職員室なら 先生に会えるかも・・・。

今日はまだ会ってなかったから

私は 心の中で ラッキーーと叫んだ。

おねえちゃんを知っている理事長先生

どんな話が聞けるかな……。

放課後のことで頭がいっぱいになった。

十話

放課後跳ねるように 職員室に向かって深呼吸して
ドアを勢いよく開けたら

ドン！！！！

誰かとぶつかって私は廊下に吹っ飛んだ。

「ごめん！！！！大丈夫か！！！！」

「は……い……」

私は少しふらつきながら相手の差し出す手をとった。

その手を握った瞬間

ハッとして顔をあげると

私の視界の前にいるのは 彼だった。

「大丈夫かい？」

近くでみると先生の目って 鋭いつり目なんだ……。でも涼しげでキュンとしちゃう……。

ドキドキ……

心臓の音聞こえてないかな……。

「すみません」 私はその手につかまった。

一瞬 時が止まった気がした。

たくさんの人の行きかう学校の中で 私と先生以外何も見えなかった。

しばらく間があって先生が
「何か用？」と聞いたから 私は慌てて

「理事長先生に会いに来ました。
1年1組 小山内 恵美 です。」

「理事長？あ…それじゃついてきなさい。
僕も今 行くところだったから……」

なんて なんて ラッキーなんでしょう…

私はスカートをなおして
彼の後について行った。

背が高くて ガッチリしてて めっちゃいい匂いがした。

穴があくほど 堂々と彼の背中をガン見した。

時間が止まって 彼とずっとこうしていたいな…
私は夢の中にいるようだった。

理事長室という部屋についた時
彼が私を振りかえった。

そして コンコン とドアをノックした。

「溝端です。」

私も彼の後について理事長室に 入った。

大きなテーブルには 大仏にソックリな理事長が座っていた。

「溝端先生 その生徒は？」

「あ…1年1組の 小山内 恵美です。」

私は慌てて名前を言った。

しばらく間があって理事長が

「あ……！ 小山内 千夏 さんの！？」
とめちやめちや大きな声を出した。

「あ……はい妹です……。」「私はその迫力に負けそうになった。

十一話

「千夏くんの妹さん!!!!
いやゝ大きくなったね。」

大仏さまが近づいてきた。

「え…私を知ってるんですか？」

「僕が会った時は まだ君はこんなくらいだったかな。」

自分の腰くらいを手を合わせた。

「優秀な生徒で わが校の誇りだったんだよ。
きみは おねえさんにそっくりだね。」

また言われた……

「よくいわれますが 私は姉のように優秀ではないんです。
だからちよっとプレッシャーなんです。」

「そうだね きみはきみだからね。
そうか あの時の小さい子がうちの生徒か……。
ご両親はお元気かな？」

「はい。忙しくしてますけど。」

「そうか。それはよかった。
おねえさんに負けないように頑張ってくれ。」

「はい……。ありがとうございます。」

私は理事長に頭を下げて 彼の前を通って
ドアを開けた。

外に出る時

「溝端先生 お見合いの話 考えたくれたかな？」

大仏の声に私はドキンとして 出るふりをして
ドアを少し開けて中の様子を伺った。

お見合い？

「せっかくですが…まだ結婚は…考えられなくて…」

彼の声がする。

「もう先生も家族を持ってもいいのにな…。
先方さんは是非って言うてるから　なんとかその気になってほしい
な。」

「ありがとうございます。
もうすこしいろいろやりたいこともあるので…」

私はホッと胸をなでおろした。

「そうか…また声かけてみるよ。」

「すみません……」

彼は頭を下げて こっちに向かってきたから
私は慌てて 廊下を走りだした。

途中 つまづいて転ぶ……。

かっこわるい……

慌てて立ち上がった。

立ち聞きしてたのわかったかな……

「ケガしなかったか？」 後から彼の声がした。

私は恥ずかしくて 真っ赤になった。

「盗み聞きした？」彼が私を覗き込んだ。

私は魔法にかかったように

「はい…」と答えた。

彼は 私を見て優しく微笑んだ。

「先生・・・私のこと知ってますか？」

思わず聞いてしまった。

先生は キョトンとした顔をして

「全然知らないよ。」と言った。

じゃあ…どうして私と先生は 見つめ合ったの？

あんなに引き寄せられるように……。

告白 一話

人に気配が何もない廊下だった。

さっきまであんなに 騒がしかったのに……

まるで私と彼を 二人つきりにしようとだれかが魔法をかけてくれたように……

私は少し赤くなった膝を撫ぜた。

「おっちょこちよいだね……。 」

冷たい先生と噂の彼は めっちゃ優しくして
私は驚いた。

「私の通信欄にはよく書かれる
チャームポイントです。」

彼が声を出して笑ったから 私はビックリした。

「小山内はおもしろいね。」

彼はまた笑った。

「先生……。」と呼びかけた瞬間に私にまた魔法がかけられた気がした。

「ん？」彼の甘い声が私の中をすっぽりと占拠してしまう……。

おねえちゃん…力をかして……

こんなチャンスないよ……………。

「先生…私…先生が……………好きになりました。」

顔が真っ赤になって
爆発しそうになっている。

彼からなんて拒否られるか
私は体を固くして彼の言葉を待った。

私を支えてくれた

彼の手が私の手に触れた。

「これから言うこと 暗記しろよ。」

そう言うのを待ち合わせの場所を
早口で言った。

そして何事もなかったかのように
彼は私から離れていった。

それからすぐまた私の周りはざわついた。

さっきまでみんなどこにいたの？
そう聞きたいくらいだった。

私と彼の間には何か 力があるのかな。

おねえちゃん…これって受け入れてもらったの？

自分の積極的さに驚いた。

私ってこんなに積極的だった？

これにも

何か後押しされた気がした。

きつと おねえちゃんが応援してくれてるんだ

とりあえず…待ち合わせの場所に急がないと……

私は全力疾走で廊下を駆け抜ける。

彼に会うために……

これから始まるかも…知れない…恋のもとへ……

二話

彼に言われた待ち合わせ場所に急いだ。

ドキドキ……心臓が…

走っている苦しさとは違う

胸の鼓動が恋を教えてくれる。

いいなって思った子はいたけれど 恋までいかなかった。

友達が付き合い始めても

別にうらやましいとかも思わなかったし……

もしかしたら自分は男の子に興味がないのになって…

思ったりして……

ただ女子の気の合う子たちと 昨日のテレビやドラマの話をして

それだけで不自由はなかった。

友達の恋バナを聞いたたり

「めぐは好きな人とかいないの？」

と聞かれても

「いないんだよね」と答える。

なのにそんな私が あの日から
それもずーっと年上の人に恋するなんて
想像もしていなかったけど……

それも告白までして今 こうして彼を待っている。

彼を自分のものにしたい

そう思った自分が咄嗟にとった行動だったのかな……。

約束の時間になった。

私は周りを見渡して 彼がどこから来るのかと
キョロキョロしていた。

その時一台の車が スーツと私の横についた。

!!???

窓があいたら 彼がハンドルを握ってた。

「乗って・・・」

私は慌てて助手席に飛び乗った。

「待ったかい？」

彼の声は甘く胸に響く

「いえ……」

緊張感で息苦しくなる。

車の中に流れる 人気グループの曲に耳を澄ます。

けっこういう曲なんだな……

盗み見する彼の横顔に 見とれてしまう自分

だけどガン見するのも アレだし……

なんか話たほうがいいけど……

頭の中では焦って混乱してうまくまとまらない。

「あ…あの…どこに行くんですか？」

沈黙を破って やっと声を出したら少し声が震えていた。

「俺の家だよ。」

横顔の彼が色っぽくて ドキンとした。

三話

男の人の家に行くなんて…ママが知ったら卒倒するよ…。

でも彼は先生だし・・・おかしいことにはならないだろうし
何より行きたい自分がいるから・・・。

沈黙の車の中

胸だけがドキドキと音を立てて

ボーカルの甘くかすれた声が一層私の恋を盛り上げる。

しばらくして車が止まって

ガレージが自動的に上がった。

そして車は静かにガレージの中

「ついたよ。」

彼の声に慌てて車から降りた。

「こっち・・・」

私は彼の背中をガン見しながら：禁断の館に足を踏み入れた。

階段を登ると彼がまたドアを開けた。

「どうぞ。」

私は緊張でコチンコチンになっていた。
思わず玄関のマットに足をひっかけて
前のめりに転びそうになった。

「キャッ！！！」 でも力強い腕の中に 抱きつくように受け止め
られた。

「おっちょこちよいはチャームポイントじゃなくて
欠点なんだぞ・・・。ケガでもしたらどうするんだ？」

スーツの胸に抱かれて私はまた　あのいい匂いに包まれた。

「先生……私……どうしちゃったんだろう…

こんな気持ち初めてで…軽い子だって

軽蔑されたら悲しいけど…ちゃんとわかってほしくて……

あの…えっと…

あ…私何が言いたいかっていうと…」

頭がパニックっている。

「わかってるよ。俺を好きなんだろう？」

彼の甘い声が笑ってる。

「はい…。一目ぼれです。

どうしちゃったんだろ……私……。」

「俺とこうなるのはきつと　きみの運命だよ。」

私は静かに顔をあげた。

彼の顔がこんなに間近にあって めっちゃ緊張してる。

「運命ですか？」 その言葉に胸をうたれる。

彼はニツコリと笑う。

「運命……じゃあ 先生も運命なら
先生は私だけを愛してくれますか？」

額に冷たい唇が触れた。

「うん……。きみだけしか愛さないよ……。
もう絶対に離さないから……。」

甘い言葉に私は気を失いそうになった。

「だから…これは二人だけの秘密だよ。

きつと誰かに知られれば 間違いなく引き離される…。

外に出たら 先生と生徒

それ以上の関係は無 だけど二人っきりの時は

こうしていつも一緒にいよう…。

きみも俺のことを失いたくなければ…わかってるよね？」

「はい！！！！わかってます！！！！」

まさかの展開に動揺しながらも 恋が実ったことには変わりがない。

禁断の恋……。

誰にも秘密の二人の恋……。

「好きです……。」 私はドキドキしながらまっすぐ彼を見上げた。

「やっと……やっと見つけてくれた……。」

彼はそう言うと 私の唇に優しく唇を重ねた。

見つけてくれた？

ふとひっかかったけど…でも幸せすぎてその言葉は
すぐに吹っ飛んで行った。

ファーストキスは

私は彼に支えられなければ 立てないくらい 甘くて…激しいキス
だった。

四話

彼がやっと 唇を離してくれた。

私は恥ずかしくてうつむいた。

「めぐちゃん？」

「え？」

「なんて呼んでほしい？」

「恵美って…呼んで下さい……。 」

彼がにっこり微笑んで

「じゃあ…恵美…ここではなんだし入りなさい。」

私ったら先を急いで 玄関で彼に告白をしてしまったんだ。

うわ…カッコ悪い…

「お邪魔します……。」揃えてくれたスリッパをはいた。

男の人の家という様子が一つも見れなくて
私は誰かほかにいるのかとキョロキョロした。

「先生…一人暮らしですか？」

「うん…そうだよ……」

「めちゃくちゃきれい好きですね。
だって…全然散らかってないもん……。」

「そうでもないよ。

邪魔なものを視界の中に置いておきたくないだけ。」

そう言って壁側にあるドアを開いた。

「なるほど〜」

見えなくていい生活のものがキレイに棚のクローゼットに片づけられてる。

「ここをしめれば キレイだろ？」

彼は舌をペロツと出した。

さっきまで私の舌と遊んでくれてた彼の舌を見て
また頬が熱くなった。

「どうした？」

彼が覗き込む。

「あ…さっきのキス思い出したら 恥ずかしくなりました。」

「恵美は…ファーストキスだったの？」

「はい…」 めっちゃ恥ずかしい……

「相手が俺でよかったかな？」 彼の冷たい指が 私の唇に触れた。

「はい…。最高のファーストキスでした。
ちよっと…激しかったけど……。」

彼のちよっとつった目が色っぽくてゾクゾクする。

「恵美…俺たちの関係を壊されないように……
いい子にしてたら
たくさんご褒美をあげるから……。」

彼が私を抱き上げて ダイニングテーブルに座らせた。

「^ズ褒美って……？」

期待感で声がかすれた。

「二人で気持ちいいと思うこと……」

意地悪っぽく笑って

彼の気の遠くなるような甘いキスが また私を大人の世界に誘って
ゆく……。

五話

「先生…先生…死んじゃう……」

あまりの激しいキスに興奮しすぎて私は 彼から唇を離れた。

「苦しい……ハア……ハア……」

息を整える私を彼が優しく抱きしめてくれた。

「すみません…上手に…ハア…キスできなくて…
初めてで…どこで息を吸ったらいのか…ハア……ハア……」

「ごめん…ごめん…
最初からとばしすぎたね……。」

彼が私の髪の毛を優しく撫でてくれた。

「先生…」

「あ…ここでは先生は禁止にするかな。
なんか悪いことしてる気がして落ち着かない…」

「なんて…呼んだら…？」

「溝端 陽之介…恵美の好きなように呼んでいいよ。」

あゝ夢みたい…夢ならさめないでゝ

「先生…あ…でも先生の名前…呼びづらいです…。」

「いいよ…なんでも…新しい名前つけてくれていいし…」

「ん…」私は頭を抱えた。

「大事なことだから少し考えます。」
私がそう言うと 彼は笑って

「その間に着替えてくるよ。冷蔵庫にジュースがあるから
勝手に出して飲んでていいよ。」

そう言ってリビングのらせん階段を登っていった。

「あゝなんて呼んだらいいのかな……。
今までの恋人が呼ばない呼び方がいい…。
私だけしか呼ばない名前……。」

彼の顔を思い出す。
もうそれだけで胸がときめく……

色っぽい つり目のちょっとキツネ顔の彼……

その時 なぜかおねえちゃんの恋人の手紙を思い出した。

” K o n t a ”

私はその瞬間…決めていた。

「おねえちゃんの恋人と同じ名前にしよう……。」

「こなた……. こんちゃん……. こん…….」

どうしてだろう……

つり目の彼に無理やり こじつけておねえちゃんの恋人と同じ名前にした。

いいよね？ おねえちゃん……

そう彼を呼んだら 少しだけでも

おねえちゃんに近づけそうなのそんな気がしていたんだ あの時……。

六話

階段から降りてきた彼は スーツを脱ぐと
とても若く感じた。

「お待たせ…ジュース飲めばいいのに…」

そう言って冷蔵庫から オレンジジュースを出してくれた。

氷が透明でキレイだった。

「決まりました。」

彼が笑顔で私にグラスを渡した。

「…で何？」彼がまたキッチンに戻っていった。

「こんた…こんたでどうですか？」

しばらく言葉が帰って来なかった。

「あれ？先生？」私は心配になって立ち上がった。

「なんで・・・こんな…なの？」

彼の声が遠くから聞こえた気がした。

「先生の顔がキツネに似てるから……」

またしばらく声が帰って来なかった。

「先生？聞いてますか？」

彼がキッチンから戻ってきた。

「きつねはコンコン…みたいな？」

まさかおねえちゃんの恋人と同じとは言えないから……。

「きつね……か……」

彼が笑った。

「呼んでみて……」

私は深呼吸をして

「こんた……」って呼んだ。

「何？」彼が笑った。

「それから敬語はここでは使わなくていいよ。」

夢みたい……

「こんた……」

「恵美………」

名前を呼び合って 微笑みあった。

「こんた……か………そっか……キツネね……。
なるほどね……。」

こんたが言い聞かせるように つぶやいた。

「気に入らない？」私は恐る恐る聞いてみた。。

「いや・・・気にいったよ。」

こんたは私をまた優しく抱きしめた。

そして

「もう一回呼んでみて・・・」と言った。

「こんた・・・大好き・・・」 思い切ってそう言ってみた。

「もっと・・・もっと・・・言っで・・・」 こんたが私の髪の毛にキスをした。

「大好きよ…離さないでね…こんた……。…」

しばらく何も話さず私たちは抱き合っていた。

「運命を信じるよ……。」　　こんたがそう言った。

私は思ったよりガツチリとした胸に顔を埋めて

　　こんなに最初から幸せでいいの？

急に不安が押し寄せて…だけどその不安を必死にけちらした。

おねえちゃんがきつと　応援してくれてるんだよ…

大丈夫…私も運命を信じるよ……。

こんたの冷たい唇が私の耳に触れた……。

告白 七話

あれから何度もキスをした。

気が狂いそうな甘いキス…冷たい彼の唇が 私と触れ合うことで
熱い唇に変化していく……。

家に戻っても まだ両親は帰ってきてなかった。

私はまっすぐおねえちゃんの遺影の前に座った。

「見てた？おねえちゃん……なんだか
夢みてるみたいで……まだ信じられない……。
こんなに簡単に手に入るなんて
思ってもいなかったわ……。
いいんだよね……。」

おねえちゃんは微笑んでる。

「おねえちゃんの恋人と同じ名前で呼ぶことにした。
おねえちゃんの恋に少しか

近づけないかなって……………。
こんたって…呼んでいいよね…？」

夢のような一日だった。

まるで何かの力が 私と彼をくっつけようと
動いてくれたような そんな気がした。

「彼も私のこと…きっと好きなんだよね？
じゃないと…あんなことしないもんね……」

なぜ彼がすぐに私を受け入れたのかは
これから少しずつ聞いてみよう……。

リビングで電話が鳴ったから 慌てて受話器をとった。

「もしもし 小山内でございます。」

「あゝ三浦です、三浦 マリ です。」

元気な声 誰だろう……

「おばさん？わかる？ 千夏の友達だったゝマリだけど……。」

「あ…母はまだ仕事から帰ってきてないんです。」

「え…？もしかして…めぐちゃん！？」

「はい…そうです。」

「キャ〜〜〜！！めぐちゃんなの！？」

人懐っこいマリさんという
おねえちゃんの友達から電話来た。

おねえちゃんのこと　きっと知っている人

転勤で東京に住んでいたけど　今回ご主人の
転勤で札幌に帰ってきたと
マリさんは話してくれた。

告白 八話

マリさんが

「今近くまで来てるので お参りさせてもらえる？」

と言ったので

ちやうど両親もまだ帰って来ないし
ちやうどいいと思った。

「お待ちしています。」

そう言って電話を切った。

「おねえちゃん お友達が来るって
よかったね……。」

しばらくしてマリさんがやってきた。

ドアを開けた瞬間 「千夏!？」 と声をあげた。

「妹です…。そんなに似てますか？」

「ごめんなさい！！千夏だったら大変なのに…
うん…とてもよく似てるわ。」

ビックリした」そう言ってケラケラ笑った。

大きな花束とお菓子を
仏壇の前に供えながら

「千夏…ごめんね…。ずっと顔出せなくて…。」

何年ぶりだろう…千夏は変わらないけど 私は変わったでしょ？」

そう言ってお線香をあげて しばらく無言で手を合わせていた。

「お茶…入りましたよ。」

私はマリさんをソファアに案内した。

「突然 ごめんなさいね…。違う日とも思ってたんだけど
私も仕事をするからちよっと忙しくなっちゃうし
もう思い切って来てしまったの。
おじさまとおばさまはお元気？」

「もうすぐ帰ると思います。」

「なんかこうしてると千夏と一緒にいるみたい。
ごめんね…気を悪くしたら許してね。
でもほんとに似てるの……。
なんか泣けてくるわ……。」

マリさんはハンカチで涙を拭いた。

「おねえちゃんとはいつの頃から？」

「高校生になって一番最初にできた友達なの。
ずっと仲良しだったの。」

知ってるよね……。

「それじゃあ おねえちゃんの恋人って知ってますか？」

マリさんは一瞬困った顔をした。

「きっとその話はタブー何だと思うわ。
おじさまやおばさまが 嫌がるから……。」

「以前聞いた時は そんな感じでした。」

「そうでしょう……。」

千夏の事故は 彼氏がかかわってたから……。」

「マリさんは会ったことあるんですか？」

「会ったことはないんだけど 話はたくさん聞いたよ。」

「こんたって人ですよね。」

マリさんは驚いた顔をした。

「なんで知ってんの？」

「彼氏の手紙があったから……」

「私も直接あったことはないんだけど……」

学校とかも一緒じゃなくてね……二人は中学生の時に
出会ったらしくて……すごく愛し合ってるって感じで
うらやましかったよ。」

「事故にかかわってるって……？」

「恵美ちゃんはどうしてそんなこと知りたいの？」

「おねえちゃんのことあまり覚えてなくて……
知りたいんです。」

そんなにそっくりなんだったら……なおのこと……」

「わかったけど……両親には言わないでね……」

「ありがとうございます……」

おねえちゃんとかんたのこと……
知りたかった……。――

マリさんに会えたのも 何かの縁……

私はマリさんの話に引き込まれていった。

告白 九話

「おねえちゃん……可哀そう……」

マリさんが帰って私は 笑顔のおねえちゃんを見つめた。
想像はしてたけど……まさかこんなに悲劇的だったのか……と……。

自慢の娘の恋人が 家庭に問題があって ヤンキーだったのが
許せなかった両親と

それでも必死に二人は一緒にいたいと戦ってきた。

中学生のおねえちゃんが 塾に行きたくないって
公園でさぼってたとき こんたと出会って恋に落ちた。

荒れ狂ってたこんたは たくさんの噂を持っていて
みんなが恐れていたけど

おねえちゃんだけは そんなこんたを理解して
こんたもおねえちゃんを信頼していた。

二人の恋を両親が知ってからは それを壊そうとする両親の圧力に
おねえちゃんは悩んでいたんだとか……

燃えあがる二人の愛はどんな障害にも 負けなかった。

卒業式の次の日　マリさんに会いに来たおねえちゃんが　言った言葉

「こんたについていきたい…」

その時のおねえちゃんは　幸せそうで

絶対に結ばれてほしいって思ったと……。

でもその夢は無残に打ち砕かれた。

待ち合わせ場所で　恋人を待ってたおねえちゃんに
信号を無視してハンドル操作を誤った車が
つつこんできて…おねえちゃんをひいてしまった。

おねえちゃんは即死

遺体の横には　夢と希望がいっぱいつまった　ボストンバックが転がっていた。

「顔はね…みたことがなかったけど姿は何度か見かけたの。」

お葬式の日だった…すごい雪でね…会場の外で雪だらけの背の高い
人が立ってた。

みんな　あれがこんたじゃない？と噂してたんだよね。

なんかすごく可哀そうだった。

ご両親は　こんたに殺されたと　千夏の死を嘆いてらしたわ。」

「こんたのせいじゃないのに……」

「千夏は理想を全部持って生まれた　太陽みたいな子だった。
明るくて　元気で　楽しくて　みんな千夏が大好きで……
頭もいいし　スポーツもできて……

ご両親も自慢だったと思うの。

卒業後は教育大の進学も決まって……小さい頃からの夢の
教育者を目指してたから……それも……こんたと出会ってから……
いろいろあったんだけどね……」

「おねえちゃんもいろいろあったんですね……」

「こんたと千夏は　最高のカップルだったんだよ。
大人は嫌がると思う　こんたがめっちゃヤンキーで……暴れてて
そんな子と付き合うのを喜ぶ親はいないでしょ……」

「こんたはそれから？」

「わかんない……。街を出たと思うよ……。それからこんたの噂は全く聞かないから……。この話をしたの 内緒にしてね……。」

「わかってます。」

ありがとうございます。またお話聞かせてくれますか？」

マリさんとアドレスの交換をした。

「おねえちゃんの会いたかった人…探して会わせてあげたいな…」

私は遺影に手を合わせた。

告白 十話

おねえちゃんの部屋で見つけた　こんたの手紙

これを見たおねえちゃんは　どんな気持ちだったのかな……。きつと幸せだったんだよね……。

もしかしたらこの本の中に何か隠されてはいないんだろうか……。

こんたとのこと……。

大量の本の数に　めまいがしたけど時間がある時探してみよう……。

せめてこんたの顔でもわかれば……

今日はいろんなことがあった……。

私の初恋が叶って夢のような時間を過ごしてきた

思い出すたび 胸が熱くなる……。

そしてマリさんの 訪問……。

おねえちゃんと おねえちゃんのこんたの恋を少しだけ知った。
最後は 悲劇的だったけど
いつかこんたにあって おねえちゃんとの恋の話を聞いてみたい……。

私の恋の相手が 先生なんて知ったら
親はきつと 発狂物だ。

おねえちゃんの恋路も邪魔してたくらいだ。
禁断の恋を許すわけがない……。

私が卒業して 彼と付き合ったのなら
きっと何も言わない気がするけど

高校生と先生は絶対にまずいだろう……。

この恋は絶対に 誰にも知られずに……守っていききたい。

頑張ったら ご褒美いっぱいくれるって言った。

思い出して顔がカッと熱くなる。

ご褒美は 二人が気持ちいいこと……

私のこんなと 一つになる日を想像してしまった。

鏡の前で 少しプヨプヨしてるお腹をつまんだ。

やせなくちゃ……

その夜 腹筋百回して 次の朝は筋肉痛で 起きれなくなった。

でも……

愛する人に会いに行く学校を 休むわけにはいかないから……

昨日のこと夢じゃないよね……

勇気を出して 告白して よかった ってそう思った。

甘い時 一話

学校の門には 必ず交代で先生が二人立って
登校してくる生徒に声をかけながら 生徒の服装に乱れはないか確
認する。

今日の担当は……こんた だった……。

私のこんたは冷く 鋭い目をして生徒たちの
服装をチェックしていた。

みんなは知らないんだろうな……

彼が あんなに情熱的なキスをすること
そしてめっちゃ優しく微笑むこと……

思い出すと またキュンキュンしてきた。

「おはようございます。」

私は少ししてれながら　こんたを見上げると
顔色変えずに鋭い目で　私を切るように見ていた。

あ……

そうだ…こんな態度とってたら嫌われちゃう…

普通に…普通に

すれ違う瞬間もドキンとした。

抱きしめられた時のいい香りが　私の体中に広がった。

今度はいつ会えるのかな……

それにしてもすごい切り替えだった。

少しか目の奥にでも 優しいまなざしがあるのかななんて
期待してた自分が恥ずかしくなった。

こんたの目には これっぽっちも私を
特別視する様子は 悲しいくらいなかった。

おまえは生徒

俺は教師

この恋を守りたかったら 私ももっと気合い入れていかなきゃ…

次にこんたにあったら いっぱいご褒美もらえるように

想像するだけで 興奮してくる……。

私は教室めがけて 走っていく……

こんなとの甘い時を想像しながら……この恋は絶対に 守って見せると……。

甘い時 二話

両親は 自営業のために 二人一緒に忙しい。

マリさんから聞いた話だと

小さい頃は 学校帰りのおねえちゃんが たまに私の面倒を見てた
と言ってた。

だからどうしようもない時は

私を連れて行動してたらしい……。

「めぐちゃんは小さくて愛らしくて

手のかからない子だったから…みんなに可愛がられていたわよ。」

「それが現実夢かわからないんだけど

おねえちゃんの恋人に会った気がするんです。

高く空に向かって抱きあげてもらったのと

雪の中でその人が泣いてる

その二つだけなんです……。」

「きっとそれが彼だと思うわ。」

「そうですか……。やっぱり……。」

おねえちゃんのこんたに会ってみたい……。

「どんな人だったんだろ。」

「千夏が言うには　すごく素敵な子だったのろけてた。
本当は勉強ができる子だったけど

学校に行かせてもらいなかったみたい……。

両親から虐待されてたって…

いろいろ問題はあったけど…そんなこと関係ない。

好きになったんだもん…って胸を張ってそう言ってたわ。

うらやましかったな〜

千夏は　輝いてたもん〜」

千夏は輝いてた……

それだけおねえちゃんの恋は　素敵な恋だったんだ。

私も素敵な恋をしてる……

おねえちゃんに負けないくらいの恋をしよう……

だから彼との秘密を守るために　しっかりとしなくちゃ……。

その後　また彼の姿を見かけたけど　次は視線も合わせなかった。
近くを通り過ぎる時は　心を落ち着けて
隣の友達とドラマの話で盛り上がった。

外に出たら　私は生徒……。

生徒でいるためには　どう行動するべきか……しっかりと考えないとい
けない。

おねえちゃんの恋みたいに　邪魔されないように……
私は絶対にこの恋をあきらめない……。

禁断の恋の心構えを 自分に言い聞かせた。

甘い時 三話

彼に告白してから一カ月がたったけど あれから二人で会ってなかった。

携帯が鳴るたびに落胆を繰り返して…

あれは本当は夢だったのかなって思うくらい寂しかった。

ある日 廊下で怒鳴り声が出て 志摩ちゃんと振り返った。

三年生の男子と 彼が言い合いをしていた。

ドッキン…胸が一回おおきく鳴った

「うっせんだよ!! テメーに関係ねーだろーが!？」

男子生徒が教科書を叩きつけた。

「すごいねー三年生ってなんか迫力あるしー」

あの先生って素敵だけど…冷たそうだね。」

志摩ちゃんが言った。

彼が拾って また教科書を彼に手渡そうとしたら
また男子生徒が その教科書を叩きつけた。

「学校やめっからな!!」

志摩ちゃんが「うわーすごいね」と楽しそうにしてる。

私は彼が心配で気が気じゃない…。

「わかった。おまえがそうきめたんならそうすればいい。
ただ…この決断は簡単に決めていいことなのか？」

おまえの一生に関わる大切なことだと俺は思う。

場所を変えてでもおまえが 頑張れると言うなら応援するし…

三日 考えろ それでも決意が固いなら

おまえの思うままに決めればいいさ。」

彼の声が 私の心に優しく沁み込んで行く…。

「勉強に集中できる場を与えられるのは幸せだと思うけどな…」

そう言うとき彼は男子生徒を置いて去っていた。

男子生徒は

「うっせんだよ!!!!」と言ってうずくまった。

「バカヤロ〜」

いろんな葛藤のある生徒一人一人と向き合うのって 大変だなと思った。

どうして彼は 教師になったのかな…

おねえちゃんも夢が教師だったみたいだけど

私には教師に魅力を感じない……。

このまま将来が決まらなかつたら 私も教師になるかもしれない……。

絶対無理だな

「あの先生 結構いいこと言ってたよね。
あの人きつとやめないよ。」

志摩ちゃんが神妙な顔をしてそう言った。

「うん…。けっこう胸に響いたかもね…。」

私には響いたよ…。

早くその声で 甘い言葉囁いて…。
冷たそうなその目が 私を見る時は 優しかった…。

二人っきりの時は きつと私は特別な存在になれるんだ。

彼がもっと…もっと愛してくれような女の子になりたい…そう思った。

甘い時 四話

塾が終わって 携帯の電源を入れたら……メールが入っていた。

私の携帯番号とアドレスだけを登録したから
彼からの連絡をひたすら待ってる一カ月だった。

「もしかして……」

私は思わず歓声をあげて
慌ててメールを開いた。

『何してる?』

うわ…もう三時間も経ってる…

『今 塾が終わったところです。これから何も用事がありません。
会いたいです。すぐ会いたいです。』

しばらくして

『残念 タイムアウト。また連絡する。』

と返信……目の前が真っ暗になった。

「どうして～～～なんで今日 塾だったの～～!!」

私はもう一度 返信した。

『会いたい 会いたい 会いたい
絶対に今 会いたい!!』素直な気持ちをぶつけた。

そしたら電話が鳴った。

「もしもし!!」

速攻電話に出た。

「ビックリしたな～～。」

「あゝ先生!!!! 先生なんだ～～!!!!」嬉しくて飛びあがった。

「あれ? 俺 先生じゃないよ……。」

恵美が俺の名前 つけたんじゃないかな？」

「あ…こんたくん!!!」

「あはは…土曜日も勉強なんて感心だよ。」

「私 頭よくないから…」

「そう。じゃあうちで勉強でもするか？」
彼の甘い声…

「はい!!!」 私は声高らかに叫んだ。

「これから迎えに行くよ。」

彼が場所を指定したから私は慌てて
そこに向かった。

太陽がもうすぐ夏だって教えてくれてるような
暑い午後だった。

告白してから 初めてのデート

もしかのことを考えて 下着がどんなだったって
しばらく考えた。

これからは 下着も気にしないと……なんてちょっと思ったら
恥ずかしくなった。

甘い時 五話

彼の車を待っていた。

どっちから来るのかな…

向かいの道路にバイクが一台止って
バイクをふかした。

ナンパ？

そう思っていると おいでと手を招いてる。

私？

目をそらして 私は彼の車を待った。

携帯が鳴って 私は慌てて電話に出る。

「何 無視してんだよ。」

「え？」私が慌ててバイクを見るとバイクの人も携帯で話をしてる。

「早くおいでよ。俺 今日バイクだからさ」

私は慌てて横断歩道の青を待たずに 彼のいる場所に駆け寄った。

「信号無視したらダメだぞ。」

まるで学校の先生に戻ってる。

「ごめんなさい。」

黒いヘルメットをかぶせてくれた。

「バイク初めてだ」私は会えた感動でテンションあがりまくる

「ちゃんとつかまっとけよ。」

私は彼の締まった腰に手をまわした。

「行くぞ。」

風をダイレクトに受けるバイク
夏を感じさせる風は優しい。

私はこの時とばかりに
彼の体にしがみついた。

「こんた…大好き…大好き!!!」

大声で叫んでも 街の音が消してしまう。

おねえちゃんも こうして叫んだのかな……。

会えない時間は私に 愛を募らせる。

学校で無視されているうつぶんや一カ月も放置されてた恨みや全部の愛を 彼にうけとめてもらおう。

バイクは走る。

私を甘い空間に誘うために……

顔を彼の背中に押し付けた。

こんなに積極的な私で・・・引かれちゃわないかな……。
でも心の中でふくれあがった

彼への想いが 激愛になって溢れだしてくる。

彼の前では 素直になりたい……

早く…早く 抱きしめてキスしてほしい……。

甘い時 六話

車庫に入ったバイクから彼が先に降りて私を抱き上げて下ろしてくれた。

彼がヘルメットをぬいで 私のヘルメットをとってくれた。

「ずいぶん 後で騒いでたね？」

彼が私の乱れた髪の毛を撫でてくれた。

「あ…ヤダ…聞こえてたの？」

恥ずかしくなって思わずうつむいた。

「そんなに俺のこと好きかい？」

私は首を縦にブンブンと振った。

クスクスと彼が笑う。

「だって…ずっと会いたくて…死にそうだったもん……」

ここで放置プレイの恨みごとを晴らす。

彼の指がスーツと唇に降りてきて止まった。

「学校ではやっとお利口さんになってきたけどさっきは信号無視したよな。」

「そ…それは　こんたくんが…慌てさせるから…」

私は慌ててそう答えた。

「ご褒美は一つ　減点だよ。」

「エ!?!　ダメくダメです!!」

彼は爆笑した。

「可愛いな」恵美は素直で・・・
汚れてなくて……」

そう言うとき車庫の中で甘い甘い　ご褒美をくれた。

彼の冷たい唇は　何かの生き物のように
私の唇で動き出す。

そしてそのうち私の唇の熱さと同化してゆく……。

キスって気持ちいいんだ……

彼のキスを必死に受ける私……

幸せ……

彼の唇が離れると 思わず私は大胆にも

自分から求めていった。

自分が自分じゃない 魔法にかけられていくようだった。

下手なキスをして 唇を離す。

「恵美…？」彼の優しい声……

「こんなに会うたびに 見えない魔法にかけられて…
自分でもびっくりしちゃう……

私 どうなっちゃってんだろ……。」「

恥ずかしくてうつむいた。

「そういう恵美も…可愛くて大好きだよ。」

彼の言葉に嬉しくなる……。

「あなたは…魔法使いなの？」

「魔法使い？　どうかな…」

抱きあげられて　またキスをした。

甘い甘い　二人の時間が流れていく…。

甘い時 七話

さっき彼が借りてきたっていう DVDを二人一緒に見てた。

そのうちに彼が真剣になってきて 私は少しつまらない…。
それに話があんまりおもしろくない。

推理物は 苦手……。

もう勝手に考えてくれ ってな感じで眠たくなってきた。

何度もあくびをかみしめていたら

そのうち本当に爆睡に入ってしまった。

多分夢の中

冷たい感触を感じて……目がさめかかった。

彼が私を覗き込んで

指が髪の毛を弄び……額に優しいキスをした。

夢なら覚めないで……

この甘いシュチュエーションに私は　白雪姫や眠り姫の気分になった。

王子さまのキスを夢の中まで
感じれるなんて……どこまで私は幸せなんだろう。

「愛してるよ……」　甘い声で彼がささやく

起きてる時も言ってよ!!

「もう絶対に離さないから……」　彼が覆いかぶさった時　濡れたものを
感じた。

え!?! 涙!?!

まさか……でもうれしいからもうすこし寝てるフリしよう……

そのうち彼の寝息が聞こえてきた。

寝ちゃったの？

恐る恐る目を開くと私の隣で眠っている彼……

「こんた…こん…」体をやっとのことで少し離すと私の手も濡れた。

涙？

私は彼の顔を静かに覗き込んだ。

目尻が濡れていた。

泣いてたんだ …… でも何で……？

私は絶対に 離れないのに……

愛しさがこみあがってくる。

大人なのに…子供みたいなこと言うんだね…。

知らなかったよ……。

「かわいい…こんた……」

私は眠っている彼に　いたずらをしてキスをした。

「ん…何だ…よ……。」

「こんた…愛してる……。」

「うん…俺も…あ…ごめん……
めっちゃ眠いから……ちよつとだけ寝かせて……」

眠そうな彼が子供のようで
私は静かに頭を撫でてあげた。

「こんた…私の夢みてね……。」

「ん……」

「大好きよ…」

「ん…お…れ……も…な…っ……ち…」

え…？

一瞬…何を彼が口走ったのかわからなかったけど…

モニョモニョ…ってその後も何か言ったから

寝言ってことにして落ち着いた。

スー スー……

彼は 私の胸の中で 安らかな 寝息をたてて安心した子供のよう
に眠った。

私は彼の背中をトントン叩きながら
母親になったような気持ちだった。

子守唄を歌いながら　そしてまた自分も眠くなって
夢の中に引き戻されていった。

甘い時 八話

今日は絶対 やばい……

だってあれから マジ寝して……気が付いたら9時……
さすがの両親も家にいない私を心配して

携帯に電話がたくさん来てた。

「送ってくよ。」

彼の車に乗る前に家に電話をして

「今 帰ってるところ……ごめんね

塾の子たちとカラオケ行っててすっかり

連絡忘れちゃった……もう少ししたらつくからね。」

ママは

「ちゃんと連絡いれなさい」そう言って怒っていた。

彼の車に乗って 少しブルーだった。

「怒ってた？」

「うん…私あんまり怒られたことなくって…
ちょっとヤバいかな……。」「

「厳しいんだ？」

「厳しい？違うかな……」

私には普段 興味がないんだよね。

今日は帰るのが遅いから 心配してくれたんだろうけどね。」「

「興味ないって？」

「あの人たちの子供は死んだおねえちゃんだけ…
私はただのおまけなんだよね。」「

「おねえさん？うちの学校出身だよね。
優秀だったとか理事長言ってたよね。」

「そうみたい。」

誰が思いだしても立派な娘だったんだって、
私だって頑張ってたんだけど
おねえちゃんには及ばないよ……。
顔だけは似てるみたいけど」

「じゃあおねえさんも可愛かったんだね。」

「うふふ…可愛い？」

私は嬉しくなってそう言った。

「可愛いよ。めっちゃ可愛い…」

ハンドルを握る

そう言いながら横顔はいつもの通りクールなまま……

私は彼によりかかった。

「恵美はさ…もし俺のことがばれて
ご両親に反対されても俺と一緒にいるか？」

「うん。ぜったいに一緒にいる…離れない……。」「

「そっか」

「私なんて 親にとってはおねえちゃん以外
ただいるだけの存在なんだもん。」

私を大事にしてくれるのは おねえちゃんを思い出すから…
私の将来を心配するのは おねえちゃんのように生きてほしいから…
私にね…おねえちゃんの夢を叶えて欲しいって言うの。」「

「夢？」

「うん 先生と同じ教職につけて…
私には絶対無理〜無理〜」

「けどできないって言えないんだ。」

「私はおねえちゃんじゃないんだって!!!!」

「私は千夏じゃなくて」

「恵美なんだから!!!!」

「そう思うでしょ? こんたくんも〜」

しばらく沈黙が続いた……………。

何か言ってくれないのかな……………。

それから無言のまま 車が停まった。

「また 連絡するから……」そう言うと 彼の車は私を置いて消えてしまった。

もう一回 キスしてほしかったのに……

不完全燃焼だと私は思った。

甘い時 九話

それからなぜか 彼からの誘いが増えて
私たちは頻繁に会って 甘い時を過ごした。

キスから先には 進んでないけど

私は はしたなくても早く彼のものになりたいと心が叫んでいた。

キスだけじゃ物足りない私がいる。

「これ・・・？」

彼が私の手に握らしたのは 部屋のカギだった。

「いいの？」

「これからさ 自由に来ていいよ。」

彼の言葉が信じられなかった。

「ほんとに？」

彼が優しく微笑んで

「ほんとだよ。」と言ってキスしてくれた。

「キャ〜〜!!!」私は嬉しくて彼に抱きついた。

「そのかわり慎重に来るんだよ。」

「はい!!!」

「ここに来る公共機関教えないとな。」

彼はパソコンの前に座って
私を自分の膝の上に座らせた。

「……………こうして…わかるか？
バスはそんなに本数がないから…帰りもし
俺が送っていけない時は気をつけ……」

私はもう夢心地だった。

「こら…聞してるのか？」

「あ…だって…嬉しくて…夢みたいで…
ほんとにありがとう…」

嬉しいのに 涙が出てきた。

「恵美？泣いてんのか？」

「だって…だって…幸せなんだもん。
私…自分にずっと自信がもてなかったから…
みんなおねえちゃんのことばかりで…
誰も私のことなんて見てくれなかったから…
おねえちゃんを知らない人に愛してもらって…すごく嬉しい…」

私はそのまま彼に抱きついて 泣いた。

誰かに認めてほしくて……
愛してほしかった……

それが今 一番愛してる人に愛されて……
私の幸せは絶頂だった。

しばらく泣いて…顔を上げたら
彼の顔が少し曇っていた。

卑屈で重いつて思われたかな…
少し心配になった。

「落ち着いたか？」次に私が見た顔は いつもの優しい顔だった。
私はホッとして……
自分からキスを求めた。

甘いキス……幸せな距離感…愛されてるって安心感

全てが私を包み込む……

「こんな…愛してる…」唇が離れるたびに私はそう言ってまたキスを求めた。

甘いキスは激しいキスに変わり…とうとう私から禁断の言葉をはいてしまった。

「恵美をぜんぶ…こんたの…ものになりたい………」

魔法が言わす? ううん…力一杯 彼を求めている。

甘い時 十話

そんな私を

彼は 無表情で私を見つめた。

その表情に私は慌てる……。

「そんなに見ないで…私…軽いわけじゃない…
男の人と付き合ったのは 初めてなのに…だから嫌いにならないで
…。」

すぎるように 彼の腕をつかんだ。

「送ってくよ。」彼は立ちあがって 下に降りていった。

私は茫然としたまま 部屋でぼーっとしていた。

私には女を感じない…？
そんなに魅力ないのかな…………。

ショックだった。

どうして抱いてくれなかったのか 怖くて聞けなかった。

車の中でも 口を聞かなかった。
彼も何も言わなかった……

会話を模索したけど 何も浮かばない…………。

沈黙が怖かったのは……
本当の彼の横顔が 冷たく見えたから…………。

私に見せてくれる優しい微笑みと 真逆な冷たい横顔……

どっちが本当のあなたなの？

抱いてほしっていったのは悪いことだったのかな…

「じゃ…また」

いつもの道で車を停めた。

「おやすみなさい…」

いつでも行ってもいいんだよね？

そう確認したかったけど…聞けなかった。

夢の絶頂から 突き落とされた気分だった。

自分の言動に後悔するだけで
穴に入りたかった。

涙で彼の車が　ぼやける……。

彼からもらった　鍵を握りしめた。

甘い幸せにぬくぬくしてた私が一瞬にして　北極にまでふっ飛ばされた様で

彼の車がみえなくなっても　歩き出せなかった。

不安 一話

何もする気にならなくなった。

ため息ばかり…志摩ちゃんがそんな私を笑う。

「めぐ・・・これで記録更新したよ」

「え？何の？」 私が頼杖をつきながら志摩ちゃんを見ると

志摩ちゃんは威張って

「めぐのため息 30分で10回だよ。さっきは7回だったから」
と大きな声で言ったから
クラス中が笑った。

「やゝねゝ数えてたの!？」

「だってゝ耳につくのよゝため息がゝ」

志摩ちゃんが笑った。

「あ…そっか…ごめん…気づけるわ…」

そう言っても体中から力が抜けたように机に伏した。

「ど…したの…」志摩ちゃんが私を揺さぶった。

「…なんかさ…生きてる意味を探せない…」
私の嘆きに志摩ちゃんが

「そんなこと言ってたらダメだよ。
生きてれば答えは見つかるわよ。」と大きな手ぶりで言ったから

私はおかしくて爆笑した。

志摩ちゃんの明るさに学校では 助けられてる……。

彼は三年の担任だから 学校ではそんなに会うことはなかった。
会いたいけど… 会えない…

会えないけど 会いたい

あの日から一カ月…いつしか夏休みも終わり・・・もうすぐ秋が近づいてきてる。

『いつでも おいで』

彼はそう言ってくれたけど

鍵を見つめるだけで…勇気が出ない……。

彼との距離がどんどん広がっていく気がした。

どうしたらいいの？

幸せだった心の中に 不安が入ってきて どんどん大きくなっていく…

その不安はとうとう私の中の幸せを全部食べつくしてしまった。

不安 二話

そんなある日 電話が来た。

「マリだけどろろわかるかしら？」

「はい！！わかりますー！！このまえはありがとうございました。」

「ほらーこんたのこと知りたがってたからー」

「おねえちゃんの……」

「そうそう……そのこんたを見た人がいて
こっちにいるみたいよ。」

「え！？ほんとですか！？
どこで会ったんだろー……」

私は期待に胸がときめいた。

「札幌駅だって。

一人でいたって言ってた。」

「その人はこんたの友達なんですか？」

「友達っていうか……

こんたは有名だったから……
見たことがあったみたいよ。」

「その関係って？」

「その人もヤンキーでね〜こんたは
とにかく喧嘩に明け暮れてて みんな怖がってたんだけど…
千夏には心を開いたんだよね〜不思議だね〜」

「話しきいてみたいな」
どんな人なんだろう」

私はこんなを想像した。

「なんかすっかり真面目になって 普通の人だったって」
家庭でももってるのかな」

「あゝ知りたいな」今度友達に詳しくまた
聞いてくださいね。」

「わかったよ」
二人のこと知ってる人がいたら私も聞いてみるね。
私ももっと知りたくなったの。
それから今のこんなにも 興味あるし」

マリさんはそう言ってくれた。

おねえちゃんの　こんたは今　どうしてるんだろう……。。

他の人と一緒になって　幸せに暮らしているんだろうか。

不安 三話

おねえちゃんのこんたは 近くにいるんだって…

私はおねえちゃんに言った。

「会いたい？会いたいよね？」

こんたが今どうしてるのか…知りたいよね…

おねえちゃんの愛した人が今どうしてるのか…

「恵美 雪が降る前に 千夏のお墓参りに行こうと
思っているんだけど 週末の予定は？」

パパが缶ビールを飲みながら 私に聞いた。

「なんもないよ」

「そうか。じゃママ あいつものように 花屋で千夏の好きだった
アイスバーグの花束をつくってもらってくれ。」

「はい。今年もうすぐ雪になるのね…」
ママが憂鬱そうに言った。

おねえちゃんは 白いバラが大好きだったって……
だからいつもお墓に行く時は
真っ白なバラの花束を持って行く。

その日は秋晴れだった。

いつものように花束を抱えていくのは私の役目

おねえちゃんの好きだったスナック菓子を持って
パイナップルジュースを用意した。

「お天気でよかったね。」 私は少し高くなった空を見上げた。

「おねえちゃんは どうしてこの花が好きなの？」
私はママに聞いた。

「お嫁さんの花だって、ウエディングドレスの色って
小さい頃からそう言って花屋に行くたびに買わされたのよね。」

ママは花束を見ながら目を細めた。

いつもはお彼岸に来るのに 今年のパパの出張で早めのお参りにな
ったのだ。

人もあまりいなくて お彼岸に来るよりずっとあずましい……。

よく手入れされた霊園は まるでお散歩してるようで気持ちよかつ
た。

「運動しながら行こう。」人間ドックを控えてるパパが少し遠いところ
に
車を停めたので 三人でおねえちゃんの待つお墓に向かって散歩し
ながら歩く。

住んだ空気と 少し紅葉が始まった風景が
心の痛い私を少しでも元気にしてくれる。

一台のバイクが通り過ぎた。

バイクを見送りながら 彼がどうしてるのか考えた。

明日…勇気を出して彼に会いに行こうかな……。

彼の背中にすがりついて風を切って
街を走るバイクを思い出していた。

不安 四話

おねえちゃんのお墓に向かって走って行った。

「あれ〜!？」

私はおねえちゃんのお墓が見えたところで
足が止まった。

「どうした？」 パパが言ったから私は 指をさした。

「誰か来たんだよ。」

おねえちゃんのお墓に花束が置かれて 線香が煙っている。

「今 来たのかな。」 私は周りをキョロキョロした。

お墓に近づいて驚いた。

豪華なアイスバーグの花束が置かれてて
おねえちゃんの好きなスナック菓子とパインジュース
それから手紙が置かれていた。

私はその手紙を 手にしようとした瞬間
ママがその手紙を握りつぶした。

「あゝママ 何で？」

パパが美しく咲いている花束とスナック菓子と
パインジュースを乱暴に持ち上げて歩き出した。

私が呆気にとられていると ママが手早くお墓に静かに水をかけた。

煙っていた線香に水が直撃して
パパが鬼のような顔で手に何も持たずに戻ってきた。

「あれ？ さっきのお花 まだまだキレイだったよ。
うちの花束より高いよ。」

入り口のゴミ箱に投げ捨てたのだ。

ひどい……

うちから持ってきたものを飾り　ろうそくに火をつけて線香に火をつけた。

「お花ちょうだい。」　ママが私から花を乱暴に奪って
お墓の上に置いた。

何が何だかわからずに私は呆氣にとられるだけだった。

「あいつ…また……」　パパが低い声で唸った。

「死んでからも千夏に…つきまとして…
絶対に許さない……」

そういうとポケットからさっきの手紙を出して
ライターで火をつけて捨てて　パパとまたお墓に向かって
ブツブツと言っている。

「あ！！！」私は燃え上がる手紙を咄嗟に足で消してかくした。

大事な手紙なような気がした。
おねえちゃんに渡さないと……。

「さっきのバイク…あいつだったんじゃない？」

「俺もそう思う。通り過ぎた時 まさかと思ったが…」

あいつ？

「あいつに千夏を殺されたんだ。」 パパの言葉に

おねえちゃんの こんたが来ていたんだと確信した。

そしてさっきのバイクは…こんた だったんだ……

バイクは一瞬しか見ていない……。

両親によって こんたとおねえちゃんがまた 踏みにじられたよう

な気がした。

お参りが終わって墓をでて霊園を歩き出した。

「あ！？ない！？」私はポケットをさぐるようにして
ママが

「どうしたの？」って言ったから

「勉強用にもってきたプリント…落としてきた。
ちよっと戻って見てくるね。」

「早くね。」

「はい、先に歩いていてね。」

私は来た道を走りだして 父が捨てたゴミ箱の中から
こんたが持ってきた花束とお菓子とジュースをまた
おねえちゃんのお墓に飾ってあげた。

それからさっきの手紙の残骸をひろって焦げカスを静かにほろって

お墓におこうとしたけど

それをポケットにしまい込んだ。

「仏壇で読んであげるから。」

そう言ったけど 中身にすごく興味があった。

こんたの持ってきた白い花束から 花をひとつもいでポケットにまた入れた。

「おねえちゃんのこんただって」

お墓に手を合わせた。

不安 五話

駐車場に入る寸前で 両親に追いついた。

「あったのか？」

「うん。落ちてたよ。」

わざとに明るくふるまったけど 両親の顔はすぐれない。

車を走らせて

「おねえちゃんゝ雪なくなったらまた来るねゝ」と言った。

車の中では沈黙が続いていた。

私はイヤホンで音楽を聞いていたけど どうしても聞きたかった。

「さっき 誰が来てたか知ってるの？」

せっかくのキレイなお花とか捨てちゃって もったいなかったな。」

「来てほしくない人だから捨てたの。」

千夏も迷惑してるわ。いつまでも気持ち悪いから。」

ママがホントに気持ち悪そうに言った。

「あいつがいなければ…千夏は今頃…しっかりとした人を見つけてそろそろ結婚したいとか…まだ結婚しないとバリバリと働いてたかもしれないしたら子供をつれているかもしれない……。」

なんで…すべてあいつにブチ壊されて……

千夏の最後の姿を忘れられない……。

血だらけで…足は違う方向に曲がって……それだけじゃない……。」

「ママ！！！！いい加減にしないで！！！！」

パパが大きな声で一喝した。

ママは我に返って…言葉をとめた。

「おねえちゃんを轢いた人なの？」

「千夏を私たちから奪おうとした男よ！！！！」

そう言うママは声を震わせて泣きだしてしまった。

やっぱりこんたのこね……

ポケットに手をいれた。

おねえちゃんへの手紙……。

きっとまだおねえちゃんを忘れていないんだ……。

車の窓から紅葉した街路樹を見てた。

おねえちゃんがうらやましい……

長い年月が過ぎていっても まだ愛し合った人は忘れていない……。

どんな人なんだろう……

愛されることでも やっぱりおねえちゃんには勝てないのかな……

会いたい…彼に 会いたい ……

心が募ってパンパンになっていた。

不安 六話

部屋に入って 手紙の残骸を出した。

何を書いてるんだろう…

三分の一だけは間に合わなくて燃えてしまった。

読んでいいよね……

ドキドキしながら白い封筒から カードを引き出した。

『二人が消えて 何度目の秋だろう……。』

俺の時間は あの日のまま 止まっているよ。

俺はいつ君たちのいる場所へたどりつけるのだろうか…

もうすこし…もうすこしで…

俺の終着駅が見えてくるから……

それまで二人で俺の留守を守っていてほしい…

千夏&葵 へ

その下は燃えて何が書いているのかわからなかった。

読み終わって 私は自然に涙が流れていた。

それでもうひとつ真実を知ってしまった。

おねえちゃんは一人で死んだんじゃない……。

おねえちゃんの お腹の中には赤ちゃんがいた……。

葵という名は 二人の子供の名前

可哀そうに……

赤ちゃんは闇に葬られてしまっていた。

この真実を知ったのも何か意味のあることかもしれない…。

仏壇に行って 遺影の写真の裏側に こんた からの手紙を入れた。

「おねえちゃん…こんたが来てくれたよ。
それから…これからは私が 二人の赤ちゃんの分も
お参りしてあげるからね……。
葵ちゃん…いい名前だね……。」

私は葵の分に 紙パックのジュースを一つおいて手を合わせた。

「パパとママの気持ちもわからなくはないけれど
ちょっとひどいね。」

「明日 私も会いに行ってくる……。
勇気を出して ぶつかってくるね…。
好きな人と一緒にいたいもん……。」

おねえちゃんの机の上に
さつき もいできた
こんたが持ってきてくれた アイスバーグの花を一輪ざしに飾った。

不安 七話

彼に言われたように バスに乗り換えて彼の家に向かった。

行ったら 迷惑がるだろうか……

それが怖かったけど……

おねえちゃんの愛が 私の背中を押してくれた気がした。

私は絶対に 好きな人と結ばれるんだ

昨日そう誓った。

おねえちゃんみたいに 愛されたい……

私だって愛されたいもん……

パパとママに反対されたって絶対戦うわ……。

私は彼の家の前に立っていた。

日曜日の朝……彼はまだ寝てるかも知れない……

鍵を出して鍵穴にいれた。

カシャッ

音がして思わずドキンとした。

泥棒になった気分……

わざとに大きな声で言った。

「おじゃましま〜〜す」

部屋は薄暗い

まだ彼は眠っているんだ。

螺旋階段を登って 寝室を探した。

この間キスした書斎のパソコンの部屋……。

隣のドアを静かに開けたら ゲストルームのようだった。

それから一番奥のドアを開けた。

部屋薄暗く 耳を澄ますと寝息が聞こえた。

スーーーー スーーーー

足元に気をつけながら ベットに近づいた。

愛しい人の寝顔……穏やかで死んでいるのかと
思うくらい口一つ空いてない……

キレイな寝顔……

私はその高い鼻の先にキスをした。

「ん………」彼が寝返りをうってこっち側を見た。

「こんた…来たよ…起きて…こんた……」

私がそう言ったら 彼が私を押し倒した……

「こんた…会いたかったよ………」

私はこんたの顎先にキスをした。

「ん……な…」こんたが寝ぼけた声で何かを言いかけた。

「何？ こんた……」

その唇をふさいだら お酒の匂いがした。

昨日 飲んだんだね……。

こんたの腕の力がこもった。

「なっち……夢か……夢だよな……
まだ酔っ払ってんだな……」

心臓が凍りついた。

彼は そう言ったかと思うと また寝息を立てた。

なっちって……誰？

彼の寝顔を見つめながら……凍りついた心に不安が住み着いた。

不安 八話

モヤモヤした気分だった。

揺り起こして 「なっちって誰？」 そう問い正したかった。

他の女の名前……

なんてデリカシーない人なんだろう

憎たらしくて…意地悪で…

だけど彼しか見えない私は それを知らない振りするか

「なっちって誰？」 そう聞いたら どんなに楽なんだろう……。。

「んゝゝゝ」 彼がとうとう目を覚ました。

「おはよゝ酔っ払いさんゝ」

「久々だなくおはよう」

ああ…やっぱり…この人が…好き…

「会いたかった？」 私は彼に聞いた。

「会いたかったよ…」

「うそつき」

「どうして？」

「だって…全然連絡くれないじゃん…
どうして会いたいって言ってくれないの？
いっつも私からただもん…」

この間の冷たい顔が嘘のように今日の彼は 優しいまなざしで
わがままなことたくさん言いたくなっちゃう……

彼は私の髪の毛を かきあげて
額を丸出しにした。

「なんでーおでこ……でこっぱっちなんだから……」

私は手で額を隠した。

彼は声をあげて笑った。

笑顔の彼に 私まで嬉しくなる……。

なっち……

気になるけれど……彼が優しいから今日はやめておく……

浮気してる？

でもこの家には女の人の気配は感じられない……。

いいや……忘れよう……

額にキス……

「この間ね……どうして抱いてくれなかったの？」

「それは……まずいだろ……ということで……。」

「私……女らしくない？ 魅力ない？」

質問して ヒヤヒヤしてる……。

「魅力的じゃなかったら…キスしないよ……。」

甘いキスが不安をかき消す。

私は 彼の言葉や 表情一つで 簡単に幸せにも 不幸にもなれる。

「じゃあ…いいよ…キスで…我慢するから……。」

「我慢？俺のキスはめっちゃ上手って評判なんだぞ…
ほんとは金をとつてもいいくらい職人芸なんだから…。」

「評判？他の人にもこんなことしてるの？」

なっちにもしてるの？

声に出そうになって慌てた。

「ここでは恵美一人だけど 外に出るとどうだかわかんないな」

「意地悪…」

泣きそうになった。

彼はそんな私を見て また笑う……。

大好きだよ……今 世界が滅亡しちゃえばいいのに……

そしたら私たちは永遠に一緒にいられるでしょ？

不安 九話

お天気のように彼は 暖かいお日様だったり
曇ってたり そして……冷たい雨だったり

今日は熱いくらいのお日様の彼で ホツとして
そんな時は うつぶんだらけの想いをぶつける。

「お酒飲んだの？」

「うん……臭いかな？」

「うん……臭いよ……」 彼がわざとに息を吐きかける。

逃げるように体をよじると彼につかまって……
それが楽しかったりして……

「大人になるとお酒があるからうらやましいな」

「別に俺は 酒に逃げてるわけじゃないよ。
いろいろあんだよ〜おつきあいが……」

私は彼の首に腕を巻き付けた。

「スナックの女の人にイチャイチャした？」

「うん…それはするさ〜」

「デュエットしたり踊ったりするんでしょ？」

「するよ〜だってそのためにいるんだから…」

私は彼の耳たぶを 噛んだ。

「痛い…」

彼が逃げようとしたからつかまえて今度は耳たぶにキスをした。

「くすぐったいな」

「うそでいいんだから　してないって言って。」

また泣きそうになった。

「恵美って…泣き虫なんだな。」

「あなたが意地悪だからよ……。」

「外の俺はしばらくしないでね……。
その代わり俺も恵美をしばらくしないから…
そういう約束だよね？」

彼の顔が曇ってきて　私は慌てる。

「冗談だよ」私は 彼の胸に顔を埋めた。

しばらく沈黙が続いていたけど

彼は私の髪の毛を撫でてくれた。

よかった…怒ってない…よね……。

「起きるかな」そう言って彼が体を動かそうとしたから

「まだ…もう少し……」

私はそう言って彼をベッドに押し倒した。

安心感と彼のそばにいたいという願望と……

それから早起きした眠気が心地よく私を眠りに誘う……。

不安 十話

「寝ちゃったんだ……」

私は飛び起きた。

彼はもうベットにはいなかった。

「こんた？」名前を呼びながら 階段を降りてリビングに行ったけど 彼はどこにもいなくて ソファアのテーブルに書き置きを見つけた。

『ゆっくりしていけるんだろ？
食材 買い出し行ってくるよ』

ずっといいんだ

「きゃー！！！！やったあー！！！！」

私はソファアで飛び跳ねた。

もう一度 書き置きを見て ハッと気づいた。

「あ…この字…どっか…」

なぜか見覚えある字だった。

なんだろう…とてもなつかしい…

考えていると 携帯が鳴った。

マリさんからだった。

「めぐちゃん、今 大丈夫？」

「あ…はい 大丈夫です。」

「この間の友達に詳しく聞いたんだけど　こんたの名前呼んだんだけど

一瞬立ち止まったけど…振り向かず歩いて行ったんだって。

多分　間違いないって言ってた。」

「おねえちゃんのお墓でもちよつとの差だったけど
すれ違ったんです。

おねえちゃんの好きなもの供えてあって…
きつと　こんた　だと思っんです。」

「うん　きつとそうだわ。

すごいね…今でもお参りに来てるのね。」

マリさんはきつと

赤ちゃんのことは知らないんだろう…

そのことは私は言わない方がいいと思った。

「おねえちゃん…って幸せですね。
どこまで愛されたのかなって…。」

「そうだね：障害の多い恋だったけどね：。
だからきつと：愛が盛り上がったのかもしれないね。」

「私も愛されたいな～って～」

「愛されるよ。めぐちゃんはまだ始まったばかりだよ。
素敵な人にきつと愛されるから～」

「そうですよね…きつと…そうですよね～」

「そうそう～その友達にね 写真写メしてもらったの。」

「え…？ほんとですか？」

「中学の卒アルだって～こんたはこの辺の学校じゃなかったみたいで
いろんなルートで手に入れたらしいよ。」

めぐちゃんの想像通りなのか 夢を裏切るのか 私はわかんないけど
私的には めっちゃいいって感じ!!」

心臓がドキドキしてきた。

おねえちゃんの愛した人
おねえちゃんを愛した人

「じゃあ 電話切ったら送るからね」
感想聞かせてね」

マリさんは電話を切った。

しばらくして携帯が鳴って マリさんからの写メが届いた。

私は ドキドキしてそのファイルを開いた。

後から

「ただいま」恵美 起きてたのか？
彼の声がした。

次の瞬間 時が止まって私は 凍りついた。

「うそ……うそよ……」

思わずそうつぶやいた。

「恵美 今日とは特別に俺の特製のオムライスを
作ってやるからな」

キッチンから彼の優しい声が聞こえた。

なんで……うそだよね……。

なんかの間違いでしょ？

頭の中が 混乱し始めている……………。

扉 一話

「恵美？どうした？」

私は思わず携帯をバックにしまってキッチンに立ってる彼の背中に抱きついた。

「いなくなったから…不安だったの…」

「夢でも見たか？」

「うん…怖い夢見たから……」

さっきみた写メは…怖い夢だと思ったかった。

「オムライス？」 私は少しでも平静を保とうと話題をそらした。

「好きか？」

「うん!!! すごく大好物のNO5に入ってるの。
こんた お料理できるの？」

「小さい頃から自分で作ってたんだ。
作れる時はいいほうでね」

玉ねぎのみじん切りもめっちゃ早い

「ん？ 作れる方？」

「いや、昔のことだよ。
恵美も大好物なんだ……。」

恵美も？

その言葉に 全神経が集中した。
も…って何？

でも今は 怖くて聞けなかった。

頭の中をちゃんと整理して……それからしよう……。

熱したフライパンに卵を流し込む音に 驚いた。

「恵美は料理とかするのか？」

「するよ。たまに…って私は結構一人だから
めんどくさがらなかつたら料理するよ。」

「えらいな。料理はできた方がいいよ。
男の心を掴むから。」

「私は こんた を掴みたい。」

「掴んでるよ？どうして？」

彼がお皿をとり移動したから 腰に抱きついて一緒に歩いた。

「なんだよ〜甘えっ子だな〜」

手際よく皿に盛り付けて 彼がケチャップを私に持たせた。

「好きなだけかけていいよ。」

私は二人のオムライスの上に 赤いハートの模様にケチャップを出した。

「すごいな〜ハート型のケチャップだ。」

今度は後から 彼が抱きしめてくれた。

「ね？何を見てるの？」 思い切って口にした。

「恵美を見てるよ……」 髪の毛にキス

「うそつき……」 私はそう言った。

「何で？うそなの？」

「オムライス…見てるくせして……」 明るく笑って見せた。

彼も大爆笑して 私の頬にキスをしてくれた。

「食べようか〜」

涙が出るのをじっとこらえた。

この真実を彼にぶつけたら…すべてが終わってしまうような気がした。

もう少し・・・彼に騙されていよう……。

彼が何を考えているのか…本当は知るのが怖かった。

扉 二話

今日の彼は優しかった。

最初は甘く幸せな時間だったのに……

オムライスを食べる頃には 泣きだしそうなのを我慢した。

優しくしないで。

車庫でお別れのキスをして

いつものように彼のバイクに後にまたがった。

あの日 私の横を通り過ぎていったのは

そうか…そうだったんだ……

真実を知るのが辛い

私は彼の腰にしがみついて夜の風をうける。

夏の終わり……

もうすぐ・・・冬がやってくる。

「じゃあまた……。」彼がそう言って去って行った。

彼のバイクの明かりが見えなくなるまで手を振って

そして力が抜けたように地面に座り込んだ。

携帯をバックから出して マリさんの写メを確認する。

悪い夢だよ……たぶん他人のそら似

涙がぼたぼた…落ちる。

「そら似なんかじゃないよ……。」

溝端 陽之介

カメラを睨みつけて 冷たい目をして
今にも襲いかかって来そうで
今の彼とは全然違うけど……でも 彼なんだ……。

誰も信じないって顔して
おねえちゃんを信じて
おねえちゃんを愛したんだね……。

おねえちゃんを忘れてないのに……私にキスするのは……

両親と同じ

私の後におねえちゃんを見てるからなの？

私を見つめてる目は 私とそっくりなおねえちゃんを見てるの？

恵美じゃない……千夏を……

ふと思いだした……

なっち……

「あはは……」

そっか……。あはは……」

泣き笑い……

ちなつ の呼び方を 変えただけ……。

私のこと愛してたんじゃない……の……？

どうして私に近づいたの？

聞きたいことがたくさんあったけど……この真実を彼に
叩きつけた時

きっと彼は私から去ってしまうだろう……。。

愛されてなくても…
彼を失いたくない…………。

悲しいけど…………いつかきっと私だけを見てくれる日が来るって信じたいの…………。

扉 三話

両親の帰りが遅いことに 今日くらい感謝した日はなかった。

仏壇の前に立って おねえちゃんを睨みつけた。

「笑ってる？ おかしくて笑ってたんでしょ？」

おねえちゃんに言ったところで言いがかりなのは 自分でもわかってるけど

ぶつけるところは ここしかなかった。

彼が私に近づいたのは

愛した人によく似てる私を抱きしめて……

そして私じゃなくておねえちゃんを重ねていたから……

抱いてくれなかったのは それでも少しはある罪悪感？

髪の毛の長さまで似ている自分

「あはは…あははは…まるつきり…身代わりじゃんね…」

写メをおねえちゃんに見せた。

懂れてつけた おねえちゃんの彼氏の名前

『こんた』

そう呼ばれて 彼は一瞬戸惑った顔をした。

私が吐いた 愛の言葉は 彼にとっては死んだ人が再び
自分の前に現れて言ってくれる

愛の言葉に彼はどんな気持ちだったんだろ……。

そうとも知らずに バカみたいに好き好き 愛してるって……

私の気持ちは一つも彼に届いてないのに……
まるでピエロだ……。

私だけを愛してくれたんじゃないのね……

「ひどいよね…二人で私をバカにして……
私…ほんとに一人でバカじゃん……」

次の日から 私は学校を休んだ。

彼の顔を見たら 真実を叫んでしまいそうだったから

たとえ愛されてなくても……
彼を失いたくないんだもん……

いつかきつと私だけを愛してくれる。

だって生きてる人間が勝ちでしょ？

家を抜けだして 背中まであった髪の毛を 耳の下くらいのショ
ートにした。

鏡の中にいる私は さっきまでの私ではなくなっていた。

小山内 恵美 は 小山内 千夏 じゃない

そう彼や両親に伝えていこう 私はそう思った。

扉 四話

「めぐ!?!どうしたの!?!その頭!!」
帰ってきた両親が驚いている。

それはそうだね…。
多分こんな髪の毛 いままでしたことないから…

薄茶色の髪の毛も手伝って 私は今までの私とガラッと印象が変わった。

「どうして髪…ママそういう髪嫌だわ。
めぐには長い髪の方が似合うのに…男みたいで…
これからまた伸ばしなさいよ。」

「はい…ごめんなさい…」と今までなら言ってたけど

「私は気にいってんの。」思い切ってそう言ってやった。

ママが私が言葉を返したことで少し驚いている。

今まであたり前に ママに言われたことには素直に応じてたから

それはビックリするよね……。

「どうしたの？学校で何かあった？」

すぐ 学校のせいにする……。

「明日から行くよ。」

気分転換したかったの。なんだかスッキリした。

早く短くしたらよかったよ。」

首筋がヒューヒューする。

これから冬になるのに…風邪ひいちゃうかも……。

ほんとに男の子みたいだ

少しやりすぎたかな……

こんた どんな顔するかな……。

おねえちゃんの面影がなくなって　ママやパパみたいに
驚くんだろうな……。

悲しがるかもしれない……。

だけど…そうでもしないと私は　いつまでも
おねえちゃんを思い出す道具でしかいられない……。

私は　恵美だから

明日目覚めて　あの扉を開く時

違う恵美になる……。

そして…おねえちゃんじゃない私を
彼に愛してもらうんだ……。

私は 恵美
・
・
・
・
。

おねえちゃんを思い出す道具じゃないんだ。

扉 五話

朝 パパのワックスを少々拝借した。

美容師さんが言ってた。

ワックスをもむように こうして……握って……
ちよつとぐちゃぐちゃに見えるけど……こうして……

「いい感じじゃん」

鏡の中にいる私は 幼い昨日の私じゃなくて

とっても大人っぽかった。

「めぐりママたち出かけるからね」

お弁当作ってあるからね。」 階段の下からママの声

「いってらっしゃい」

これで出かける時うるさく言われないよね。

洗面所に行って ママのかみそりと毛抜きを出して
次に眉毛を細くした。

「いたゝい…」

毛抜きを使うなんて初めてだったから……
志摩ちゃんのかっこいい眉毛は毛抜きだって言ってた。

抜くたびに痛さでゾクゾクした。

鏡の中の私は……もう新しい恵美が変わっていた。

これでいいんだ……
みんなが悪いんだよ……みんなおねえちゃんが好きだから……

私を愛してくれないから

美容室で見た今どきのお化粧

いろいろおしゃれの勉強もしないと……
キレイになって彼をもっともっと私のこと好きにさせたい

スカートのウエストを二折りにした。

さすがに短いかな……でも……可愛い

首筋が寒いからちよつと早いけど マフラーをした。

家を出る時は今まで 必ずおねえちゃんに手を合わせたけど
あの真実を知ってから
手をあわせるのは やめた。

ささやかな抵抗。

私のほしいもの何でも持つてるおねえちゃんへの反抗
嫉妬それから……負けたくないって叫び

扉を開く 過去までの私

そしてここから外に出たら…私は変わるんだ。

愛する人を入れるために…自分探しをしよう…。

扉 六話

いつもの登校風景で違うことは一つ

人の視線 特に男の視線はいつもとは全く違った。

「ヒュー！！！！」

口笛が聞こえる。

「H高にあんな子いるんだ？」

「すげーかわいい〜」 聞こえてくる言葉は 今まで縁もゆかりもない言葉

今までは お高くとまって 頭よさそう 冷たそう とか
そんな感じだったけど……

これからは違うんだ。

そう思うだけで楽しくなる　ウキウキする。

「志摩ちゃん～おはよ～」

前を歩いていた志摩ちゃんに声をかける。

一瞬振り向いて　志摩ちゃんはまた前を向いた。

「志摩ちゃんったら～おはよって言ってんじゃん～」

志摩ちゃんは怪訝な顔で一瞬考えて

「え・・・？ええ～～！？め…めぐ～～！！？？」

志摩ちゃんは目を白黒させて　バタバタしてる。

「うわ～大人っぽいから誰だかわかんなかった。
どうしたの？髪の毛切ったの！？」

「うふふ・・・思い切ってバツサリ似合う？」

「うん！！似合うけど全然違う人なんだもん。
めっちゃ大人く眉毛もイジツたん？」

「志摩ちゃんが毛抜きって言ってたから頑張ったよ。」

「ちょっと赤くなってる。」志摩ちゃんが笑った。

「そんなに違う人に見える？」

「見えるよ。少なくともうちの学校にはそんなにいないかな。
めぐはさく髪の毛が茶色いからそういう髪の毛にしたら
ちよっと不良っぽく見えるんだわ。
いつも髪の毛束ねてたから全然違うもん。」

「よかった。」私が言うと志摩ちゃんが

「何がよかったの？」と目を丸くした。

「私 今日から生まれ変わるの……。
今まで無駄に生きて来たような気がするから
親の言いなりで親に可愛いがられようとかで
ちよっという子になりすぎてたから……」

「あゝ反抗期なのね……。
そうだそうだ反抗期だ……。」

志摩ちゃんが私の手をとって走り出した。

「さ……このスタイルで正門つきやぶれっかな
本日の生活指導は……うわ……二年の山岸Tじゃん
めぐ……頑張れ……」

新生 小山内 恵美

こんなことでへこたれないよ
志摩ちゃんとどさくさにまぎれて正門に飛び込んだ。

扉七話

志摩ちゃんの手伝いもあって うまく玄関を突破。

教室に入ると一斉にみんなの目が飛んできた。

「めぐ？」 女子が数人とんできて私をつこん徐。

「誰かと思ったよ」

「ちょっとイメチェンしてみたの。」

「ちょっとじゃないよ」すごい誰か一瞬わかんなかった」

みんなの視線が気持ちいい。

「よく玄関でつかまらなかったね。」

「志摩ちゃんが隠して走ってくれたの」

普段あまり接触のなかった男子まで寄って来た。

人に注目されることなんて今までなかったよ。

おねえちゃんはいつも輪の中心にいたっていうけど
こんな気分だったんだろうな……。

「問題はゴリラだねーきつと……」

「いいんだーちょっと今日はやりすぎだったから
明日はもう少しおとなしくしてくる。
仕方がないから怒られてくるよ」

みんなが注目しているゴリラがチャイムとともに入ってきて

すぐに私に目をとまった。

「おい…おい…頼むよ小山内…」

「すみません！！！やりすぎでした。」

私が大きな声でそう叫ぶとクラス中が大爆笑になった。

「反省してるのか？」

「はい」

「わかったけれどもとりあえず職員室に行ってちゃんと話してこい。」

今は、指導部は山岸先生がいたはずだ。」

こんたは…？

でも半分よかったと 半分ガツカリと……。

「わかりました。」

「それにしても変わるもんだなく感心したよ。
女は化け物だな」

ゴリラの言葉にまた大爆笑した。

「それは休みの日にしろよ。」

「はい」

怒られてるのになぜか楽しい……自分が生まれ変わったような気がした。

扉 八話

職員室に行くと先生たちの視線が一斉に 刺さった。

「すみません……やりすぎたので
指導部の山岸先生は……。」

恐る恐るそう言った。

「反省してるならえらいぞ〜
それにしても小山内 すごくキレイだな〜」

英語教科担任がそう言って笑った。

素直にさえしてれば怒られないんだと思った。

「これは休日になります。」

「そうしなさい。」

山岸先生：は：ちよつと面談室に行ってみなさい。」

「はい。」

私は頭を下げて面談室に向かった。

彼は一時間目は授業のようだ。

面談室に近づくとき声が聞こえて足を止めた。

「最近：冷たいわよね：。」 山岸先生の声

「そっかゝそんなことはないけどなゝ」
一瞬息を飲んだ。

「週末泊まりに来てよ。」

この間だってあんなに飲んだのに家に帰っちゃって」

「ネコを飼ったんだよね。」

「ネコ？ 私も見たいわ。」 不審に満ちた声

「俺は女の人には家に呼ばない主義って言ったよね。」
彼の声は冷たい声だった。

「ごめんなさい…わかってるわ…
ただ…会いたくて…
キスしてほしくて…」

「勤務中にそういう話するなよ。」

「ごめんなさい…」

山岸先生と……付き合ってるんだ……。
頭を殴られた気分だった。

それから何も聞こえなくなって私はすごく心配になった。

思いつきり大きくノックした。

もし二人がここで何かしてるなら阻止しないと

「はい……」山岸先生の声がした。

「二年一組の 小山内です……。」

きつと彼も 動揺してるだろう……。

「すみません」思いつきり明るくドアを開けた。

山岸先生の向かい側に 背中側を見せて
彼が座っていた。

「あら：あら：私見逃したのかしら。」

「すみません、やりすぎでした。
明日からちゃんとしてきます。」

彼が振り返って 目があった。

心臓がドクンとして頬が熱くなった。

初めて彼を男何だっと思った。
他の人を愛しながら……違う人を抱きしめる。

私と山岸先生は同じ立場……………。

彼が立ち上がった。

「その格好を見逃すわけにはいかないから
今日は家に帰りなさい。」

そういうとまた背中を向けた。

バカ！！！！バカ！！！！バカ！！！！

言いたいことは山ほどあった。

今だって 山岸先生のこと知って 私は壊れてしまいそうなのに
冷たい顔の一言で……

もっと私を見てよ！！！！

「……だって：厳しいけど明日はちゃんとしてきてね。
」
気の毒そうに山岸先生が言った。

泣きそうになったのは……
帰れって言われたことじゃない……

彼の心が掴めないから……。

扉 九話

教室に戻って乱暴にカバンを持ち上げた。

「小山内さん どうしたの？」理科の大泉先生が聞いた。

「登校禁止で帰ります。」 イライラしていた。

「めぐる」志摩ちゃんが心配そうな声を出した。

「指導部から言われたのね、明日はちゃんとしてきなさい。」

帰り支度を乱暴にやって私は後の教室のドアを思いっきり閉めた。

ごめん…自分が悪いのに……

でもどこかにあたらないとやり切れなかった。

玄関で靴を叩きつけて傘立てを蹴飛ばした。

今日は雨の予想だったから

傘が散乱したけど 腹の立ち方がハンパじゃなくて

私はもう一つの傘立てを蹴り飛ばした。

「片づけて行きなさい。」

その声に驚いて振り返ったら 彼が冷めた目で私を見ていた。

「やだ…片づけない…先生がやって。」

彼が後から近づいてきて死ぬほどドキドキした。

無言で傘立てをかたづけている。

「きらい…大嫌い…」私はそうつぶやいた。

それでも彼は顔色も変えずに 傘を片づけている。

「うそつき……」

涙がとうとう落ちた。

彼は立ちあがって

「早く帰りなさい。」 心一つこもってない声……

私は泣いてるのに……心配もしないの？

私は玄関の扉を開けて思いっきりボタンとして
小雨の中走り出した。

泣いてるのがばれないように

彼にもう一人 同じようなポジションの人がいたこと……」

信じられない……

おねえちゃんのことでもショックだったのに…
山岸先生のナイスボディが頭に浮かんで混乱させる。

「バカ…バカ…」

傘を持ってくるのを忘れた……

小雨だけど…冷たかった。

私は家に帰らずに まっすぐ彼の家に向かった。
バスを降りたら雨が強くなってきて
霰に変わった。

も～～最悪なんだから!!!

玄関を開けて飛び込んだ。

もう泣いてんだか　泣いてないんだか　わからないじゃん……

どうしたら彼を…一人占めにできるんだろう……

髪の毛から滴がたれて床がべちよべちよになった。

扉 十話

彼のリビングは朝出かけたままになって なんだか人間らしくてホッとした。

制服も下着も全部脱いで 彼がうたた寝用に使ったのか 小さな毛布にくるまってガタガタ震えていた。

ずっと寝不足が続いていたから 私はそのまま眠ってしまった。

夢の中まで私は最悪だった。悲しい夢ばかり見ている。

彼は出てこないのに：お金を落としたとか 遅刻して置いて行かれるとか

そんな腹の立つ夢ばかりで：夢の中で

そんななら寝なきゃよかったって後悔してる…。

楽しい夢をみだしたのは体がポカポカしてきてからだだった。

誰かと追いかけてごっこをしてる……

高い高いとダッコをしてくれる……

泣かないでってキスをした：それが誰なのか見えて来た時 目が覚めた……。

「ん……」 薄暗い部屋に赤い光が見えて私は起き上がった。

ストーブ……

ストーブが真っ赤に燃えている。

あれ……？私……

スーツの上着を脱いでいる彼の後ろ姿を見つけた。

すぐにでも抱きつきたい衝動をグッとこらえて
私は毛布をしっかりと巻き付けた。

ネクタイをほどきながら彼がふり向いて
「起きたか？」と言った。

私は彼に背を向けて寝転がった。

「困った奴だな……」彼は少し笑いながら近づいてきて 抱きあげ
た。

「キャ……」私は足をバタバタさせて抵抗する。

「こんなに冷えて……風邪ひくぞ……」

ストーブつけて熱いシャワーしたらよかったのに……」

そう言いながら彼は私を風呂場に連れて言った。

「え……？」いきなり毛布をはぎとって私は全裸だったから
恥ずかしくて死にそうだった。

そのまま湯船にバシャーンと彼と一緒につかった。

熱いお湯の中で一度身震いしたら毛孔が一斉に開いた気がした。

私は彼に後から抱かれて湯船の中……
突然のことで……心臓がドキドキしてる。

「今日は寒かったから……風邪ひくなよ」

優しい声に泣けてきた……。

「う…うつ…」顔を覆って私は大泣きした。

彼の優しい声をずっと聞きたかった…。

こうして抱かれているのが私にとっての幸せなんだもん…。

「泣き虫だな…。俺のことで泣いてばっかだよな…。

不幸にしてるんだよな…。

もう…やめようか…。」

私は首を必死に振った。

「やだ…やだ…やだ…」

体の向きを変えて彼の胸に飛び込んだ。

「愛してる…愛してるの…。」

彼の逞しい体と お湯の温かさが 心も体も包み込んでくれた。

愛の形 一話

「やだから……私は絶対に離れない……。
好きなの……。泣いても別れるって言わないで……。」

彼にしがみついて泣いた。

裸な事も忘れて私は温かい湯船の中で 裸の彼に抱きしめられた。
私の体にかすかに触れる 男の人の部分を感じて
ドキドキしてた。

充分に温まった体ごと彼が抱き上げて
大きなバスタオルを先にソファ―に敷いて私を静かに下ろした。

灯りはストーブの赤……。

彼は私から離れてまた浴室に向かって行った。

「抱いて……。」 勇気を出して私はいった。

「後悔…するよ…きつと……」
声は向こう側から聞こえた。

「しないよ…絶対に…だって運命だっていったじゃん……。」

「まあ…ね…。だけど…状況は変わるよ…。」

「山岸先生のこと？」

「やっぱり聞いてたんだ。」

「うん……。」

彼は自分の腰の部分にバスタオルを巻いて近づいてきて
私にも
体の上にバスタオルをかけてくれた。

「こうして二人で会った時幸せすぎて…

嫌いって思ったけど…裏切られたって何度も思っても好きで好きで死んでしまいそうなの…。

こんなに私を好きにさせたのは…あなたでしょ？」

彼がおねえちゃんのこんなだって わかってから
私は彼のことを こんた って呼べなくなっていた。

「ね？誰を見てるの？」私はまたあの時の質問をした。

少し間を置いて

「恵美だよ……。」「彼が言った。

「髪の毛短くなったけど…？それでも私を見てる？」

「意味がわからないな…。
どうしてそんなことを聞くんだ？」

「私は恵美だから…：もう…：身代わりはイヤなの…：」

「身代わり？」彼の顔が赤く見える…：。

「小山内 千夏 はあなたの愛しい恋人だった…：。
私は千夏の妹で…：顔がそっくりで…：
だから…：あなたは…：私を見つけたんでしょ？」

初めて彼が動揺した顔をした。

「私はおねえちゃんじゃないよ…：。
おねえちゃんの変わりにされて愛されるのは…：悲しい…：。
あなたが好きなの…：おねえちゃんの呪縛から…：解放してあげたいの

……」

私は彼の手をとって 頬づりをした。

彼の表情がどんどん冷めていく……。

頬に触れた手も……冷たく変わって行く……。

愛の形 二話

「今日はもう遅いよ…帰らないと親心配するだろ？」

「いいの。心配したって…私は親より…あなたの方が大事なもの。」

「少し頭冷やしてさ…俺は別に逃げないし…」

「なんで…そんなに拒否するなら…どうして私と付き合ったの？」

彼はスウェットに着替えてしまった。

自分だけまだ…間拔けな全裸で…情けなくなった。

「恵美が告ったんだろ？」

「そうだけど…でも運命って言ったじゃん…」

コーヒーをおとす香りが充満した。

「運命だよ……。俺にとってはこうなることも全部シナリオ通りなんだけどね……」 冷たい横顔が…非情に見えた。

「シナリオ通りって……。」

そんな簡単な言葉で済まされてショックだった。

「でもさ…ちよつとシナリオ変更したいんだ。」

その後の言葉を聞くのが怖かった。

「別れよう。」

体の血がスーッとひいていくのがわかった。

「やだよ…そんなこと言わないでよ…。」

予定のシナリオでは別れないんでしょ？
そのままでもいいもん……。」

「状況が変わった……って言っただろう？
優しい声に変わった。」

「私が髪の毛を切って おねえちゃんに似てなくなったから？」

「そうだよ……って言ったら？」

「じゃあ エクステつけるもん……
私がおねえちゃんじゃなくて 私を愛してって言ったから？」

「そうだよ……。」

「じゃあ……おねえちゃんだと思って愛してくれていい……」

涙の大洪水になっていた。

「やだったけど…別れるって言うなら我慢するもん……。…」

「…山岸先生と結婚するよ…。」

「え……。…」
目の前が真っ暗になった。

愛の形 三話

「結婚する？どうして？」

「山岸先生とならうまくやっていけそうなんだ。」

「嘘つかないでよ……。」

「ごめんな……。」

「おねえちゃんを忘れられるの？」

「いや…忘れられないよ……。忘れるわけないじゃん……。
俺もあの時 一緒に死んだんだ……。」

今 生きてる俺は その死んだ俺のコピーだから…さ
だから…どう生きてもどうでもいいんだ……。
どうせこの世で なっちに会えるわけでもない……
だれを抱いたって…だれにキスしたって…何の意味もない……。
なっちがいないんだから……。」

わかっていてもショックは募って行く。

「私は…おねえちゃんの変わり…
でも少しか…私をみてくれたことはある？」

「ないよ…。
恵美を抱きながらキスしながら…いつも
千夏とキスしてた。」

「ひどいよ…。
少しくらい私を愛してくれてなかったの？」

「千夏にソックリなんだよ。
この目もあつばったい小さな唇も…
声も笑い方も泣き顔も…寝顔も全部…」

彼は私を抱きしめた。

「なっち……なっち……愛してる……。」

冷たい唇が私の唇に触れる……。

「なっち……」唇を離して彼が私をそう呼んだ。

悲しくて…涙が流れる……。

彼の唇が首すじを這って……体を覆っていたバスタオルをはいだ。

「なっちをずっと抱きたいって思っていた。」

「キャ…」小さい叫び声をあげて私は慌てて胸をかくした。

「やっと…会えたね…。」

夢じゃないよな……なっち……。」

彼はもう私を見ていないと思った。

ここにいるのはもう…私なのに私じゃない

おねえちゃんなんだ。

それでもいい……。

彼に愛されるなら…いいんだ…いいじゃん……

それでいいんだ……。

しかし……。

私の手をどけて彼の唇が 胸の先に触れた時

「やめて……え……!!!!」と思わず声をあげた。

彼が驚いて私を見つめた。

「やめて……え……私は…恵美だもん……。
うっ……うっ……く……」

悔しくて…痛すぎる……。

嗚咽の私に彼は乾いた下着をはかせて
ブラウスを着せた。

それから崩れかかる私を立たせて……制服を着せて

「行くよ……。」「って言った。

「やだよ……。帰らない……。」「

ジャンパーをはおって私の腕を掴んだ。

「送って行くよ。」優しい声でそう言うのと泣きじゃくる私を無情に

無理やり歩かせて車に乗せた。

「悲しい想いさせてごめん……。な……」

彼は一言だけそう言った。

私の泣き声だけが響き渡る車……

「やだ…帰りたくない…別れたくないもん……」

でも…やっぱり辛いのは……私は恵美だから……。

愛の形 四話

「ついたよ。」

無情にも車はいつもの場所についてしまった。

「明日から 俺は先生で 恵美は生徒に戻るから。」

「そんな勝手なこと言わないでよ。」

私は…別れたくないもん……。」「

「千夏の身代わりはイヤだったんだろ？
恵美がそれを知ってしまったら…俺も
付き合いつらいし……。」

「いやだけど…だけど…
一緒にいたいんだもん……。」「

「俺のこと…記憶にある？」

「え…？」

「俺は何度も恵美に会っているよ。」

「夢か現実かわかんない記憶はあるの…。
それがあなただったんだって…。」

「そっか…。
可愛くて小さくて…愛情たっぷり受けて
天使のようだったよ。」

「愛情？そんなのは今は全然感じられないけど？」

「千夏は仕事で忙しい母親の変わりをした。
俺と千夏を会わせてくれたのも恵美だった。」

彼はまっすぐ前を向いてそう言った。

「そして…俺と千夏を永遠の別れに導いたのも……」

彼が私の顔を見た時 恐ろしいくらいに
冷たい顔になっていた。

「天使の恵美だった……。」

私はその言葉にスーッと血の気が引いて行くのがわかった。

「どういう…こと……?」

「天使に罪はないんだ……。俺が幼稚だった。」

…あの時あの手紙をおまえが

両親の前で読んだんだ。

俺たちが二人で教えて楽しんでいた字を

上手に恵美は読んでしまった。

俺たちを引き裂こうとして 千夏の両親が圧力をかけてきてて
なかなか会うことができなかった。

あの日駆け落ちするのに 予定時間が変更になって……

それをつたえる手立てがなくて…幼稚園の園庭で遊んでた
恵美に千夏に渡してくれと 恵美に託したんだ。

その手紙を見事に読んでしまった。

結局手紙は…千夏には届かなかったんだけどね……。

親に監禁された千夏は

やっこの思いで抜けだしてきて 変更になったとも知らずに
俺を待ち続けて……事故にあった……。」「

私が…私が二人を引き裂いたの？

愛の形 五話

小説本文 「どうして私を……？
私のこと憎らしかったんでしょ？
どうして……？私を受け入れたの？」

「憎らしくなんかないさ。
恵美は 千夏の妹で……俺と千夏のキューピットだし……
三人の思い出がたくさんあるんだよ。」

「だけど……憎んだでしょ？」

「ごめん……余計なこと言った……。
誤解しないで……。恵美は俺らの天使だった……。
辛いことがたくさんあって……だけど恵美の笑顔に
救われてきたから……。」

「ごめんなさい…。

愛されたいなんて…調子のいいこと言って
そんな資格なんてないのに……。」

「恵美……。」

私は辛くて…情けなくて
彼の車を降りた……。

何か彼が言いかけたけど…彼はその言葉を飲みこんで車を発車させた。

終わっちゃった……。

心がポツカリ空いた……。

まさか二人を永遠に引き裂いたのが自分だったなんて……

こんな に恋する資格なんかない

涙も出し過ぎて枯れてしまった。

「でも・・・好きな・・・・・・・・。。」

彼に抱きしめられたお湯の中……………。

「忘れられるのかな私……………」

雪が落ちてきた。

あ…雪だ……初雪………

雪の白さで…どうか…どうか…
私の罪を……隠して下さい……。

そして私の罪をキレイな白い色で…
埋めてください……。

そしたら……また彼に愛してもらえますか？

足取り重く やつと家にたどり着いた。

玄関のドアを開けようとしたら ママが出てきた。

「ただいま…」

「ただいまって…こんな時間までどこにいたの？」

「友達のところ。。」

「自分の行動に責任を持ちなさいね

母がそういつてリビングに消えて行く……。

おねえちゃんの彼氏に恋をしてる

そう言ったら

ママ・・・どんな顔するんだろう……。

そのままベットに突っ伏した。

そしたら…また…枯れたはずの涙が溢れだしてきた。

愛の形 六話

雪が街を覆い尽くし…一面が銀世界になってゆく

私は全てのやる気を失って

ただしかばねのように日々過ごしていた。

そんなんで成績はがた落ち 学校も休みがちになって

ママはそんな私にイライラしていた。

「明日は学校どうするの？」

行かないと留年してしまうわよ」

「うん…」 行こうと思ってても明日になるとわからない…

足がすくむんだ。

ゴリラも何度か足を運んでくれた。

志摩ちゃんからも心配のメールが何度も来てたし
人の優しさに感謝した。

でも

彼と彼が結婚をきめた山岸先生に
普通に会うことなんかできなかった。

彼は山岸先生を愛してはいない。

愛していない人と結婚しようとしている。

それが間違ってるってことは彼だってわかってるけど
それを阻止する資格が自分にはないってことに
絶望していた。

初恋でこんなに深く人を愛してしまい
失恋して…この先また人を愛せるんだろうか……

おねえちゃんの部屋に久しぶりにはいった。

彼の手紙を初めて見つけたあの本棚で
本をペラペラめくり続けた。

おねえちゃんはこんな本が好きだったのね。

そして半日たったところに私は最後の本に手をかけた。

題名が見るからに読む気を失う
難しい本だった……。

その箱にはいった本を手にして驚いた。
それは本じゃなくて

可愛いお花の絵が書いてあるノートだった。

「え……？これって……？」

そのノートの中身がに緊張感が走った。

ここに何かが書かれている……。

私は深呼吸してそのノートをめくった。

愛の形 七話

ノートにはおねえちゃんの愛の言葉がつまっていた。

こんた というあだ名は キツネに似てるからで
誰がつけたのかは わからないってこと……。

（あだ名は 私がつけたのと同じ意味だったことに
笑ってしまった。）

おねえちゃんと

こんたとの出会いは

公園の木に風船がひかつかて

私があきらめられずに泣きわめいて ベンチに座っていたヤンキー
に一喝されて

でおねえちゃんが反対に怒鳴り返して…

で…風船をヤンキーがとってくれて…

そのヤンキーが…こんた だった。

会うたびにひかれていく

おねえちゃんの気持ちちが素直に書かれていた。

両親が忙しくて 保育園の迎えと母が帰ってくるまで年の離れた妹の面倒を見なくてはいけないストレスや
だけど可愛いから許しちゃうとか……
私への愛の言葉もくすぐったかった……

デートの大半は私を連れていかなければ行けない

こんなも 私をとっても可愛がってくれていた。

付き合いが両親に知られて 圧力をかけられても
それでも絶対に離れないって二人で誓いあった夜に結ばれたこと。

ノートには こんな への愛の言葉で満ち溢れている。

読み終えて 私は涙が溢れてきた。

二人は いったいどんな愛の形を築いてきたんだろう。

一つ言えることは……

二人は深く愛し合ってたこと

求め合ってたこと

二人の中には誰も はいりこめないことも……。

「おねえちゃん……これは こんた が読むものだよね。」

私は 彼に会って このノートを渡したいと思った。

そして……

彼を……おねえちゃんから解放してあげたいと思った。

おねえちゃんは死んだんだよ……。

そう認めないと 彼は前には進めないから……。

愛の形 八話

「一人で大丈夫？」

「仕方ないよ。仕事でしょ？いつものことだし」

うちは両親揃って出張に出かけることもある。

今回は大きな契約があるようで 夫婦同伴で出張することになった。

「いつものあなたなら心配しないんだけど……
なんだか……ちょっと心配だわ……。」

私が学校に行ってなかったり不安定だから……それなりに心配してる
んだろう……。

「来週から行くから安心して……。」

「ほんとに？」 ママが明るい顔になった。

「うん…ごめんね…」

もうすぐ冬休みだし…テストもあるし
また気合い入れて頑張るよ……」

両親はホッとした顔をした。

「一泊くらいぐどってことないわ。」

できるだけ元気に笑った。

「ひさしぶりに笑った顔みたわ。」

ママが私の頭を撫ぜた。

いつもいい子でいるのは…愛してくれるのを待っているから

おねえちゃんは死んだんだよ……

彼と同じ 両親も…まだおねえちゃんの死を受け入れていないから

大事なことを見失っているんだ。

「いってらっしゃい。」いつものように元氣に見送った。

そして彼に電話をかけた。

「もしもし…」寝ぼけた声の彼

「恵美です。」

「んーどうした？あれ…今何時なんだ？」

完全に寝ぼけている。

「朝の八時です……。」

「今日って土曜だね……。」

「そうですけど……先生……？」

「サボり魔さん……。久しぶりだな。
学校に来るのを忘れたのかな……」

「思い出しました。来週から行きます……。」

「そっか。よかった」

「先生に渡したいものがあるの。
うちまできてくれますか？」

「家は…マズイだろ……？」

「親は出張なので大丈夫ですから…待ってますから。」

そう言って私は電話を切った。

彼をここに呼ぶ……おねえちゃんの思い出がたくさんつまったこの家に……。

愛の形 九話

彼はお昼頃やってきた、

「まさか…ここに来るなんて思ってもいなかった。」

「ごめんなさい…。呼びつけて…渡したいものがあって……はいって下さい…」

彼の緊張感が伝わって来る…。

「おねえちゃんに会って…」彼を仏壇の前に連れて行った。

「な…なっち…」彼が遺影を見て声を震わせた。
そして線香をあげて 長い時間彼は 手を合わせていた。

その間に私は コーヒーをおとした。
香りが広がっても 彼はまだおねえちゃんのところから戻って来ない。

「先生…。」 私はもう先生としか彼を呼べないのが寂しい…

…。

「コーヒーはいったけど……」

「あ…ごめん…」先生は立ちあがって私の方に歩いてきた。

「お参りしたかったんだ……。お墓には行ってたけど……
葬式の時には…門前払いで…結局……お参りできてなかった。
ありがとう……」

彼の目が潤んでいた。

私はそれに気づかない振りをして コーヒーを出した。

しばらく無言で コーヒーを飲んだ。

「渡したいものって…何なんだ？」

「あ…こっちです……。」「荒治療が始まった。

二階にあがって 彼を案内したのは おねえちゃんの部屋

「ここは…？」彼の表情が困惑してる。

「おねえちゃんの部屋……。ママが掃除してるから…そのままなの……。」

彼は部屋中を見渡して 壁にはってあるポスターを見て笑った。

本棚を見ながら指で本をなぞって 一冊の本に手を止めて 吹き出した。

ここに彼がはいったのは初めてだろうけど…彼にはわかるメッセージがあるのか
時折笑顔で思い出すように 静かに見ていた。

その様子に 複雑な嫉妬を覚えながら……
私は彼にあのノートを渡した。

「これは？」

「なんか日記っていうのかな…とにかく先生のことばっか書いてある…」

彼は椅子に座って机でノートを読みだした。

時折声を出して笑ったり 感慨深く天井を見たり
私はそんな彼を見ながら…おねえちゃんに嫉妬していた。

おねえちゃん…ずるいよ……

死んでも彼を離さない……。
二人の愛の形って…いったい…どんな形を二人で作ってきたんだろう。
う。

その様子を小さかった私はそばで見えて
記憶があったら辛かっただろうな……。

だってきっと私は…その時には間違いなく初恋を経験してるだろう
から……

その時の記憶がなかったことを 感謝していた。
彼は今…昔に戻っている。

おねえちゃんの愛の言葉の数々に 出来事・・・幸せそうに彼が
笑顔でそれを読む・

わかっていただけれど…見たこともない彼の表情が私の心を刺すんだ
よね…。

愛の形 十話

「恵美……」先生が窓を見ていた私に声をかけた。

「はい？」

「ありがとう……。これ俺もらっていい？」

「どうぞ。そのつもりだったから……」

ノートは先生が持っていた方がいいかなって
このノートは多分 親も知らないはずだし……」

「ありがとう……。
めっちゃうれしい……。」

彼が子供のようにうれしそうにノートを抱きしめたから
こらえていた嫉妬心がメラメラと燃え上がってしまった。

「いつまで…いつまで…そうやって
おねえちゃんの亡霊にしがみついてんの？」

いい年してバカじゃない……。

悲劇のヒーローはもう十年たつたんだよ……。

自分のために生きたっておねえちゃんは悲しまないよ……。
どうするつもりなの？

それでいいの？

それが先生の一番幸せなの？」

思わず怒鳴りまくっていた。

興奮したから息が荒くなって

ハアハア……と息を整えた。

「私には……そんな資格ない……かもしれないけど……
でも……うちの親も先生も……

よくやるさって思うわ バカじゃないかって……

ママは毎日飽きもせず主のいないこの部屋を片付けて……

パパは仏壇の周りを今だに

おねえちゃんの好物で飾らないと怒るし……

いつまでそんなことやってんだろ。

こんな近くにあなたたちを求めている人がいるのに

その存在を見ないようにしてるのよ……

バカみたい……」

「そう……ほんとそうなんだよな」

俺はいつになったらまともな恋ができるようになるのかな。

思い出がきれいすぎて

いやなとこ一つも見なくてさ…俺は

なっちに救われたんだ……。

あいつに出会わなかったら それこそどんな人生送ってたか……

先生になんてなれなかったろーし

ある意味学校になんか無縁で育ってきた俺が

こうしてじぶんの家を持って まっとうに教師になって…

全部全部…あいつのおかげなんだよ……。」

「それは……そうかもしれないけど…」

「俺は救われたけど

なっちにとっては…俺と出会ったことは…

ずっとずっと…間違えだったのかとか…考えてばかりいた。

だけど…これには…

俺と出会ってよかったって一杯書いてあって…

なんか長い間ずっとつかえてた

胸のつかえが急にとれた気分だよ。」

「そうだよ…ここにはおねえちゃんの心が一杯…

どんなにあなたを愛してたか

あなたと出会えて幸せだったかとか

そればっか書いてある……。」

私だっておねえちゃんと同じくらい好きなのかもしれないのに
おねえちゃんの影に隠れてこうして……
嫉妬だけして……いつになったら忘れる？
私と一緒にいたら思いだすから辛い？
私じゃ……ダメですか……あなたと一緒にいたい……。」

彼は静かに微笑んで私を静かに抱きしめた。

「サンキュー。」

そして彼の口から語りだした……。
おねえちゃんのこと……。

優しい光 一話

俺はどうして生れて来たのだろうか……

絶望の中 俺は毎日どうか……どうか……痛くないことを祈って生きてきた。

「コラッ！！テメー何ノロノロ食ってやがる！？」

親父の怒鳴り声 俺は恐ろしくて頭を抱える。
頭を抱えれば腹を蹴られる。

年の離れた夫婦だった。

親父はかなりのじいさんで……母親は若い女だった。

「ほんとコイツ見てるだけでイライラするんだよ！！！」

母親のキンキラ声が後に続いて

俺はその日の夕飯をとうとう食えずに違う部屋に入れられる。

俺はこいつらの本当の子供なのか

物心ついた時から疑問だった。

だって自分の子にここまでひどい仕打ちをするものだろうか

いつか本当の親が迎えにきてくれるんじゃないか
そう祈りながら 寒い夜外に出されても必死に空想にひたっていた
りした。

絶望したのは こいつらが間違いなく俺の親だったことだ。

逃げ場のない地獄 毎日 毎日 俺は殴られ蹴られ罵られながら生きてきた。

いつか・・・きつと・・・誰かが助けてくれる

そう思わないと生きて行く意味さえ失う。

何度か学校の先生が俺の傷を見つけては 報告してくれて
施設にひきとられてだけど

本当の両親ということだ また短期間で帰された。

しかし母親が学校から帰ると姿を消していた。

男ができて家を出て行ったと酒に酔った親父が
俺を殴りながらそう言って泣いた。

情けない男だ……俺は絶対こんな男にはならない！！！！

中学になって俺の背がいきなり大きくなって 親父と対等な目線になった時
いつものように虐待されていた俺は 自分を守るために親父を投げ飛ばした。

親父の目が鬼のようになり 俺はその後気が遠くなるほど殴られた。

意識が戻った時 俺は悟ったんだ。

力なら俺だって負けないと……。

次に殴られたのは 朝頭が痛くてなかなか起きれなかった朝だった。

「ダラダラしてんじゃねー！！！！親父に寝ている脇腹を
思いつき蹴りあげられた。

俺はもう自分をおさえられなくなっていた。

「ふざけんじゃねーよ」

俺は今までの全ての恨みを親父にぶつけてやった。

「やめてくれよ……」今まで偉そうだった親父はまるで弱者のように背中を丸めて 怯えた顔で俺を見上げた。

その日から親父と俺の立場は逆転した。

髪の毛を金髪に染めて 眉毛を剃りおとした。

鏡の中に新しい俺が生まれた気がした。

誰にも負けるもんか……。

親父はまた新しい女を家に引き込んで 生活を始めた。
だけど もう俺を恐れて暴力をふるうことはなくなった。

居場所はなかったけど それなりに外で時間も潰せるようになって
俺にはもう怖いものは何もなくなった……。

一人で生きて行くために 何をしたらいいのか模索しながら……。

優しい光 二話

喧嘩に明け暮れた。

喧嘩して 喧嘩して 毎日喧嘩して……

そして虚しくて……ヘコヘコついて来る奴はいたけど

俺は一人で平気だったし

でも面倒くさいからほっといてるうちに

増えてきて 不良グループの頭だと言われるようになった。

俺の名前をつかってそいつらがテキトーに暴れてくるから

俺はいつの間にか スゲー怖い奴というレッテルをはられてしまった。

だからチャリンコに乗って

遠くまで出かけてきて 俺が知られてないところまで遠出してきて

一日中公園でボーっとしてたり……

とにかく一人でいたいと思っていた。

「とって……ねーたーん……！」

ウワ~~~~ン!!!!」駄々をこねるガキの声が耳触りだった。

「また買ってあげるから……我慢して……」

「ヤダ～～ヤダ～～!!!!」

そんなやりとりをくり変えてるから俺もどんどん腹が立ってきた。

「おい!!!! うっせーぞ!! 黙らせろや!!!!」

俺は体を起こして大声で威嚇した。

俺の前にいたのはまだ一歳くらいの女の子と制服姿の俺くらいの女だった。

「え?」女が俺の顔を睨みつけた。

「うっせーんだよ。あっち行ってやれや!!!!」

「は?うちの妹がさどーして泣いてるかわかんないの?」

俺は女の迫力に驚いた。

だって俺に言葉を返してきた女は今までいなかったから。

「あんたがその座るベンチで寝てんのが邪魔なんだよ!!」

女が俺の後を指差した。

は?????

指した方向を見るとベンチの裏の木に赤い風船がひっかかってた。

「あんたが邪魔だから妹にあきらめさせてたのよ!!」

体起こしたんだったら取ってくんない?

あんたでかいんだからさ!!」

その言葉に素直に従った自分に驚きながら

俺はベンチの上に立って赤い風船をとって小さい方の女の子に渡した。

「あがとーおにーたん!!」その子はまだ頬に涙の後が残っていたけど

ニッコリと微笑んで小さい手で糸を掴んだ。

生意気な方の女が

「よかったね〜メグ〜」そう言って抱きあげた。

「ありがとね。助かったわ。」

そう言うと 俺の前から立ち去った。

「なんだよ…あの女…ムカつくな〜」

中二の春……

それが俺と千夏…そして恵美との出会いだった。

優しい光 三話

「腹減ったな〜」

思わずつぶやいたのは それから数日たった夕暮れ時だった。
家にはとりあえず寝るだけで・・・最近はずっとに食えるのは給食のみ

とりあえず親父がよこす小遣いで菓子パンを買ったりして
空腹をしのいでいた。

だけど成長期の男には少なすぎる栄養で
それでも背だけはヒョロヒョロ伸びるから俺はやせっぽちであばらだらけだった。

げっそりしている頬を見て先生が

「おまえ食べてるのか？」と聞いてきたけど

「ま…ほどほどに…」と答えた。

行政にわかったところで今まで何も変わらんことわかってるから…
俺はもうここでもう少し耐えて
中学卒業したらどこか住みこみで仕事を探すつもりだった。

「なんか食いて〜〜ええ!!!」

俺はイライラして叫んだ。

「はい…どーど!!」声がして俺の手を柔らかい手が包んだ。

俺は驚いて体を起こした。

「あ…おまえは風船のチビ!!」

「おにーたん どーど!!」女の子は俺にグミをくれた。

「グミじゃなく」でもうれしかったから

「あんがとな」そう言って口に甘いグミの味が広がった。

女の子の笑顔にすさんだ心が一気に晴れた気がした。

「めぐる〜めぐる〜!!めぐる〜!!めぐる〜!!どこ〜!!」

「おねーたん!!!」ちっこいのが大声で叫ぶと
まっさおになった女がものすごいスピードで走ってきた。

「はぁ…はぁ…めぐる…もう!!」

女の子は小首をかしげて女を見て
「おにーたん お腹すいた」そう言うときまた俺にグミをくれた。

「グミじゃお腹一杯にならないね〜」
そう言って額に輝く汗を拭いた。

優しい光 四話

女の名前は 小山内 千夏 といって俺と同じ中学二年生だった。
チビは恵美もうすぐ二歳。

千夏は忙しい母親の変わりに
保育園の迎えとその間の世話をしていた。

「その頭 学校で怒られないの？」

「怒られるよ。」

「だよね。どうしてそんな無理すんの？
うちの男子の中にもそんなのがいるけど
無駄な労力だなんて私は思うんだけど…？」

バカにされたようでムカついた。

「いろいろ主張したいことが個々に違うからさ。」

「主張なんだくくそっかくく」

千夏はゲラゲラ笑った。

恵美も

「そっかくくくあ」と無邪気に千夏のマネをした。

「これ…後で食べよっかなくって思ってたから」

そう言ってカバンから 小さな弁当を出した。

「うちママからなんも言われてなくて今日は振替給食でお弁当いらなかったのに持たせちゃったんだよね。よかったら食べる？力作だよ」

「弁当ってあんたが作るの？親は？」

「うちさく好きなんだよねくこういうの作るのだから弁当とお守はうちの仕事なんだ。」

腹が底からなっている……。

「おねーたんのおべんとーおいちいよ。」

片言が可愛い恵美がそう言った。

「じゃ…遠慮なく」俺はウキウキして小さな弁当を開けた。

「これ〜食べていいのか？」

色どりキレイな可愛い弁当

そう言えば弁当なんて何年ぶりかな……。

弁当はめっちゃめっちゃ美味しかった。

「おにーちゃん好き嫌いなくていいね〜」

「めぐはピーマンがちらい」眉をしかめて言った。

「完食くくく」俺は手を合わせて祈るようにごちそうさまを言った。

「めっちゃうまかったくく
こんなキレイで うまいもん初めて食べた!!」

食べるものが俺をこんなに幸せで素直にするなんて知らなかった。

優しい光 五話

それから俺は 二人に会うために公園に行くようになった。

千夏は俺のために必ず弁当を持ってきて

俺はその弁当を食べさせてもらった。

俺の姿を見つけると恵美は飛んできて

いつものように「だっこ だっこ」とせがむから

空に向けて高い高いをしてやると 後の大きな木から必ず一枚葉っぱをむしった。

公園のベンチに座って 恵美が無邪気に遊ぶのを二人で見ながら俺はいつしか千夏のさっぱりした性格に惹かれていた。

千夏は社長の娘で家も裕福で：俺とは全然生きる世界が違ったけどそこがまた俺が千夏を眩しく感じる魅力なのかもしれない。

千夏の話し方で学校での様子も見えてくる。

きつともだちの間でも中心になっているんだろう：

千夏から聞く 学校の話題は

俺とは全然違うもんだったから・・・

うらやましい半面 俺には何も話題がなくて恥ずかしかった。

「陽之介って呼びづらいな」千夏は今まで そっち と俺を呼んでいただけ
突然そう言った。

「俺は自分の名前 あんま好きじゃない」
愛されていない親につけられた名前がかっこよすぎて
敷居が高すぎる。

「なんて呼べばいい？」千夏が言った。

俺は小学校の時 きつねの物語の挿絵に似てると誰かが言いだして

『こんた』

と呼ばれていた。
まだあの頃は 学校でも人と触れ合っていて今よかずつと楽しかった。

いまでも俺はあの頃の流れて

「こんた」と呼ばれている。

「こんたねっ！ホントだ…あれでしょ？
小学校の三年くらいに習った…あのキツネの話でしょっ
めぐが寝る時 何回かお話してあげたっ」

うん うん 似てるわゝゝあははゝほんとだゝ」

ケラケラ笑う千夏が可愛い。

「じゃあ こんた。うちのこともあんたとかやめてくれるかな？」

「名前で呼べって事か？」 俺は内心照れている。

「あだ名は？」

「ないよゝみんな千夏って呼ぶからゝゝ」

その時俺は思った。人と違う呼名で俺だけしか呼ばない呼名で呼びたいと思った。

「俺はさ……」 咄嗟に思いついた

「千夏を反対にして なっち にするかなゝゝ」

千夏は目を丸くして

「なるほど〜！〜！なんかいい〜新鮮だもん〜」
と目を輝かせた。

それから千夏は俺を 「こんた」と呼び
俺は千夏を 「なっち」と呼んだ。

俺だけしか呼ばない名前が うれしくてちょっぴり甘い気持ちにな
る。

俺はいつの間にか千夏に 恋していた。

優しい光 六話

夏休みに入る 終業式の前の日
その日はめずらしく恵美がいなかった。

「恵美は？」

「風邪で寝込んでる。今日はシッターさん来てるんだ。
だからおべんとうは作れなかったの。
ごめんね。」

「いいよ俺は弁当だけが楽しみじゃないし…」
思わず口から出た言葉を慌てて飲みこんだ。

「え？何？何？」 おもしろがって千夏がその後の言葉を聞きたがる。

「いや…恵美に癒されるからさ」 矛先を恵美に向ける。

「あゝっそ！」 千夏はむくれて唇をとがらした。

キスしたい……

そんな衝動にかられた。

「何よ……。俺の視線に気づいた千夏がちょっと慌ててる。

「あ…そういえば夏休みだからしばらく会えないね……。」「
千夏がめずらしく慌ててるのがめっちゃ可愛かった。」

「うん……。そうだった…。」
それに気づいて俺は急に寂しくなった。

「一カ月か…長いね…」
こんた 携帯持っていないんだよね……」

俺には携帯なんていつ与えてもらえるのかなんて謎だった。
でも今日くらい欲しいと思ったことはなかった。
連絡の手立てが俺にはないから……。

「会いたい時にテキストに来てみるよ。」

俺がそう言くと 千夏は

「それじゃあ うちは毎日会いに来るもん…」と言った。

「え？毎日？」俺はビックリして千夏を見ると

「こんた 男でしょ？うちから言っているの？

言うから…もう…我慢できない…」

千夏の可愛い唇がさらに尖っていた。

思わず俺は…千夏を抱きしめた。

「こんた…？」シャンプーのいい香りが俺の鼻をくすぐった。

「俺も…毎日会いたい…。いつも一緒にいたい…。

だから毎日来てみるよ…。会えなくても…。

約束しないのにこうして会えたらめっちゃ嬉しい…。」

素直な気持ちを千夏には言えた。

「こんな俺だけど…付き合ってください…。」心が汗をかいている…。

答えを待ちながらドキドキしていたら
千夏が俺から静かに離れて　俺を星がたくさんあるキラキラした大きな目で見つめる。

「その言葉…ずっと待ってたよ…うれしい」

そう言っただけ突然俺の唇を奪った。

素早く顔を離して「冷たい…こんたの唇気持ちいいわ」

そう言うときまた俺の胸に顔を埋めた。

「好き…こんなに人を好きになったの生れて初めて…」

千夏の言葉に感動していた。

人に好かれるなんて俺だって初めてだったから……。

俺は千夏を一生離さないとその時誓ったんだ。

優しい光 七話

夏休みはやっぱり行っても会えない日が続いた。

携帯が欲しいな……

千夏に連絡するすべがないのが辛かった。

夏休みは俺にとってとは地獄だった。

給食がなければ 俺はまともに食事にもありつけない。

ただ親父が俺にはもう暴力では勝てないとわかってくれたのか
殴られたりはしなくなったが

放置されるという虐待に変わって行った。

救いなのはこづかいをくれることだったから

多分これで暮らせということなんだと俺は悟った。

寝る部屋と風呂の提供 後は学費 最低限だけは親らしいことは
してくれたと思う。

家族としての居場所と食事 ぜいたくはできなかったから
携帯なんてもってのほかだった。

夏休みになると親父は俺を家においておきたくないようだった。最初は意味がわからなかったが、新しい若い女と俺ができてしまうのが怖かったらしく、こづかいをさらに多くくれて

「夕方までどこかで遊んで来い。」と金をくれた。

俺にだって選ぶ権利があるだろーよ……

まあ…金をくれるから俺にとってはラッキーだったけど……。

天気の良い時は千夏を待って公園のベンチとその辺をウロウロして過ごしていた。

夏休みも半分すぎた頃、やっと千夏の姿を見つけて俺たちは抱き合った。

「会いたかった~~~~ア~~~~!!」千夏は俺の胸で半べそをかいていた。

「俺もめっちゃ会いたかった」会いたくて会いたくて俺は素直に気持ちを千夏に言えた。

「私を待ってくれてた？」

「毎日来てたよ。まじにこのままなっちに会えなかったらどうしようって思った。」

「うれしい〜私也会いたくて死にそうだったの。」

「あれ？恵美は？」夢中で抱きしめていてちっこい恵美を忘れていた。

「まだ…両親とおばあちゃんの家にいるの。」

明日帰ってくるから…私はどうしても家族より早く帰って来たくて……

嘘ついて…先に戻ってきたから…

きつと会えるって信じてたから……すごくうれしい〜」

俺は強く抱きしめ過ぎて千夏が折れてしまっくんじゃないかと心配になったけど…でも…本当にうれしかったんだ。

会いたさ 恋しさ 募っていたから……。

「今日……うち……に来て……誰もいないから……」 千夏はそう言った。

優しい光 八話

千夏の家は公園から 十分くらいの小高い丘の上にあるらしい。

「坂道きつくね？」

「もう慣れたよ〜でもね〜もうすぐ引越すんだ。

今度はこの下のほら：あそこに空き地があるでしょ？

あそこに家を建てるんだって。」

大きな道路から二本はいったところに
かなりでかい空き地があった。

「おっきい家が建つんだな〜。」

「そうみたい〜今の家で充分なのに 大人って見栄を張るから……
あんまりでかいと恥ずかしいんだけど……

どんだけお嬢様？みたいでしょ？

私なんて全然なのにな〜」

「ほんとだ〜」俺が言うと

「失礼ね」そう言って俺の背中を押した。

「手つないで……」千夏が言った。

【いいのか？俺…遠慮してたんだけど…
だって…近所に見つかったらまずいだろう？」

「そっか…まずいか…
うちの親うるさいからな…」

千夏はふてくされて唇を尖らした。

キス…できるよな…
期待感で妙な汗をかいてきた。

「早く…早く…早く…!!」千夏が走り出した。

「待てよ…」
さすがに毎日登ってる坂道に千夏はびくともしないけど
俺は全然ダメだ。

腹もすいてるし…やっぱ体力ない…。

視界が開けてきて古いけど大きな家が見えてきた。

俺には縁遠い家だなと思った。

玄関に入る時も…俺を家が拒んでる気がした。

俺見たいな男と付き合ってるなんて・・・

親が知ったら 発狂するな～

金髪の根元が黒くなってきて…

お嬢様の千夏には どこから見ても不釣り合いだから

虐待されて育った人間と

両親に愛されて育った人間

俺たちが結ばれてもいいんだろうか…。

玄関のドアを閉めたら 千夏が抱きついてきた。

「もう誰もみてないから……こんた　一杯甘えていい？
今日はめぐもないし……めっちゃくつついていいよね？」

俺を見上げた千夏の目が　色っぽくてドキドキした。

その日　俺たちはひとつになった。

初めて同志で　何をどうしたらいいのか　なんにもわからないのに
男と女の本能が俺たちを　一つにしてくれた。

「愛してる……大好き……こんたしかもういらない……」

千夏は俺のガリガリのあばらに顔を埋めた。
恥ずかしくなった。
痩せてても腹筋して鍛えないと思った。

「俺もなっちゃんじゃない……なっちゃんがいれば何もいらない……」

何度も何度も抱き合ううちに　俺たちはひとつになることが
それぞれに気持ちのいいことだってわかってきた。

さっきまで手さぐりだった行為は…抱き合うたびに
わかりあえて…千夏が甘い声を出すたびに 俺はいつぱしの男にな
った気がして感動した。

優しい光 九話

あのときはままごとにようでも 俺たちには真剣で…

「結婚しような。」

「こんた の奥さんになっておかあさんになるわ。」

「俺はさ〜」

千夏に俺の夢を話た。夢なんて今まで無で人生に絶望していたのに今の俺は夢を大いに語れた。

子供は三人で毎日千夏と子供に いってらっしやいのキスをして仕事に出かけて
そして夜にはただいまのキスで迎えてもらう。

千夏を愛して 子供を愛して 俺は理想の人生を送る。

千夏となら その夢も絶対に叶いそうに思えた。

まだ子供の俺たちは 夢を現実にするのはたやすいことだと思っていた。

「私のどこが好き？」千夏が聞いた。

「なっちは…俺にとって優しい光なんだ……。」

俺を幸せにしてくれるから……俺が夢を見てもいいって思わせてくれたから……」

「うれしいな…私は優しい光なのね……。」

こんたの笑顔が好き…無表情だった　こんたが…笑うと私はキュンキュンしちゃう…。」

それから冷たい唇が好き……キスしたらひんやりして
でも私の唇とどんどん同じ熱さになる…溶け合う気がして
こんたは　私のものになる……。」

「俺の唇って冷たいんだ……。」

「きつとご飯ちゃんと食べてないからよ……。」

ガリガリのあばらを千夏が弾いた。

俺は小さい頃からの話をした。

愛されず育ち　なぜか虐待を受けて育ってきたこと……
それがどんなに理不尽で恐怖だったのか

今は暴力はないけれど　居場所と十分な食事もあたえられない
そんなすさんだ家庭に育ってきたと
千夏には素直に話せた。

千夏は大きな目から　真珠のような涙をいくつもこぼして
俺を強く抱きしめた。

「私があいしてあげるから・・・こんなを優しい光で包んであげる。
だから：絶対私をお嫁さんにしてね……。」

嬉しくて…俺も泣けてきた。

人の前で泣くなんてカッコ悪いと思ってきたけど
千夏の前では　俺は素直になれるんだ。

朝までいろんな話をして　何度も愛し合った。

俺らは愛し合うたびに　一つなる喜びがどんどん大きくなる。
千夏が

「このまま……つながったまま……ずっといられたら……」

そう甘い声でつぶやく……。

そしてその声を耳にしながら…俺は果てる…。

幸せだった…。

千夏の親の目を盗み 愛し合った。

夢中になりすぎて…俺たちはどんどん坂を転がって不幸が口を開けて待っていることに気づかずにはいた。

二人一緒にいることが…幸せすぎて 何も見えなくなっていた。

優しい光 十話

千夏と愛し合うための時間をつくることは難しかった。

俺と千夏は同時に早退をして

千夏の親が忙しいことをいいことに

最初は千夏のおこないがよかったから早退は簡単だった。

学校も親も具合が悪いと思い込んでいた。

俺はもうどうでもいい存在で 親父も関心がないから簡単ではあったけど

その態度が俺をどんどん悪というレッテルに変わって行った。

放課後は恵美がいるから

愛し合わない時は 三人で公園で遊んで

恵美の目を盗んでキスするのが楽しかった。

冬が来て…クリスマスに俺はマフラーをもらった。

うれしかった。

俺には何をあげるものがなくて

親父の金で千夏にプレゼントしたら千夏が汚れてしまう気がして

「キス一杯してくれたらいい…」

千夏と白い雪が舞う夜 何度も何度もキスをした……。

冬休みはまた会えない日が続いて気が狂いそうだった。

千夏のいない人生なんて俺には想像するだけであの 幼い頃虐待を受けてた

あの時よりずっと地獄に感じた。

イライラして 不安で

俺は自分の城で そのうっぷんを喧嘩ではらしていた。

自分の区域にいと俺はいつも狙われていた。

俺の名前をかたり喧嘩をする奴らに何度もまきこまれて

俺には知らないことばかりだったけど

負けるのはイヤだった。

俺がずっとこの暴力を受けて生きてきたんだ。

おまえらみたいな 反抗期でこんなことやってる奴らに
負けてたまるか！！！！

中学生だけじゃない 高校生や 街のチンピラからも狙われていた。
警察からもマークされるようになっていたことに
俺はまだ気づいていなかった。

だからこの区域を出て 千夏に会いに行く時は
ホッとできた。

俺を知らないこの街に癒され…千夏と恵美に癒された。

会えないいら立ちは俺を凶暴に変えて

「会いたいな……」 そう叫びながら 敵の腹に拳を突き刺していた
……。

負けない気持ち 一話

「一緒にいたい」

そんな気持ちが大きくなる……。

外で会う時間が少なくなった冬が過ぎて 春がやってきて
また恵美を含めて三人で会う時間が増えてきた。

愛し合いたいと思うことより 少しでも同じ空気を吸っていたい
どんな形でも一緒に時を過ごせることが
二人にとっての幸せだった。

中三になって俺以外は受験生になって 千夏もどうしても行きたい
高校に向けて
準備が始まった。

私立の高校だけど うちの学校でも秀才たちが数人
目指している学校だと知った。

将来の夢を目指しての頑張れる

そんな千夏を見ながらうらやましいと思った。

俺には夢はなかった。

千夏と結ばれる夢はもちろんあったけど

自分が何をしたいとか どうなりたいとか……
こんな状態では何も見つけられなかった。

「おまえが進学する気ならおとうさんに話して見るぞ。」

担任が今だに決まらない俺を心配してくれた。

「仕事したい…仕事して早く家を出たい…」

「今は中卒では難しいぞ。せめて…高校は出ておかないと
将来がおまえが結婚したくても家族を養うことさえできないぞ。

男は仕事だぞ、もう少し勉強をして考えても遅くはないだろう?」

家族…養う……

「子供を幸せにする…それはおまえにとっても一番のしたいことじゃないか?」

先生の言葉に俺は泣けた…。

「俺みたいな子供にしたくない……」

あたりまえに与えられる愛を与えられずに絶望の中生きてきた……。

「おまえと三年間過ごしてきてわかったことがある。
おまえはやればできる 俺はそう思ってる。
真剣にやってみないか？ 自分の将来のために……。」

先生の説得で親父はあっさりと俺の進学を認めた。

「もしかしたらお父さんの中にも
おまえに対して愛情があるのかもしれないぞ。」

んなわけないだろ…

そう思いながらも そうであつたら嬉しいと思った。

給食を食べるために毎日どんなことがあつても通つた毎日が
俺を救ってくれるとは思わなかったけど

なんとか進学する高校も決まつて

それを報告したら 千夏はとても喜んでくれた。

「素敵なことね。将来私たちが結婚する時
お互いに何かにうちこめていたらこんな素敵な人生はないわ。
こんた にも早く自分の道を探してほしい。」

千夏は志の高い人間だった。

そんな千夏に負けてはいられない……。

もっと愛されるように

千夏と同等になれるように……俺も頑張らないといけないと思った。

負けない気持ち 二話

受験を目の前にした冬休みが開けた日だった。

久しぶりに会えた俺たちは一目のつかないところを探してキスをしていた。

「塾で毎日勉強漬けで…こんたの顔みたらまた頑張れる」

千夏はそう言って微笑んだ。

「俺は単願で受けるから…まだなんとかなるかな」

「勉強しなきゃダメだよ。」

人間ってその時々で与えられたことはきちんとしないと幸せになれないんだって…あの時こうしたらよかったとかうちは後悔したくない。」

俺の胸はグサツと音をたてた。

「こうしてこんたと出会えたことに感謝してる人生だもん。ケチつけないんだ。だから私は絶対に夢を二つ叶える。先生になること それから 溝端 千夏になること……」

千夏がはにかんだ。

「めっちゃ…可愛い…」

俺は千夏を抱きしめて 今度は熱いキスをした。
千夏の熱い唇に俺の唇はとけてしまいそうで……
いつもキスは気持ちよかった。

「こんなに…もっと触れてほしい…」

唇を離して千夏が甘い声でささやいた。

「俺だって…もう…限界……」

しかしこの厳寒な季節に…んなことをしたら
凍死してしまうから……

「俺早く 自分の部屋を持って
いつでも千夏と一緒にいたいな……。」

「うん……。一緒にいたい……。
そうなれるように頑張ろうね……。」

それまで一杯こういう気持ちを貯金してたらがんばれるよ。」

「なっちの考えの転換は前向きだな」

俺は唸ってしまった。

「夢をかなえるためなら辛いことだって全部く転換しないと……
大事なのは二人の強い気持ちだよ。

どんなことがあっても絶対にあきらめない。
二人でいることを……」

感動した…。

千夏の転換のおかげで俺はまっとうな軌道修正ができる気がする。

雪中 手をつないで歩いてた…その時だった。

「あゝ溝端じゃね？」 後から声がして凍りついた。

「女いんの？手つないでるし」

俺は咄嗟に千夏に言った。

「早く 家に帰れ……走って!! 絶対振り向くなよ。」千夏の背を押して

千夏が押した勢いで走りだしたら 後から足音が近づいてきた。

俺は勢いよく振り返って 千夏を追おうとしてる奴の足元に蹴りを入れた。

負けない気持ち 三話

勢いよくそいつが転倒した。

振り返ると相手は四人 この間いきなり俺に殴りかかろうとしてきた高校生だった。

「こらあテメーなめた真似しやがって!!!!」

四人が一斉に襲いかかってきた。

いつものことだ 多少のリスクは慣れているけど

俺は千夏が逃げたことを確認して そいつらの挑発を受けた。

足元に転がっていた奴が俺の足を掴んで俺を雪の上に転ばせてその上に数人で襲いかかってきた。

「こらあガキのくせにちょーしこいてんじゃねーよ。」

「う…」 まともに頬に一発受けた。

千夏も逃げ切った頃だなとしばらく大人しくしていたが

その間に受けた暴力が俺の力のバロメーターになっている。

「オラ！！溝端！！」容赦なく腹に蹴りがはいった瞬間 俺は相手の足をつかみ一人を雪に転がして他の奴らの一瞬の隙を見て殴りかかった。

しばらくして俺は背筋が凍った。

一人足りない！？

「デメーら！！！」俺の怒りは頂点まで達した。

「気づくのおせーよ」うずくまってそう言ったやつ顔を蹴りあげて

俺はフラフラしながら 千夏を探しに走り出した。

「ちくしょー千夏になんかしやがったら ぶっ殺す！！！」

しばらく走っていたら

高校生が数人の大人に取り押さえられていた。

なっち……！！！！

俺はその輪に入りこみ 女性に抱きかかえられている千夏を見つけて抱きしめた。

「なっち！！大丈夫か！？」

「うん……つかまってひきずられたから思いっきり男の急所に蹴りいれてやったら……殴られた……それだけ……

それでデカイ声で助け求めたら……みなさんが……来てくれたの……」

千夏の口から血が流れてて
ハンカチでそれをおさえていた。

「ごめん……ごめんな……」

「大丈夫よ……それより……こんた……顔……血だらけ……」

「俺は慣れてっから……ごめんな……」

後からザワザワと声がした。

通行人が警察を呼んだらしくて俺の後からも声がした。

「きみ 話しかけてもらえるかな？」

やば……

とうとう警察の世話になることになった。

負けない気持ち 四話

むこう側で倒れていた四人と千夏に急所をやられた一人

そして俺……

パトカーが出動して大変な騒ぎになった。

「おまわりさん この人は悪くないんです。

急に襲われて…私を逃がしてくれたんです!!」

千夏が説明をしてくれた。

「きみは顔を殴られたんだね？」警察官の質問にも
千夏らしくキビキビと答える。

その後からもう一人警官が近づいてきて

「大田さん その男子谷岡中の『溝端』です。」と言った。

「溝端ア？」警官の顔が一気に厳しくなった。

「おまえ…溝端…陽之助か？」

「はい……。」「

「ずいぶん暴れてるよな？この間は北中の生徒とやったんだってな？」

「俺はやってません。」「

勝手に俺の名前を使って動いてる
友達のふりをした奴らだ。

「おまえの名前 北中からあがってたぞ？
一度 しよっぱこうってちようど思ってたんだ。」「

「俺は…その話は後で聞いただけで……。」「
慌てて説明するが

「どっちにしてもおまえが頭なんだろう？」警官の声がきつくなった。

「勝手に頭にされてるだけだ！」「俺も必死で食い下がる。

「なおさらそれなら…そいつらを封じ込めないとおまえの名前で悪さしてんだぞってことになる。」

「俺は一人でいいんだ。」

仲間とか全然いらなし・・・行動だって誰とも組んじゃねーし…」

また一人警官が近づいてきて
千夏に家まで送るよと言った。

「いいです…一人で帰れます。
彼に送ってもらいますから……」

「唇腫れてきたな……一応話し聞くか？」

俺は

「この人は巻き込まれたんだから警察なんて行かなくていいだろ？」

「そうはいかないさ」

暴力振るわれたんだ。その顔で帰ったら両親も驚くぞ。」

可愛い千夏の唇の端が 真っ青になっている。

「警察って…親に連絡するんですよ？」
千夏の声が動揺している。

「もちろん…親が迎えにきてから家に返すから」

俺の手を千夏がギュッと握った。

これから起るはずの…妨害のプロローグが幕を開けた。

千夏も巻き込んで…警察署に連れて行かれた。

負けない気持ち 五話

千夏とは別々にされた。

警官に

「友達だけど…巻き込まれたただだから問題ないっすよね？」と聞いた。

「めっちゃめっちゃ秀才でそんなことに巻き込まれるような子じゃないからな……。大丈夫だよ、被害者って感じだな。」

「よかった…」

「おまえのそこは父親来ないって言うから担任の先生に連絡したぞ。」

「親父来ないって言ったんだ……。」

「刑務所でも入れてくれってさ・・・
なんて親だ……。虐待歴あるんだな」

「あ・・・はい・・・」

「家庭環境に負けたらダメだぞ。

彼女なんだろう？なおさらだ。

いまのままなら付き合いも

彼女の両親から反対されるからな……」

一気二暗くなった…………。

確かに：親にばれてしまったら　きつとこんな
危ないことに娘が巻き込まれて

心配するだろう……

でも俺が真面目に千夏を愛してること
ちゃんと伝えたらきつとわかってくれる

そう信じていた。

「千夏！！！」女の人の叫び声

「けがはないの？あ・・・ちょっと・・・
その顔いたい・・・ちょっと・・・」
たぶん母親が半狂乱になっている。

「大丈夫よ。ちょっと巻き込まれただけ
心配しないで。」

「警察に来るなんてよっぽどのことでしょ……」

母親は大騒ぎしている。

「今 説明しますから座って下さい。」

警官が厳しい口調でそう言うとな
やっと母親の声がしなくなった。

急にこれから先のことが不安になった。

俺たちこのまま一緒にいられるよな？

母親の動揺した様子を感じて：こんな俺との付き合いを認めてはもらえないだろうと予感していた。

「そんな不良といつ友達になったの！？
うちの学校にはそんな人いないでしょ？」

また大声で叫んでる。

「おまえがかわらんと：みんなはおまえのこと
誤解したままになるぞ。

彼女ができたんなら：相手の親にも認めてもらわんと
許してもらえないぞ：」

担任がやってきた。

「彼女のおかあさん

えらい剣幕だぞ……。

あれは彼女も帰ったら 怒られるだろうな……」

俺は一気に落ちこんだ……。

千夏を失いたくない……

親に反対されたって何したって

俺は千夏と一緒に生きたいんだ

そう思うと今までのおこないが急に情けなく思えた。

俺らこれから……どうなっていくんだろう……

負けない気持ち 六話

「おかあさん あくまでもお嬢さんたちは被害者です。そんなに責めたら可哀そうですよ。」

千夏についている婦人警官が母親の取り乱し様を見てそう言った。

「そうですけど…大事な受験もあるし…
こんな顔になって…第一この子に不良の子と付き合いがあるなんて…
そんな子と友達なんかじゃないわよね？」

典型的な教育ママって感じで
俺なんて絶対に受け入れられないだろうな・・・。

「ママ やめて。彼は悪い子じゃないから。
私の大切な人だから そんな言い方しないで。」

千夏はきっぱりと言い切った。

「ちーちゃん…あなた…いつからそんな
大切になって…どういう意味なの？まさか……」

「そうよ。付き合ってるの。
もうずっと前から。だからそんな言い方しないで。
ママでも許さないから。」

千夏の声に胸が一杯になった。

先生が俺の肩を抱いた。

「彼女のためにも…わかってるよな？
ちゃんとOKもらえるような男にならないと…」

そう言ってニツコリ笑った。

うれしかった……。
誰より千夏が認めてくれているのが…まじうれしかった。

「溝端の名前は 本当のおまえ自身からかけ離れて大きくなりすぎ
だ。
勝手に一人歩きしてるから…今回みたいなことに
巻き込まれることになるんだ。
しっかりとした姿でそれを跳ね返さないといけないぞ。」

「はい…すみません…」

足音がして千夏が立っていた。

唇の腫れはさらにひどくなっていた。
俺は立ちあがった。

「ごめんな。痛いだろう…」

「大丈夫ったらしくこんただってひどい顔よ。
お大事にしてね。」

しばらくあんな状態だから 受験まで会えないわ。
私も力入りたいし…。」

そう言いながら三月のカレンダーの八の日を指でさした。

俺も思わすうなづいた。

「千夏！！！！トイレってどこですか？」
母親が怒鳴ってる。

「じゃあ 頑張ろうお互いを信じて」

千夏はそう言うのとニコリと笑って 母親のところに戻って行った。

俺も頑張るよ…生まれ変わって…

三月八日のカレンダーを見ながらそう思った。

負けない気持ち 七話

俺は髪の毛を坊主刈りにした。

学校では驚いていたけど 残念なことにぼうずでも
悪い顔がさらに迫力を増して悪人顔に見えた。

鏡を見ながら

習慣はそう簡単には変わらないんだと笑ってしまった。

俺はあの日の千夏との約束から こんなに勉強したことないくらい
に勉強した。
担任がサポートしてくれてわからないところを
徹底的に付き合ってくれた。

「先生：俺外人の友達いねーのに何で英語勉強するんだ？」

「いつか友達ができる時のためさ」先生はそう言って笑う。

少しづつ変わって行く俺に　悪い仲間たちが（俺は仲間とは思ってないけど）

「今さら　何やってんだか…」　バカにしながら噂していた。

俺の人生は今　千夏だけのものだから

千夏を幻滅させないように頑張ってるんだ。

「おまえさ　やっぱり思った通りだな。」

「何が？」

「飲み込み早いわ。勉強しつかりやったら
もっと上の学校目指せたのにな。これからでも遅くないから
将来のために彼女のために　勉強頑張れよ。」

先生の言葉がうれしかった。

認められれば　千夏の親にもいつかきつと会いに行ける。

「英語ってさくけっこう面白いんだね。」

「面白いだろう。発想と転換だな。何事もさ。」

今頃千夏も頑張ってたんだろうな

そう思いながら 千夏を想った。

会えない時間は俺らをきつと深く結ばせてくれる

俺はそう信じていた。

千夏と会ったらすぐに抱きしめてキスをたくさんしよう……。

俺はその楽しみを胸に
机に向かって 必死に勉強する。

千夏との将来に向かって 俺自身も変わり始めていた。

負けない気持ち 八話

受験の前日 初めて自分が受ける高校へ足を運んだ。

受付で名前を言うと 一瞬受付の生徒たちの顔が変わった。

目配せをして先生が二人 俺のそばにぴったりとついた。

向こうは普通に行っている演技をしているが
どう見えても俺が暴れるのを抑え係とも言えそうな若い先生と
絶対柔道部と言えそうなガッチリした先生

ここまで来て俺は何もしないのに：

「おゝゝ!!! アイツか? こんた!!!??」
階段の上の方から 声がした。

「溝端 陽之介か?」とりあえず先輩という上級生から声がかかった。

俺はいつもならガンを返すところだったけど
今はとても穏やかな気持ちでいた。

ニツコリ笑って ペコリと頭をさげた。

「お…お…見たか!!! 今 頭さげたぞ!!!」

「マジか〜!!!?」

見るからに悪そうな奴らがどやどやと俺を見下ろしていた。

同級生の間からも遠目で俺を見てる視線に気がついた。

俺って…そんな悪い奴だと思われてんのか…

今まで人の目なんて怖いこと一つもなかったのに

千夏の親の目を気にしてから これから先付き合うことを禁止なんかされたら

どうしようとか そんなことばっか考えた。

きつと…禁止されるだろうけど…

だからこれからは少しづつでも軌道修正をして

千夏といつか結婚を許してもらえるように頑張ろうとか

考えていたから……。

やっぱ……難しいのか……

金髪を坊主にしても 鏡の中の俺は悪人顔だし……
人の視線は痛いし……

それでも負けない心を持って 前を向いてやる。

今頃 千夏も高校見学してるんだろうな。

もうすぐ会える……。

受験が終わったら…… やっと千夏を抱きしめられる。

「や…あれが…溝端？」

「最悪……ちゅーかここ受けないでほしい」

女子の声・・・・・・・・。

傷つくな

俺は苦笑いをするしかない……。

千夏はよく俺を受け入れてくれたな

そう思うと千夏に感謝した。

千夏との出会いが　もしかしたら俺にいろんなことを気づかせてくれた気がする。

一人の女に出会い　恋をして　恋をされて
そして今までの自分のことを包み隠さず話して
それでも　こんな俺でも　愛してくれた。

千夏のためにも　俺はやるぞ

俺は明日にせまった入試に最後の力をぶつけようと誓った。

俺が変わったらきっと 周りも変わる……。

千夏の親に許してもらえるように……

俺の将来に初めて 希望の光を見た気がした。

千夏がいるから 千夏がいてくれるから

俺は千夏の笑顔に感謝せずにはいられなかった。

負けない気持ち 九話

待ち合わせの日　楽しみの給食も食べられないくらい
俺はドキドキしながら過ごしていた。

待ち合わせの時間の三十分前に公園についた
ベンチはまだ雪がかぶっている。

今日もまた雪が降り続けている。

千夏が待ち合わせ時間と言った時間が過ぎても
姿が見えなくて
期待感から不安感に変わって行く……。

どうしたんだろ

親に反対されたんだろうか

それとも病気だろうか……

交通事故？

たくさんのもしかしたらを考えてるだけで　いてもたってもいられ

ない。

俺は千夏の家の方に向かって歩き出した。

途中で会えるかも知れない……

でも千夏が坂道から降りてくることはなかった。
俺はしばらくコンビニの中で立ち読みをしながら 千夏の姿を探した。

待ち合わせの時間からもう三時間が過ぎていて
あたりはもう真っ暗になってきた。

忘れてしまったんだろうか……。

朝からの期待感がどんどん絶望感に占められて俺の心は
厚い雲がかかっていくようだった。

この日のために 頑張ってきたんだ

坂道を登る交差点から 一台のベントが降りてきた。

もしかしたら……

俺はその車の姿が消えたと同時に坂道を駆けあがった。

今のは千夏の親じゃないのか

会社の社長ってあくいう車に乗ってるんだよな。

吹雪の坂道

頬が雪に濡れて真っ赤になってるような気がした。

会いたい 姿だけでもいい

千夏が俺を 忘れてなかったらそれでいいんだ……。

坂道のとっぺんにあの家が 俺を拒むように見下ろしていた。

息が切れて門の前で 息をハアハアと整えた。

大きな窓には灯りがともっている。

そして新し車のタイヤの後がガレージの前についていた。

両親のうち　もしかしたら一人が残っているかもしれない

もしそうだったら…きちんと挨拶をしたらいんだ
堂々と…今はダメでもきつときつと　俺が頑張ったら
受け入れてくれる日が来る。

インターフォンを押そうとした時　玄関のドアが開いた。

俺は慌てて

「あ…すみません…溝端と言います…」と言って息を整えて
顔を上げようとした時

俺の胸の中に　千夏が飛び込んできた。

俺は…もうこのまま死んでもいいって…思った。

負けない気持ち 十話

「こんた~~~~あぁ~~~~」

千夏は泣き声……。

俺はそんな千夏をギュッと抱きしめる。

「なっち…会いたかった……。」

「こんなに体冷たくなって……」千夏は俺の頬を温かい手で静かに
おさえた。

「ずっと待ってたから……何かあったんじゃないかって……」

「ごめんね…今日私がこんたと会うこと…どうしてなのか…気がつかれて…」

でね…絶対に行っちゃダメだって……

私一生懸命…こんたのことわかってもらいたくて

話したんだけど…聞く耳もたなくて……

やつともう出かけないだろうって思ったんじゃない？

さっき仕事に一度戻るって言って出て言ったの……。

私はこんたが…待ってる気がしたけど…

めぐがいるから…とってもこの天気で
めぐを連れてはでかけられないもん…」

千夏は嗚咽しながら必死に今日の出来事を
俺に話してくれた。

「わかってるよ…大丈夫…
なっちが俺を忘れていなかったらそれでいいんだ。
会いたって思ってくれてただけで
幸せな気分になった…。」

「今ね…めぐがうたた寝してたから…
早く…一時間もしたら帰ってくるから…」

千夏は俺の靴を持って
俺の手を引いて階段をあがて行く。

顔を見るだけでもよかったけど…

千夏の部屋に入って 千夏が抱きついてきた。

「もうずっとずっと…したかったの……。女の言うことじゃないよね…でも…嫌いにならないで…」

俺は感動していた。

俺をこんなに求めてくれているんだって……。

「俺だって…ずっとずっとこうしたいって思ってた。」

千夏をベットに押し倒して 長いキスをした。

千夏の吐息が甘い吐息に変わって行く。

「こんた…愛してる…

誰になんて言われても…こんたしかいないの……」

千夏が可愛かった。

俺はそんな千夏の全てにキスをした。

「俺も愛してる……」

なっちの全部を…俺が守ってやるから……。」

こんなに他人を愛せるなんて知らなかった。
千夏がいれば何もいららないんだ。

今　ここに爆弾が落ちても千夏と一緒になら…絶対幸せだって……

俺の腕の中で　女に変わって行く千夏を見て
俺も男に変わって行く……………。

久しぶりだった…。

何度もキスをして　愛を囁き合う

「二人はどんなことがあっても　変わらない……………」

そう誓い合って…………千夏は俺の背中に爪を立てた。

「こんた・・・こんたが…大好き……。」

余韻に浸って抱き合っていたら

千夏の涙が枕を濡らした。
その涙を見て

「俺が…これからしつかり頑張って
きつとなっちの親に許してもらえるような男になるから……」
そう言った。

「うん…きつと…許してくれる
だって私の愛した人だもん……私も頑張るから…
二人の未来のために……」

キスをして
二人で微笑みあった。

「帰んなきゃ・・・」俺はまだ千夏の温かさに触れていたかったけど
親が戻ってきたら大変だから 起き上がって洋服を来て

それを見ながら千夏はずっと泣いていた。

「離れたくないよ……」

俺は千夏の額にキスをした。

「離れてても愛は育つから　大丈夫だよ。」

「次はいつ会える？」

とりあえず…四月の日曜日　いつもの公園で待ち合わせした。

「一カ月も会えないんだ……」千夏が口を尖らす。

その唇を　素早く奪う。

「行くよ。」

千夏はやっと起き上がって　洋服を着た。

階段を降りて行くと

「ねーた~~~~ん~~~~どこ~~~~!?」 恵美の叫び声

「やば…めぐ起きちゃってた~~~~」 千夏はペロツと舌を出した。

千夏は恵美を迎えにリビングに走って行った。
俺は玄関で靴をはいていたら

泣きじゃくる恵美を抱きながら 千夏が出てきた。

「ほら〜おにーたんだよ〜」 千夏が俺に恵美を差し出した。

「にーた~~~~ん」 恵美の笑顔にとろけそうになった。

「ひさしぶりだったな〜」

俺は恵美は天井に向けて抱き上げた。

「またな…」その隙にいつものように千夏と熱いキスをした。

恵美は天井にタッチしながら声をあげて喜んでいた。

「うん…またね…」

俺は 幸せな気分で屋敷を後にした。

違う道を回って降りて行くと ベンツが坂道を曲がって行った。

あぶなかった…あ…

千夏に引っかけられた背中が ちょっとチクツとした。

恋の試練 一話

「携帯が欲しいんだけど……」 勇気を出して親父に言った。

親父はビールを飲みながら怪訝な顔をして

「高い授業料払うから…無理だな…学校行けるだけでもありがたい
と思え。」

予想通りの答えが返ってきた。

「バイトでもすりゃいいだろうが。自分で稼げ なら買えるだろう…」

バイトか……

高校行ったら 家の事情とかでバイトができるって言ってたな
そっか…バイトしたらいいのか

携帯さえあったら 寂しい思いさせないのに
いつも心の中を語りあえるんだ。

合格発表の日

俺には手ごたえがあったから余裕の気持ちで 発表を見に行った。

しかし…俺の番号は何回探しても…見つからなかった……

うそだろ…………

目の前が真っ暗になった。

数人が掲示板を見て安堵の声をあげていた。

なんで……俺…試験はできたはずだし……

絶望感にどこをどう歩いただろう……

学校に戻ることになってたから
気が付いたら門の前にいた。

「溝端……」 先生がくらい声で俺を呼んだ。

「先生…俺…試験はできたはずなんだけど…」

「俺もそう思ってる…おまえ頑張ったからな……。」

「なんで…ダメだったんだろ……」

先生は深くため息をついた。

「この間 警察の世話になっただろ？
それが学校側が知っていたらしいんだ……。」

「俺…被害者なのに……？」

「それでなくてもおまえに警戒してたからな。
警察は被害者だし穏便に済ませてくれたはずなんだが……。」

「じゃ…千夏も？」

「多分あの子は大丈夫だろ……。
あくまでも被害者なんだからさ。
おまえは今までの行いと評判で…おとされたんだろう……。」

「そ…そんな…」

絶望感が俺を襲った。

「おまえみたいな子は絶対上の教育を受けさせるべきだ。
俺に任せておけ……」

先生がそう言うのと俺の肩をポンポンと叩いた。

涙が流れた……。

悔し涙 後悔の涙

「負けんなよ。おまえは絶対にできる奴だって俺は信じてるぞ。」

「せんせ……」

俺は声を上げて泣いた……。

先生に会えてよかった……

俺をわかってくれてありがとう……

素直な気持ちを先生に話した。

俺はなんとか 定時制という形で 勉強をすることになった。

恋の試練 二話

卒業してからも先生は俺の進路を探してくれた。

定時制の高校に決まってから

昼間 働くところを探した。

なかなか決まらず

先生と一緒に いろいろ足を運んでくれて

少し離れたところで働くのがいいだろうと

隣の市のスーパーでバイトという形で

朝から午後まで働き 通うのはちょっと大変だけど
終わってから学校に行くという生活になる。

何より俺を立ち直らせたのは
収入が入るということだった。

金さえあれば…携帯だって…もしかしたら一人暮らしもできる

千夏のように切り替えて前向きに生きていこうと思ったら
なんだか楽しみになった。

「先生…ありがとう…」

「なんかあったら連絡してくれよ。
おまえは俺の可愛い生徒だからな」

そう言って笑った。

先生のためにもしっかりやらなければと思った。

入学式が済み

千夏との約束の日を迎えた。

今日は来れるかな……

待ち合わせ時間

俺の進路も千夏に伝えたかったから

神様に千夏と会えるように何十回も祈り続けていた。

「にーたーくん!!!」可愛い声

小さい恵美の手を引いて 満面の笑みの千夏が走ってきた。

会えた

俺は神様にお礼を言った。

そしてすぐに駆け寄って恵美を抱き上げて
そしたら千夏が俺の胸に顔をうずめた。

「会いたかったよ…」

「俺も会いたかった……」

公園のベンチは乾いていてまだ足もとに少し雪が残っている。
俺たちはそこに腰掛けて
おどける恵美を見つめながら

こっそりと指と指をからませた。

「合格したか？」

「うん！！ こんたは？」

「俺は…試験では問題なかったけど このまえの騒ぎが
学校がわに知られて不合格だった……」

「え？ だって…被害者じゃん…」

「俺のおこないの問題だよ…問題児を入れたくなかったんだって」

「ひどいわ…今はちゃんと頑張ってるのに……
うちの両親みたいに頭カチンカチンなのね。」

「でもさゝ先生が見つけてくれて定時制に通うよ。
昼の仕事も決まったんだ。」

「そうなの〜〜!？」

千夏は自分のことのように喜んでくれた。

「あゝそれじゃ今度から 会いたくなったら
そのスーパ―にいけば会えるのね。」 と言って目を輝かせた。

「あゝそうだなゝ
でもちよつと遠いぞ。汽車に乗って来ないとゝゝ」

「海を見ながら こんたに会いに行くなんて素敵ゝゝ
よかったねゝゝ頑張つてね。」

「先生のおかげなんだゝめっちゃ相談に乗ってくれて
俺の進路先決めてくれたからゝゝ」

「私も教師になったらそうやって 生徒の心に残る先生になりたいわ……」

千夏の夢は 教師だった。

小さい頃に見た ドラマが影響して 絶対先生になるって言ってた。

「そうだな、俺は絶対に先生を忘れないもんな。」

話している間も二人の指は絡み合う。

「一人暮らしするからなく金ためていつでも一緒にいられるように」

「うん……そしたらずっとベットのなかだね」悪戯っぽく千夏が笑う。

あの夜の出来事を想像して…指だけでも刺激的に感じた。

「一年だけ千夏に遅れちゃうけど…待っててな。」

「うん…待ってるよ。」

恵美が向こう側を見た瞬間　キスを交わした。

どんな短いキスでも　軽い触れ合いでも
俺たちの中では　幸せだった。

「会えない時間はやっぱり…愛育ててくれるんだね……
だってこんなに会うと幸せで
会えるまで好き好きって大きくなるもん……」

「俺もだよ……。」

千夏に会うために…俺　生きてるんだと思う……。」

「うれしい…うれしいよ……」

千夏が俺の肩に頭を乗せた。

恵美が走ってきて

「ダッコ」と言ったら膝の上に座らせて
三人で顔を見合って笑った。

「可愛いめぐでも おにーたんは おねーたんのものだからね」

千夏がそう言うとき 恵美は無邪気に

「おにーたん」と言って足をばたつかせて笑った。

「これから 会いに行くから……
迎えに行くよ」一緒に海見ながら帰ってこようね。」

千夏はそう言って俺の腕に 自分の腕に手をまわした。

「大好きよ…こんたが好きでたまらないの…」

四月の空は 希望の色・・・・・。

恋の試練 三話

お互いに高校生活がスタートして 千夏は親の目を盗んで俺に会いに来てくれて

俺にも給料が入って 携帯電話と それから給料が入るとホテルで愛を確かめ合う……。

そして公園で恵美と三人で会う

恵美も千夏に似て賢い子で 千夏と二人で恵美にひらがなを教えるのが楽しかった。

そんな夢のような楽しい日々を送っていた。

「勉強さえおとさなかったら 親は大丈夫よ。」

と千夏が言うように 学年五位以上の成績をとって 積極的に学校行事に参加して

弁論大会なるものでは毎回賞に入っていた。

「きっと こんたとは終わったって思ってるわ。

大丈夫…うまくやってるから」

そう言って千夏は微笑んだ。

俺に会う給料日後の週末を　フリータイムでベットで過ごす

愛おしさは募る一方

そして千夏の前向きな強さに　俺も恥ないようにと　必死に立て直しながら

俺たちは高校三年生になった。

千夏は教育大を目指し

俺もいつしか　千夏と一緒に教師を将来の希望に入れていた。

「一年遅れるけど待っててな。」

「好きな人と同じ夢を追えるなんて幸せよ。」

恵美はそう言って喜んだ。

俺も必死に勉強していた。

正直　時間的には本当にきつかった。

学校から帰ってきて　深夜まで勉強して

そして朝 九時までに隣街の仕事場に行き そして学校へ
だけど充実していた。

確実に自分は変わって行くんだって 手にとるようにわかった。

会えない時はメールや電話で千夏と愛を語り合う

それだけで十分に 充実してる毎日を過ごしていた。

「愛してる?」

「愛してるよ……愛してる?」

「うん…愛してる……。」

愛を囁き合う毎日がずっと続くって 信じていたんだ……。

「恵美はなっちにソックリだよな。」
「どうしてる？ 元気してる？」

「そうでしょ？ 私の小さい頃の写真とめぐはソックリで
ママがたまに混乱するくらいって言ってた。
元気にしてるよ」

頭がいいって 園でもビックリされてるらしいわ。
だって、先生志望の二人に教育されたんだから、ね」

恵美がしつかりしてきてからは
千夏が怖がってあまり恵美とは会ってない。

「こんたのこと絶対内緒だからね。」

「わかってるって」

恵美は 俺と会う時に 千夏に何度もいい聞かされて
最近は少しムツとする様子だった。

「こんたに会いたがってたから
今度また連れてくるわ。」

もしなんかの拍子にママに言ったら……って思うと怖いんだよね。」

「そうだな……。」

恵美には会いたいけど…もう何十回も内緒だって言われたらさすがにムツとしてるもんな」

「最近ねーけっこうな反抗期なんだ。家でも手をやいてるわ。」

「そっかー恵美はきつと千夏にソックリに成長するんだろうな」

愛しい唇に甘いキスをした。

「こんなにも弟がいたら 絶対めぐの彼氏にしてあげるのにー
きつとね…ここだけの話
めぐの初恋の相手は こんた なのよ。
だって…うふふ…反抗は私にひどいから……
それもこんたに会わせろってー」

「マジ？」

「姉妹して同じ男の人を好きになったら修羅場でしょー
めぐがまだ 子供でよかったわー」

千夏はそう言ってケラケラ笑った。

そんな千夏を俺は抱きしめる……。

「一生 離さない……。」「そう囁きながら……。」「

恋の試練 四話

高校に入ってから俺は 背がまた伸びて183センチになった。
ガリガリだった体は 家での筋力トレーニングと
仕事場での米や酒など 重たいものを荷おろし作業も手伝って
ずい分しっかりとしてきた。

お金をもらうことで食事もしっかりとれたし 心優しいパートのお
ばさんたちに
可愛がってもらっていい食事もとれるようになった。

「こんた……」 いつものようにベットの中で千夏が呼んだ。

「ん？」 俺は向きを変えて千夏の方を見た。

千夏は俺の顔を指でなぞって

「もう…これ以上 素敵にならないで……」とうつぶさながら言った。

「え？素敵って…俺？」 嬉しい言葉についつい顔がほころぶ。

「だって…前はおっかない顔してて…みんなが怖がるような感じだったのに

今はさくめっちゃカッコイイんだもん……。だから……うち……心配なんだもん……。」

千夏が可愛かった。

「そんなこと言うのなっただけだし……サンキュー……全然もてないけどもし……もてても俺にはなっちがいればいいんだ。他はなんもいらないから……」

「うれしい……」

千夏の言葉がうれしかった。

男としては好きな女にそんなこと言われたらたまらないから千夏にもっとドキドキしてもらえるような男になりたい

俺はそう思ってこれからもやって行こうと思っていた。

そんな幸せな日々に 突然思いがけないことが起きた。

今月に入ってから千夏が体調が悪いとぼやいていた。

「風邪でもひいたのか？」

「うん…熱っぽくて食欲ないの……。」

「そんなの俺に半分うつしちゃえ」俺はそう言っただけいつものような熱いキスを千夏と楽しんでいただけ……

仕事先に迎えにきた千夏

「顔色…悪いんじゃないか？」俺はさえない表情の千夏にそう声をかけた。

「あのね…」そう言っただけ千夏が黙り込んだ。

千夏の言葉を待ったけど沈黙が続いた。

「どうした？何かあったのか？」こんなに元気のない千夏は初め

てだったから

俺は心配になって千夏を抱きしめた。

「どうしよう……。うちのこと重くならないで……」

「そんなこと思わないから……どうしたんだ？」

千夏が俺の背中にぎゅっと力を入れて　すがりついた。

「あのね……うち……妊娠してた……」

俺の背中にスーッと緊張が走った。

恋の試練 五話

「に……に……」

さすがの俺も動揺していた。

千夏は俺を見上げて 今にも泣き出しそうになっていた。

「ごめん…こんなこと言っているのか…わかんないけど…」

俺の言葉に 今にも涙がこぼれそうな千夏の大きな目がキレイでじっと見つめていた。

「俺…喜んでいい？めっちゃ…嬉しいんだけど……」

千夏の中からポロポロと大粒の真珠が落ちた。

「ホント？喜んでくれるの？」

「あたりまえだろー俺となっちが愛し合ってここにできた命だろう？喜ぶに決まってるだろう？
なっちはどうだった？」俺は急に心配になって聞き返した。

「うれしいに決まってるー」

人目をはばからず俺たちは抱き合った。

俺は千夏を高く抱き上げて　そして抱きしめた。

「あ・・・子供が苦しがったら困るから…」少し力を緩めたら
千夏が笑った。

「うれしいー」

その日　俺はまだぺったんこの　千夏のお腹にキスをして

「パパですよー」と声をかけた。

俺は絶対に自分の子供を愛して愛して　大事にするんだ。
そして愛する人といつまでも一緒に生きていく……。

夢からさめて現実に戻ると急に 怖くなった。

「千夏の親に…なんて言おうか……」

「きっと今言ったら おろしなさいって言われるもん……。だからギリギリまで絶対に言わない……。大学生になって結婚してる人だってたくさんいるし絶対ばれないようにする。」

俺は急に申し訳ない気持ちになった。

「ごめん…一人で辛い思いさせて……俺も一生懸命働くよ。」

「病院はまだ行っていないけど 検査薬では陽性だったから来年の6月には生れるわ。」

「6月か…なんかすぐだなく」。

それまで三人で暮らせるように頑張らないと・・・。
とりあえず千夏は大学に行く準備をして：なんとか
見つからないように：：：やっぱり俺じゃ反対されるよな：」

千夏だけに辛い思いをさせる気がして
申し訳ない気持ちで一杯になった。

「大丈夫。うち：ママだもん：。

絶対 ぎりぎりまでばれないように頑張る！！
うちの親 忙しい人たちだから：多分そんなに私のこと気にしてな
いと思うの。

成績くらいかな～あの人たちが喜ぶのは
子供の幸せより テストの点数や通信簿の5の数 何人中何位だとか
そんなことくらいしかないよ。
後は大学のことかな～」

「そっか～」

でも俺の親父はまったく興味なしだから：とりあえず
教育費払って寝かせてくれる部屋があるだけいいかな～って：
殴られなくなったら感謝もできるようになったよ。

俺はどんな父親になれるだろう：：：。」

「こんたはね…一杯愛してくれるわ」
だって今こんなに　うちを愛してくれるでしょ？」

「なんかちよつと不安だったから
今のなっちの言葉に救われた気がする……」

「最高の親になれるわ。」

千夏を愛する時　繊細なものを扱うようで手が震えた。

「大丈夫か？」

「うん…大丈夫だよ……」

千夏は…少女で女でそして…母になるんだ……。

女の千夏はいつものように
俺の腕の中で　甘く切なく　喘ぐ……。

そんな中で

俺はこれから…千夏と子供を守る強さをどうやって身につけようかと考えていた。

恋の試練 六話

冬になると千夏の腹も少しづつだけ 目立ってきて
俺はお腹の子供に語りかける。

子供が潰れる気がして 千夏を抱きしめたまま二人の時間を過ごす
ことが増えた。

なんとか親に見つからず
受験に近づいてきて…千夏は子供をかかえながら
勉強に励む。

いつでも どんな時でも 一生懸命な千夏に
負けないように俺も仕事 学校と真面目に取り組む毎日だった。

高校の担任から
「大学の準備をしておけよ。おまえなら国立でも行けそうだし
俺たちと同業の夢を持ってくれてる
将来のホープは大事に育てないとな。」

担任は笑った。

千夏と出会ってから人が好きになった。

まともな人生を送れるようになったのも 千夏の愛に支えられてきたからだと感謝した。

だから子供が産まれたら 俺が二人を守って愛し抜くんだ。

「最近 太ったんじゃない？」って言われ始めたよ。
千夏が言った。

「お腹が可愛くなったからなく。
病院とか…そろそろ行った方がいいよ……。
俺も一緒に行くからさ……。」

二人で数えていても もう千夏の子供は
両親によっておろされるという 恐怖からは免れる。

「妊娠のこと…話しに行こう。
ちゃんと挨拶しておきたいんだ。」

千夏の表情が曇ってきた。

「俺も…めっちゃ怖いけど…わかってもらおう…」

一生懸命頑張るよ……。

俺ね、今の店の店長からずっと働いてくれて言われたんだ。だから考えてた……俺は大学は行かないから……

卒業したら店に就職して……そうしようと思うんだ。」

「え……。だって先生になるって……。」

「いいんだって……なっちは夢に進め……

ちよつとだけ学校には行けないけど休学して体が落ち着いたら戻ればいいよ。いろいろ調べたんだ。

そうしよう……俺は俺の夢はさ……なっちを守ることだけ……そばにいてくれたらそれが俺の夢になるから……。」

千夏の中から大粒の涙がこぼれる……。

「愛してる……。こんな風にまともに生きれるなんて

思ってもいなかった。なっちに救われたんだ。

俺の人生……まだ18年だけど……生きてきてよかったって言える。

それだけ千夏に出会えた俺は……それだけでも財産で……幸せなんだ。」

千夏は俺の胸に飛び込んだ。

「愛してる…本当に今死んでも…何も…何にも後悔なんてない……。
うちも…こんたに会えて…最高に幸せだよ……」

震える可愛い唇にキスをした。

恋の試練 七話

千夏の推薦合格が決まった。

俺は居間でテレビを見ていた親父に緊張しながら声をかけた。

「ちょっといいか…話があるんだけど…」

そばでタバコを吸っていた女が立ち上がって
台所に行った。

俺は親父の前に座って正座した。

「何だ？」親父はギロツと俺を見た。
まだこの目で睨まれると 俺は手が飛んでくるんじゃないかと
かまえてしまう。

「あ…あのさ…俺 一人暮らしたいんだけど…
高校卒業まであと一年あるけど…来年早々に…
仕事場の近くに引っ越したいんだ。」

「学校はどうすんだ？」

「…やめてもいいと思ってる。」

「おまえ成績いいって先生から電話もらったぞ。

国立目指せるって だからおとうさんの意見聞かせてくれて…

俺はおまえにしてやれることは あとは大学を出してやることくらいしかない…

おまえには…つらい思い…させてきたから…よ…」

は??? 今…なんて言った?

「悪かったな…親父として何もしてやらんのに
おまえにあたりちらしてごまかしてきた…」。

愛情のかけ方がわからなかった。

言うこと聞かないと 駄ないと思った。」

親父は今 俺に謝罪してるのか…?

「俺には 親がいなかったからな…」。

捨て子だったんだ。 寺の前に捨てられてたって…
もう少し遅かったら死んでいたらしい…。

死んでもよかったんだけどな 生きてしまったばかりに

親を恨み 社会を憎み……そんな俺が親になったのをまた憎んだ。
おまえには関係ないのにな……
やめなきゃ……優しくしなきゃって思えば思うだけ……
おまえに辛くあたってしまった……すまなかったな……。
もうおまえも一人立ちするなら……俺はなんも言わないから……
おまえの思うとおりにしろ。」

思いがけない親父の言葉に俺は動揺していた。

「あ……あの……」俺は言葉を探す。

「保証人か？いいぞ。金があるなら出世払いでも……いいぞ。」親父はあっさりと言った。

親父の様子にペースが狂ってしまった。

「あのさ……俺さ……あ………」

「なんだ？早く言えよ。」

「結婚したい人がいるんだ。」

親父の顔が止まった。

「ごめん…驚かせて…子供が生まれるんだ……。」「

親父はもっていたコップを落とした。

せつかく親父とわかりあえる瞬間だったのに…

俺もついていないなと 第三者的に見てる俺がいる……。。

恋の試練 八話

長い間 沈黙していた父親が

「おまえのしたいようにしたらいい。」そう言って居間を離れて言った。

投げ出されたのか 認めてくれたのか わからない言葉だったけど
俺の思うように生きていいっていうことだと
そう考えるようにした。

千夏の両親に挨拶に行く前日は一睡もできなかった。

朝 千夏の家の近くのコンビニで待ち合わせをした。

「こんた…大丈夫？」

「すげー緊張してる……。ほら…。」

ダウンのチャックを下ろして千夏の手を心臓に持って行った。

ドクンドクン

「うわ……ほんとだ……」

千夏も不安げな表情だった。

「許してくれるなんて思っ
てないから……ひどいこと
言われたら……」

「可哀そう……。挨拶やめよう……。？」千夏が言った。

「え？ そんなわけには……」いきなりの千夏の言葉に驚いた。

「ずっとずっと考えてたの……。どうせ許してくれるわけないんだしそれなら二人で逃げた方がいいって……」

「こんたを傷つけるわ。きつと……私はいいんだ。」

「情けないとかバカ娘とか……何言われてもいいから……」

「こんたを傷つけたくないんだ……」

俺はレジで温かいコーンスープを買った。

「行こうか……」千夏の冷たい手を握った。

「こんたと付き合っ
てんのがばれて……
ずいぶん嫌がらせさ
れた……」

散々 めぐのお守とかさせてたくせに…

何百回出て行こうって思ったか…私の行動を監視させるのにお手伝いさんに報告させてたり 学校に会社の人が迎えにきてたり こんたにはそんなことされてるの言えなかった…。だってこんたはきつと

自分を責めるから…：なんとか乗り切らないとって…：
だから勉強した…：成績さえよければあの人たちはニコニコだから…：。

こんたを隠すために親の前で

『もう終わってるしゝあんな人と真面目に付き合うわけない』とか 親がこんたの存在を切るように 嘘八百言いまくって…：

ごめんね…辛かったけど…：こんたを守るためには 仕方ない嘘を一杯ついて 親の気をそらしたんだ。」

俺は温かい缶を千夏の赤くなった頬に静かに押し当てた。

「あったかいゝ」千夏は目を閉じた。

「ありがとうなく俺がもつとしっかりしてたら なっちにこんな苦労はさせなかったのに…：。

ありがと…俺を守るために…一杯つらい嘘つかせてたんだな…：」

「うん…：。辛かった…：。

世界で一番愛してる人を悪く言うの……。」

「大丈夫だよ…。」

ここの本当の気持ちは俺が一番知ってるから。」

千夏の胸に手をあてた。

「もし…許してもらえなくても…ここから逃げても俺は千夏と子供を守るから……

なっちの好きな本をたくさん買ってやれる夫になって子供をめっちゃめっちゃ愛してやる……

大丈夫…安心して…絶対に迎えに行くから……」

「ひどいこと……言われたらごめんね……」

「ほんとの親に散々言われてるから慣れてるよ……。心配するな。」

千夏の不安そうな表情が痛々しかった。

「笑って…

ママの笑顔がパパの勇気になるんだよ……。ほら……」

俺は千夏のお腹を撫ぜた。

「ここにいるヤツも心配してるぞ。」

千夏はやっといつものような笑顔になった。

千夏が笑顔でいること…それが俺のやるべきこと……

深呼吸をして二人でしっかりと手をつないで…
新築の豪邸に向かって歩き出した。

見えてきた豪邸に 黒い雲がかかって見えた……………。

恋の試練 九話

「あ…そうだ…」

千夏は ビニール袋を取り出して

「この間 読んでみたいって言ってたでしょ。
貸してあげるよ。」

読書好きの千夏が最近感動したと 興奮して教えてくれた
ちよっと分厚い本を俺に差し出した。

「うわ……すげー字が…ちっこい…」

「面白いから絶対に読んでね。
こんたの感想も聞きたいから」

「ちよっと時間かかるけどいいのか？」

「いいよ」

「サンキュー」俺はカバンに本をしまった。

「じゃあ…行くね…」

心臓をおさえて二人で笑いあった。

門から入ると 恵美が走ってきた。

慌てて千夏が 恵美を抱き上げ

「あとで遊んであげるから おにいちちゃんのこと知らないフリしてね。」

一瞬俺に微笑みかけて 恵美は顔がとまった。

「めぐるるる!!」雪山の陰から 現れたのは体の大きな目のキツイ男の人で

千夏のおとうさんだ

目元がそっくりだ…キツさは千夏にも恵美にもないけど…

顔が一瞬にして気むずかしそうな表情に変わった。

「あ…パパ…あの…溝端 陽之介くんでは…」

「千夏さんとおつきあいさせていただいてます。溝端といいます。」

体中の震えが止まらない…、

その間も厳しい視線が俺に突き刺さった。

「何の用だ？これから出かけるぞ。

おまえも用意しなさい。」 厳しい口調で千夏に言った。

「え？聞いてないし…せっかく来てくれたのに…ちよっと話をきいてほしいんだけど。」

「事前のアポもなくそんなこと言われたって 挨拶に来たって？
うちは認めないよ。千夏には俺たちがいいと思った男と一緒にさせる。」

おまえ…隠れてまだ付き合っていたのか？」

千夏を怒鳴りつけた。

「ちょっと!! 何も話聞かないで やめてよ、失礼でしょ。」

「悪いね、付き合ってるんなら手を引いてもらえるかい？

きみは千夏にはふさわしくないよ。わかるかな？

千夏がきみと付き合っているのを知って

いろいろ調べさせてもらったんだ。」

俺はあまりにはっきり拒絶されて言葉を失った。

恵美が大きな目をして心配そうに俺を見つめている。

「私の人生でしょ？ どうして私の好きな人と一緒にいたらいけないの？」

「おまえと付き合う男は もしかしたらいずれ

この会社をまかすことになるかもしれない人間になる。

悪いけど…きみでは無理だろう。」

「そんなの知らないわよ、なんならめぐだっていいじゃん。

私は絶対こんなじゃないやなの!!」

ヒステリックに千夏が叫んだ。

恋の試練 十話

「何騒いでいるの？千夏帰ってきた？」

玄関から毛皮のコートを着た母親が出てきた。

「どうしたの？」

千夏が母親の前に駆け寄って

「ママ うちこんたと結婚するからね。」

一瞬の沈黙が俺を緊張の絶頂に追いやった。

「何を言ってるの？気でも狂ったの？」

母親が俺を睨みつけた。

「あ…千夏さんとおつきあい…」まで言ったところで

千夏の頬が音を立てた。そしてそのまま吹っ飛ばされた。

「ママ〜おねーちゃん可哀そうだよ〜」恵美が泣きだした。

「このバカ娘が、あれだけやめなさいって言ったわよね。別れたって散々言ってたのに…嘘ついてたのね…嘘までついて…あれはみんな私たちを騙す嘘だったの？」

俺は慌てて千夏を起こしに手を出したら

「触らないで！私たちの大事な娘よ。気安く触らないで！！」

「俺にとっても大事な人です。一緒にこれからずっと生きていく約束をしています。」

俺はやっと言葉を言えた。

「何が…？千夏の将来はもう決まってるのよ。

将来の夢が叶って 少し人生になっとくしたところで私たちの選んだ最高の夫を見つけてあげるって。

それがあなたじゃないことは もう決まってるでしょ。

千夏だけが女じゃないわ。あなたはあなたにふさわしい女の子がい

るでしょ？」

「千夏 出かけるぞ。
用意しろ。」

「やだ 絶対に行かない。」

「千夏!!!!」
父親が怒鳴った。

俺は千夏を抱き起こして 抱きしめた。

「千夏と結婚させてください。」俺はすがりつく千夏をしっかりと抱きしめた。

「なにを・・・バカなこと・・・
まだ何もできないのに 夢みたいなこと言って…」父親は千夏の腕をつかんだ。

力の強い父親に引っ張られて千夏は俺から離れそうになった。

俺は千夏をなんとか抱きしめて

「乱暴しないでください！！！」と叫んだ。

「俺は千夏の親だ。おまえに言われる筋合いは何もない。
手を離せ。今後一切千夏とは会わせない。」

「やだ！！こんなと引き離すんならうち 死ぬから！！
恨んで恨んで……ずっと恨んでやる！！」千夏はもう気が狂ったよう
になっていた。

「落ち着いて……からだによくないよ……」

俺は千夏の背中をとんとんと叩いた。

「俺の娘に気安く触るな！！」父親の拳が俺の頬にヒットして俺は
雪の中に倒れた。

「こんた……！！」千夏が叫ぶと 恵美も大泣きをした。

父親は千夏の腕をねじあげて ジャンバーのポケットから携帯をとり上げて

俺の目のまえで真っ二つに折った。

「パパ!! 何すんのよ!!」 千夏が抵抗すると今度は千夏の頬を殴った。

千夏は吹っ飛んで雪の中に倒れた。

「とにかく帰ってくれ!!!」 父親は俺を見て怒鳴った。

「痛い…痛いよ…こんた…助けて…」と泣きだした。

「なっち…」俺は立ちあがって駆け寄ろうとしたら母親が千夏を抱き起こしに行った。

「こんた…痛いって…」俺の血の気はすーっとひきだした。

母親が千夏を抱えて動きが止まった。

「え……ちょっと……ちょっと……!!!」

いきなり半狂乱になった。

「どうしたんだ!？」 父親がそばに駆け寄った。

「パパ…千夏…まさか…まさかよね……」

千夏が泣きじゃくりながら「私の赤ちゃん…痛いって…言ってるよ……」

両親は茫然としている。

恵美の泣き声と 千夏のうめき声

「なんて・・・? なんて言った?」 父親は俺を見た。

「千夏は妊娠しています。俺の子供です。

6月に生まれます。だから俺たちを結婚させて下さい!」

俺は大きな屋敷に向かって大声で叫んだ。

雪がまた・
・
・
振ってきた・
・
・
。

永遠の別離という結末

「お腹…痛い…こんた…助けて…」

千夏が泣きじゃくる。

「赤ちゃんになんかあったら…許さない…」

千夏の両親は茫然としていた。

「とりあえず病院に連れて行こう。」

父親が俺を思いっきり突き飛ばした。

「こんた！？ 大丈夫！？

もう…やめてよ暴力するの！！！」

「慣れてるだろう？ きみは虐待されていたんだろう？

親にもまともに愛されなかった人間が千夏や子供をどう愛してやるんだ？

親と同じことをするんだぞ、血が流れているんだから。」

「いえ 俺に愛を覚えてくれてのは
千夏です。千夏に愛し方を教えてもらって 俺はやっとまともにな
ったんです。」

「だから…どうして千夏なの？」

あなたにふさわしい子がいるじゃない。

千夏は将来 会社を経営してくれる優秀な夫と一緒になくてもらわ
ないと

あなた高校だってまともに行っていないでしょ!？」

「ママ・・・?なんでこんたが高校に行っていないなんて言うの？」

そう…前から聞きたかったの……。怖くて聞けなかった……

こんたの受験する高校に根回ししなかった?

だって…警察は被害者で受験生だからって…こんたもうちも

学校側には連絡しないって…言ったのに……

試験には受かってるのに…合格できなかったのって…

ママたちが…?」

千夏は放心状態になった。

「そんなこと知らないわ。」明らかに動揺してる母親

「ひどいわ…人の人生めちゃくちゃにする権利がママにあるの?
うちと仲良くしてたからでしょ?ひどいわ……

うち　こんた　になんて謝ったらいいの……」

千夏がまたへなへなと座り込んだ。

「これが親なのかと思うと　恥ずかしくてたまらない……
ごめんなさい……こんた　うちと付き合ったばかりに……」

千夏は土下座をして雪に顔を埋めた。

「いいよ……。そのおかげで俺はこうしてなっちと

一緒にいれたし……社会に出る勇氣もできたし……人間って忙しくして
る方がいいんだ。

だから……そんなに気にするな。俺は後悔してないから。

お金をかせいだから　携帯も買えたし　プレゼントも買えたし……
・一緒にいられたし……」

そりゃ……いい気はしなかった。

千夏の両親は卑怯な大人だと思った。

でも……千夏の親だ……。

「結婚するから!! もう決めたの!!」
許してくれないなら 学校だっていなくていいから!!」

千夏はまた叫んだ。

母親は泣きだして

「あんたのせいよ。
あんたが千夏の頭をいかれさせたのよ!!!!」

「ママ とにかく病院だ。
子供のこともちゃんと調べんと。」

父親は千夏をひきずって車の中に押し込んで父親がすぐに乗りこんだ。

「なっち!!!」 俺は車に駆け寄ろうとした。

暴れる千夏を父親が抑え込んだ。

恵美を抱いて母親が運転席に乗り込んで エンジンをかけた。

「こんた~~~~ア!!!!」 千夏の悲鳴

「なっち~~~~!？」 無情にもベントは走り出した。

俺が千夏側のガラスに手をかけた瞬間 ベントは加速して俺を振りきって走り去った。

千夏の真っ二つに折れた携帯が無残に取り残された。

永遠の別離という結末 二話

千夏と連絡がとれなくなって俺は不安な日を過ごしていた。

父親が手をかしてくれて 仕事場のそばにアパートを借りた。

居間が八畳で台所が別についていてそれにもうひとつ八畳の部屋がついている。

必要なものは父親が買ってくれた。

「俺の城か……」

ここに一日も早く 千夏を呼んで

千夏の笑顔で朝を迎えて そして夜を迎える…

気が狂いそうだった。

どうしたら連絡がとれるだろうか……

お腹の子供はどうしているだろうか…

卒業式が近づいてきたある日

意を決して

千夏の学校の前で待機した。

きっとそこには親の手が伸びているはずだったけど
ここで待つしか手はなかった。

登校時間 多分通るだろうその道で俺は神様に祈りながら
千夏が気づいてくれることを……
親に気づかれないことを……

しばらく待ってたけど 千夏車は見なかった。

どうしてるんだろう

俺は絶望の中 少なくなってきた登校してくる生徒に
後は 託すしかなかった。

千夏の卒業式が終わって それから二人で駆け落ちしよう。

もしも反対されたらそうしようと二人で決めていた。

昨日 書いてきた手紙には

駆け落ちの待ち合わせ場所と時間を書いて 千夏から借りた本に手紙をはさんだ。

どうか…どうか千夏に届きますように……

向こう側から歩いてきた真面目そうな女子にそれを託した。

怪訝な顔をしたけど

俺が「借りていた本なんです。必ず渡して下さい。お願いします。」と頭を下げると

「わかりました。ちょうど同じクラスだから間違いなく渡します。」

と言ってくれた。

「あ：ちゃんと学校に来てますか？」

「ちょっと休んでたけど最近は 来てます。

元気ないって噂してます。もしかして：ちーちゃんの彼氏ですか？
どんな人なんだろうって：。。。」

「他の人に：俺のと言わないでね。

千夏にどうか：渡して下さい。」

女の子はポツと顔を赤らめた。

「わかりました。」

そういつて学校に向かって歩いて行った。

俺はその後姿に手を合わせた。

どうか…千夏の手が届いてくれますように……。

その日に向けて俺は 準備をした。

花屋で千夏の好きな アイスバグの白い花を予約した。
当日 俺はこの花束を抱えて千夏に会いに行くんだ。

この部屋に千夏の笑い声と 赤ん坊の泣き声が
幸せに満ち溢れる日はもうすぐやってくるだろう……。

そんな時 携帯が鳴った。

俺に電話が来るのは めずらしいなと思ってみたら
知らない番号だった。

ためらいながら俺はその電話をとった。

永遠の別離という結末 三話

「もしもし……」

「こんた!! うち!!」

懐かしいそして愛おしい声

「携帯がなくて こんたの番号の最後が思いだせなくて何回も何回も間違えて…やっとなやっとな…今 家。」

「大丈夫か? お腹の子は?」 俺は元気そうな声に安心しながら体の具合を聞いた。

「うん。産婦人科の先生に怒られちゃったよ。こんなになるまで…おかあさんの資格ないって…」 声が沈んだ。

「ごめんな。俺と一緒にいれなくて。」

「でもね 超音波で見たよ。指しゃぶりしてた。めっちゃ可愛い 見せてあげたかった。」

「え？どうやって見たんだ？」

「お腹になんか塗ってね：写真とってもらったから
持って行くね。もう用意終わってるの。
あんまり持っていなくていい？」

「いいよ。俺の服着てたらしいし：あんまり重い荷物
持ってくるなよ。なっちだけいればいいんだ。」

「うふふ……。早く会いたい。」

「親は：やっぱり：なんて言ってた？」

「口きいてないもん。でもお手伝いさんとか使って
うちを見張ってるんだ。」

「大丈夫か？」

「うん。もう逃げるしかない」
朝も早いから 絶対うまく出れるよ。」

「そっか」千夏の明るい声にホッとした。

「あのね…赤ちゃんの名前だけど…夢を見たの。
男の子か女の子かわかんないけどね…
あおい ってこんたが呼んだんだよ。
だから名前はあおいにしよう。いい？」

「もちろんいい名前だよ。
漢字はどう書く？」

「それはこんたにまかせるわ。
うちは呼名でこんたが漢字 二人でつけた名前だね？」

「あおいか」
溝端 千夏 に 溝端 あおい ……」

「もうすぐ…もうすぐ会えるね。
早く会って抱いてもらいたい……。」「

「俺も会いたい……。
これからは朝も夜もずっと一緒だね。」

「愛してるこんた……」

「俺も愛してるよ……」

「ありがとう……うちを見つけてくれて……
こんたに会えて幸せだったよ。」千夏が言った。

「だった……じゃないよ過去形だし……
幸せだよ……だろ……」

「あ……そうだった……あはは」

明るく笑う千夏に俺は安らぎを感じる。

「あ……まずい来た来た!!
電話切るね、削除しておかないと……」。

「じゃあこんた…あさって…」

千夏が焦りだした。

「うん！！待ってるからな。

明日卒業式 頑張れよ～～」

電話が切れて ツーツーツと鳴った。

あさって…ここに千夏が来る……。

俺たちの幸せの場所……。

なっち俺も 幸せだよ……。

永遠の別離という結末 四話

駆け落ちを明日に控えて俺は親父に呼び出された。

「お・・・来たか・・・」

親父はすでに酔っ払っている。

「あれ：静江さんは？」

「ああ お出かけ お出かけ～
とつととお出かけ～」

「なんかあったのか？」 親父のテンションが高くて心配になった。

「いや～なんもない」。

ただ一人暮らしはどんなもんかと思ってな。」

「あ：まだ一人だけど明日彼女が越してくる。」

「そっか。相手の親は・・・ゆるしてくれないんだろ？」

「身分が違うからなんて言われた。
娘にはふさわしくないって……。」

「そっか……。ふさわしくはないだろうな。
こんな男が親なんだし……おまえは虐待されて
育てられてきたし…社長様のお嬢様だからな……。」

「え？社長様って……？まさかここに……。」

「何のめぐりあわせだろうな……俺が今かかってた
取引先の社長なんだな…これが……。」

突然取引中止になって何のこっちゃと思えば
表向きは俺らの仕事に納得いかないとか
だけど結局 おまえと娘のことだったんだ。

『取引してくれたら今まで通り…』だってよ。
笑わせんなよな」

会社にも圧力かけて…結局さ

このまま取引を成功させたかったら…
俺をどこかに飛ばせて話で…決着がついたらしいぞ。」

俺は体がわなわなと震えた。

「親父には関係ないのに……」

「ま……いいさ……俺はおまえに父親らしいこと
してやってなかったしな……。」

「俺はああいう人間が一番嫌いなんだ。
息子とお嬢さんのことですから私はなんにも
口を出しません。息子はしっかりしてますから
苦労させた分って言ってやった。」

「どこに行くんだ？」

「本社勤務から 工場の庶務課に転属されたよ。
今さら定年までもう少しだし
そこで頑張るさ……。」

だから今年の学校に提出する用紙には
工場の名前を書いておいてくれ。」

そう言って メモを俺に渡した。

「あれ…親父…これって…」

「気にすんな。長がついてるのかついてないのかの
違いだからな。」

俺は涙が出てきた。

憎かった親父だった…。肉親から受ける暴力にどれだけ
辛い思いをしたことか…
食べることもろくにできないから
給食食べに 学校に通った。
暇だから授業を聞いた。

「俺もさ おまえにいろんなこと
気づかされたよ。」

次もまた俺の息子で生まれて来いよ。
今度は大事に育てさせてもらうから…」

「ごめん…とうさん…」

久しぶりだった　とうさんって呼ぶの……。

「負けんなよ。障害を超えて二人で幸せになれ。
今さら父親ぶって悪いけれど…
子供は抱かせてくれよ……。」

「うん…うん…ありがとう……。
俺　いい父親になるからね……。」

「俺の分まで頑張れよ。」

親父がこんなに優しい顔で笑うのを俺は
初めて見たんだ。

千夏との出会いによって…俺はどんどん幸せになっている気がする
有頂天になっていた。

永遠の別離という結末 五話

「何かに使え。」親父が通帳を差し出した。

「え・・・？」俺の名前の通帳だった。

「これからいるだろ？」

「そうだけど…でもこれから大変なのに……いいのか？」

「おまえのためについていうか

自分自身の後悔っていうか…少しづつためていたんだ。

何もしてやらなかったのに金だけためてな。

どんだけできの悪い父親なんだか…

言葉をかけるより金を出す方が楽だったんだな。」

「だって…かなり入ってるよ…」

「俺からの懺悔だと思って…受け取ってくれ。
家も保険もみんなおまえのもんだ。」

「あれ静江さんは・・・？」

「おまえのかあちゃんと同じで出て行ったわ……」

「マジに？」

親父が悲しそうに見えた。

「女もさ…もっと言葉がほしいもんなんだな。

俺はそういうこといわねータイプだからさ…

まあ・・・身から出た錆ってやつだ。

これからは いいおじいちゃんになって…孫が
全てになるから…楽しみだな……」

午前中から飲んでた親父は昼すぎに

「少しねてくる…」そう言って部屋を出て行った。

携帯が鳴った。

「あれ…？」 職場からの電話だった。

俺は休みだったけれど どうしても人がいなくて
早朝二時間だけ出てほしいと店長から 頼まれた。

店の近くに越した俺は けっこうやって緊急に出されるけど
これから俺は 家族を持って 仕事をしていくうえで
ここんとはちゃんとやっておきたいそう思っていた。

二時間か……

スーパ―は二十四時間だから……
こういうことはよく起きるんだ。

明日は 日曜日で…俺と千夏は四時に待ち合わせをしていた。
その時間なら親もまだ寝ているということだったから。

仕事は七時には終わるから…それから汽車に乗って…
八時…八時なら…なんとか……

しかし連絡することができない。

恵美の幼稚園がこの近くだと言っていた。

俺は雪の中をメモを持って走り出した。

恵美に託すしかない……。

実家から15分走ったところの教会の敷地に園があった。

「どうか…まだいますように…」

教会に近づくとき子供の声が大きくなった。

俺はそこかたまりの中で恵美を見つけた。

ちょうど園バスが敷地に入ってきて団体が園から出てきた。

恵美はその団体から 吸い寄せられるように飛び出してきた・

「おにーちゃんーん!!」

恵美がはしりだして俺の目のまえでニツコリ笑った。

「これを・・・おねえちゃんに渡してくれる？
絶対に渡してね。」俺は恵美のぷよぷよした手に癒された。

「わかったよ〜。ん〜と」

そのメモを連絡帳にはさめて

「あんね…もうめぐ漢字も少しよめるんだよ。
すごいでしょ？ 偉いでしょ？」

俺は得意げな恵美の頭を優しくなぞった。

「めぐちゃん！！何してるの！！」先生が血相を変えて走ってきた。

「やばい…必ず千夏に渡してね。」

先生は俺をにらみつけた。

「なんですか？変なことするなら警察呼びますよ。」

俺は慌ててその場から立ち去った。

恵美の後ろ姿を見ながら　なぜか不安だった……。

先生が恵美を抱き上げてバスに乗り込んだ。

恵美…頼むぞ……

消えて行くバスにそう願った。

永遠の別離という結末 六話

実家に泊まって待ち合わせ場所に行くつもりだったが
仕事が入ったので俺は部屋に戻ってきた。

予約していた千夏の好きな花束は
予定変更で テーブルで千夏を待つことにした。

掃除機をかけて
何もない家具の上を雑巾でふいた。

千夏がはくスリッパと歯ブラシと枕だけはそろえてあった。

「ここに…千夏が立って料理するんだ。」

千夏にエプロンを買わなきゃと思った。

それから・・・
それから・・・

殺風景なこの部屋に千夏がいるのを
想像しながら

明日の夜はこの狭いベットでお互いの体温を感じながら眠りにについている……。

俺は千夏の枕をだきしめた。

「愛してるよ。もう絶対に離さない。」

そうつぶやいてやっと眠りについた。

朝 ハッとして飛び起きたらもうすぐ5時で

「ヤベ〜〜〜きのうなかなか寝付けなかったから
うわ〜めっちゃ最悪だ……」

俺は飛び起きてダッシュで着替えをして用意をして
携帯を持ったら 充電が切れていた。

「なんだよ……最悪じゃん……
今日は幸せな日になるのに……俺何してんだか。」

とりあえず携帯をジーンズのポケットに入れて
ダウンをはおって部屋を飛び出した。

「うわ~~~~なんだあ~~~~」

外は凍りつくくらいの冷え込みだった。

待ち合わせ時間ちよつとずらしてよかったな……
こんなに冷えてたら千夏もおおしも
凍っちゃうから。

ツルツル路面で何度も足をすくわれた。
三月だというのに……なんだこの寒さ……
だけど星がきれいで空が澄んで見えた。

今日は晴れるんだな。

途中アイスバーンに停まりきれない車が
立ち往生していた。

それを見ていて俺もひっくり返った。

周りを見渡して

「うわゝめっちゃカッコ悪い……」

思いつきり打った腰が痛かった。

なんか……今日は……ついてない

千夏にあえば きっと運勢も上昇するだろう……。

「こんたゝあ」千夏の声が聞こえたような気がして
振り返った。

誰もいない……。

「早く会いたくて 空耳までしてる。」

俺はおかしくて笑った。

「ダッシュで働いて少しでも早く終わらせよう!!」

明かりがついたスーパーが見えてきた。

俺は 何も知らずに…必死に働いて…ときめく心をおさえながら
列車に飛び乗り……待ち合わせ場所に向かう。

待ち合わせの変更前から
四時間たった……八時……いつもの公園のベンチ……

千夏を待って……
希望を待って……だけどいつまで待っても千夏は現れなかった。

永遠の別離という結末 七話

いつまで待っても 来ない千夏に心も体も凍えていた。
俺は 十時すぎ・・・たまらなくなつて公園を出た。

朝の冷え込み通りに 空は青い……。

どうしたんだろう…きっと見つかったのかも知れない…

とりあえず千夏の家のおそばまで行こうと
歩き出した時に 公衆電話ボックスに車が追突したのだろうか
めっちゃくちゃに壊れていて
それを数人の作業員たちが片づけていた。

俺も今日はめっちゃめっちゃ転んだし……

通り過ぎようとした時 その作業を見守っていた人たちの話声が
耳に入ってきた。

「いやゝびつくりしたね。すごい音だったしょ。」

「ほんとさ…だけでも可哀そうだったな……」

俺今日は ショックで立ち直れないな……。」

「電話ボックスにいたんでしょ…あの女の子
まだ若かったよね……。顔はキレイだったけど・・・
ひどいもんだったね……。」

その言葉に俺の全神経が傾いていた。

「だけでも…あんな時間にな…今朝ならしばれたべー…
あれ 誰かまっとって 寒くてあんな中にいたんだろか……。
ついてないな……。運転手も気の毒だったな……。」

俺は恐る恐る電話ボックスの方に視線をやった。
視界に入ってきたのは血をあびたような粉々に割れたガラスだった。

「あ…すいません…。」俺は恐る恐る立ち話してる人に声をかけた。

「交通事故ですか？」心臓が静かに音をたてている。

そんなはずない…落ち着けよ……

「そうなんだ」喋りたくて仕方なそうに二人が話出した。

今朝 五時少し前 ものすごい音がして外に飛び出したら
車が電話ボックスに突っ込んでいて
その中にいた若い女の子が血を流して挟まっ
慌てて119番通報したという。

五時少し前・・・
時間に変更になっていたからそれは千夏ではないと
思いながらも不安が頭を一杯にする。

「女の子は？」

「レスキュー隊が救出してたけど もう即死状態だったらしいよ。
ものすごい出血だったからさ……」。

やっとボックスも撤収してくれてホッとした……。

俺はもう今日はショックで・・・ショックで……………」

「どんな…どんな感じの子だったんですか…？」

「顔は傷なくて・・・キレイな子だったな・・・

髪の毛は肩くらいで・・・あれはまだ十代じゃねーかな・・・」

「あれボストンバックね・・・散乱してたっしょ。

下着とかなんか入ってて家出でもしてきたんだろっか・・・」

俺は全身の血がスーッとひいていくのがわかった。

まさか・・・まさか・・・

「病院に連れて行かれたんですか？」声が震えている。

二人は怪訝な顔で俺を見つめて

「いや・・・即死だもんさ・・・」。

現場検証終わって 警察の車に乗せられて行った・・・。
可哀そうだった・・・。」

俺の目から涙がこぼれてきて
それでも俺は

大丈夫 千夏じゃない

そう思い続けていた。

どうか両親に見つかって 家を出られない

そうに違いない……。

ここで死んだのは……違う女の子だ……ヨロヨロと足がもつれた。

俺は何度も転びながら 千夏の豪邸に向かって歩き出した。

永遠の別離という結末 八話

体も心も凍りついた俺が向かう先は千夏の家しかなかった。

罵られても罵倒されても 千夏が生きていればいい

何度も何度も神様にそう頼んだ。

俺を拒む千夏の家の前に立った。

深呼吸をして門の中に入ろうとした時

数人のスーツ姿の男たちが出入りしていた。

忙しそうに出たり入ったりを繰り返す。

一人の男性が俺と目があつた。

「あ・・・あの…千夏さんの友人で……」

そう言いかけたら

「あ…お参りの方ですか？

申し訳ありませんがお嬢様はまだ…こちらにお戻りではないんですが…

式場の方へいらしてもらった方がいいと
思いますので……」そう言々と手帳を出して
何かを書いて 俺に手渡した。

式場……？

俺の心臓はもういつ止まってもおかしくなかった。

俺はそのメモを見るのが怖くて仕方がなかった。

恐る恐る目を落とすと

北国斎場 通夜は明日の夜になっていた。

通夜………

夢なら覚めてくれ……悪い夢を見てるんだ……。
朝からついてなかったから……。

頭の中が音をたてている。

「場所わかりますか？」

男性が声をかけてくれた。

「あ…あの…」俺は混乱して何て言葉を返していいのかわからなくなった。

「突然のことだったから…ご両親も混乱していて…」

まだ…警察から戻って来ないんです。

お嬢様のご遺体は…まっすぐ式場に行くようなことも言っていて私たちも待機中なんです。

かえって式場にいらしていただいた方が…いいと思います。」

「あ…今朝の交通事故で……？」

俺の口はもう…それを言うのが精一杯だった。

「公衆電話に車が突っ込んだんです。今朝はしばれてましたからね、スピードを出していて滑ったらしいんです……。」

お嬢様は即死状態だったようです。」

「あ……なんて……。」

俺は頭を抱えた。

目の前が真っ暗になってフラフラと歩き出した。

雪が急に強く降りだして……。俺の視界は今度は真っ白に変わった。

何度も転んでコンビニのある大きな道に差し掛かった時五・六人の団体が向こう側からやってきて

「千夏……今日　こんなと駆け落ちするはずだったんだよ……。なんで……こんなことに……。」

一人の女がそう言った。

みんながシクシク泣いているのが俺にもわかった。

「千夏…千夏…!!」

団体は千夏の名前を叫びながら
俺の横を通り過ぎた。

「なっち…なっち…」俺も千夏を呼びながら歩いた。

俺のせいだ…

きっと公衆電話で何度も何度も俺に電話をしていたに
違いないのに…俺の携帯は充電切れで

そう思うと千夏がどんなに心細かったんだろうと思った。

なっち…これが夢なら早く…早く覚めてくれよ…

いつしか涙が頬をつたいだしていた。

雪の勢いが強くなってボロボロになった俺の姿を隠してくれた。

永遠の別離という結末 九話

事故現場の電話ボックスはもう撤収されていた。

朝：ここで見かけた粉々のガラスの破片に交っていた血の色は……千夏のものだったんだ。

俺は四つん這いになってその破片を探した。

破片を見つけたら千夏が

「見つかったちゃった」そう言って俺の顔を見て笑ってくれるようなそんな……願掛けをして……

474

「なっち……ごめん……俺が遅れたばつかに……

寒かったろ……電話が通じなくて不安だったろ……

ちよっと遅れたけど……

怒ってたら……給料出たら好きなもの買ってあげるから……

だけど……高いもんは……高いもんは……

うっ……な……何で……何で……

嘘だって言ってくれよお……。」

涙と一緒に鼻水も凍った地面に落ちた。

「なんで……こんなことに……。」

恵美に渡したメモは 千夏の手には渡らなかったんだ……。

俺が仕事うけたばかりに……

携帯の充電をしてなかったばかりに……

俺と

俺と出会ったばかりに……千夏は……千夏は……

春の雪が俺を濡らした……。

手が真っ赤にかじかんでも……千夏を見つけたら
きっと俺をあたためてくれる……

「助けて……俺……どうしたらいい？」

おまえがいなくなったら……俺どうしたらいいんだ……。

何を……何を待って……おまえを

どのくらい待てば……また会えるんだ……。」

人だかりができていた。

だけど俺は必死に千夏を…千夏の痕跡を探す…。

「痛かっただろ……葬も……可哀そうに……
ごめん…大事な日に……俺のせいだ……。
俺がおまえたちを殺してしまったんだ……。」

大声で泣きわめいて俺は冷たい地面に
突っ伏した。

「誰か……誰か……
俺を殺して下さい……！俺を……殺して……！！」

大声で泣きわめいた。

「誰か……誰か……
殺せ……！！殺せ……！！」

しばらく大声でわめいていたら
両脇を抱えられた。

「離せよ！……！離せって言ってるんだろ！……！」

俺は足をバタバタさせた。

「殺せって言ってるんだよ！……！」

両脇を抱えられたまま車に押し込まれた。

「頼むから……お願いだから……殺して下さい……！」

俺は膝を抱えて大声で泣いた。

車は静かに走り出した。

永遠の別離という結末 十話

「落ち着いたか？」

イスに深く腰掛けて俺は茫然と天井を見ていた。

連れてこられたのは警察署

俺はパトカーに乗せられてきた。

「ほら…飲め……。」

湯気のたったココアをテーブルにおいてその人は座った。

「あ……………」

「久しぶりだな…………。」

千夏と巻き込まれた喧嘩の時に世話になった刑事だった。

「すみません…………。」俺はうなだれた。

「大丈夫か？彼女だったんだろ……？」

「え？」俺は顔を上げた。

「可哀そうに……。さっき……ほんとにさっきだぞ……。
両親と妹と帰っていったぞ……。」

俺は立ちあがった。

「なっちは……死んでなんかいないよね……。
何かの間違いだね……。」

刑事は俺にココアをすすめた。

「まず あったかいの飲み……。」

俺はあたたかいココアをすすった。

甘いココアが喉を通って胃に落ちた。

「駆け落ちするんだってな……。

両親が言ってたぞ……。妹がおまえからもらったメモを

風呂に入っていた千夏さんに読んでいたのを

とりあげて家族総出で厳戒態勢をとる手はずになってたらしいけど……

なぜかその時間よりかなり早い時間に出て行ってしまったらしい……。

両親は 事故の電話で飛び起きたと……混乱してたな……。」

「最初に待ち合わせしてた時間に出て行ったと思う……。」「

「そっか……。妹が読んであげてたおまえの手紙は

千夏さんには聞こえてなかったんだな……。

なんて言っちゃったらしいのか……。」「

「苦しんだ顔でしたか……。」「もう声がかすれてきた。

「顔はきれいだったよ……。眠ってるみたいだった。」

お腹に……子供がいたんだってな……。

咄嗟にかばったったんだろボストンバックで……

本当に……気の毒としか言えない……。

おまえらはおまえらなりに幸せになろうとしてたんだ……よな……。」

「俺……なっちと会って……生れてきてよかったって……

自分を好きになったんだ……人生に希望が見えて
人を守りたい……ってそう思った……。」

「わかるよ。

おまえみたいな将来きつと俺たちが追うような人間になるだろうって
思っていたけど……おまえはずい分変わったよな。

きつと……大丈夫……きつと前を向いて彼女の分まで
頑張っていけるだろう？」

俺は首を振った。

「刑事さん……俺に拳銃かして……。」

頭撃ったら……すぐになっちに会いに行けるだろう……。」

「バカだな……

後追ったって会えないんだって……

俺の死んだばあさんが夢枕教えてくれたぞ……。」

刑事がココアを飲みほしてゴミ箱に捨てた。

「……俺……どうしたらいいんだろう……。」

「早く立ち直れ。」

きつと時が……立ち直らせてくれるから……。」

俺はしばらくその場でまた 大声で泣いた。

春の雪 一話

そのまま千夏を追いかけて 雪の中をさまよった。

まっすぐ行くのではと言われた会場には

千夏の両親の会社の人間が数人 葬儀の用意をしている

「今日のご実家に戻られましたよ。」と言われた。

大きなホールには立派な祭壇と次から次へと届けられている
花輪が両脇にならんでいる。

千夏が好きだったアイスバーグが
祭壇に埋められて行く……………。

うちにも千夏を待つてアイスバーグが待つてる

テーブルにかざってきた花束を思い出した。

本当なら今頃 花束に感動してくれた千夏と
初めての夕飯を囲んでいることだろう。

斎場を出て千夏の家に向かった。

雪が降り積もって足元が雪だらけになっている。

祭壇の白い色…そして目の前に降り積もっていく白い雪

千夏の好きな色で…俺の視界は覆われて行った。

俺を拒んでいる大きな屋敷・・・
でも今の俺には 千夏に会いたい

それだけしかなかった。

インターフォンを鳴らすと エプロンをした女の人が出てきた。

「どちらさまでしょうか……」

「あ…千夏さんの友人で 溝端と言います。」

「どうぞお入りください。」

拍子抜けするくらい簡単に豪邸に足を踏み入れた。

「あ…家族の方は？」

「お疲れで…今休まれています……
どうぞ…こちらに……。…」

俺の心臓は飛び出そうだった。

千夏との現実がすぐそこに…迫っているから
俺は現実を受け入れなければならない……

逃げ出したい気持ち

だけどどうしても千夏に会いたかった。
千夏に会わなかったら

俺は一生後悔して生き続けなければいけないから……。

会社の部下たちがリビングにつめていた。

明日の打ち合わせか みんなでプリントを見ながら
確認作業をしていたが

俺に気づくと一斉に頭をさげた。

俺も立ち止って頭をさげた。

キッチンにいた女子社員たちが お茶をもってやってきた。

「こちらです……」

和室には美しいアイスバーグに飾られた祭壇と
そして一枚の布団が敷かれていた。

千夏じゃない……これは絶対に悪い夢なんだ

俺はその部屋に足を踏み入れることがなかなかできなかった。

「どうぞ……」女の人に声をかけられて

足を踏み出した瞬間に 体を後ろ側に倒されて俺は床に転がった。

いきなりのことで一瞬ボーっとしてると

「何しにきた!!??」 千夏の父親が仁王立ちになっている。

「あ…千夏に…千夏に会わせて下さい…」

俺は土下座した。

「なんでおまえはこいつを家にあげたんだ!!」

案内してくれた女子社員を怒鳴りつけた。

「そんな…さっきからお友達がたくさんいらしてましたから…」

女子社員は今にも泣き出しそうだった。

「こいつを外に出してくれ!!」父親が叫ぶと

さっきまで打ち合わせをしていた数人が俺を取り囲んだ。

「お願いします!!千夏に…千夏に会わせて下さい…
じゃないと俺…これからどうしていいのか……」

お願いします！！一目でいいから…千夏の顔を…見せて下さい……」

「おまえのせいだ……。おまえが千夏を殺したんだ。
おまえがいなかったら千夏はこんなことには
ならなかった……。」

「すみません……。だけど俺たち…愛し合ってるんです。
誰に反対されても 二人で一緒にいたかったんです。」

「おまえらが結ばれなかったのは 神様も許さなかったからだ。
帰れ！！もう千夏を…これ以上千夏を
まどわさないでくれ。ここまできたら千夏を…ちゃんと天国に
行かせてやらないと…おまえに会ったら千夏は成仏できないんだ！
！！

早く連れて行け！！！」

「お願いします！！！」

「さあ…」 右わきを抱えた人がそう言って俺を持ち上げた。

「お願いします！！一目だけ…千夏に…
千夏に会わせて下さい！！」何度も何度もそう叫んだ。

しかし数人の力によって俺はまた無情にも
雪が降りつもる玄関の外に
出されてしまった。

しばらくして

「靴です……」そう言って俺のまえに靴が置かれた。

力なく顔をあげるとさっき話した男の人だった。

「風邪ひきますよ。これ……」

そういうと俺に……黄色のひよこのぬいぐるみをくれた。

「恵美おじょうさまが眠っている千夏おじょうさまの
布団の中にたくさんぬいぐるみを入れて
怒られてたんです……。さっき僕がおじょうさまを確認したら
手の下になってこのひよこがまだ残ってたんです。」

俺は黄色いひよこに頬づりをした。

「千夏……千夏……」 涙と鼻水がひよこを濡らした。

「とても安らかな顔です……。」

美しくて幸せそうで……そんな顔のお嬢様を想像してあげてください。

「

そう言うとその人は家の中に戻っていった。

春の雪 二話

葬儀の日も雪はやまなかった。

俺は厳重にチェックされた受付でまたもや
入場を拒否された。

「一目だけでも……」何度もそう言って頭を下げたら
警備員が来て俺は会場の外に出されてしまった。

社長という肩書を持つ千夏の両親は たくさんの
従業員を使い入り口を固め
俺を千夏にはあわせてはくれなかった。

会場の外で 雪をかぶって俺は手を合わせた。
凍える体と流れ落ちる涙が
俺の心に憎しみの火をともし……。

葬儀が終わり 参列者が泣きながら会場を出てきた。

俺はそれを影から見ていた。

次の日も受け付けはたくさん的人数で 固められていた。

その日は 千夏と葵の肉体が減びてしまう日だった。
俺は黄色のひよこに頬ずりをした。

「ごめんな…お別れもできずに…
許してくれ…：一目でいいから会いたかった…：。
会いに行けない俺を許してくれるか…？」

たくさん泣き声に見送られて
千夏の棺が出てきた。

会えなかった絶望感はやがて 雪が俺に降り積もるかのよう
に憎しみへと変わっていく。

「ごめんな…なっち…：。」

俺は棺の中の 愛する人に手を合わせた。

絶望の淵にいる俺にさらなる悲劇が襲いかかった。

千夏の顔が…思いだせない……。

必死に携帯電話のデーターを何度も開いて確認しても
頭の中で 千夏を想いうかべると
どうしてなのか…千夏の笑顔は もう俺の頭の中には
鮮明には浮かんでこなかった。

最後に会ってやれなかったからだ……

千夏が怒ってるのかな……
会いに行ってやれなくて……怒ったのかな

それとも神様に罰を与えられたのかな……。

俺の心は決まっていた。

千夏を追って……死のう……って

もうきつとこれからの人生

千夏を忘れさせてくれる女にはめぐりあうことはないだろう……。

札幌は記録的な春の大雪にみまわれていた。

「おにーちゃん……」

後ろから声がして俺は 驚いた。

慌てて後を見ると 恵美が立っていた。

「おにーちゃん 大丈夫？」 恵美は毛のフワフワした帽子をかぶって

まるで愛らしいウサギのように俺の顔を覗き込んだ。

春の雪 三話

俺が恵美と同じ視線の高さになると
白いウサギは俺のフードにかぶった雪を小さな手でほろった。

「泣いてたの？」

心配そうに俺を見つめる。

複雑な気持ちだった。

恵美さえ…ちゃんとメモを渡してさえいてくれれば……

「あのね…おねえちゃんに読んであげたの。

『聞こえた?』って言ったら『うん』って言ったよ。」

俺の心が恵美には見えている気がしてドキンとした。

だけど…約束やぶったよね？

俺は 心の中でそう言った。

そしてもう一つ不思議な感情もこみあげた。

恵美の顔を見てるとなぜか千夏を思い出す。

幼い顔付きの中に　なぜだろう千夏の面影を鮮明に思いだす。

「大丈夫だよ…。めぐがいるから…」

そう言うとき恵美は俺の冷たくなった体を抱きしめた。

小さな体なのに…：体のぬくもりだって感じさせないのに
俺の心は静かに温かくなっていく…。

「めぐが…おにーちゃんを守ってあげるから
もう泣いちゃダメだよ。」

俺の中で千夏と恵美が完全に一つになっていく。

「ほんとに守ってくれるか？」

「うん…。だからもう泣いちゃダメだよ。
おねえちゃん…。悲しんじゃう…。
めぐがいるよ……。」

たぶん千夏も…小さい頃はきつと恵美と
同じ顔をして同じ声で……。

「待ってていいか？恵美が大きくなるの…
そしたら俺を守ってくれるか？」

「うん……めぐがいるよ……。」

小さな手は俺の冷え切った頬を触って

「うわっ…風邪ひいちゃうよ。」と言った。

向こうから 「めぐ……!!」と大きな声がした。

「あ…行かなきゃ…じゃあおにーちゃんまた公園で待っててね。」

そう言うとうサギがかけていくように俺の前から走り去っていった。

千夏の変わり……

俺はもう一度 千夏を抱きしめられるかもしれない……。

恵美という小さな天使をこの瞬間から

千夏の変わりにして…

またいつか会える……
愛する人が姿を変えた 白いウサギ……。

春の大雪の中に千夏と葵が旅立って行って……

それから俺は 白いウサギがあ頃の千夏に戻っていく日を待っていた。

いつかウサギは千夏になるだろう……。
その日まで…俺は待とう…。

生きて 生きて……

この腕にもう一度…千夏を抱く……

復讐という思いを
幼い恵美に封印した……。

流れゆく季節の中で……あの日の恵美の記憶が消えてしまっても

俺は必ず会いに行く……。

そして恵美が千夏だったら
きっと俺を真っ先に見つけるだろう……。

そうしたら……俺は

恵美に復讐しながら千夏を抱きしめる。

春の雪 四話

流れる季節の中で

俺は一年に一度 恵美を見つめる。

彼岸の日に家族とやってくる。

恵美は一年そして一年と 少しずつ千夏に近づいてきた。

美しい色彩の花束を抱えて
まるで

そこに千夏がいるようで

俺は 何度も抱きしめたい衝動にかられた。

そして三人が帰ってから

俺は千夏の墓の前に立つ。

今年の俺の話を千夏に語りかけるんだ。

そして・・・

もうすぐ千夏を抱きしめるよ

愛する人の顔を忘れずにいられるのは
一年に一度

ここに現れる

もう一人の千夏

俺の中で 恵美の存在が千夏に変わっていた。

千夏を抱きしめたい
キスしたい

甘い声で喘がせたい……………。

「千夏待ってろよ……………
もう少しで……………俺は……………。」

俺がもし恵美を自分のものにしたら
あの憎き千夏の両親は

また俺を憎むのだろう……………。

でも…もう俺には失うものもない

「待ってろ。もう少しで
俺たちまた結ばれる時がくるよ」

墓に供えられた美しい花束を
俺がもってきたアイスバーグに入れ替えた。

毎年

俺はいつもそうするんだ。

千夏の好きな花束に取り換えて墓を後にする時
出口のゴミ箱に

恵美が持ってきた花束を投げいれる。

。「来年も来るからな」振り返り 千夏と葵の墓を後にする・・・

春の雪 五話

春の雪に真っ白にされた俺は
全てにおいてリセットされた気がした。

高校を卒業してから 世話になっているスーパーからも
就職の誘いをもらったけど
俺は 大学進学を決めて

千夏が行くはずだった

教育大に入学した。

そして高校の教師を目指すことにした。

勉強してそしてバイトして
親父からもらった貯金を使わせてもらって
いろんなことを考えられないように
集中するために必死になった。

俺も忙しきにかまけて
親父から足が遠のいていたある日

めずらしく親父が俺を家に呼んだ。

上機嫌な親父が寿司をとってくれて
親父は俺の近況を知りたがった。

俺がそれとなく毎日の話をする

「おまえに何もしてやらなかったのに・・・
こんなに立派に育ってくれて…ありがたいな。
おまえは俺の誇りだから……
親らしいこと何もしてやらなかったこと
許せないと思うけど
許してほしい……。」

そう言うと泣き出した。

「親父……。」

しばらくしてまた 上機嫌になって俺に酒を注いだ。

「俺の健康上 何かあればここに全部

大事なものが入ってるからな。」

親父はそう言うのにっこり笑った。

何か親父に違和感を感じていたけれど
また忙しい毎日をおくりすっかり忘れていたある日のこと

親父が死んだと

警察から電話が入った。

死んだ?????

親父は鬱病と闘っていたのだった。

千夏の親から 工場勤務に飛ばされ ある意味やりがいもなく
いろんな葛藤の中で暮らしてきたのだろう。

俺の中での親父はもう……いい親父だった。

親父の援助のおかげで俺はこうして
とりあえず将来を見据えていられた。

ひっそりと葬式を出した。

同僚だった人が数人 参列に来てくれた。

本社からの圧力と嫌がらせに 親父が悩んでいたと聞いた。

きつと……

千夏の親の会社が 本社に圧力をかけていたんだろう

俺はそんなことも知らずに自分のことだけで
精一杯だった。

千夏を失って

そして親父を失った……。

復讐心は否応なく 募っていく……。

親父が残っていた家に戻って暮らしたすと
小さい頃に受けた暴力を思い出し夢を見た。

悪夢が俺と包んで行く。

親父とはわかりあったつもりでいたけど
トラウマは簡単にはとれないものだった。

俺は 教師の免許をとって 千夏の通った私立高校へ
千夏の姿を追い求めて教師として採用になった。

すぐに家を建て替えて
それでやっと悪夢から解放された。

春の雪 六話

女を抱いても 愛されても
俺の体と反対に

どんどん心は冷めて行く……。

「何を見てるの？」

「おまえを見てるけど？」

「うそつき……。

あなたのそういうところが辛いの……。

本当のあなたは……ここにはいないでしょ？」

冷酷男とか

死人とキスしてるみたい

相手が俺を愛していくと 俺の中に
自分への愛が見えない

傷つけてしまいながら
俺から去っていく……………。

仕方ないさ……

相手から近づいてきて 怒って去っていく……

俺が悪いわけじゃにだろうに……

だけど……

女を抱きながら 千夏を探している。

千夏に似てるところが見つかれば
俺は千夏を抱いている気分になって
冷えた心が熱くなっていく

そして果てた後に残る

この残酷な現実にまた…心が凍りつく

女を抱くたびに残るのは ただ
無残に傷つく 自分の傷の痛みだった。

もうすぐ・・・

もうすぐ

千夏を抱きしめる日が近づいている。

俺はきっと恵美は この学校に入学してくると確信していた。

そして入学名簿に見つけたんだ……

小山内 恵美

恵美が千夏だったら……

きっと俺を見つけてくれるだろう……。

もし恵美が俺のことを見つけられなかったら
その時は 恵美に近づくのはやめようよ思っていた。

入学式

俺は恵美をまっすぐ見つめた。

なっち……………

そして俺と恵美の視線が絡み合う……………。

そこに立っていたのは
俺の愛した

小山内 千夏 だった……………。

春の雪 七話

恵美と俺が特別になるまでに時間はかからなかった。

恵美の記憶の中には

俺とあの時のおにいちゃんとは
まったく繋がらないようだった。

あの幼い天使のような恵美は
今は

俺が愛した千夏とよく似ていた。

俺のことを　こんた　と呼んだ時は驚いた。

まるで千夏にそう呼ばれているようで

恵美の肉体を借りて

もしかしたら千夏が宿っているのかと
思うくらい

二人はよく似ていた。

キスしてはにかむ顔も……
素直に表現する様子も……

俺に唇の冷たさに喘ぐ顔も・・・

勢いに任せて全て奪ってしまうはずだった……。

だけど…それ以上は

進んではいけないような気がして

俺は今まで 思い描いていた復讐を果たせずにいた。

「抱いて…」

すぎる恵美を抱けばいいのに
手がすくむ……。

抱いてしまえば…千夏として愛したら終わるはずの
恵美との仲……

恵美を俺に夢中にさせて
またあの高慢ちきな親を悩ませてやるんだ…

そう誓ったはずなのに……

恵美は俺が全部奪うのを心待ちにしている。

奪えば簡単なのに
俺はそれ以上は手を出せずにした。

なんで……………

千夏の復讐を遂行するうえに俺は
教師でいるとかそんなことはどうでもよかった。

それがくだらないことであっても…
人がどう言おうと

恵美を千夏にして抱きしめ
そして
全て俺のものにしてやる……………。

あの親の怒り狂う顔

そして何より 恵美と千夏を重ね合わせて

それで報われる情けない俺の執着心

恵美はそんな俺の企みなんぞ知らずに
純真な笑顔で

俺にキスを求める……………。

いつしかその純真さに 俺の心の罪悪感が後退りを始めて行った。

「ね…誰を見てるの？」

「恵美を見てるよ……………」

「うそつき……………」

とうとう恵美も他の女と同じ台詞を言いだした。

春の雪 八話

突き放した時の 恵美の表情が好きだ。

だから思いつきり冷たくしてやりたくなる。

恵美は俺に嫌われないように必死で耐えるし・・・
だから俺は

二人っきりの時は 恵美をたくさん抱きしめてやる。

今まで てきとーに生きてきて

もしかして…俺今 結構充実してるのかもしれない。

千夏と愛し合って以来・・・
ひさしぶりに楽しい気持ちになっている自分がいた。

最初は 恵美を抱きしめながら
千夏を思い出していたのに

なぜだろう……。

今では 恵美は恵美に見える時が多くなっている。

千夏を裏切っているわけじゃない……

そう自分に言い聞かせて……
だけど混乱している自分がいる。

恵美が俺と自分の姉の関係を知り
あの日のおにちゃんのうちすらとしている記憶が
俺だったことを知って

傷ついていた。

小さい頃から 千夏に似てるということ
両親からは恵美として
愛された記憶がないと言っていた。

だからどこか…恵美は寂しそうな目をしていた。

だから俺が

恵美を見ながら千夏を思い出していることに
傷ついてしまった。

そんなことはどうでもいいことのひとつだった。

なのに 俺を見つめる恵美に動揺している俺がいた。

もっともっと傷つけて
ボロボロにしようと思っていたのに

これ以上 壊したくないもう一人の俺が

そろそろ潮時だぞ

そう呟いている…………。

春の雪 九話

俺の言動で 不安定になる恵美が心配だった。

それが俺のせいなのはわかっていても 俺にはどうすることもできない。

恵美が長い髪の毛を短くしてきた時

私は千夏じゃない恵美だよ

必死に俺に主張してる姿が痛々しかった。

恵美を千夏にしよう

そう考えてきたのに……

これ以上深入りしないで

千夏がそう言っている気がした。

俺と出会わなければ 千夏は今頃 夢だった教壇に立って
子供たちとの毎日で輝いていただろうし
隣には違うもっとしっかりとした男がいたのかもしれない。

俺と出会って幸せだったのか？

何百回・・・いや何千回繰り返してきた言葉

俺の一生は千夏とともにあるべき
今までは そう思ってきた。

同僚の山岸先生とは もうずいぶん前からの
大人の付き合い

俺を縛りつけないところが結構よかったけど・・・やっぱ女。
自分だけを見てほしいと俺にそう言う。

無理だよ・・・

俺には忘れられない人がいる。

恵美が俺と山岸先生の関係に気がついた。

冷えた体で眠っている恵美を見て
もうこれ以上：振りまわすのはやめようと思った。

愛しさで一杯になって俺はまた
恵美を抱きしめる。

山岸先生と結婚する　なんて嘘をついて
また：恵美を泣かせた。

俺は恵美を泣かせては抱きしめる。
なんてひどい男なんだろう……。

恵美が千夏の似てる限り　俺の心には千夏と恵美が行き気して

俺を混乱させていくから……。

恵美が抱いてほしいと懇願した。

そこに横たわるのが恵美なのか千夏なのか・・・
また俺を混乱させる。

自分がどんどん壊れて行く気がしていた。

もう終わりにしよう

俺はそう決意していた。

このままじゃ俺も 恵美もダメになる……………。

一生千夏を愛し続けるって誓いながら 恵美が恵美になって
俺は恵美を愛しいと思うたびに俺は自分をひどい人間だと絶望して
いく。

俺はどっちを愛してるんだ・・・

「おねえちゃんの代わりに
私を見てくれたことある？」 恵美は聞いた。

俺は

「ないよ。」と答えるしかない。

絶望に満ちた恵美の表情に胸が痛む。

俺自身がわからなくなっていく

ここにいるのは恵美？それとも千夏？

いままでやってきたことが　すべて裏目に出てきていた。

「やめて~~~~え!! 私には恵美だもん~~~~!!」

恵美の悲鳴に　ハッとする・・・・・・。

もう終わりにしなければ……

これ以上恵美を巻き込むことはできないから・・・・・・。

俺は一生　千夏を忘れない。

千夏だけを愛していくことに決めていた。

恵美を千夏の変わりにして 復讐するつもりが
恵美として…愛しくて抱きしめている自分に

俺自身が…どうしていいのかわからなくなっていく……。

春の雪 十話

傷つけて別れた恵美が気になりながら 数日たったころ
恵美から呼び出しの電話がなった。

渡したいものがあるから

家に来てという恵美からの電話だった。

俺を絶対に受け入れてくれなかった大きな屋敷の前であの雪の日を
思いだす。

玄関のドアを開けたら 千夏？と一瞬間違えるほど
髪の毛は短くなっても…やっぱり二人はよく似ている。

両親がいないということでかなりホッとした俺は ほんとにへたれ
だと思った。

あの日あと一歩でというところで転がされた和室には
愛しい人の笑顔があった。

恵美にお参りさせてほしいと頼んで

俺は華やかに飾られた仏壇の前で 千夏に再会した。

なっち…ひさしぶりだな……

遺影の千夏はあの笑顔で俺を包み込んでくれた。

涙が頬をつたう……。

「俺と出会わなかったらって…おまえは後悔してるか？」

千夏に問いかけたけど遺影の千夏は笑っている。

それから恵美は千夏の部屋に入れてくれた。

前の家の時は よく目を盗んでこのベットで愛し合った……

壁のポスターのアイドルと俺とどっちがいいって

千夏に質問したよな…

このたくさんの本も…あの幸せな時に一瞬で幸せな気持ちになって
タイムスリップしていった。

恵美が一冊のノートを俺に手渡した。

千夏の日記のようなものだと言った。

俺はドキドキしながらそのノートを開くと 可愛い字と色とりどりの
ペンで

俺へのメッセージが綴られていた。

ゆっくり読んでいる暇がないけど 俺が見たところには

「愛してる」 「大好き」 「出会えてよかった。」

そんな言葉が何度も何度も踊っていた。

俺も…愛してるよ…大好きだよ…出会えてよかったよ……

二人が交わしたいろんな思い出がここにはあった。

一ページごと千夏の言葉に彩られた 二人の思い出がなつかしく…
そして鮮明に思い出された。

恵美はこのノートを俺にくれると言った。

正直に子供のように嬉しかった……まだまだ千夏の心と俺の心が通うような気がした。

思い出に酔っていて 恵美を忘れていた。

「いつまで…いつまで…そうやって

おねえちゃんの亡霊にしがみついてんの？

いい年してバカじゃない……。

悲劇のヒーローはもう十年たったんだよ……。

自分のために生きたっておねえちゃんは悲しまないよ…。
どうするつもりなの？

それでいいの？

それが先生が一番幸せなの？」

恵美の声にハッとした。

もう少しだけ 千夏との思い出に揺れていた……。
そう思ってただけ……

いや…一生そうしてもいいって思ってた。

俺は恵美に千夏の話をしていた。
それが恵美にとって残酷なことだってわかってたけど……

俺はそうやって生きてきたこと

これから先も千夏の思い出と一緒にいたいということ

だけど…気づいたんだ…
千夏との愛を振りかえると そこには恵美の存在も大きいことに気づいた。

いつの間にか 千夏の変わりになっていた
恵美が…恵美として俺の心に住み着いていること……

そしてそれは俺を愛したまま 命を落とした
千夏に対しての裏切り行為だと…………。

恵美は潤んだ瞳で俺を見つめる。

「それでも うちが先生を愛してるもん…………。
うちは…千夏じゃない！！恵美だもん！！！！」

恵美はそう言う俺の胸の中で 泣きじゃくった。

あの日の 白いうさぎは もう幼い天使ではなく 女になっていた。

白いうさぎ 一話

「うちだって…こんなに好きなのに…どうしておねえちゃんに縛られてんの？もういないんだよ。思い出の中で笑ってるしかできないのに…こうして…こうして先生を抱きしめてるのはうちだよ。」

彼の胸の中にすがりつく。

「俺のくだらない復讐とやらの恵美を巻き込んでしまった。

恵美を千夏の変わりにしようって復讐…。」

計画は変更するから…これ以上恵美を傷つけたくない…。」

「やだ…やだ…」

「恵美…ごめんな…。」

おまえは何にも悪くないのに…ただ千夏にソックリで

おまえの両親が憎くて小山内家に執着しすぎてた。

俺はこれから先も 千夏を忘れることはできない…。」

恵美が千夏に似ていることで俺は 自分が混乱してきている。」

「それは…うちのことも少しは好きになってるからでしょ？」

彼の話で私はわかったんだ。

私を大事に思ってくれているから……
もうやめようって言ってくれてること……。

「好き……ん……」

あの頃の白いうさを俺は泣かせすぎてるから……
あの日俺を小さいからで抱きしめてくれたフワフワのうさを
傷つけて泣かせて……絶望させてばかりいる。

もしこのまま…一緒にいても俺は
いつも恵美に千夏を見て抱きしめて行くだろう……。
今さらだけど…高校生らしい恋をした方がいい……。」

彼の残酷な言葉に私にスイッチが入った。

「やだ…あなた以外の人を好きになれない……」

彼の首に巻きついて 私は彼の冷たい唇を奪った。

「じゃあ…千夏になる……。

あなたの幸せが千夏でしか叶えられないなら……

うち…千夏でいい……。きつと…きつとね…

うちはちっこい頃…きつとおねえちゃんに嫉妬して暮らしてた。

二人がいちゃつく姿にきつと…ちっこくても嫉妬して傷ついてたんだ。

だから…だから……嫉妬にはなれっこなんだ……。」

言葉が嗚咽で消されていく……。

彼の指が私の前髪をかきわけた。

「嘘つくな……。

苦しいだろ？嫉妬に慣れるなんてありえないよ。

だから…切ないんだろ？」

「離れたくない……。あなたを抱きしめるのは私だけだもん……。」

「俺も切ないから…これからは

全然違う似てない女に抱きしめてもらうよ……。」

意地悪……

「私しか…あなたを救えない……。」

おねえちゃんのベットに彼を押し倒して
私は彼のセーターを素早く脱がした。

「千夏だよ……。会いたかった……。」

悲しいけど…心が割れそうだけど……
でも愛してる……。

あなたがいてくれれば……あなたが抱いてくれたら

私は恵美じゃなくてもいい……

それであなたが救われるなら……。

彼の唇が熱くなるまで…キスをし続ける……。

白くろくろ 二話

おねえちゃんのベッドで…彼にキスをする……。

私にとってはおねえちゃんに対しての精一杯の抵抗
いいんだって……

私は彼の前ではおねえちゃんになっても……
おねえちゃんの前では恵美でいる。

もう彼を苦しめないで……
彼は私のものだから……

おねえちゃんよりずっと幸せにしてあげる。
私は生きている。
体も心も彼のために捧げられる。

「めぐ……」唇を離して彼が言った。

「違うよ…こんた…千夏だよ……。
恵美の体を借りて……抱いてもらいにきたの……。
ここでこのベッドで……また私を抱いてくれるでしょ？」

「めぐ……やめろ……」

悪い冗談だぞ……俺が本気になる前にやめろ……。
これ以上……おまえを泣かせたくないんだ……。」

彼が私を想ってくれるだけでいい

「こんな……会いたかったよ……。
抱いて……抱いてほしいの……ずっとずっと待ってた。」

馬乗りになっていた私を彼が抱きしめて
そして逆になった時……彼はもう私をおねえちゃんだと思っている。

そう私はあなたの千夏

「なっち……。」

「ん？」彼の高い鼻にキスをした。

「恵美……？」

「どっちでもいいよ……あなたが抱きたいって思う方で……」

残酷な言葉だった。

彼が私をおねえちゃんにして抱くの……わかってる……。

それでも彼に抱かれたい……。

彼はもう男に変わっていた。

優しいキスも甘いキスも……今までとは違う男になっていた。

そんな彼が愛おしかった。

何も知らない未知の世界が私を女に変えてくれるのが
世界で一番愛してる人でよかった……。

彼の指と唇と……そして舌が

私の全身を愛してくれる……大きな波が寄せては引いて……
甘い吐息が声になる。

おねえちゃんと彼が愛し合ったベットで

二人を見ていた家具や壁のポスターに見られて
私は興奮していた。

あの頃 幼くて……でもきつときつと

おにいちゃんが好きだった。

天使だったから抱き上げてくれた…でもきつときつとおねえちゃんと同じにしてほしかったんだと思う……。

今…きつと彼の中で私は おねえちゃんだけど

私は時を超えて 大好きだったおにいちゃんに愛されてる
そう思うだけで幸せだった。

私と彼こそが運命なんだって

おねえちゃんは彼の運命の人じゃない
私が…彼の運命の人なんだ……。

悲しくて切なくて…辛くて…
でもそれでも…こうしてほしいって思ってるなら
私は幸せなんだって……

初めての扉が開かれる時……彼が言った。

「大丈夫か？」って……

え？

私が喘ぎながらうなずくと 充分すぎるほど潤った扉を彼が静かに開いてくれた。

「ア！！！」私が痛みで声を上げると 彼はそんな私を強く抱きしめてくれた。

ひとつになった瞬間だった

私は嬉しくて涙が流れる……。

「一緒に…行こう……。」彼の言葉に興奮した。

痛みはもう…初めて味わう快感へと変わっていった。

愛する人が私の体とつながって 私の体に語りかけているような感覚だった。

「こんた……こんた……ああ……」私は夢中で何度も彼を呼んだ……。

たとえおねえちゃんでもいい……

今 私は 彼とひとつにつながって

同じ終着駅を二人で目指している。

彼の動きが止まった時……私は快感の波にのまれて海の底に沈んで行った。

白いうさぎ 三話

「めぐ…恵美……」

名前を呼ばれて目を開けると愛する人の顔

恥ずかしくて彼の胸に急いで顔を埋めた。

「大丈夫だったか？」

彼の言葉に思いっきりうなずいた。

体を離そうとする彼にまたしがみつく……。

「行かないで……。」

彼は私を優しく抱きしめてくれた。

「おねえちゃんと…愛し合えた？」 辛い質問だった。

「そうしたかったんでしょ？ 思いは叶った？」

困っている彼の頬にキスをした。

「私とおねえちゃん…そんなに似てるんだ……。
皮肉だね…姿形そして…… 抱かれてる時まで同じなんて…
ほんと…親を恨むしかない…あはは……。」

笑いながら涙が流れてきた。

「責めてんじゃないの……。

それでもあなたに抱かれてうち…めっちゃ幸せだったから…
世界で一番愛してる人に一番をもらってもらって
幸せだったよ……。

だから泣いてんの。悲しいとか辛いとかそんなんじゃない
それだけはわかってほしいの
うちね…あなたに会えてよかった。
あなたは私の運命の人だから……。」

彼が私の額にキスをした。

「俺はずっと恵美だっと思って抱いていた。
だから…痛くないのか心配だった……。」

彼が私の中に入って来た時そういえば

「大丈夫？」って聞いたんだ……。

「え？」

「千夏だと思いこもうとしたけど……恵美だった。
ずっとずっと恵美を抱いてるって…わかってるよ。」

私は時が止まったように彼を見つめた。

ほんとに？

「うん……。恵美を抱いたんだ……。」

嬉しかった めちゃめちゃ嬉しかった。

初めて おねえちゃんから彼を奪い取った気がして
私は有頂天になっていた。

もう大丈夫だね？

おねえちゃんの呪縛から解放できたんだよね？

私は嬉しくて嬉しくてまた彼を求めた。

「次は…恵美だって思っ
て愛されたい……。」

彼がまた私に覆いかぶさった。

静かに目を閉じて 私はさっきとは違う
幸せな気持ちで 彼に触れられる快感を楽しんだ。

「名前…名前呼んで……。」私は叫んだ……。

彼は「恵美…。」と呼んだ。

「もっと…もっと呼んで…恵美って呼んで……」

自分のことばかり考えていた。
その時 彼がどんな気持ちで私の名前を呼んでくれていたのか
考えもせずに……快感の波が押し寄せて

何も考えられなくなった。

「よ…ようの…すけ……」

私の 溝端 陽之介

私だけの 陽之介なんだ……。

陽之介の動きに合わせて 一緒に空を飛んだ気がした。

海の底ではない・・・

青い空を陽之介と一緒に…飛んでいる

そう思っていたのは 私だけだった…………。

白いうさぎ 四話

私の頬にキスをして彼が帰っていった。

彼の後ろ姿を見送りながら 心はもう踊っていた。
彼は……

私のものよ
おねえちゃん……

おねえちゃんと繋がっていた彼の糸を 私に手繰り寄せて
死んだ人間と生きた人間のできることの違いで
彼を抱きしめてあげられた。

彼も恵美を抱いて 愛してくれた。

おねえちゃんの部屋のベットを直しながら
さっきまでここでしていたことを思い出す。

まだ体の中心が熱い

彼とひとつになった喜びが 私を包み込んだ。

愛してる……

私の名前を何度も呼んでくれた……

自分を愛してもらいたい人に
初めて認められた気がした。

いつも私の前には おねえちゃんがいた。

おねえちゃんはもう存在すらないのに 私は戦わずして
いつもおねえちゃんに負けていた。

でも……でも

今日は私にとって 戦いに勝った日

一番欲しい人を手に入れた。

「もう絶対に離さないから。」

おねえちゃんの部屋で私はそうつぶやいた。

両親がなんて言ってたって
絶対彼と一緒にいるんだ。

世界中を敵に回したって構わない。
二人つきりになってもいい

おねえちゃんができなかったことを私がするだけだもん…。

「陽之介って誰も呼んだことがないんだって…」

幸せで…幸せで仕方がなかった。

この喜びを誰かに話してしまいたい…。

この心も体も彼のもの……。

私はこれから待つ未来は 幸せしかないと信じてた。

彼と一緒にいる未来を信じて……………。

白いうさぎ 五話

私はそれから 積極的になっていった。

「陽之介……大好き……。」

二人っきりの時はめっちゃくちゃ甘えた。

彼は苦笑いしながら…

「もうここに来てから何十回も聞いたよ。」と言った。

「陽之介は？」

首に巻きついた。

「可愛いよ……大好きだよ。」そういうと笑った。

嬉しくて私は彼の胸に顔を埋める。

「抱いて……」

「……そればかりの付き合いになりたくないな……」

逃げ腰に聞こえる。

あれから一度も抱いてくれなくなった。

「どうして……？ どうして抱いてくれないの？」

「抱くことだけじゃないだろう……」。

もっと自分を大切にしなきゃ……」

いつもそう言って キスまでしかしてくれなくなった。

キスをしながらも気の遠くなる快感が
私を押しつぶす。

「意地悪……」

彼の顔が悲しく見えた。

「…女の子にここまで言わせて……意地悪だよ……」

彼は私を抱きしめて

「可愛いよ……」とつぶやく。

そんなやりとりが続いていた。

どうして抱いてくれないの？

いつしか幸せな気分を不安が覆って行く。

時より見せる悲しい顔が

さらに追い打ちをかける……。

私を選んでくれたんだよね？

彼は悲しそうな顔で 微笑んだ。

白いうさぎ 六話

高校二年生になって新しいクラスに変わった。

志摩ちゃんとは離れてしまったけど それなりに知ってる顔がいて
そんなに不安はなかった。

「いいな〜めぐ〜」

「さっき 真紀子にも言われたよ…」

私はクラスの離れた友達から 何回も言われてる

「いいな〜」という言葉に苦笑していた。

「だって…王子と同じクラスなんだもん〜」

「なこと言ったってまだ うち喋ったこともないよ。」

「いいな〜毎日至近距離で王子を見られるなんて めぐは幸せだよ。」

王子……………

アイドルになれそうなくらい素敵な子で
一年の時から友達が騒いでいた。

勉強ができて スポーツもできて それから生徒会にも所属して
こんな全てを兼ね備えた人間がいるなんて

志摩ちゃんたちには彼の後に星まで見えると

王子と呼んでみんなで楽しんでいた。

私は王子より もっと素敵な人のことで頭が一杯だったから
学級代表で絡んではいたけど そんなに興味はなかった。

確かにカッコいいことは認めるけどね……

王子の存在はやっぱり クラスで断トツだった。

明るくて元気で いつもみんなの中心で笑ってる
王子の魅力に人が引きつけられるのかもしれない。

移動教室の時 忘れ物をして慌てて教室に戻った時のことだった。

生徒が各教室に入ってもう 静かになっていた。

教室からノートを持ちだして走っていると
彼の後ろ姿。

私は誰もいないのを確認して 彼に触れようと走り出そうとした瞬間だった

山岸先生が脇の教室から出てきて 彼の肩をポンと叩いた。

私は慌てて階段の踊り場に隠れた。

二人は立ち止り

山岸先生は彼のネクタイを笑顔で直していた。
彼もされるがままに 山岸先生と笑顔を交わす。

その光景は 大人で：

私には到底そんなことはできないと思った。

二人は言葉を交わしながら廊下を進んで行く。

時より山岸先生が甘えるように彼の体に 自分の体をぶつけた。

彼は大げさによろけて また二人で見つめ合って笑う。

山岸先生の締まったウエストを見せつけられながら

私が子供すぎて……彼が遠くに感じた。

二人はまだ続いているのかな……

彼が山岸先生を私を抱くように抱く姿を想像して一気にブルーに突入した。

今夜は絶対に抱いてもらう……

私はそう決心した。

彼は私のもの……

泣きそうな気持ちをぐっとおさえて私は歩き出した。

白いうさぎ 七話

ふっと風を感じて私は立ち止った。

「そんなゆっくり歩いてたらくれるぞ。」

私の前には王子が立っていた。

高山 学 （たかやま がく） 名前までしっかりしてる。

「あ…そうだった…」

我に返って 走り出そうとしたら前につんのめって
王子の体にぶつかった。

私の腕を王子が持ってくれてなんとか転ばずにすんだ。

「ありがと…転ぶとこだった…」
私は心臓を撫ぜ下ろす。

「けっこうおっちょこちよいだよね。」
王子が爽やかに微笑む。

これが志摩ちゃんやだったらショック死するね…。

「うん かなりね……。あ…行かなくっちゃ…」

私は王子の手をすり抜けて走り出した。

チャイムが鳴って 王子がつぶやいた。

「うわーっ10分間 廊下だな……。…」

そして私たちは廊下に立たされている。

王子は生徒会の打ち合わせが長引いたようで気の毒だった。

「漫画の世界じゃないんだからさ…廊下に立たすなって感じだよね。」

王子が笑った。

「そうだよね。」

「そういえば話したの 初めてだね。」

「うん そうだね。」

「ずっと話したいと思ってたんだ……。」王子の言葉に驚いて顔をあげた。

「え？」

「なんかさ…ガード固いっちゅーか…話ずらいっていうのか…」

「うち…話ずらい？そっかな……。私はフレンドリーだと思うけど？」

そんな印象なのかな…私って…

「いや…俺がそう思ってるのかな。」

王子が笑うとめっちゃ爽やかで思わず見とれてしまった。

「あんまり男子と話さないかもしれないけど
そんな風に思われてんのかな。」

「小山内さん めっちゃ大人っぽいから…
男子からは大人気だよ。」

「え？全然知らなかったわ。」冗談でも悪い気はしない。

しばらく無言が続いて 私はさっきの彼と山岸先生のことを思い出
して
病み期に突入していた。

「ね？さっきからずい分ため息が深いんだけど？」

「え！？や…やだ…聞こえてたんだ！？」

私は慌ててバタバタした。

クスクスと王子が笑った。

「めっちゃ…かわいいね〜小山内さん。」

「あ…かわいいなんて嬉しいわ。

でも高山くんには負けるわ 高山くんが笑うと爽やかな風が吹くから〜」

「吹かね〜から〜」王子が笑った。

いや 吹いたよ・・・めっちゃ爽やかだわ〜

私は おかしくて爆笑した。

白いうさぎ 八話

「あ…やっあと五分だね。」

私は時計を見てそう言った。

「五分？もう五分しかないんだ……」

王子はそう言っていると自分の時計を見た。

「しかって…もう疲れたわ……早く教室入りたい……」

人の気配に顔をあげた。

彼が向こう側から歩いてきて私と目が合った。

一瞬 絡み合う視線

王子が会釈したから 私も慌てて会釈した。

「授業遅れたんだ？」 そう言うといつもの冷たい彼に戻ってしまった。

「はい。」王子が返事をした。

彼はそう言うのと去っていった。
私は彼にしがみつきたかった。

愛してる…あなたは私だけのものじゃないの？

今日は絶対 絶対 愛してもらおうから……

「小山内さん？」 王子に呼ばれてハッとする。

「え？」

「溝端先生に今 見とれてた？」

「あ…え？ 違うから…いつもオーラが冷たいなって思っただけ」

慌てる私……。

「でもさ かつこいいよね。

男から見ても あのかつこよさには自分もあゝいうの憧れるよ。

男子からは大人気だけだね。」

「そうなんだ」 意外だった。

「あ…もうそろそろ教室もどろっか……」 私が歩き出そうとしたら

「なんかせつかく小山内さんと

話せたのに 残念だなゝ現実に戻るみたいで」

王子が背中をつぶやいた。

「え？」

私が王子を振りかえると王子は大きなため息をついた。

「どうしたの？」

「まだ小山内さんと話してたかったなっ」

ちょっと恥ずかしくなった。

「話しかけてくれればいいのに……。」

「マジ？ いいの？」

「それはいいようクラスメートなのにおかしいじゃん」

「そしたらさ…俺も めぐ って呼んでいい？」

ドキンとした。

「あ…別にかまわないけど…王子ファンに殺されたくない……」

「殺されそうなら…俺が守るし……。」

なんか意味深な会話をしてる気がした。

「守ってもらったらなおのこと危険かも……。」

志摩ちゃんが怒りそう……

「めぐ……。」王子が呼んだ。

「ん？」私もなんだかドキドキしてる。

「うわ……めっちゃいい……」王子が叫んだ。

「ついでにさ…俺のことも学って呼んで。」王子が私を見つめた。

「そ…それはマズイとおもうわ。
ホントにうち殺されるから……。」

「王子の手が私の手をとった。」

え・・・

お姫様の手にキスをするように王子が私の手をとった。

「俺が守るから。」

そう言うとき手の甲に乾いた唇でキスをした。

心臓が飛び出そうになった。

「俺とつきあってほしいんだけど……」

王子の声が大きくて 誰かに聞かれなかったか不安になった。

「あ……うちは……そんな……。」「

「俺を好きになってくれてからでいいよ・・・」

王子はそう言うと先に教室に戻っていった。

ハッとして私も歩き出すと 彼と目が合った。

彼は とても優しい顔で私を見つめていた。

聞いてた？

ほんとに優しい顔だった……………。

白いうさぎ 九話

彼の優しい顔が気にいらなかった。

私を子供扱いしてる

私は…苦しくて 切ない恋をして…大人になったんだもん……。

いつものようにまっすぐ彼の家に向かった。

冷蔵庫を開けて 彼が帰ってくるまで何か作って
あげられるものはないかなって思った。

うちは私が帰る前にお手伝いさんが来て
食事の支度をしてくれるから料理は苦手……。

材料があれば作れるけど

ないなかで創作するのはすごく苦手だったりするけど

冷蔵庫の中にキレイな柄のタッパを見つけた。

これって…

恐る恐るタッパをあけると 肉じゃがが入っていた。

鮮やかな緑色のきぬさやとオレンジ色のにんじんが
誰かの手作りを物語っていた。

朝食べたと思われる色違いの柄のタッパがキッチンにお茶碗と一緒に
においてあった。

嫉妬が湧きあがってくる。

山岸先生の手作り？

それとも…誰かほかの人？

私だって作れるもん……

何も入っていない冷蔵庫から卵とソーセージを出して
冷ご飯と一緒に炒めて炒飯を作った。

微妙な一人分量だったけど
炒めてるうちにベタベタしてきてご飯がかたまりになっていた。

「何よ…こんな見た目じゃないわ。」

味でしょ？絶対！！」

おねえちゃんのお弁当が美味しかった

彼はそう言った。

二人を結ばせたのは私と…お弁当だった

炒飯は炒めれば炒めるほど固まって 見た目は全く美味しくなさそうだった。

いいじゃん…作った努力だけでも……

味見しても 全然美味しくなかった。

「もう！！」私は頭に来て 作った炒飯をゴミ袋に入れて座りこんだ。

肉じゃがも一緒に捨てたい気分だった。

美味しそうに食べる彼を想像しては情けなくなる。

おねえちゃんも料理が大好きで よくケーキを焼いていたと聞いた。

そのお弁当が彼とおねえちゃんを結びつけたんだよね。

「うちって何のとりえもないんだ……。」

情けなかった。

ソファーに横になってたら眠たくなってそのうちにうとうとと眠りについてしまった。

白いうさぎ 十話

「こら…風邪ひくぞ。」私の体にふわ…つとタオルケットをかけてくれた。

目をこすりながら起き上がると 彼がスーツ姿で立っていた。

「先生…おかえり…」嫌味くさく言った。

「ん？なんだ…うさぎちゃんはお機嫌斜めかな？」
彼がそういいながら上着をハンガーにかけた。

私は立ちあがって 彼のネクタイを持って外そうとしたけど
うまく外せない。

よくママがパパのネクタイをほどいてあげているマネをした。

「いいよ…自分でできるし…」
そう言って彼はネクタイを外してワイシャツを脱いだ。

「どーせ…私は何もできませんよ…お」

不貞腐れて ソファ―に座った。

「おゝなんだゝゝずい分荒れてるなゝゝ。
おじさん疲れてっから 付き合えないぞゝゝ。
風呂入ってくるからそれまで機嫌直せよ。」

「もう！！子供扱いしないでよ！！」

私は立ちあがって制服を脱いだ。

「何してんの？」彼のいい方にもムカついた。

私は彼より先にお風呂に飛び込んだ。

湯船につかって顔をお湯に沈めた。
しばらく待っても彼は入ってこない。

ドアを開けて

「陽之介！！！！早く入ってよ！！！！」と怒鳴った。

「ちょっとおもしろいテレビやってるから後で入る。」

ドアをバタン

「バカ~~~~!!!!」と怒鳴ってお湯をぶっかけた。

シャワーを頭からかけて
情けなくてイライラした。

こんなことしてただ恥ずかしいだけで 情けないだけで……
悔しくて涙が流れた。

こんなんだから：ダメなんだ……。。

こうなったらシャンプーして石鹸で体を洗って……
そしたら少し落ち着いた。

彼のバスローブを着て出て行ったら 彼がドライヤーを持って待っていた。

「おいで〜お姫様〜」

私は泣きそうになりながらイスに座った。
温かいドライヤーの風が 私の心をゆるくする。

「私……子供すぎる？ 疲れる？」

「可愛いよ〜俺の中ではいつまでも白いうさぎだから。」

「子供扱いしないで……一人の女として見てほしいの……。」

「仕方ないよ。だって学校で見る恵美は高校生だし……
今が一番楽しい時だろう？」

「聞いてたんでしょ？」

彼が髪の毛をクシャクシャにしてドライヤーをあてた。

「高山はいい子だぞ。恵美とお似合いだと思うけど……。」

「ホントにそう思うの？」

「じゃあ山岸先生なら……陽之介にお似合いなの？」

「恵美よりは……世間的にはお似合いだろうな……。」

「キライ……もう……大嫌い……。」
涙がとうとうこぼれおちる。

一つになって……これでずっと一緒だと思ってたのに……
もっともっと……近づけるって信じてたのに

彼はどんどん私から遠くなる気がする。

「ねえ？私を好きでしょ？」 私はふり向いてドライヤーをかける

彼を見つめた。

彼は表情を変えずに ドライヤーをかけ続けている。

「ねえ・・・答えてよおお・・・」

また前を向いて私は 大きな声で泣き出してしまった。

愛するという事 一話

「山岸先生が好き？」 嗚咽しながら聞いた。

「好き……ん……ただ一緒にいたら楽しいかな。

共通な話題も多いし 彼女の考え方は勉強になるし……

それに……あまり……うるさいことも言わないしね……。

あきらめてくれたんじゃないかな……。

俺は誰のものにもならないよ……。」

その言葉が私の頭を殴りつけた。

ガンガンガン 頭が鳴っている。

「恵美……俺……おまえを抱いちゃいけなかったんだ。」

今さら……そんなこと言わないで……

「なんで……？ おねえちゃんじゃなくて私を抱いたんでしょ？」

ドライヤーを止めて彼は私の頭を整えた。

「後悔しても…遅いよな……。
俺が恵美を汚してはいけなかった。」

「汚した？そんなこと言わないでよ!!」
私はふり向いて彼に抱きついた。

「私はめっちゃ…幸せだったんだもん……。
好きな人に大事なものをあげられて…幸せだったのに…
そんなこと言うのやめてよ……。」

「恵美を幸せにしてやれるのは俺じゃないよ……。」

「そんなことわかんないでしょ
私が愛してんのは 陽之介だけなのに!!
私がいいって言ってんだからいいんだよ!!!!」

「恵美のことだけ…愛してくれる男にこれから何度も巡り合えるから…」

私は涙でにじむ彼を見つめた。

「こんなに泣かさないで　もっともっと楽しい気分になさせてくれる恋に

きつと巡り合える……。あんなことした後で自分勝手なこと言ってんのわかってんだ……。

でも…俺といったら恵美はいつも泣いている気がする。」

私は激しく首を振った。

「違う…違う…私は幸せだって…私が言ってるんだから間違いないでしょ!？」

「恵美……。」

俺はやっぱり…千夏を忘れられない。

恵美だと思っても千夏が…おまえの中に俺を惑わす

千夏がいる限り…俺は千夏を探してしまう。

恵美を見つけて恵美を抱きしめたら

千夏が泣いてる気がして……

あの日 恵美を抱いて…後悔した。

いや…おまえのせいにしてゴメン…。

俺が…俺が辛いんだ…。

千夏を…裏切って…罪悪感で一杯だった。

他の女をいくら抱いても こんな気持ちになることはなかった。

ゴメン……。俺が…俺が無理…。

これ以上 千夏を裏切れない…。

混乱させて…恵美を泣かせたくないんだ…。」

頭がガンガン鳴っている。

彼の目に涙が…涙を見つけて私はさらに混乱する。

「やだ…なんで泣いてんの？泣かないでよ…。

男なのに…大人なのに…先生でしょ？

子供の前で…生徒の前で…泣かないでよ……おお！！！」

「ごめん…。

俺を…嫌いになって…。

サイテーだろ…情けないだろ…。

恵美に近づいてさんざんキスして…好きにして

恵美を弄んだんだ。

…恵美が…恵美が大切なんだ…だから…俺のことで

泣かせたくないんだ……。

俺はダメな男だから……他の女は泣かせても
やっぱり恵美だけは……泣かせたくない……。

復讐なんてくだらないことは……もうやめるから……」

彼が……彼が……声をあげて泣いた。

許してくれ……

解放してくれ……

いつも大人の彼が……私の前で怯える子供のようになきじゃくった。

私はいつしか自分が泣くことも忘れて
取り乱した彼を茫然と見ていた。

私が彼を追い詰めてるの？

彼はおもむろに立ちあがって フラフラと浴室に向かって歩き出した。

洋服も脱がずに浴室にはいつてシャワーの音が響き渡った。

シャワーの音に混じって 彼の泣き声が聞こえた。

「なっち……なっち……ごめん……ごめん……
もう二度と裏切らないから………」

私は床に座り込んで 大声で泣いた。

おねえちゃんには…勝てないの？

もうここに肉体のないおねえちゃんに……
私がどんなに彼に心をつたえても おねえちゃんの亡霊には敵わ
ないの？

私が彼を愛することで 彼を追い詰めるなら……

彼が解放してくれって言うなら・・・

私は彼が壊れてしまわないように・・・
解放してあげるべきなの？

私は子供だから…彼と一緒にいたい…
他の事情なんてどうでもいい

彼がそばにいてくれればそれだけで幸せなのに……………。

大人ぶった私が言う。

可哀そうだよ……………。
解放してあげた方がいいよ……………。

私は立ちあがって制服に着替えた。

今日は抱いてもらう予定だったのに
別れを告げられちゃった……………。

「あはは・・・・・・・・」泣き笑いしながらカバンを持った。

「ばいばい・・・・・・・・」

大人ぶった私がテーブルに合鍵を静かに置いた。

大人ぶった私じゃないと子供の私は 死んでしまいそうだった。

彼を残して 玄関のドアを閉めた。

大きく深呼吸して目をゴシゴシ拭いて 私はフラフラと歩き出した。

どこに向かってんの？

私がいるべき場所・・・・・・・・

忘れられんの？

わかんない・・・・・・・・

でもこれ以上 彼を苦しませたくないもん・・・

愛してるって・・・・・・・・こういうことなのかな・・・・。

愛するという事 二話

大人の私が頑張ってくれて　なんとか家にたどり着いた。

玄関を開けると　ママが鬼のような顔で立っていた。

「こんな遅くまで　何をしてるの!？」

玄関に飾ってある時計は11時を回っていた。

「あ・・・ごめんなさい・・・。
ちよっと友達の家で遊び過ぎちゃって……」

私は靴を脱いで慌てて部屋に戻ろうとした。

「あなた・・・お風呂入って来たの?」

「え?」いきなりの言葉に動揺した。

「石鹸の匂いがするんだけど?」

「あ…石鹸の匂いのするコロンを友達の家でつけたの……」

大人の私がそう言い放った。

ママは怪訝な顔をしたけど

「気をつけなさい。」一言言って部屋に戻っていった。

私はうまくついた嘘に驚きながら

私のことなんてどーでもいいくせに

そう思っていた。

まっすぐおねえちゃんの部屋に行って 電気をつけた。

「いい気味だって笑ってんの？」

私からこんなをとるなんて百年早いとか…

バカにしてんでしょ？

優しい顔して笑ってるくせに ホントはめっちゃ性格悪い
親も好きな人もみんな一人占めして……
私を孤独にしてんのはおねえちゃんだし……
ここで私が彼に愛されて……だから怒ったの？
彼の夢に出て 私と別れるように言っただけでしょ？」

恨みごとをずっと言い続けていた。

「死んでるくせに……もういないくせに
いつまで私の邪魔をするの？
ほんとにいやな女……！」

私は壁のポスターもベットカバーも
きれいに並べられた本も手当たり次第
窓から投げ捨てた。

しばらくして雨の音がした。

今頃 大切な思い出の品が雨にあたって汚れて行く……。

いいよ・・・

もういい加減 部屋だってあのままで・・・
いつまで死んだ人のために流されて行くの・・・。

「いいさまよ・・・。」

ベットの上で天井を見てた。

別れたんだよね・・・。

私・・・彼を解放したんだよね……？

それで本当によかったんだろうか……

「愛してる…………。今だってこんなに愛してんの…………。
胸が押しつぶされそうで…………死んでしまいたい…………。」

悪い夢だと思えばいい
明日になって目が覚めた時 あれは夢でありますように……。

さっきのことみんな忘れてしまいたい
心が壊れちゃえばいいのに……。

目を閉じてでも彼の顔しか浮かばなかった。

ねえ……ここでは私を優しく抱きしめてね……。

「愛してんのは恵美だよ。」 って言って……。

そしたらもっとうまく生きていけるから……。

その夜 彼の夢を見た。

いつものように優しい彼が私を抱しめてくれた。

「ここで毎晩抱きしめてくれる？」私が聞くと彼は

「いいよ。」と答えてくれた気がした。

「愛してる…。」

だけど…朝目が覚めると 私は泣いていた。

別れたんだ…。。。

あれは悪い夢ではなかったんだね……。
これから彼とどんな顔で会ったらいいの？

大人の私が言う。

大丈夫 ニッコリ笑いなさい。

そしたら彼は少しは気持ちが楽になるから……

彼を悲しませたくないでしょう？

一緒にいるだけが愛じゃない
愛する人のためにできることをするのも愛

私は後者を選んだんだよね。

力なく起き上がって 窓の外を見たら 見慣れたおねえちゃんのも
のが

雨に打たれてた。

その様子がおかしくて大声を出して笑った。

「あははは・・・ざまゝみろだゝゝゝはははゝ」

しばらくして悲鳴が聞こえた。

ママが見つけてパパもやってきた。

二人は慌てて雨の中でおねえちゃんの荷物を拾い集めていた。

「バカみたい〜」

あたふたする両親を上から見ながら　そう叫んだ・・・。

「バカみたいだね。」

いつまでも思い出に縛られてっからよ。」

ママがぼろぼろになったおねえちゃんの本を抱きしめて悲鳴をあげた。

きつと怒られるだろうな……

でも不思議に気が重くはならなかった。

今は誰かと戦いたい……私はそう思っていた。

愛するという事 三話

ベランダで雨に打たれながら あたふたする両親がおかしかった。
大切な娘は多分 あんたたちを憎んで死んだのに
その娘を忘れられずに今もひきずっている。

ここに生きてる娘がいるのに
あんたたちは死んだ娘を重ねてるだけ
いつまでたってもそれに気づかない。

「あはは・・・」

気が狂ったようにおかしいのは そんな両親と
死んだ人間に負けてる自分の滑稽さ

雨にうたれて私は笑い続ける。

おねえちゃんのものを拾い集めていた両親も
私の様子について固まっていた。

しばらくして母が上がってきた。

「どうしちゃったの？何かあったの？何であんなことするの？」
トーンが上がってきた。

私の心配より おねえちゃんのを投げ捨てたことへの怒りが
この人の中では大きいんだって
そう思うとさらに怒りは増してきた。

「恵美!! なんとかいいなさいよ!!」

母の手が私の頬を勢いよく打った。

母に叩かれたのは初めてだった。
一瞬沈黙した。

「恵美!?! 答えなさい!?!」母が沈黙を破った。

「いつまでも死んだ人間に縛られて バカじゃないの!?!
こんなことしたっておねえちゃんなんて見ちゃいないんだよ。
死んだら終わりもうおねえちゃんはいない。
いつまでくだらないことしてんのか教えてやったのよ。」

「恵美? どうしたの?」

「くだらないからよ。自分らが死に追い込んだくせに
自分らが殺したくせに 何悲しんでんのよ。
許してやればよかったじゃん!!
そしたら…そしたら…私だってこんなに辛くなかったのに!!」

そうだよ彼がおねえちゃんと結婚してたら
憧れだけで終わっていた。

こんなに苦しい恋なんてしなくてよかったのに……

「何言ってるの？なんでそんなこと言うの？
誰に吹き込まれたの？」

母の顔つきがさらに鬼のようになった。

「あいつが…あいつと会ったの？」母がゆっくりそう言った。

「誰よ。あいつって……」私は母を睨むと

「あ…いや…そんな…まあいいわ。
少し頭冷やしなさい……。」

そう言って母は部屋を出て行き また庭に戻って
おねえちゃんのをひろいだした。

「学習しなさいよ～～バカじゃないの～～あはは・・」

私の高笑いが静かな朝に響き渡っていた。

愛するという事 四話

「学校休むんでしょう。電話しておくわ。」

母がそう言って出かけて行った。

勝手に決めないでよ……

行くよ……だって彼に会いたいもん……。

冷えた体をシャワーで温めて 髪の毛を整えて
制服に着替える。

鏡の中の私は 大人の私になっていて
子供の私は今日も守られていた。

教室についたのは二時間目の途中だった。
後のドアを開けるとみんなが一斉に振り返った。

「あら？ 小山内さん欠席じゃなかった？」
数学の先生

「いえ、遅刻です。」
私はそう言って席について教科書を机の上にだして

授業に入った。

余計なこと考えずに…勉強しよう

弱い私を押しのかけて 大人の私がそう言ってる。
大人の私…嫌いじゃないな

弱い私が感謝している。

休み時間 友達が集まってきた。

「めぐ 欠席って言ってたよ。」

「うん…親が勝手にそう言ったんだもん。」

「いいじゃん…休ませてくれるなら
私なら休むけどな」

「だって学校の方がいいもん。
うちにいたって楽しくないし……することないもん…」

彼に会いたいんだもん……

それからようもないのに廊下を歩いて

職員室の前を通ったり教科室の前を横切ったり

でも残念なことに

彼には会えなかった。

三時間目は担任だった。

「あれ…小山内どーした？欠席だって連絡来てたぞ。」

「親が勝手に連絡したんです。」

「そうか……でも放課後來るんだぞ。」

「え？誰がですか？」

「ご両親。おまえなんか心配させてんのか？」

俺には変わったところないと思うけどと言っただけけど…」

「そうですか…」

「心配させんなよ。」

よし…じゃ授業始めるか。」担任が話を切り替えた。

何しに来るんだろう。

私の行動を学校のせいにもしたいのかな

そんなことを考えてると

あ……

彼のこと……

彼が見つかったら大変なことになるわ

私はパニックになった。

授業が終わったらすぐに飛び出した。

教科室 職員室 どっちに行こうか迷ったけど教科室に向かった。

教えなくちゃ

両親が来ること…見つかったら大変なことになる

彼と会えるこの空間を奪われたら
私は生きていけない・・・・・・。

私は祈るように彼を待った。

話声が聞こえた。

それがすぐに彼で相手は山岸先生だと思った。

彼の視線が一瞬私をとらえた。

「あら？ 小山内さん？」 山岸先生が私に気づいた。

「あ……あの……溝端先生　ちょっといいですか……」
私は彼に声をかけた。

山岸先生はそのまま教室に戻っていった。

「何？」 厳しい顔で彼が言った。

「放課後 両親がきます。それをつたえにきました。」彼に抱きつきたかった。

「そう……。
俺に会いに来るの？」

私は首を振った。

「見つからないで……絶対に見つからないで……」

そう言うのがやっとだった。

それ以上彼と話してたら 大人の私だって泣いてしまう。

この胸は私だけのもの

そう叫んでる……。

愛おしくて胸が震えている。

私は彼をあきらめられない……。

もう一度彼の顔を見た。

彼は悲しい顔をしていた…………。

私は会釈して彼の横を走りすぎる。

ゆっくりだと抱きついてしまいそうだった……。

そして涙が流れる。

こんなに…こんなに好きなのに……。

「めぐる」後から声がして慌てて振り返った。

王子が立っていて

私の涙に戸惑った顔をしていた。

あ…

気がついてゴシゴシと目を拭いた。

「どうした？」

「ううん…思春期だからね…いろいろあんのよ。」

「おっせなく俺は中学で終わったけどな」

王子の笑顔に思わず私も笑った。

「親来るんだろーめっちゃ思春期じゃん？」

「うっさいんだよね。ほんとにイヤになるわ。」

「めぐでも反抗するのか？」

「思春期だしね。」

王子と話していると少し元気になった。

「今日も…めっちゃ可愛いよ…。」

「え？」聞き慣れない言葉に耳を疑った。

「何回も言わすな。俺だって必死なんだからな。」

今日も可愛いって言ったんだ。」

私は思わず頬が赤くなった。

「ありがとう・・・学…も…
カッコいいよ……」

勢いで 学と呼んだ。

学は嬉しそうに笑った。

「めぐに言われたら最高にテンション上がった。」

思わず吹き出した。

彼との距離が深まっていく中

学との距離が縮まった気がした。

「気長に返事待ってるからな……。」

そう言えば告白されたんだっけ……

「あ…それは…む…」と言いかけた瞬間に
チャイムが鳴った。

「あゝやべゝゝほらまたたたされるぞゝゝ」
学はそう言って
私の手を握って走り出した。

王子の行動にギャラリーが目を光らせた。

「ちょ…ちよつと…学…手を…」

学はニッコリ笑って振り返った。

「本日のミッション完了ゝゝ」

学は私の手をしっかりと握りしめた。

愛するという事 五話

「どういふことよゝさつき手をつないでたでしょ？」

志摩ちゃんと真紀子から取り調べ中

「違うってゝあれは立たされるからって言って 学が…あ
王子が勝手に手を引っ張ったのよ。」

「もうゝゝお似合いだから・・・
仕方ないな…」 志摩ちゃんがため息をついた。

「王子って一年の時からめぐのこと好きだったらしいよ。」

「え・・・」私は飛びあがった。

「うちもお似合いだと思うわ。

めぐなら仕方ないかなって……。」 真紀子もため息・・・。

「そんな…まだそんなことには…なっていないし……。」

焦る私

「だけど他のファンが許さないかもしれないから
今日無事に帰れるように帰り道確認した方がいいよ。」

志摩ちゃんが苦い顔で言う。

「やめてよ〜〜〜」

私的にはそんな所じゃない・・・・・・。

彼がうちの親と会わないことを祈るしかない……。

彼とここで会うことも許されないなら

私の人生なんて・・・・考えられないから。

彼に別れようって言われたって

冷たくされたって

彼をここで見て胸をときめかす

そんな毎日だっていいから

彼と一緒に空間にいたいんだもん。

大きなため息をついた。

「どーしたの？」志摩ちゃんが驚いた。

「ごめん……なんか親 担任に会いにくるらしい…。最近ほんとにウザイ……。」

「めぐでもそんなこと言うの？」

「私のことなんかどーでもいいのに急に干渉するのやめてほしい。仕事かおねえちゃんしか興味にないのにさ。」

「おねえちゃんって死んだんだよね。」

「そうよ。もう十年もなるのに…今だに千夏千夏ってバカみたいなんだもん。あ……ほんとイライラする。」

私が乱暴に壁を蹴ったら

志摩ちゃんと真紀子が大爆笑した。

「何で……笑うのよ……お」

「だって……めぐらしくないんだもん」

「私……？私って何……よ……。みんなおねちゃんばっかで

私のことなんかどうでもいいくせに

どんなに頑張ったってどうせみんなおねえちゃんには……

叶わないんだもん……。私は？恵美でしょ？千夏でもなっちでもない
よね……」

涙が流れてきて 止まらなくなった。

「大丈夫？」

志摩ちゃんと真紀子が慌てて私を抱きしめてくれた。

愛するという事 六話

「ごめんね…そんなに悩んでるとは……めぐ？
大丈夫？ごめんね……」 志摩ちゃんの困った声

「違うの…ごめんね。
なんかもう耐えられなくて……。」

「そっか？そっか うちら友達じゃん……いつでも
聞いてあげっからね。ためないで出しなさい。」

「あんがと…なんかすごく楽になった。」

志摩ちゃんと真紀子は顔を見合わせてよかったねと言った。

親が来る時間だった。
どうか彼と会いませんように 私はそれだけを願っていた。

玄関で靴をはいていると 人影が見えた。

私が顔を上げると いきなりだった。
バケツの水を頭からかぶせられた。

バツシャーン

「キャハハ・・・めっちゃざまーあー」

多分上級生だった。

玄関を掃除していた同級生の子たちも啞然としていた。

もしかして…モップ洗ってた…やつ???

私は血の気が引いてそして底から噴火するみたいに
ワナワナ震えた。

私はかなり機嫌が悪いのよ? いいの?
あんたたちでこのストレス解消しても?

「ちょっと 待てよ。」 走り出したグループの一人の髪の毛を掴んで
引きずり転がした。

「キャー!!!」

「喧嘩か？何よ？」 男子たちが集まってきた。

「おまえ下級生のくせに生意気なんだよ。」

私はその女子生徒に飛びかかった。

「キャ||||!!」

何が起こったのかわからないけどとにかくイライラをそこにぶつけた。

「やれゝやれゝ」

楽しんでいる男子の声

髪の毛をひっぱられたけど 反対に長い髪の毛をひっぱりあげた。

「痛いゝゝゝ！！キャゝゝ痛いゝゝ」

黒だかりの人たちがおもしろそうにはやしたてる。

「コラゝゝ！！何してんだおまえたち！！」先生の声に周りが退散し始めた。

その瞬間頬を思いきりひっぱたかれた。

「デメー」

私は大爆発した。

「痛い！！やめて」上級生が騒いだけど
気にせずに私も頬を思いきりひっぱたいた。

「いい加減にしろさい！！」

体育の先生と

理科の先生に引き離されて その間も私は

「どうどうといいなよ！！」

卑怯もの！！」私は怒鳴った。

「いやもうめっちゃ不愉快！！」上級生は金切り声をあげる。

「ほら二人職員室だ。」体育の先生は暴れる私をおさえ付けて歩き
出した。

「ふざけんなよバ————カ!!」

職員室に行く間も みんなが茫然として立ちつくしていた。

「小山内・・・どうしたんだよ。」体育の先生が言った。

「だって…だって…頭から水かけられ
それも掃除の水だもん…：…なんでそんなことされなきゃなんないの
よ……」

今度は情けなくて泣けてきた。

もう死んでしまいたい

私はそう心の中で 叫んでいた。

愛するという事 七話

職員室に入って中央の椅子に座らせられた。

私はまだ興奮が冷めない。

向かい側の椅子に上級生

私たちはまだ掴みあいのけんかをする勢いだった。

「松田先生と溝端先生 呼んできてもらえる？」

「松田先生は生徒の親がきてて相談室です。」

その言葉に驚いて立ち上がった。

「あ…ごめんなさい。

やりすぎました。

解散していいですか？」

彼を呼ばないで……

その時放送がかかった。

「溝端先生へ至急職員室へ」

うわ……どうか何事も……おきませんように

しばらくして彼が職員室に入ってきた。

「どうかしたんですか？」私の顔を見た。

私は目をそむけた。

「喧嘩です。女子プロ顔負けの大ゲンカです。
松田先生　お客さんで　後よろしくお願いします。」

体育の先生はそう言うのと去っていった。

上級生の方を見て 彼が

「島谷 なんでけんかしてんだ？」

「だって…だってね先生……高山学と イチャイチャしててめっちゃムカついたんだもん。手をつないで走ってたって。」

彼は島谷という生徒を見ながら優しく微笑んだ。

「やきもちか？」

「はい……。」

「やきもちだって…きみは許せるかな？」

「はい……。」

彼の目を見ることができなかった。

「人間は嫉妬に狂うと…後先考えずに狂ってしまうから後で後悔しても遅いから……。」

こういう風におおごとにならないように気をつけなさい。」

「はい……。」「島谷はそう言って職員室を出た瞬間入れ替わる世ように

乱暴にドアが開いた。

私は彼とドアの方を振り向いて 愕然とした。

鬼のような顔をした母が飛び込んできた。
そして私たち二人を見つけると

走り寄ってきて

「溝端…溝端 陽之介……」そうつぶやいた。

「ママ…？」私は不安でいっぱいだった。

その後を 担任が追ってきて

「おかあさん どうかしたんですか？」と聞いた。

「よくも………あんたの入れ知恵ね………」

そう言うと 彼の頬を力いっぱいひっぱたいた。

「ギャ〜何すんのよ ママ!？」

私は悲鳴をあげて 彼と母の間に割って入った。

「また……また現れたのね……この疫病神!!」

職員室の中は異様な空気が流れて誰もが 私たちを注目していた。

愛するという事 八話

「失礼よ！！何するの先生だよ！？」「私はそう叫んだ。

一瞬母は ひるんだけれど
また怖い顔で彼を 睨みつけた。

「なんであんたが先生なんかやってんの？あんたみたいにクズが
この学校で生徒に何を教えてるの？
うちの千夏がなるはずだった夢を なんであんたが叶えてんの？」

「千夏と一緒に将来を見てたから。」彼の表情は氷のようだった。

「なにが…？あんたになんの将来があったのさ。
喧嘩に明け暮れたチンピラのくせに 氣どった顔で先生なんて
それも恵美の近くにいてってどういう事なの？」

機関銃のように母が怒鳴り続ける。

「あんたが余計なこと恵美にいったんでしょ？
恵美はいい子だった 千夏と同じ
あんたに出会うまでは二人ともいい子だったのに
恵美まで変えてしまうの？私たちへの復讐のつもり？」

「ママ!! ひどいわ。先生には関係ないじゃない。

私とママたちとのことでしょ? もう帰ってよ!!」

仕事忙しいんでしょ? 今まで見向きもしなかったくせに

朝のことで動き出したんなら またおねえちゃんのせいだ!!

あんたたちは 私のことなんてどーでもよかったんでしょ?

先生のせいにしないでよ。」

私はテーブルの上にあったプリントを母に投げつけた。

「恵美!!!」 母が私の頬を殴った。

「サイテー……死んだ人の部屋を片付けたって私の部屋なんて
片付けたこともなくせに……」

だから嫌いなものよ!! あんたたちも……

おねえちゃんも!! 私生きてんのよ!!! 私を見てくれたことあった?

見てないじゃん!!!」

「とにかく……理事長先生にお話してくるわ。

溝端は教職員にはふさわしくない。この立派な校風には似合わない

って……。

私はあんたを陥れるならなんでもやるわよ……。」

「じゃあ…殺しますか？

あなたが父を死に追いやったように…手をよこさずに
周りからゆっくり追い詰めますか？」

彼の顔は完全に冷酷な顔に変わっていた。

「千夏と子供を殺したのも…あなたたちです……。

俺から大事なものを奪ったのは……あなたたちですよね？」

母がキーーーーッと顔をくしゃくしゃにした。

「恵美 学校やめなさい。

違う学校に転校しなさい。」

「な…何言ってるの？」

「この男がやめないなら 学校に来させる意味もないわ。」

担任も困り果てた顔をしていたが

「まずはご家庭でもう少しよく話合ってください。

私も今回のことを校長と理事長に伝えますから……」

そう言って彼と母の間に割って入った。

ママなんて大嫌い……。

私から……大事なものを奪ったら許さない……。

私は こんなに親を憎いと思ったことはなかった。

愛するという事 九話

「帰るわよ。」母が私の腕を掴んだ。

私は彼を振りかえったけど 彼は冷たい目をして向こう側を眺めている。

ごめんなさい……

私のせいで あなたの夢を壊してしまう

それだけは絶対阻止しなければ……
廊下で私はママの手を振り払った。

「ひどいよ…先生には関係ないのに
どうしてあんなひどいこと言ったのよ。」

「憎いからよ。
これ以上あいつに振りまわされて
あんたまで失いたくないわ。」

もう失ってるよ

「理事長先生とかやめてくれる？」

「それは無理。

千夏の夢をあいづがか叶えてんのは許せない……。」

「ママたちだって先生の大事なものを奪ってんのに？」

ママの顔が強張った。

「家まで送るから用意してきなさい。」
話をすりかえる。

「いい。志摩ちゃんが待ってるから。
忙しいんでしょ。仕事戻って……。」

ちょうどいいタイミングで友達に名前をよばれた。

「めぐるう」

ラッキー

「行くわ。」

私は母をふりかえらず友達の方へ走った。

彼と話しがしたい。

彼に謝りたい・・・。

頭の中はパニックだった。

彼の表情が…これ以上…彼との距離が広がるのは

死ぬほど辛いから・・・

今は先生と生徒でも

彼を見つめられる場所が私の大切な時間

それが今の私の愛するということなんだから

その場を奪われることだけは どんなことがあっても
それが親だとしても

許せない・・・・・・・・。

「めぐ・・・大丈夫だった？」 友達がいった。

「あんま・・・大丈夫じゃない・・・」
涙がここで溢れてきた。

「今日是最悪な一日だよ……。」 顔を覆って泣いてしまった。

彼と親を会わせてしまった……
自分が一番……許せなかった。

彼を人前で……傷つけてしまった。
過去を暴露されてしまった……。

全部……。私のせいだ……。

愛するという事 十話

教室に戻ると学が近づいてきた。

「ごめん：俺のせいで：大丈夫か？」
責任を感じて神妙な顔つきだった。

まだ濡れた髪の毛が バケツの水だったこともあって
屈辱的だったけど

それ以上に私にとっては
彼が親に見つかってしまったことの方が
今は大きかった。

「学のせいじゃないよ……。
自分もちよっとイライラしてたから……
ストレス発散してやりすぎたの……。」

教室に残っていた数人がそのやりとりを見守っていた。

あきらかに泣いた後の私にきつと

さらに罪悪感で学は困った顔をしてた。

「送るよ……。」学がいった。

私は首を振った。

「ありがと……。でも……ちょっと怖いからやめとく……。」

「俺が……そういうものから守るから……」

俺はめぐにずっと恋してたんだ。せっかく距離が縮まったって

それなのに俺のせいで……こんなことされて……

なんて言ったらいいのか……。」

「気にしないで……今日はたまたま学のことでおおごとになったけど
違うの……自分もほんとに今病み期だから……」

だから学が悪いなんて一つも思っていないから……

これからもいい仲間で……いてほしい……。」

私はカバンを持って教室を出た。

どうしても今日は彼に会いたい

今は学のことを考える余裕なんてなかった。

早く彼に会いたい……。
彼に会って謝りたい……。

それだけしかなかった。
合い鍵のない家の玄関でずっと待ってた……。

途中母から何度も携帯が鳴ったけど無視をした。

もう……いい子でいなくていいんだ。
私はおねえちゃんじゃない

彼のためだけに……私自身のために素直に生きて行く……

愛することは自分に素直になること

もうどうなっても構わない……。

明るかった空が真っ赤に変わってそして日がしずんだ。

初夏の街でも日が沈むと肌寒く感じた。

彼はなかなか帰って来なかった。

「陽之介……早く帰ってきて……」

何度もメールでそう打っては 削除した。

私が待ってたら 帰って来ないかもしれない……。。

三十回目の母の着信に出た。

「何してるの？家にいるの？」母はかなり怒ってる。

「いるよ。電話に出たくなかっただけ…」嘘をついてみる。

母はホッとした声で

「今日はどうしても帰りが遅くなりそうだから明日ゆっくり話しましょう。先に休んでなさい。」

「うん。」

携帯を切ったら 私の前に彼がたっていた。

「あ……」胸がいっぱいになった。

「何してんの？」彼はかなり酔っている。

「謝りたくて……。」私は鍵を開けてる彼の背中にぴったりとくっついて

ドアを開けたら素早くはいりこんだ。

「もうここには来ないって…そういう約束だよ…ね…」

フラフラになって彼は靴をぬがないでひっくり返った。

「だけど…会いたかったの。謝りたかったの……。」

酒くさい息の彼は

「あはは・・・」と笑って

「そんな簡単には…許せないけどね……。」

今日 俺はいつもの俺ではいられないから……帰れ……。
おまえをきつと傷つけるから…頼むから帰ってくれ……。」

そう言うときたちあがって ヨロヨロとリビングに入っていた。

そしてまた大きな音がして
私は慌てて彼の後を追った。

傷ついても愛 一話

「大丈夫!？」リビングでひっくりかえってる彼を私は揺り起こした。

「いいから…帰れて…」ちょっとろれつに回らない言葉で彼は言う。

「やだ……。ちょっと話したいの……。」

「まともに話せないし……帰った方が……いいよ……。」

「こんなに酔って…ごめんなさい…うちの親に言われたからでしょ? 傷つけてごめんなさい……。」

「久々に会ったけど 変わってないよ……。」

あの上から物のいい方……人をバカにした態度……」

「ごめんなさい……。」「

「頼むから…もう帰ってくれ……。」

恵美を傷つけてしまうから……俺は今日は

何すつか…わかんね……

このまま……寝てしまいたい……だから帰れ……。」

「傷ついてもいいから……」

私……あなたと一緒にいたい……。

おねえちゃんに勝てなくていい…あなたがおねえちゃんを
私の奥に見ててもいい……

だけど私は一緒にいたい……

傷ついたってボロボロになったって私はあなたのそばにいたい……

……。」

涙が落ちて彼の頬を濡らした。

「恵美……俺さ……」

もう誰も愛さないんだよ……。だから俺を混乱させるな……

やっぱり俺はお前の親にたいする憎しみを忘れられない……

これ以上 おまえといたらお互い傷つけ合うだけだ……。」

「陽之介……」

寂しいんでしょう？こんなに酔って……

傷つけて：私はそれでもいい
わかったの・・・・・・それでもいいって
あなたを抱きしめて行きたい・・・・・・。」

涙が流れ落ちる。

「傷つけないんだ・・・・頼むから・・・・
今の俺につけこむな・・・・信じるな・・・・
酔いがさめたらおまえをまた・・・・突き放すから・・・・」

そう言いながら彼は私を抱きしめた。

お酒の匂いに酔ってしまいそうだった。

「いいの・・・・。陽之介のいいようにして・・・・
酔いがさめて突き放されても
このこと何にも覚えてなくても
私はあなたを愛してるから・・・・
傷ついてもあなたのそばで：あなたを見ていたらそれが幸せ・・・・」

「俺は千夏しか愛さない・・・・」

「うん・・・わかってる・・・」

彼の手が酔いでうまく動かないから私が自分で服を脱いだ。
それから彼のスーツを脱がして
私たちは生れたままの姿で抱きしめ合った。

彼は子供のように震えていて・・・私はまるで
母親のような気持ちで彼を抱きしめた。

彼がしてくれるように今夜は私が彼を愛してあげた。

そして彼は果てた後　すぐに寝息に変わった。
スヤスヤと穏やかな寝顔にもう一度キスをした。

「愛してる・・・。この世を敵に回しても
あなたが私を必要としてくれたら・・・どこまでもついて行くわ。」

裸の彼にタオルケットをかけて
私は身支度を整えた。

私は決めた・・・・・・・・。

彼のそばに……いることを……………。

彼の心の氷が解けて私だけを見てくれる日を夢みて……
彼の家をあとにした。

傷ついても愛 二話

家に戻ると 車が置いてあった。

「うわ・・・最悪じゃん・・・」私はつぶやいた。

志摩ちゃんに電話をした。

「どしたの？こんな時間に・・・？」

「あのねお願いがあるの…。今日私と一緒にだったってことにして志摩ちゃんの家に行ったって私の愚痴を聞いてくれてたって……ごめんね…こんなことたのめんの志摩ちゃんしかいなくて」

「うん…それはいいけど…
めぐ・・・大丈夫？」

「心配かけてごめんね。親うざいんだもん……。
電話かけたら話合わせておいてね。」

そう言って電話を切って 深呼吸してドアを開けた。

そのまま階段を上がろうとすると

「まちなさい！！！！どこにいったの！？」

母が出てきてあとから父も出てきた。

「家にいるって言ったわよね。いつからそんな嘘まで付くようになったの？」

「嘘？嘘ならおねえちゃんは何百回もついてたでしょ？
なんで私だけそんなこと言われるの？」

「千夏のこと言ってんじゃないわよ。
それに千夏はもういないのよ 何を比べてるの？」

「いない？」

比べてんのはそっちでしょうが？

いないならいつまでも部屋をそのままにするな。

おねえちゃんに私を重ねるな！！！！

迷惑なんだわ。千夏千夏って……私のことなんかどーだっていいんだよ

どこ行ってたって関係ないでしょ？
やめてよ…急に心配すんのも私を思い出すのも…」

また頬に痛みが走った。

「ごそこそとあの男に吹き込まれたんでしょ？
まさか恵美の近くにいたなんて・・・またあいつ
何をするかわからない…って
まさかあなた…あの男とどうにかなってないでしょうね!？」

母がいきなりパニック状態に陥った。

「別に・・・」私が言うと

肩をつかまえ狂ったように揺すった。

「やめてよ……………」

「恵美？大丈夫よね？ママたちを裏切っていないわよね？」

「そんなこと答えてくもない。」

私は突き放すように母から離れて階段を駆けあがった。

「恵美？大丈夫よね？まさか・・・そんなことになってないわよね？」

でもあの男なら…パパ！やりかねないわ。」

母の半狂乱の声を聞きながら
部屋で音楽を大音量でかけた。

聞きたくない

彼のこと悪くいうのは 耐えられない・・・

私は大音量の中で耳をふさいだ。

「私は彼を愛してるわ。」

その声だけが私に響き渡る。

傷ついても愛 三話

朝 母が

「今日から学校に行かなくていいから。」と言った。

「は？」制服姿の私はその言葉に驚いた。

「今日からしばらく学校休みなさい。」父の声

「何で？学校ってずる休みしていいものなの？」

「あの男のいる学校には通わせられないから
これからは家庭教師でもやとうから家で勉強しなさい。」
母が私に背を向けた。

「友達にも会えないの？何で？」

「理事長には話してきたからあの男を解雇しなければ
学校への寄付もやめるって

あの男が解雇されてから学校に行きなさい。」

私の頭に血がのぼった。

「何言ってるの？ どうしてそうやってきたないことするの？
人の人生めちゃくちゃにする権利あんたたちにあるの？
会社経営してっからってそんなにすごいことなの？
人間としてサイテーじゃん！！！！」

今度は父の手が頬をうった。

「おまえいつから…そんな口聞くようになった？」

私は頬をおさえて

「あんたたちが私にかまわないからわかんなかったのよ。」

そう言おうと

「何！！！！誰に向かって口を聞いてんだ！！」
父にもう一発殴られて 廊下にひっくり返った。

「暴力使えばいいと思って・・・
私はそんなことには絶対に負けないから・・・
これ以上私を追い詰めるなら 死ぬから
おねえちゃんみたいに死んでやるから……………」

親を恨みながらおねえちゃんと
天国で暮らしてくわ。」

カバンを持って外に飛び出した。

「待ちなさい！！！」父が追ってきたけど
私の方が早いに決まってる。

すれ違う人が私を見ていた。

それでも私は走った。

彼がいる学校に向かって

撃たれた頬がジンジンして

目も痛かった。

口に血の味がして手でふくと

鼻血が出ていた。

これだもん人に注目されるわ

両親に殴られた記憶がなかった。
だっていつもいい子でいたから……

パパとママに嫌われないように　いい子のふりをしてきた。

「めぐ!!」声がして振り返ったら
学が走ってきた。

「おまえ・・・ちよつと・・・」

「おはよう」

「おはようじゃねーよ。」

学はポケットからハンドタオルを出して私の鼻にあてた

「いいよ汚れるよ」私が慌てると学は

「いいから・・・それに…目腫れてるぞ。
ヤバイ顔してる・・・。」

「朝から親と喧嘩したの。」

だいぶひどい？」不安になった。

「ひどいよ……。学校行ったら保健室行って
冷やしてもらえ。それにしてもひどいな……。
おまえ女の子なのに この顔はないよ。」

学はそう言々と私の頭を優しくなぜた。

「あはは……。大丈夫よ

私は強いんだよ。」そう…彼がいれば私は聞えるもん……。・・・

傷ついても愛 四話

学が私を守るように教室の中に入れてくれた。

「うわ…」みんなが私に注目した。

「王子のファンにやられたの？」

私を待ってたような志摩ちゃんが教室の中にいた。

「ちがうよ」

「だって……すごいよ。目半分潰れてるから……
めぐ……最近どーしちゃったの……？
昨日だって変な電話してくるし…私いつめぐの親から
電話くるかってヒヤヒヤしてたのよ。」

「ごめんね志摩ちゃん」

私は志摩ちゃんに抱きついた。

「親に？」

「うん……もう大嫌いだから……」

「かわいそうに……」

志摩ちゃんの優しさに涙が出そうになった。

「ほら……」学がタオルが巻かれた冷たい保冷剤を
目のところに当ててくれた。

「保健室で借りてきたよ。」

「ありがとう……。」

学校に来てよかったそう思った。

H Rの時間になって担任がはいってきた。

担任は私を見つけて「あ……小山内なんだすごい顔だぞ。」と

声を上げた。

「今日から休みだって聞いてたぞ。」

「親が勝手に休ませるって……」

「おかあさんかなり取り乱していたけど……
だいじょ……ばなかったのか？」

「はい……こんな感じです。」

「おまえ何をあんなに怒らせたんだ。」

あ……溝端先生も……」と言いかけて口を閉じた。

「溝端先生……どうかしたんですか？」私は立ちあがった。

「いや…なんでもない…」

私は担任が他の生徒に聞かれたらまずいと思って
言葉をやめた気がしたから 静かにイスに座った。

連絡事項を言って担任が出て行ったから後を追って
彼のことを聞いてみた。

「先生…溝端先生はちゃんと来てますか？」

「ああ…来てるよ。
なんか…複雑なのかおまえのうちと…」

「昔昔……死んだ姉の恋人だっただけです。
逆恨みしてるんです。」

「そっか。」

溝端先生は優秀な先生だから…これから将来が楽しみだから…
大切にしていきたい教員の一人なんだ。」

担任はそう言うと言顔で階段を降りて行った。

会いたい……彼に会いたい

授業も上の空だった。

二時間目の途中で 体育の先生と社会の先生がやってきた。

「小山内……」申し訳なさそうにそう呼んで

「おとうさんが迎えに来てる。
家に帰れと言ってるんだけど……荷物用意して……」

「イヤです!! 帰りません!!」

だってまだ彼に会ってないもん・・・

先生たちが私を囲んで

「ひとまず親の言う事 今日聞いた方がいい。」

理科の先生が私の腫れた顔を覗き込んでそう言った。

傷ついても愛 五話

「先生・・・私学校に来たいの……。」

涙が溢れた。

クラス中が可哀そうだとかひどいとか騒然としていた。

「わかってる。俺たちもそうしてもらうのが一番だと思ってるからわかってもらえるように頑張ろう。」

今日は帰った方がいい。

わかるよな？」

いつも厳しい体育の先生が優しく言った。

私はうなずいて 帰り支度を始めた。

「心配かけてごめんね。」 教室を出る時 みんなに頭をさげた。

「俺たちもできることあったら応援するから。」 学がそう言った。

みんなも大きな声で

「頑張れ〜」と言ってくれて私は嬉しくてもう一度頭を下げて廊下に出た。

とぼとぼと先生たちに両脇を抱えられて廊下を歩いた。

「とりあえず 職員室に行こう。」
体育の先生が言った。

彼に会いたい……

ハッとして

「溝端先生は……？」 私は先生に聞いた。

「今……理事長室で小山内の両親と話してるよ。」

「うちの親と!？」 その言葉に私は理事長室に向かって走り出した。

「おい！！小山内～～！！」

逃げ足は速いんだ。

また彼を追い詰めに来たの？

どうして・・・彼の高校入学やおとうさんの異動や・・・
人生狂わせることたくさんしてきたのに
まだ彼を苦しめるの？

おねえちゃんは幸せだったって言ってた。
こんたに会えて毎日が楽しかったって言ってた

それなのに・・・
それなのに
どうして彼だけ苦しめるの・・・？

私は最後の階段を二段抜かしで登って 一番奥の理事長室のドアを
思いつきり開いた。

両親は背中を向けて
彼と理事長は驚いた顔で 私を見た。

「何しに来たの!？」私は怒鳴った。

彼は私の顔の様子に 茫然としていた。

「ちょ……何その顔は……。」母が声をあげた。

「パパに殴られたから……そんなことも知らないの?」

父も啞然としていた。

「おまえすぐ飛び出して行ったから……
わかった……目にあたったのか……病院に連れて行かないと……」

父は動揺している。

少しだけ可哀そうになったけど
今はそんな場合じゃない。

「先生をどうするつもり?」

「やめていただかなければ 学校への寄付金もやめるし 恵美を他の学校に転校されると言ってるだけ。」

母はもう…狂った鬼のようになっている。

「会社経営をしてる常識人とは思えないわ…。

社長はエライから人の人生も狂わせていいんでしょう？

寄付金やらないとか 先生をやめさせるとか…

脅しでしょ？そんなことばっかやってきたからね…

おねえちゃんが罰を受けて死んだんだわ！！」

「め…恵美……あんた親に向かって…

千夏が死んだのは私のせいなの？」

「そうよ。あの時幸せになりなさいって背中を押してあげたら

今頃 おねえちゃんは幸せだった

愛する人と愛する人の子供に囲まれてきつと笑ってた。

パパだって

ママだって

可愛い孫に囲まれて幸せだったろうし

私だって千夏にそっくりな妹じゃなくて…

小山内 恵美として…普通に生活して…普通の恋をして

自分だけ愛してくれる人と結婚して…家庭を持って…

今より何百万倍…何千倍幸せだった!!
こんな悲しくて切なくて苦しい思いしなくていいんだもん……」

腫れた目の視界は半分でも……
私の視界にはあなたしかいない……。

あなたを守るためなら…なんでもできる……

だからそばにいて

近くにいて一番遠くにいる人でも……

私の視界の中にいてくれるだけでいい……

それ以上は望んだりしないから……。

傷ついても愛 六話

「帰ります。理事長それではよろしく。」

母は乱暴に私の手を引っ張った。

「痛い」

父が私にぴったりとついて

私は振り向くのが精一杯だった。

「先生！！絶対にやめないで！！」

大丈夫だから私がなんとかするから……

ここにいて……おねえちゃんの過ごしたこの学校で
ずっと先生してて……」

私は叫んだ。

「来なさい！！」

彼は茫然としていた。

「負けないで!!! もうこんなくだらないことに負けないで!!!」

彼の姿が視界から消えた。

それから私は一言も口を返さなかった。

母は恥をかいたと私を罵りまくったけど

もう彼から両親を離れたことで 私は力尽きていた。

「病院……」父が言ったが

「殴ったなんて言ったら大恥かくわよ。

腫れてるだけだし冷やしてたらじきに治るわよ。」

母はそう言うときまたグチグチと文句を言い始めた。

家に帰ると私は 部屋に引きこもった。

時折 様子を見にお手伝いさんが上がってきたけど

私はずっとベットの途中で彼のことがばかり考えている。

「お嬢様…お食事は？」

いつもより長い時間いるお手伝いさんに

「あれ？まだいたの？」思わず声をかけた。

「今日から残業ですよ。」お手伝いさんの声に思わず出て行った。

「私を見張ってんの？」

「今夜からは奥さまは先に戻ってくるので
それまで残業ですよ」と笑った。

長くいるお手伝いの 初音さんは私におにぎりをくれた。

「千夏おじょうさまにも こうしてこっそり
おにぎり渡しました・・・思いましたよ。」

「おねえちゃんも？」

「ええ、よくこうしてストを起こして困らせてたから……でも私には素直に接してくれました。

おにぎりの差し入れをして、千夏おじょうさまのノロケ話を聞いて。」

「恋人の？」

「反対されてたから……でも私にはとてもよい子に思えましたけどね。おじょうさまがあまりに幸せそうにお話してくれるから。」

「そうなんだ。

そんなに幸せそうだった？」

「はい……とっても……。

お亡くなりになられても私は……きっとおじょうさまは

最高に幸せな人生だったって思っていましたから……きっと

今も笑顔で可愛い子供と一緒に見守ってるような気がしていますよ。

あの彼も今はどうしているのか……。

そうそう…恵美おじょうさまは覚えてるかしら……

私に『大きくなったら　こんたと結婚する』って教えてくれたんですよ。

私が『おねえさまの恋人ですよ』って言ったら

泣いてしまって……きつとおじょうさまは小さくても恋してたんでしょうね。」

やっぱりだ……

「今の彼にあっても私はやっぱり恋すると思う？」

初音さんはニツコリ笑って

「だったら素敵ですね」

千夏おじょうさまも小さな恋心に気づいていて

苦笑いしてましたからね……。

めぐなら…いっかゝって……。」

初音さんの告白に心が熱くなった。

「他に私　何か言ってた？」

初音さんは ニッコリ微笑んだ。

傷ついても愛 七話

ねえ…やっぱりそうだった……

私も あなたを好きだったんだって……

小さい記憶は私にそのことを忘れさせたけど
多分それは幼心にも

きつときつと切ない片想いだったはず

小さい私は 大人になりたい そう叫んでいたんだ。
可哀そうな私

きつとあまりに辛くて 忘れてしまったんだろう

『おねえちゃんのじゃないも〜ん』

そう言って困らせていたとか……

『こんなに双子の弟がいたらよかったのに』
おねえちゃんは苦笑したとか

幼さゆえに 自分の意思表示はしっかりしてたんだ……
これが私がおねえちゃんときほど年が変わらなかったら
大変な修羅場になってたんだなって笑ってしまった。

その事実を知って 私はさらに彼への愛は運命なんだと悟る。

やっぱり…絶対

彼がいつか手を差し伸べてくれるまで何年かかっても…
絶対待ってようって……そう思った。

彼にメールした。

『どんな妨害にも負けないから
先生も絶対にやめないで……。私は明日だって学校に行くから
絶対にやめないで下さい。』

彼からの返信は……。なかったけど
私の想いをきっと
わかってくれただろう

私にとっての運命の人は 彼しか考えられないから

次の日 めっちゃ早くに家を抜けだした。

だって学校に行かなきゃ彼に会えないもん

時間をつぶすにはありすぎた。

思わず足は彼の家に向かっていた。

もしかして勇気があれば…彼の家のインターフォンを鳴らせるかもしれない。

そしたら私が小さい頃から片想いだったってこと教えてあげよう…。

初夏の朝は気持ちよかった。
顔はまだ腫れていたけど……そんなのどーでよかった。

彼を守るための勲章だって……
私の心はなんだか落ち着いていた。

傷ついたらって私は彼を守る

それが私の愛の形だって……そうすることが一番正直なのかもしれない。

彼の家の前に来て　いつも鍵のかかってないシャッターを少し開けた。

「あ……」

彼の車がなかった。

「昨日帰ってきてないのかな……」
急に不安になった。

部屋の窓を見上げた。

「ねえ・・・私はここにいるよ・・・」

そうつぶやいた。

傷ついても愛 九話

しばらくシャッターの中で座っていた。

彼のバイクを撫ぜながら 彼の腰に手をまわして走った
あの夜を思い出す。

「どこ行っただろ……。」

「誰と一緒になんだろう……。」

考えるだけで胸が苦しくなる。

その時シャッターが開いて光がさした。

「う……うわ……誰？」 彼が声をあげた。

「先生……。」 彼の後から射す朝日が眩しかった。

「恵美？」 彼が車庫のなかに入ってきて私の前に立った。

「痛かったか？」

私の顔を覗き込んだ。

ドキドキして：私は胸をおさえた。

「あたりどころが悪かったんだよ……。」

「ごめんな：俺のことだろ：？」

「学校に行くなって言うから：」

彼の顔が近すぎてドキドキした。

この間のこともあるし：

私はあまりに積極的だったから少し恥ずかしかった。

彼は覚えてないのかな……

「うちの親の妨害になんか負けないでね。
私は大丈夫だし・・・
絶対負けないもん……」

「強いな……。」

彼は悲しそうに私を見つめた。

「俺のことで・・・あんまり頑張るなよ。」

「どうして？先生以外のことで私は頑張りたいくないから。」

「困った奴だな。」

「お手伝いさんから聞いたの。
私の初恋は…先生だったんだって…
おねえちゃんにやきもちやいてたって言ってた。

やっぱりそうだと思ったんだ。」

彼は笑った。

「それは光栄だ……。うさぎちゃんめっちゃ可愛かったから……。」

「なんか嬉しくて……。小さい私もやっぱり先生が好きだったんだね……。」

今日は彼が優しく笑ってくれる気がした。

「そっか」

このままその胸に飛び込んでもいい？
そんな優しい顔されたら 甘えたくなるよ……。

私がそんな気持ちと戦っているなんて
きっと彼は知らない……。。

「恵美…そろそろ時間だぞ。」

「あ…ほんとだ……。先生は？」

「俺は車があるし…それに着替えないと……」

「どこかに泊まってたの？」
その質問の答えが怖かった。

「うん……。」「それ以上は答えなかったから私もその質問はやめた。」

「じゃあ…行くね……。」「後ろ髪を引かれる思いだった。」

「うん……。」「彼が言った。」

「学校で会おうね。」ふり向いて私は言った。

「気をつけていきなさい。

それからあんまり…戦わなくていいぞ。

無理するなよ。」

「私は先生のためなら 戦うもん。

わたしにとって先生は…運命の人だから……。

おねえちゃんが先生にとって運命の人のように……。

だから私が先生を守るから……。」

そう言うときまた悲しそうな顔をした。

そんなに悲しそうな顔しないで……。

私はあなたがいれば強くなれるんだから……。

傷ついても愛 十話

学校の前で母につかまった。

「いい加減にしないよ。」 母

「そっちこそいい加減にしてよ。」

「あんたが学校に行くと 困るのはあの男だよ。

大人しく私たちの言う事きかないとあの男は学校に来れないんだから。」

.....

その言葉に足がすくんだ。

とりあえずこうしてみつかってしまっただけ
またここでもめるのも恥ずかしかったから
私は仕方なく母のことばに従った。

横目に学校を見ながら

私はどうして家に戻るのだろうと思った。

それでも今日は彼に会えたから……

私はまだそんな気分でした。

愛おしい人……

彼を守るためには 学校に来てはいけないんだろうか

でも……

毎日彼に会うとしたら 学校しかない……。

私はいったいどうするべきなんだろう。

その夜から吐き気と下痢と熱にうなされた。

口にも物を入れると水でさえも激しく嘔吐した。

苦しかった。

ジッとしてると彼のことがばかり考えていた。

携帯を取り出して彼にメールをしようとしたら
圏外になっていた。

「あれ：なんで圏外？」

母が携帯をとめてしまっていたことに
具合の悪さに すぐには気づかなかった。

「おかしいな……」

強烈な具合の悪さで 脱水症状を起こして
入院することになった。

ついてない……

病院の真っ白な天井を見つめて 24時間点滴にじばられた。

彼に会えないならこのまま死んでもいいよ

病院は私を気弱にしていく……………

彼は…今頃何してるかな……

私に少しか会いたいって思ってくれてるかな……

腸に細菌が入ったのと同時に 肝機能が低下してると診断されて私の入院は長引いた。

吐き気がおさまった頃には わけのわからない脱力感でトイレに歩くのも辛くなった。

このまま死んじゃったりして…

本気でそう思うほど 具合が悪かった。

そんなある日のこと私は眠っていて…付き添ってくれてる初音さんが誰かと話してるのを聞いていた。

夢の中で聞こえるその声は……

「おじょうさまの先生ですか？」

「はい。入院していると聞いたので……突然押しかけて……あの……このことはご両親には……」

「わかってます。おじょうさまが

あなたに会われて元気になるなら……今眠ってますけど……おかえりになる時　ここに電話下さいね。」

初音さんはそういうと廊下に出ていった。

彼だ……

嬉しくて目を開けなくなったけど……少し寝たふりをした。

彼の指が私の頬に触れる……そして額にかかっていた髪の毛を整えた。それから指は唇に触れて……それから耳たぶに触れた。

「恵美…寝てんのか？」優しい声にますます目が開けられない

鼻先に彼の冷たい唇が触れた。

心臓がものすごい速さで脈打っている。

それから頬へ……そして唇に触れた。

目を覚ましたら現実に戻されそうで……このまま寝たふりをしてたら
もっと幸せな気持ちになるような気がして
私は必死に寝たふりをしている。

耳たぶを噛まれた時は 思わず体をよじった。

「フッフ……寝てもここは弱いのかな……」

そうあの甘い時を過ごしてた頃
彼が耳たぶを噛むと 私はくすぐったくて声をあげた。

私はその快感を必死に耐えている。

「早く……よくなれよ……。」

点滴されている腕を指がなぞる。

「可哀そうに……こんなに青くなって……」

点滴が漏れた青く変色した腕に 彼の唇が触れる。

その時 初音さんが戻ってきた。

「大変です。社長が戻ってきますから……早くお帰り下さい。」

「わかりました。ありがとうございました。」

「おじょうさまにお伝えしておきますね。」

「いえ……このことは彼女にも言わないで下さい。
もし知ってまたご両親ともめるといけないから……」

「そうですか……きっとあなたに一番に会いたいと思いますけど……」

「また時が過ぎてそれからでもいいです。」

「わかりました。また来る時はさっきの電話に連絡下さいね。」

ドアがひらいて彼が出ていった。

またきつと…来てくれる…

私は確信していたから……そのまま最高に幸せの絶頂のまままた夢の世界へ戻っていった。

彼の存在 一話

夢のような素敵な出来事だった。

彼の指や唇が私に触れた時　そこに愛を感じてしまったのは
私の間違いなんだろうか……。

彼に触れることで

私は最高に　幸せな気分になる……。

私にとって彼という存在は　私の生きる証だって……
彼のいないこの世はきつと……色のない世界

彼がいるから私は　いろんな心でいろんな色を
感じることができるとだって

夢なら覚めないで……。

もし目が覚めてこれが夢じゃなかったら……
私は

彼の腕に飛び込もう……

きつと…彼も私を…愛してくれている……。

だけど…どうしても

私を受け入れられないなら……

私は彼にこの想いをきちんと伝えて……

「あなたをずっと待ってるから」ってそう伝えよう……。

彼を待つ意味は私の人生の全てだから……。

夢を見た。

小さい頃の私 彼にだっこされて

高い木の葉を一枚 もぎとって 彼の髪の毛にさしてあげた。

「似合うか？」

「うん!!」

そして私を抱きしめる。

小さい私は おねえちゃんみたいに抱きしめてって言いたいの
に やっぱりうまく伝えられなくて
彼は私を下に置いた。

次に私は もっと喜んでもらいたくて
可愛いたんぽぽをつんで彼に持って行こうと振り返った。

ベンチに座って 二人が見つめあっていた。

私は彼の名前を呼んで 走り出そうとしたら

二人は熱いキスを始めて
私の足は とまった。

見ちゃいけない……

子供心にわかっていた。

だから私はまたしゃがみこんで たんぽぽをとり続ける……。

悲しかった……。

小さい心が 壊れてしまいそうだった。

おねえちゃんなんて……いなくなってしまえばいい

私は何度も何度もそうつぶやいて
たんぽぽをもぎ取った。

そしてそのたんぽぽを地面に投げ捨てて
足で踏みつけた。

死んじゃえ……死んじゃえ……

それから場面が変わって 彼が雪の中で泣いていた。

「どうしたの？ どうして泣いてんの？」

私が聞くと

「うさぎが俺の大事なものを…壊してしまったんだ…」

「うさぎって？誰？」

「恵美のせいで…千夏は死んでしまった…。」

彼はそう言って泣いた。

「恵美？」私がそう言うと

向こうから真っ白な帽子をかぶった幼い女の子が走ってきて
彼を抱きしめた。

「めぐがいるから……」

うさぎはそう言うとうなだれている彼を小さな体で
抱きしめた。

うさぎは私と目が合うと ニッコリと微笑んだ。

うさぎの心の声が私には聞こえた。

邪魔者は消えたから……

彼は私のものだよ。

可愛いはずのうさぎが 恐ろしい生き物に変わっていた。

「陽之介……逃げて……」私の声は彼には聞こえない。

うさぎは不吉な笑いを浮かべて 私を見て笑い続ける。

助けて……誰か……助けて……

私はそこから動けなくなっていた。

彼が真っ白な雪に隠されていくのに……

愛らしいうさぎのふりをした悪魔が彼をどこかに連れて行こうとしていた。

待って……やめてよ……!!

彼に触らないでよ……!!

私はぐっしりと汗をかいて 目が覚めた。

悪夢から目覚めて 私は大きなため息をついた。

彼の存在 二話

「退院いつできるの？」 あれから一週間たってすっかり体調が戻った私は 母に聞いた。

「血液検査の数値がまだよくないんだって……もうしばらく我慢なさい。」

「だって…もう具合悪くないのに？」

「肝臓は大事なところなんだしいいから…だまって寝てなさい。」 母は私に布団をかけた。

「携帯…使いたんだけど…」
おそるおそる母に言った。

「病院で携帯は使えないでしょう。」

「つかっていいところあるじゃん……友達にもメールしたいしきっとみんな心配してるよ。」

「担任の先生から話してもらったから 大丈夫よ。」

母は全く取りあわない
予想通りだけど……………。

彼と連絡を取り合ったりすることをきつと恐れている。

携帯にロックかけておいてよかった。

母が出て言って 初音さんがやってきた。

「おじょうさま 元氣そうですね。」

「今日は一日 何して過ごせばいい？
もう…あきちゃったよ……」

寝てばっかいて イヤな夢も見ると もう苦痛の何物でもないよ。」

「元氣になった証拠ですね〜。
完全に治さないと 肝臓は一度悪くすると治りづらいんです。
しっかり治さないといいけません。」

「あゝ学校に行きたい……。先生に……。会いたいな」

ついつい初音さんの前で彼のことを口走った。

初音さんは彼を入れてくれたから 味方だと思った。

「先生？」 林檎をむいてくれた。

「うん…大好きな先生なの……。素敵な先生…。」

初音さんが笑った。

きっと彼と結びつけてくれた。

「おじょうさま…もしかして恋してるのですか？」

「え…？」 私は頬がポツと熱くなった。

「恋…って…でも…そうなのかな…。」 言葉を濁した。

「おじょうさまが彼以外の人を私に教えてくれたの初めてですね。小学校も中学校も男の子には見向きもしなかった

から…

こんたさんの次に初めてです」

そう言うとニツコリ笑った。

「そ…そうだった？」

「千夏さまが亡くなってから…最後に彼のことを口にした日から初めてですよ。」

「私はなんて言ったの？
全然覚えてないの……。」

「おませさんで…またきつとおにいちゃんに会えるわって…
私がどうしてですか？って聞いたら

『呪いをかけたの』って可愛い顔でそう言いましたよ。
本気でちょっと怖かったけど……。」

そう言う私の口にまた 林檎を入れた。

彼の存在 三話

『呪い…』

彼が来てくれた時 見た夢が忘れられなかった。

あの時彼を抱きしめた私は 可愛い私ではなくて
妖怪のような恐ろしい生き物だった。

やだな…なんか結びつくじゃん

あの日 ねざめがすごく悪かった。
夢の内容を覚えてるのも めずらしかったから……

でもきつと多分きつと
あれは私の本音だったんだと思う。

二人の愛が深い分

私は傷ついていたに違いない……。

幼かったと言っても 私が彼に恋していたことに
間違いはないから……

私の目を盗んで・・・

私の存在が邪魔だったろう空気にきつと私は気づいていた。

あの時があまりに辛くて

きつと私の記憶が封印されている気がした。

私にとって 邪魔者だったおねえちゃんがなくなること

絶対に 望んでいたに違いない

二人の愛が深い分きつと私の嫉妬は深くなった。

彼に渡されたメモをおねえちゃんにあげないで

読みあげたのも・・・きつと意地悪だったのかもしれない。

おねえちゃんが彼とどこかに行こうとしてるのを私は知っていた。

だからきつと：両親に聞こえる大きな声で

私は彼からの大事な伝言を読みあげたに違いない

彼が言っていた。

「ちゃんと渡してくれれば・・・」

そこには彼の私に対しての憎しみがあつたろう

私が幼かったゆえに追及できない 恨みがかくされてるんだろう。

幼くて愛らしい姿の白いうさぎは

心がドロドロで自分勝手な

悪魔な私・・・おかしくて笑った。

邪魔者がいないのに

今だにその邪魔者が私に嫉妬をさせている。

いつになったらおねえちゃんを越せるんだろう

私は一生 おねえちゃんの存在の影に隠されて
生きていくことになるのかな

私は 彼の

『オンリーワン』になりたいのに…………。

会いたい……
会いたい……

会いたくて胸が押しつぶされそうで……

彼が私のどす黒い呪いをといてくれるのを待っている。

彼しかとけない呪いを……

そのときつと私は

彼の『オンリーワン』になれるだろう。

公衆電話を見つけて 彼に電話をかけることにした。
ちよつとでいいの……
彼の声が聞きたい……。

いろんな企みを考えて演技をした。

「あの…白雪銀行の中澤と申しますが…溝端 陽之介様
いらっしやいますでしょうか？」

北海道では一番大きな銀行だった。
これできつと彼に怪しまれなくつないでもらえる。

「少しお待ちください。」

保留音が流れる。

彼が出たら 恵美ですって言おう。
きっとビックリするだろうな……。

「もしもし…お待たせしました。」
次に出たのは男性だった。

私は驚いて動揺した。

ばれた?????

「白雪銀行さんですね。溝端は退職いたしましたか……。」

「え？」思わず聞き返した。

「溝端は退職いたしました。」

私の時間が　そこでとまってしまった。

退職って・・・・・・・・

受話器を・・・・・・・・置いた・・・・・・・・。。。

彼の存在 四話

頭が真っ白になっていた。

退職？ 退職って…何？

私はいてもたってもいれなくて
病院を抜け出してタクシーに飛び乗った。

彼の家はいつものとおりに
私を迎えてくれてるように思えた。

シャッターのカギがかかっている
インターフォンを鳴らしても音が鳴らない。

「先生！！先生いますか！？」私は郵便受けから声をあげた。

裏がわのリビングの窓から
背伸びをしてのぞいた。

真っ暗な部屋の中 そこに彼がいないことを物語る。

まさか…

私が必死に背伸びをしていると
後側から一瞬車のライトが差し込んできた。

見慣れた家具たちはここにいた。

「よかった…帰ってくる……」

安堵感で座りこんだ。

玄関に戻ってポーチの中で膝を抱えた。

美しい星空を眺めていた。
流れ星を絶対見つけてやる

そして願うんだ

ずっと彼と一緒にいられますようにって……

「おじょうさん…おじょうさん」

「あ……」外は明るくなっていた。

「あ……この人待ってたから……」結局流れ星も彼にも会えなかった。

頭を殴られた気持ちになった。

717

「集金に行ったらもう越すからって言われたよ。」

「だって…家具とかあるし…」

「家具つきで家を売るんだって。
世間話してたから……。」

「そ…そんな……」

お婆さんはそう言うのと去っていった。

嘘よ……。

学校に行った。

見慣れた制服がたくさん歩いていた。

いつから私はここの風景から除外されたんだろう。

「めぐ？」ふり向くと友人達に囲まれた学がいた。

「悪い先行ってて。」そう言うと 友人たちはニヤニヤしながら歩いて行った。

「入院してるって聞いたけど？」

「ね…溝端先生って……。」

「先週かな…いきなりやめたんだよ。」

ねえちゃんの担任だったから 大騒ぎだったよ。

なんか外国に行くって言ってたけど…なんか問題起こしたとか噂になってたけど いい先生だったからショックだったみたいだよ。」

「外国って……。」

地面に涙のしずくが落ちた。

「陽之介ええ……」私は顔を覆って地面に座りこんだ。

私の命と同じくらい大事な存在だった。

心が片方 えぐりとられたまま捨てられた気がした。

彼の存在 五話

学校から連絡を受けた両親が職員室に迎えに来た。

「恵美・・・もう心配させないで。」
母の声がしらしらしく聞こえる。

「先生・・・やめさせたのね……。」母の顔を見ずに自分の足元を見ていた。

「やめさせたって・・・自分から辞職したらしいわよ。
校長先生……」

「はい……」

「溝端先生は前からそう言ってたんですわよね？」

「小山内・・・溝端先生は前からそう言ってたんだよ。
私たちがお願いしてこの三年生を卒業させるまで待ってほしいと

それで本当はもう少しいてほしかったんだけど
後任に優秀な先生が来てくれて

バトンタッチしていったんだよ。」

校長が言う事を信じるわけがない。

「先生まで嘘つかないでください。」

「今年の卒業式が終わった時に一度辞表を受け取ったんだけど
三年にあがる先生が急きょ妊娠で担任もてなくなって
なんとか頼みこんだんだよ。」

校長がさし出した手紙には

彼の名前と三月の日付が書いてあった。

「どこに行ったんですか？」

「本人の話によると 海外協力隊にはいったので
そこで貧しい子供たちに勉強を教えてやりたいと
話してくれただけだが……はつきりとはわからない。」

海外って……

「どっちにしても：ママたちが
先生を追い詰めて早くやめさせたんでしょ。」

私は誰かを憎まなければ生きて行けそうなかった。

「いいじゃない
別にあなたに関係ないんだし……」

「うるさい……うるさい……」

私はそこらにあったプリントをまき散らした。

「彼がいないと生きていけないって言ったら？」
私は母をじーっと見つめた。

「ちょ…何言ってるの…まさかあなたまで…」

「私は彼を愛してる。」

私は彼がいないと生きていけないって言ったの。
わかる？おねえちゃんじゃない私よ！！！！」

「気でも狂ったの？」

「よくも…私から彼を奪ったわね。
絶対に許さないから…」

不思議にもう涙は出なかった。

私は半分魂が抜けだしたようにぼーっとなった。

「もう…どーなったってかわわない…。
この世界に彼がいらないなら…もうどーだっていいから…」

私はその日から 魂が半分抜け出て
その半分が彼を探す旅に出かけてしまった。

彼を連れてきて・・・

彼を見つけてきて

そしてこんなに愛してるって伝えてきて……

小山内 恵美 は この日を境に 死んだ……………。

彼が抱きしめてくれるまで・・・
白雪姫やシンデレラや眠れる森の美女や

彼が私を見つけて抱きしめてくれるまで……………

もう誰も愛さない・
・
・
・
・
・
・
○

彼の存在 六話

それからしばらくして私は学校に戻った。

彼のいない学校には 何の思い入れもなかったけど
でも彼のいた形跡を探しながら
私は視界に彼の姿を想像する。

顔が思い出せなくて
スーツ姿の後姿を殺風景な視界の中に想像した。

「めぐ？聞いてる？」 志摩ちゃんに背中を叩かれた。

「え？..ごめん..」

「最近変だよ.....。それでね学とはどうなったの？」

「学？..ううん..あれからそんなに話してないかな..」

「うちの彼が言ってたよ。」

学はかなり本気だって……」志摩ちゃんに彼氏ができた。

「うれしいけど…今はちょっと重いかな……」

「贅沢ね～みんな王子と付きあいたいのに……」

学にも早く違う恋を見つけてほしい
私には今 重すぎるから

「なんか～軽い恋がしたいな～
一回きりでいいの……全部忘れられるような恋
自分が自分じゃなくなるような軽い恋がしたい～」

「軽い恋??? ずい分わかんないこと言うのね～
めぐって大人ね～」志摩ちゃんがどついた。

そう……

その瞬間だけ 彼を忘れられるなら

でも彼のことは一瞬忘れるだけで
またずっとこうして彼を想うだけでいい時間を過ごして

でも辛くなったら
他の男にすがるんだ……。

志摩ちゃんが言ったように
大人の恋すぎるかな

そんな毎日が過ぎていく

会えなければ会えないほど
彼への気持ちで心がいっぱいになっていく……。

どうしてるの？

あなたもこの星空を見えますか？

私を思い出してくれますか？

まだ私の半分の心は彼を見つけてはいない……。

あれからおねえちゃんの部屋にはいらなかった。

仏壇も素通りした。

親とも必要以外の会話をしなかった。

初音さんとちょっと会話する程度

休みの日は自分の声がどんな声か忘れてしまう……。

だけど…それでよかった……。

彼に会えないなら……このまま忘れ去られて雪に埋まってしまいた
と思った。

彼の存在 七話

「大学受けるんでしょ？」

「受けない……。」

「何言ってるの？先生からも国立行けるって教育大もだいじょうぶだって言われてるのよ。やることないなら先生になるって言ってたでしょう？」

母の言葉にいちいちムカついた。

「モンスターな親に潰されるから教職には魅力感じない……。就職するかな……。」

「バカ：なことを今こんな時代に高卒でどこの一流企業が取ってくれんの？うちの会社にだって傷がつくわよ。」

「見栄っ張りだね。だからおねえちゃんの子供のことも

かくしちゃったんだろーけど〜」

「恵美いい加減なと言わないでよ。
どこに子供なんているの？」

「ママたちのくだらない偏見に殺されたんでしょ…
おねえちゃんも赤ちゃんも…」

「あの男が言ってたの？」

「さ〜〜ね〜〜どーせもういないし〜」

「恵美…いつからそんな子になっちゃったの？
いい子だった恵美に戻ってよ……。」「

「戻るわけないよ。」

「ママたちは私の大事な人を奪ったんだから…」

「めぐ・・・・・・・・」

あの男は…千夏のことを愛してるのよ？

もしあなたに近づいたとしたらそれはあなたが

千夏によく似てるから…千夏の面影をあなたに見てるだけよ。
目を覚まさない。」

「ママだってそうじゃない……」

一度だって恵美だと思ってないじゃん

おねえちゃんを私にして……私はおねえちゃんじゃない
それを押しつけてんのはママでしょ？

彼は正直に言ってくれたもん

千夏以外を愛さないって……！！

そっちのほうが千倍正直でしょ！？」

私はそのまま家を飛び出した。

外はまた白い世界になっている。

私を雪で隠して下さい……………。

そして春になるまで隠してくれたら……………。

こんなに辛くないのに

凍える夜は彼のぬくもりを思い出してしまうの・・・・・・・・。

冷たい雪は彼の唇を思い出す。

重ねるごとに私の熱さで解けていく唇・・・・・・・・

「抱いて・・・・・・・・」

私は雪の中に大の字になって倒れ込んだ。

彼の存在 八話

「酔っ払いか？」

私が大の字で寝てると声がして慌てて起き上がった。

「なんだ…ガキか…」

ホストクラブの男の人みたいな

茶髪のツンツンヘアー

多分私よりは ちよっと年上で…遊んでるタイプに見えた。

私は雪をほろいながら…罰が悪い気がして
小走りで走り出そうとした。

「ちょ…ほら……」

コンビニの袋から湯気の立った物を出した。

「肉まん食う？」

私は首を振った。

「ほら…遠慮すんな。」口につけたから

「あっつい!!」と言った。

男はゲラゲラ笑って

「めっちゃうまいぞ〜食っていいぞ〜」と言った。

その流れに私は口を開けて一口肉まんをかじった。

「ホワ・・ホワ…あっつ〜う〜」

私は口から湯気を出してあふあふしていた。

「うめーだろ〜後は俺んだからな〜」
そう言う男は歩き出した。

「ごちそーさま」

男は手を上げて去っていった。

おもしろい奴だな〜

男の姿を見送りながら…なんだかイライラが吹っ飛んだ気がして私も家に戻った。

肉まん美味しかったな……

あんまりコンビニとか行かないから……
正直言うと 初めて食べたような気がした。

次の日 学校の帰り道 家のそばのコンビニに初めて入った。

肉まん…肉まん…

レジ行って

「肉まん ひとつ下さい。」と言った。

「はい。」元気な声の店員が

「肉まん好物だったのけ？」と言った。

驚いて顔を上げたら 昨日の茶髪の男が肉まんをとりだしていた。

「あー！昨日の・・・」私も思わず声を上げた。

「よ…酔っ払い」

「違うから……頭冷やしてたの。」

「そっか……うちの肉まんめっちゃ美味いぞ。」

「それで食べてみたくなったの。
一つ全部ね。」

「あ…そっ…百円なり……い……」

おもしろい奴だ…私はそう思った。

彼の存在 九話

「俺さゝここもう少しで終わるから待っというてゝ
そんなとき肉まんやるからさゝゝ」

私もまだ男と話したい気分だったから
立ち読みをしながら男が終わる時間まで待っていた。

外の窓ガラスをトントンとして男が外に立っていた。

いつの間に・・・

「ほら…肉まんゝゝ」

男が肉まんを差し出した。

「ありがとう…」

私は袋から湯気の立った肉まんをとりだすと
男はすでに自分の肉まんにかぶりついていた。

「腹へってたんだゝゝあ生きかえるぜゝ」

「ここで働いてんの？」

「ここだけじゃねーぞーこれから着替えて夜の街へくりだすんだぜ」

「ホストしてんでしょ？」

「なぜわかった？」男の様子がおかしくて私は笑った。

「なんかドラマで見たのと同じ感じだから」

「マジ??俺もいたについてきたんだにや」

男の名前は

クリスと言った。

「クリスマス？ってさっき名札に栗島って書いてあったよ。」

「気にすんな」

「おもしろい奴だね」 ひさしぶりに笑った。

「気軽に笑うなよ俺はホストでもNO1かNO2を争う男だからな。」

「こうやって一緒にいてやるだけでも金かかるんだぞ」

「へへホントに」

そう話してる間に家が見えてきた。

「あ・・・うちそこだから」

「えっどこ？」

私が指をさすとクリスは目を丸くした。

「あの豪邸のおじょうさまなん？べっくりしたな〜」
大げさに驚いた。

「豪邸に見えるだけよ。
中なんてクソだから〜」

「クソって可愛い顔して言うなよ〜」クリスが胸をおさえた。

「おもしろい人〜
ひさしぶりに笑わせてもらったよ。」私は笑いすぎた目を拭いた。

「また会いにこい。コンビニは月火金日の一時から五時までだから
な〜」

クリスはそう言うと言と足早に去っていった。

クリスカ……

なぜだかまた会いたいて思わせるヤツだと思った。

その出会いが私を大きく変えていくとも知らずに……。

彼の存在 十話

私は磁石に吸いつけられるようにクリスと接近していった。

クリスとの時間は 彼との辛い別れを
少しだけ忘れて思いっきり笑えて

心が癒されていった。

軽い恋がしたい

クリスはうちの近くのアパートで一人暮らしをしていた。

家具だって布団と洋服くらいしかない
貧しい暮らしだった。

大した温かくならないストーブ

それでもクリスといったら笑ってばかりいれた。

その夜はめっちゃめっちゃ寒かった。

「ストーブ温かくないね」

「こいつに期待かけたらいけないぞ」
過度な期待はこいつらをダメにする。」

「ブツ……」私は飲んでいたコーヒーを吹き出した。

「こら娘っ子」そう言うとき、きんを持ってきて飛び散った
コーヒーをふいてくれた。

「寒いか？」 クリスが私を見た。

「うん……体も心も寒いんだ……。」

「心もか？ じゃあストーブでなんか温かくなねーよ。」

そう言うとき私を抱きしめた。

「心が寒い時は抱き合うのが一番だって……」

クリスの言葉に反論はしなかった。

もしかしたら…クリスなら忘れさせてくれる？

一瞬でいいの

この辛いここが……少しでも解放されるなら

もう彼以外愛さないけど

寂しくて仕方がない 満たされなくて震えてる。

「言っとくけどボランティアだぞ。
俺に惚れるなよ。わかってんな？」

「わかってるよ」 クリスは仕事柄彼女は作らない主義だと言っていた。

「だけど…おまえは特別だ……。
なんでそんなに悲しい顔してんだ？」

抱きしめられて…私はクリスに

「愛する人がどこかに行ってしまったの。

私の心が半分彼を探しに出て行ってるから…悲しくなるのかな…
…。

私も彼しか愛さない…。」

クリスの手が私の髪の毛を撫ぜた。

「だけど…寂しくて虚しくて切ないんだ…。」

「うん…彼のこと考えてるのが辛くなる時があるの。」

「忘れたって…思ってるんだ？」

「忘れる？違うんだよね…。」

彼を想っている自分が好きなの。だけど一瞬だけでいいから
その辛さから解放されたいとも思ってる。

その瞬間だけでいいの…。

クリスと一緒にいると…笑ってる時だけ
彼を忘れている…。」

「お役にたってるんだ。
指名料いただきますか……………」

そう言うのと私の耳たぶを優しく噛んだ。

「ア…」思わず甘い声で体をよじった。

クリスはしばらく私の耳を攻撃して私はその何とも言えないくすぐったさに身をよじっていた。

彼以外の男にこうされても…私は感じてる…
淫乱な女…耳たぶだけじゃ…

そう考えているとクリスの唇が私の唇に触れた。

熱い唇だった。

彼の冷たい唇とは真逆で熱くて燃えるようだった。

「俺が忘れさせてやるから…………おまえの心ん中俺だけにしてやる。」

寒い部屋で温かいところは
クリスのベットの中心だった。

裸で抱き合えば クリスの熱い体温に私の冷えた体はすぐに熱くな
った。

陽之介……

興奮の中で私は混乱した。

彼の名前を心の中で 何度も呼んだ……。

彼を呼ぶほど 快感が押し寄せてきて……私を酔わせる。

「俺の名前を……呼べ……」 吐息が私の耳を刺激した。

「ン……?……」

「俺の名前は……すすむ……進だ……」。

じゃねーとおまえ……解放されねーぞ……。
目を開けろ……。今……おまえを抱いてんのは俺だから……。」

私は薄目を開けて　そして大きく目を開いた。

「進……？」　彼じゃない男を　そう呼んでみた。

「これからは俺の名前を呼べ……
じゃねーとおまえ……余計悲しくなるんだぞ……。」

進の体が私を引っ張って高いところに連れていく……

「一緒に……おちるぞ……」

そう言うときまた私に大きな波が押し寄せて
その波の中で私は彼じゃない男の名前を呼んだ。

「すす……ア……進……」

何度も何度も 違う名前を呼んで
解放されていく……。

陽之介を……愛してる……

その心が 一瞬だけ……進に入れ替わっていく……残された半分の
心が……

違う男を受け入れていく……。

そして私は……堕ちていった……。

灰色の空 一話

この天井を見るのは…二回目だった。

また…ここにいる…懲りないよな…。

「目覚めましたか？」

不思議な感覚だった麻酔がさめる時…
現実に戻る瞬間

灰色の空に見えるこの現実が私を空虚な世界に呼び戻した。

「誰かお迎えは？」

「…いいえ…一人で帰ります…。」

「じゃあもう少し休んだら受付で会計とお薬もらって行って下さいね。」

部屋には誰もいなくなった。

私はまだぼんやりとしてる感覚の中で お腹に手をあてた。

「ごめんね……。 」

涙が流れて枕を濡らした。

「もう…消えてなくなっちゃえばいい……。 」

彼を探しに行った半分の心はいつまでたっても戻らない。

残された半分の心は自暴自棄になって
体も心もボロボロになっていった。

「小山内さん……。 」

私が目を開けると 白衣を着たお医者が立っていた。

「これ以上 こういうことが短期間の間に続いたら…一生涯が

産めなくなるかもしれないよ。

ちゃんと相手の人に話して避妊をしてもらいなさい。
それがダメなら別れなさい。

きみにとって…知らない人間だと思いなさい。」

「はい……………」

二回目だった。

私は半年前にも一度 中絶手術を受けた。

そして今日また二回目の手術が終わった。

「まだ若いんだから……………」

男は一人じゃないんだよ。

ちゃんと責任のとれる男を探しなさい。」

わかってるって……

だって進は 私の一番愛するべき男じゃなくて……

空虚感を埋めてくれる存在でしかなかった。

それでも…私は進と別れられずに同じ過ちを繰り返している。

手術代は 進がブツブツいいながら用意した。

「妊娠しないようにおまえが気をつけろや。
もう今回だけだからな。」

朝 私にお金を渡してベットに入って寝てしまった。

情けなかった……。

だけでももうどうでもいいと思った。

こんな人生 どーなったっていい……。

進路先も未定のまま 私は卒業を来月に控えていた。

うるさく言っていた両親はいつしか何も言わなくなった。

本当に捨てられたんだ……

豪邸の中で孤独になった私はそう悟った。

千夏は死んでいるのに 生きていて
恵美は生きているのに 死んでいた

なんだか自分の人生が滑稽で 笑える……。

進が自分を愛していないのはわかっていて。
だから……進と別れられない……。

愛を彼以外の男と囁き合うのは考えられなかったから

自分を愛してない進とする 軽い恋の代賞が大きくなっていても

一人でいるよりはよかった。

「俺は特別を作らない。」進の生き方も嫌いじゃない……。

私と進は似ていると思う……。

「私も特別を作らない……」彼以外の男を本気で愛することはないから……。

灰色の空 二話

「小山内…おまえどうするんだ？」

担任が言う言葉はいつも同じだった。

「何もしません……。」

卒業したら…どこかで雇ってくれるところで
仕事をして…それでいいです。」

「もったいないな。」

国立だっていけるんだぞ？

就職の方がおまえには難しいぞ。」

「先生…私は若いんだから……」

今しかできない仕事だってあるし…

大丈夫ですって」

「小山内……。」

おまえ自分を大事にしろよ。」

「ありがとう…先生……。
でも…いいんです。

こんなできそこないの人間は…高望したら失望するだけです。」

「小山内…おまえはできそこないなんかじゃないだろう？」

「死んだ人間にも勝てない……
できそこないです。

誰にも愛されないし…誰も愛しません。」

担任は困った顔をした。

「いつも気にかけてくれて先生……
ありがとうございました。」

私は頭を下げた。

志摩ちゃんも私立の大学に推薦で決まっていた。

彼氏も一緒に大学でとても喜んでいた。

私は自分が哀れだったから
志摩ちゃんの純愛を見ながら心を癒していた。

「めぐ……私ね……途中から
めぐのことわからなくなったの……。」

「途中？」

「中学の頃 クラスは別だったけど私 めぐと
友達になりたいってずっと思っていたの。
高校に行って同じクラスで嬉しかったけど……途中でめぐが
急に大人になっちゃって……ついて行けなくなった。
だって何も話してくれなかったから……寂しかったよ。」

私は志摩ちゃんを抱きしめた。

「私は志摩ちゃんが大好きだよ。
今は志摩ちゃんを見てると心が和むの……。
好きな人のことで 喜んだり泣いたり 志摩ちゃんは輝いてるよ。」

「私はめぐが心配なの。」

相変わらず何も話してくれないし……

どんどん遠くに行ってしまうようで……本当に心配だよ。」

「ありがと……心配してくれて……

志摩ちゃんだけだよ……。」

「何言ってるの。私の彼氏だって真紀子だって美和だって……王子だって……みんなめぐを心配してるんだよ。」

「そっか……。」

ありがと……。」みんなにもお礼言わなきゃ……」

「お礼なんか……友達じゃん……。」

めぐにも幸せになってほしいのに……。」

めぐが本当に悲しそうに見えて……心配なの……。」

私は志摩ちゃんのシャンプーの香りがする

髪の毛に口づけした。

「志摩ちゃんの幸せ見てたら私も幸せな気分になるよ。」

「めぐだって幸せになる権利あるんだからね……。」

私は志摩ちゃんを抱きしめた。

「幸せになる…権利か……。」

他の人とは決してつかめない
私の権利……。

彼が消えて 私空は灰色に変わった。

時が過ぎて 私は自分で自分をボロボロにしていた。

彼がいなくなって私はあの日 死んだんだ……。。

心が半分なくなって……

彼を追いかけていなくなったキレイな心を待ち続けて

私はどんどん汚れていく。

進がホストで稼ぎが増えて 中央区のマンションに越すことになった。

卒業したら私もそこに住むつもりでいた。

そして就職先はもう 進が決めてきてくれた。

「そのオーナーは俺のいいお客なんだよな
おまえはいい女だから絶対もうかるぞ」

「じゃあそこでいいわ。」何も詳しい話も聞かずに就職先に決めた。

金をたくさん稼いで…自立する……。

それには手段は選ばない。

私は夜の世界に身を任すつもりでいた。

進が店の客と どんなことを店を出てしているのかは
想像はついたけど それもどうでもよかった。

他の女を抱いた体で 私を抱いても

その時だけ夢中になれるならそれでいい……。

穴のあいた心を 進が忘れさせてくれた……。

誰でもいいんだ……

愛を望まない男がいい……………私はそう思った。

灰色の空 三話

ひさしぶりに卒業式の練習のために登校した。

もうこの制服を着るのが数回なんだと思うと
三年間の愛着がこみあげた。

入学式の日

彼と再会して私は運命のように恋に落ち

彼と甘い時間を過ごして

そして真実を知って

その恋は悲しく切ない恋に変わっていった。

彼を知れば知るほど私の愛は燃えて・・・・・・・・

彼を愛せば愛すほど

自分の無力さに傷ついてゆく

きっと私は彼を愛するだけのために生まれて
彼を救うために生きている

そんな気がした。

この風景から彼を失って

私は生きる意味を失くしてしまった。

彼がない人生は私にとっては輝きを忘れた原石にしかすぎず
偽りの輝きを求めて

目をつぶると彼に抱かれている錯覚を覚えた・・・。

進はそんな私に気がついて
自分の名前を呼ばせ続けた。

「俺のこと好きになるなよ。」そう言いながら
私を支配したい進の勝手さも
私の心が冷えていればそれはそれで可愛いと思えた。

進の中で私の存在は

好きになられてはウザイけど
好きになってほしい

そんな存在なような気がする。

ここに愛がある？

ときかれれば・・・

私自身が進を求めている意味は愛ではなく

愛の代用なんだと思う。

「お互いに都合のいい存在」私はそう答える。

ただ男と違い女の体は複雑だった。

私を抱く時 絶対に避妊をしない進に 妊娠に怯える私
そのしほりつけられる感情が情けなくなった。

避妊をしないこだわりは

私を所有物として進が見ていることを意味した。

病院の先生に勧められてピルを飲み始めて

自分の体は自分で守るしかないと教えられた。

そんなめまぐるしく自分が変わっていった三年間だった。

これから私はもっと灰色の空の下で生きていくんだろう・・・

愛のない出会いを繰り返して

失望と絶望に脱落していくんだよ・・・

どうせ彼にもう二度と会えないなら・・・

彼以外の人を愛したくないから

灰色の空で生きていく方がお似合いだと思う。

灰色の空 四話

「小山内さん」

山岸先生が私を呼んだのは卒業式の朝だった。

私はかなり早く学校に登校して彼がいた風景を
確認して歩いていた。

「おはようございます。」先生とは話す機会がまったくなくて
本当に久しぶりだった。

「卒業だね…。」

「はい…。」

「私もね…今日卒業なの…学校辞めることになったから。」

「え? どうしてですか?」私はスーツ姿の美しい先生を見つめた。

「結婚することになって 東京に越すことにしたの。」

「結婚？」

山岸先生だってもうかなり適齢期を過ぎてるから そんなに驚くことではないけど

「いろいろやっとな ふっきれたし・・・

もうそろそろ自分の人生幸せになるための努力をしようかと思ってね：ずっとプロポーズされてた人について行くことに決めたんだ。」

彼を・・・忘れるんだ・・・。

「そうですか。

おめでとうございます。」

先生はいいな・・・

軌道修正できるんだから

「好きな人がいたの：。年甲斐もなくずっとここに来てからずっと好きだったの。勇気を出して告白して

付き合いだして・・・だけど好きになるのは私だけで彼はいつまでたっても私を本気で愛してくれなかった。

それでもいいって・・・思ってた・・・だって

彼以外の人を愛せなかったから・・・。」

なんで私にそんな話するのか・・・

「彼の過去を知って仕方がないことだってわかった。

だから・・・自分は二番目でもいい

生きて彼を抱きしめていればきつといつか彼の心の氷はとけるって
信じていたから・・・都合のいい女でいることにした。

会えば情熱的に愛してくれたし・・・

その時だけは彼は私のものだって思わせてくれたけど・・・

錯覚だったみたい・・・。」

「錯覚？」

「うん。悲しいけど彼の心の中に芽生えた葛藤の中にいるのは
私じゃなかったんだよね。

それを知った時虚しくなった。

私が彼を解放してあげる存在だと思ってたのに・・・

そうじゃなかったみたい。

彼が去る時 私は忘れる努力をすることを誓ったの。

彼は優しく抱きしめてくれた・・・。

もう・・・それだけでいいって・・・思うようになってきたの。」

「彼って…溝端先生ですよ。」

「うん……。」

あなたのおねえさんなんですってね……。

彼の永遠の人は……。

もういない人に叶わないなんてこんなに愛してるのに
なんて無力なんだろうって情けなかったわ。」

私と先生の気持ちは同じ

「やっと…歩き出すわ……。」

彼もきつと喜んでくれているはず……。」

「よかったですね。」

そんな簡単に答えが見つかって…何よりです。
ちよつと嫌味な言い方をしてしまった。

「あなたは…彼を待つの？」先生の言葉に心臓がとまりかけた。

「え？」

「きっと私とあなたは同じことで悩んできたんじゃないかなって……
今もきつと……まだトンネルの中にいるんでしょうね……。」

先生の笑顔は美しかった。

「自分を愛してくれる人に人生を預けて見るのもいいと思うわ。」

「アドバイスありがとうございます。」

「自分を大切にしてあげてね。」

先生は解放された美しさの中で微笑んだ。

私が行こうとしたら

「小山内さん……」ともう一度声をかけた。

「はい……?」

「彼の葛藤の中にいたのは…私じゃなくて
あなただって知った時は 憎らしかったわ。
だからあなたのまえでわざとに彼に甘えたり…寄り添ったりしたの。
いい年して…本当にごめんなさいね。」

そう言って廊下を歩いていった。

灰色の空 五話

卒業式中ずっと山岸先生の言ったことを考えてた。

彼の葛藤の中にいたのは私？

葛藤って……何？

私をもっと彼を守っていれば
この風景の中に彼はいた…。

もし彼がいたら 私はどんな気持ちでこの日を迎えたんだろう。

明日から……

私は 夜の世界にと身をゆだねる。

これからの人生に何も希望はないけれど
もし今彼がいたら私の人生には少しは希望が持てたんじゃないか

彼がみている緊張感で

おねえちゃんに負けたくないプライドで

いつか…彼が私を抱きしめてくれるという期待感で

もっとマシな毎日で希望を持っていたのかもしれない……。

みんなが涙していたけど 私には涙はなかった。

「めぐ……」

帰ろうとしていた私を 学が呼びとめた。

学は本州の大学に決まったようだった。

「ありがとな……。」

「ん？何が？」

「俺はおまえに恥ずかしくない男でいたいって…頑張ってた。この三年間 おまえのおかげで自分が成長したかもしれない。だけど…俺はおまえに何もしてあげられなかった。」

「そんなことないよ。」

私こそ…ごめんなさい。

学の気持ちに答えられなくて……。」

「幸せに・・・なれよ。」

心配なんだ…。めぐは人生投げたしまってるようで……。」

「ありがとう……。」

学も…いい恋を見つけて…幸せになってね。」

「めぐ…こんなこと頼んで軽蔑されるかもしれないけど
最後に…一度だけキスしてほしい……。」

俺の恋の終わりの日だから……。」

学の顔が真っ赤になっていた。

かわいい……

私にとってキスなんて簡単なことだった。
なんなら体だって……。

だけど学は 私を愛してくれてるから
怖くてそこまではできない。

学にとってキスも大切な思い出になる行為だろうから

空き教室に学を引っ張って

私は久しぶりに重いキスをした。

心がガンガンとぶつかってくる愛のあるキス

感動する……

おどおどしたキスだった。

学はきつとまだキスには慣れていないんだろう

私はお礼のつもりで

学のキスのリードを始めた。

重いキスは……やっぱりいい……

心のあるキスは私を幸せにしてくれる……。

きつと今頃 学の頭は真っ白だろう……。

しばらくその感触を楽しんで 私は学から顔を離れた。

「ありがと学……何か一瞬でめっちゃ心が温かくなったよ……。」

学はボーツとした顔をしていた。

「心のあるキスって幸せな気分にしてくれるね。」

私は学の頬にもう一度キスをして

「じゃあね〜」と言った。

「あ……うん……ありがと……。」「
学の頬は真っ赤になっていた。

私は学校を振りかえった。

「一番幸せで……一番切なくて 一番苦しかった三年間だった……
さよなら……私……
少しの期間でも輝いてた私……」

ここにきたらきつと思ひ出させてね……。」

彼がいたこの風景を…………

辛い時にはまた見に来よう…………

卒業…………

いろんな意味で私は 今日卒業した。

灰色の空 六話

その日の夜 両親が戻って来ない間に
進が友達の車を借りて迎えにくることになっている。

私は

『自立してみます。』

走り書きしてテーブルにおいた。

自立か・・・

これを自立とは言わないよね。

おねえちゃんの好きなアイスバーグの花束を飾った。

しばらくここでおねえちゃんと話すこともなかったけど

「おねえちゃんの今頃は…幸せだったんだろうね。

愛する人との未来を想って 今頃ウキウキしてたんだよね。

お風呂に入ってたんだっけ？

私が読んじやったんだよね。こんたの手紙

きつとね…親にわざとに聞こえるように…読んだんだと思うわ。

私もきつと…おねえちゃんとかんたの

幸せを願ってはいなかったのかも…知れないね…。

あの時 私が無黙っておねえちゃんの手紙を

手渡していたら…うちの人生は全く違ふものになつてたのかもしれない。

運命を変えてしまつた悪魔は

パパやママじゃなくて…私だつたんだね…。」

私はおねえちゃんの遺影をしっかりと見つめた。

「もう…おねえちゃんにそっくりな妹も卒業する…。」

私は私…今行こうとしてる道が

間違つてても…もう…歩き出したから…。

小山内 恵美はもう…死んじゃうから…。

私の哀れな人生を見ててね…。

彼以外に私を救える人はいない…。

彼以外の人に幸せになんかしてもらいたくないから…。

パパとママをよろしくね。」

携帯が鳴つた。

進がついたとメールをしてきた。

贅沢なこの家とも　しばらくサヨナラだ。

簡単な洋服だけを持って

玄関のカギをかけてそして郵便受けに　カギを投げ込んだ。

「ばいばい……。」

この豪邸の私はいつも孤独だった。

おねえちゃんがなくなって…私はいつも一人で留守番をしていた。
家族旅行は　仏壇でおねえちゃんが一人になるからしない

それが小さい頃からのうちの約束事で
大きな家でそれなりにお金があっても
食事だって一人で　寝つく時も一人で…ひどい時は朝も一人だった。

でもそれでも愛されたいって思ってた。
おねえちゃんよりいい子にしてたらきつと
親に愛されるって信じて　頑張ってた。

言いなりになる私をいい子だって褒めてくれても
それでも…私は満足だった……。

いい子でいよう

それが恵美の生き方だったけど

彼に出会って…愛されたいって強く思った。

彼にも親にも一番に愛されたい・・・

だけど……

私は愛されなかった…………。

愛してほしい人に 愛してもらえない人生だった…………。

進が助手席のドアを開けた。

「行くぞ。」

車が動き出した…………。

きっと間違っているだろう人生に向かって…………。

そこで待つ人生がきつと私を誰でもない私に変えてくれると信じて…………。

灰色の空 七話

「頭いて……………」

朝 必ず私はそう言いながらベットの中から出てくる。

「飲みすぎ……………」

髪の毛をグシャグシャにして鎮痛剤を飲む。

「もう…この薬も効かないな……………」

頭痛薬はこれで何回違うのんだか……………」

タバコに火をつけて
キッチン換気扇のスイッチをつけた。

「フーーーーーッ……………」 灰色の煙を口と鼻から出した。

「昨日の客は最悪だったよね。」

よく耐えたよ……。でもまあ…あのクソツタレも金だからね」

タバコとコーヒーを飲み 新聞を三誌
タバコをくわえながら隅から隅まで読む。

いろんな客がくるから 会話を合わせるのに
新聞を読むのが一番いい。

それからファッション雑誌を読みながら
手帳を出して

今夜同伴してくれそうな客を探す。

私は21歳になっていた。

この仕事も何とか慣れて お客もたくさんついてきた。
進の引越したマンションは 外国に住むパトロンの部屋だったから
長居はできないから大変だった。

店のオーナーに前借させてもらって

なんとか小さなボロアパートを契約してそれから必死に働いた。

そして今では小さいけど

なんとか2LDKのマンションを借りれるくらいの給料をもらえるようになった。

仕事はむいてると思った。

お酒を飲んで 騒いで たまにおさわりされて

それでもキャハキャハと可愛く笑ってればいいなんて

簡単なもんじゃない・・・・・・・・人からは蔑まされる仕事だけど

私はそうじゃない・・・・・・・・。

それなりにやりがいのある仕事だった。

進がのめりこむのもわかる気がした。

進はそんなイケメンとかじゃないけど トークが女を引きつける。
だからやっぱり新聞だけは真剣に読んでいた。

私と進の関係も続いていた。

お互い距離を持った付き合いだったけど……

進も束縛を嫌うから

束縛しない私は都合のいい女だった。

そして私自身も 特別な存在を作らないというのが
進には安心できたのかもしれない。

お互いの距離感と仕事を尊重して進とはいい関係だと思ってた。

何もかも…それなりにうまく進んでいた………。

灰色の空がたまに 青い空に見えることも増えたけど……

ある日進が 荷物を持って転がり込んできた。

「しばらく居させてくれ。」

灰色の空が……黒い空に変わりつつあった。

灰色の空 八話

進が部屋の客を激怒させて 追いだされてきた。
私の小さい城は
進が転がり込んだことで
とんでもないことになった。

「どうして？」

「ちょっと店の客に入れ混んじやって
パトロンの置いてあった宝石類を金にしちゃって……」

寝耳に水だった……

「え？ クリスらしくないことに……。」

クリスは新規で飛び込みで入ってきた若い女にらしくない好意を持
つたらしい

話を聞きながら私も複雑だった、
クリスが特別な存在を作ったことや
掟やぶりを犯してしまったことも……。

そしてその女はまたとんでもない女だった。

最近来ないと思ってたら

そういうことだったのか……。

「まいったな……もんすごく怒り狂ってさ……

店のオーナーにも圧力かけて……

俺クビになっちまったし……。」

「クビ？　なんでまた……そんな……」

「めぐぐぐ頼むぐぐ金貸してよ。」

「え！？　そんな……私だって貸せるようなもんじゃないし……」

「オーナーに前借してたからそれ返さないと……

他の店でも働けないし……。めぐ金あんだろ？

実家だって金持ちだしさ……。」

「実家はもう関係ない。やめてくれる？
うちをあてにすんの。」私は頭に来て強く言い返した。

進は私を押し倒して

「めぐしか頼れないんだって……。
すぐ他のところ探して 金返すからさ……あ
フロンティアの杏樹さんはかなり稼いでいるだろう？
俺の貸してほしい金なんて
簡単だろ？頼むよ……ほんと……困ってんだ……。」

耳元でささやく

耳たぶを甘く噛みながら 唇は移動していく……。

「知らないって……アン……イヤ……」
私の体を知りつくした進の攻撃は執拗で
切羽つまってるのを物語ってた。

いつも以上のテクニックに私を酔わせて

「めぐしかいないんだよ……」と言い続ける。

お金はなんとかできる額だった。

その金を持って進は部屋を出ていった。

進ならすぐに返してもらえらるだろう……
なんて考えが甘いことに気がついたのは　それからまた
しばらくしてからだった。

しばらく戻って来なかった進が
顔中腫らして戻ってきた。

「ちょ…ちょっと……。」

「めぐ………金貸してよ……。」

進が墮落し始めていった。

「また？　なんで？　もう無理だから……。
仕事見つけたんじゃないの？」

「まえのオーナーに潰されまくっててさ……」

「だって…前借分は返したんでしょ？」

「めぐ…頼むよ……。
俺…殺されちゃうよ…」

情けなく進が泣きだした。

私は全身の力が　一気になくなって茫然と進を見るしかなかった。

灰色の空 九話

まとまった金を渡すと 進は帰ってこなくなる。
断りきれずにもうずいぶん進に貸してしまった。

私はフロンティアと言う店で 杏樹という名で働いていた。

そのオーナーを進から紹介されて
ずいぶん世話になっていた。

引き抜きは何度も来てるけれど オーナーに恩もあって
それにこの店が けっこう好きだった。

「杏樹ちよつといいか・・・？」

ある日 オーナーに呼ばれた。

「クリスはどうしてる？」

「最近 帰ってきませんけど……。」

「ちょっと聞いた話だが…かなり金に困ってる様子だとか
おまえも貸しているのか？」

「あ…はい…もう150万くらいになります……。」

オーナーが頭を抱えた。

「バカだな……。」

あいつ悪い女にひっかかってるみたいだぞ。」

「客ですよね……。」

「クリスのいたホストクラブのオーナーからも聞いたが店にもかなりの借金とか同僚ホストからも借金してる様子だぞ。」

「店？オーナーに前借した分を返すって最初にお金を貸したんだけど……。」

「女に貢いでるらしい……。」

女のバックには……ちょっとヤバいのがついていてかなり街金とかにも借金しまくってる様子だぞ。

杏樹…もうクリスは終わりだから

しっかり断った方がいいぞ。」

私もおかしいとは思っていたんだ……。

それから半月した頃
仕事から帰ると 進の靴があった。

私は背筋に冷たさを感じながら 部屋に入っていくと
部屋の中がめっちゃめっちゃになっていた。

「キャ~~~~」私が悲鳴をあげると
進が飛んできて

「ごめん……ごめん……探し物してたんだって……。
こんなに散らかすつもり……なかったんだけど……
ね……めぐ……金貸してよ……。」

半分座った目が私を恐怖感でいっぱいにした。

「もう無理だから……150も貸したのよ？
いつかえしてくれんの？」

私が言うと進は案の定 狂ったように笑った。

不気味な笑いが部屋中に響き渡った。

「金ないと・・・殺されるよ・・・」

「どうして？ そんなことになっちゃったの？
何にお金つかってるの？
働いてないの？ 進は働くの好きだったじゃん……」

「おまえが俺をしつかり捕まえてないから
こんなことになったんだ。」

進は私を壁に押しやった。

恐怖感で体が震えた……………。

灰色の空 十話

「おまえさえ…俺をしつかり捕まえてくれれば…
おまえが全部悪いんだ……。」

「ちょっと…何言ってるの？なんで私が出てくるのよ……。」

「おまえが俺を愛さないからだ……。」

タバコと酒がまじった悪臭が進の口から出る。

「おまえが…愛してくれないから…寂しかったんだ……。」

「だっていつも言ってたじゃん？

束縛するな…俺に特別な女はいらないって……

勝手なこと言わないでよ…客とかと好き放題やって……。」

頬を打たれた。

「うっせんだよ……。」

おまえを抱く時　なんで俺が俺の名前を呼ばせんのかわかるか？

おまえは俺に抱かれながら他の男の名前を呼ぶんだ……

この屈辱おまえにはわかんねーだろーな……

おまえは夢中だからさ……。

他の男の名前を言いかけて……

俺はそのたびに……その名前に嫉妬する。

これだけ何百回もおまえを抱いてんのに……おまえはいまだにその名前を……言いかけては俺の名前を呼ぶんだ……。

俺にだってプライドがあっからな……。」

進の膝が私の腹に入った。

「う……やめてよ……。」

「いつ俺を愛してくれんのかと……期待したけどよ……

おまえは俺を愛するのあの字もなく……

今度は仕事に没頭し始めて……本気にならないおまえは……

うまく客を転がして……あっという間に

俺よりずっと稼ぐようになったんだよな……。」

そして膝が腿に入って私はうずくまった。

「すす……やめてって……痛いから……。」

私は必死に進に訴える。

「全部……テメーのせいだ……

「テメーが俺の…俺のプライドも人生もめっちゃくちゃにしたんだ!!」

今度は頭の上に衝撃が走った。

それから私は進の暴力にさらされた。

最初は必死に手で自分を守ったけど…守ることもできないくらい体が心がズタズタになっていった。

最後は打たれても痛みさえ感じなかった。

地獄の時間が過ぎて やっと進が私から離れてテレビをつけた。

もう進は壊れてしまっている。

半分しか見えない視界が明るくなって

画面はニュースを読むアナウンサーが写っていた。

助けて…これ以上やられたら…死んじゃうよ……

しかしアナウンサーは非情に淡々とニュースを読んでいる。

次のニュースにうつったのは 海外の貧しい地で復興のために働く外国人の姿だった。

おめでたい人達ね…自分の国にもこうして死にかけてる奴がいるけどね

それからスタジオに絵が写った。

悲惨な貧しい国の現状をつたえながら
アナウンサーが声にした。

「溝端 陽之介さんにおこしいただきました。」

み…みぞばた…よ…う…のす…け…

愛おしい名前の響きに私は必死に閉じかけた目を開けた。

テレビにうつった

その人は真っ黒い顔をして眩しいくらい白い歯で笑っていた。

陽之介…？

その時 進がまた私の上に馬乗りになった。

殺される…

愛しい人の声を聞きながら 私は固く目を閉じた。

進はぐったりとしている私を裸にしていた。

「やだ…やめて……………」

テレビの中にいる愛する人の前で…こんな姿を見られたくない…
だけでもう体は自分では何もできないくらい
動かなくなっていた。

ただ悲しいことに哀れな快感だけは…私を別の世界に引き込んで行く

「やりがいのある毎日です。自分で選んだ道を
後悔はしていません……。これからもきつと……関わって生きてい
きたいです。」

彼の声を聞きながら…彼に抱かれている錯覚に陥った。

「愛してる……愛してる……ヨウ………」

そしてすべての動きがとまって恐ろしいくらいの静けさが
私を恐怖感に導いていく……。

次の瞬間に何が起こるのか……
これで私の人生は閉じられるのか……
どんな痛みを最後に感じるのか……

「おまえって…サイテーだな……。」「

恐ろしく低い声で進が言った。

テレビの音は天気予報に変わっていた……。

私は深呼吸をして 最後の時を待つ……。……。

進がキッチンナイフをちらつかせていた。

刺されるんだ……

最後に彼にもう一度だけ…会いたかったな……
でも…テレビで彼を見れたのは神様からの最後の贈り物だったのか
も……

目を閉じた・・・・・・・・

「ウッ！！！！」進の聲がしてその瞬間
生ぬるいものが体中にかかった。

え・・・・・・・・？

そして次の瞬間 進の体が私に覆いかぶさって来た。

血・・・・・・・・

「キャ~~~~ツ」

進はうめき声をあげながら苦しんでいる。

「すす・・・・進！？何したの！？」

「お…れ…だって…おまえを…ずっと愛して…いた…
おまえが…離れるのが…い…やで…ずっと…ずっと…嘘ついて…」

鼻先に感じる生臭さにはきそうになる

「進…!!病院…!!早く…どけて…」

「めぐ…あ…い…し…てる…」

まだ血が流れているのに
進は動かなくなってしまった。

助けて…

進の返り血を全身に浴びて 私は恐怖感でいっぱいになっていた。

「助けて…助けて…
死にたくない…彼に…会いたいのおお～～～」

私はそのまま気を失ってしまった。

さまよう心 一話

サイテーだな…

サイテーだな…

「やめて…やめて…」

恵美…恵美…

血で真っ赤に染まった進が馬乗りになっている

「やめて…ええ…!!!!」

恵美

「助けて…ええ…」

私の手を誰かが手握った。

「キャ~~~~ツツ~~~~!!!!」

目を見開いて 飛び込んできたのは私を覗き込む母だった。

「ママ……。」 私は驚いて母を見た。

「恵美……大丈夫よ……ママがいるから……。」

「あ……あ……進は…….?」

これは夢か……現実か……

悪夢があまりにおぞましくて……私はこれが夢なら絶対に寝ないと思った。

「どうしてママがいるの…….?」

「あなたずっと寝ていたのよ……。
よかった…このまま目を覚まさなかったら…私…どうしたら…って
…」

母は泣いていた。

「私……どうしたんだろう……。…」

父がオーナーと病室に入ってきた。

「パパ？オーナー……。？」

「目が覚めたのか……。？」　パパが駆け寄ってきた。

体を起こそうとして激痛で　体が動かなかった。

「い…イタツ………」

その痛みで私は　さっきの血だらけの進が現実なことに気がついた。

「オーナー！！！進は！？」

「忘れろ……。忘れるしかない……。。」

「血だらけだった……私の体に……。あ……。進の血が……
オーナー……進はどうしたの？」

オーナーは私の手をとって

「進は追いこまれてたんだ。
杏樹が……無事でよかったよ……。。」そう言った。

「進……。死んだの？」

「オーナーさんが気がついてくれなかったら
あなたはいつたいたくなってたのか……。。」

母が涙をぬぐった。

「明日のシフトの変更で電話したけれどでなかったから
杏樹は必ず電話に出る子だから
心配になって…スタッフと三人で杏樹の部屋に行ったんだ。
そしたら…鍵が開いてて…入ったら
血だらけの部屋で…俺は杏樹もダメだと思ってたんだ…。
救急隊員が息ありますって言ってくれて…ホッとしたんだ。」

「進は…死んだんだ…。」

私はあの惨劇を思い出して体が震えだした。

ガタガタ歯が鳴って

「あ…あ…あ…」言葉にならない…。

おまえってサイテーだな…

恐ろしい顔で私を見下ろした進の顔を思い出して私は
パニック状態になった。

「血・・・血・・・血が・・・」

飛び散って・・・私の・・・口の中も・・・血だらけで・・・
生臭くて・・・進が血だらけで・・・あ・・・あ
サイテーだって・・・」

「恵美！！大丈夫ママがいるから！！」

母が私を抱きしめた。
髪の毛を撫でて撫でて

「これからはママが・・・ママとパパと
あなたにちゃんとかけてあげなかった愛情をたくさん
かけてあげるから・・・守ってあげるから・・・」

「あ・・・どうしよう・・・
私のせいだって・・・私が・・・進を追いつめたって・・・
きっと私を恨んでるよ・・・どうしよう・・・」

進との惨劇が私をパニックにさせた。

目を閉じると血だらけの進が浮かび上がる。
その日から私は悪夢にうなされ

進から受けた暴力で内臓が損傷していることもわかった。

母はつきっきりで私に付き添ってくれた。

「ママ…私が眠くならないようにして……
寝るのが怖い……進が…進が…私を恨んでる……」

でも…眠気は私を襲い
そして恐ろしい夢を見せる……。

ついこの間まで見ていた
彼と再会する夢や空想も……今では悪夢にかき消される。

「ママ…助けて……」

誰か……助けて……

陽之介・・・・・・・・私を助けて・・・・・・・・。

もがいてももがいても 悪夢は私を襲い続け
その悪夢はいつの間にか おねえちゃんを殺したのも
おねえちゃんと彼の赤ちゃんを殺したのも……すべて私……だという
悪夢に
膨れ上がっていった。

私は激しく衰弱し始める・・・・・・・・。

さまよう心 二話

「やだ・・・先生・・・注射しないで・・・
寝たくないもん・・・やめて・・・。」

睡眠を怖がる私は

食事も取れずぐっすり眠ることもできず
精神的に追い詰められていた。

目の下には黒くかわったクマができて
寝ることが怖くて仕方がなかった。

「少しぐっすり眠りなさい……。」

「寝たくない…怖いから……。」

注射はそんな私をすぐに闇の中に引きずり込む。

悪夢が始まってでも薬で眠らされたら
どんなにあがいても夢からは逃れない

目が覚めて夢の内容を覚えてなくても
体全身の疲労感が

きつと悪夢におそわれていたことを教えてくれる。

このトラウマはいつまで続くんだろう

カウンセリングと精神的な治療を繰り返して
それでこのトラウマは私を解放してくれるのだろうか…

外科的な治療も住み
家からの通院に変わった。

たまには違う夢も見れるようにはなったけど
悪夢を見た朝は

全身にひどい汗をかいて
飛び起きて頬には冷や汗と涙の後が残っていた。

「助けてよおお………」

私は泣きわめいた。

それからしばらくしてオーナーが進の同僚を連れてきた。

私も何度か進を交えて会ったことのある顔だった。

「大丈夫ですか？」ヒロトは私の変わり果てた姿に一瞬驚いた顔をしたけれど、ホスト笑顔を作って私の横に座った。

「ヒロトは進のこと詳しく知ってたから

少しでも状況聞いた方が杏樹も気が楽になるんじゃないかと思って。」

「わざわざありがとう……。」

「大変でしたね…。

杏樹さんをこんな目に合わせて……

やっぱアイツ普通じゃなかったから……

いつものアイツだったら、こんなことに杏樹さんを

巻き込まなかったと思います。

杏樹さんのまえではアイツ誰よりも演技してたから……」

「演技？」

「かっこいい男を必死で演じてた……。」

嫌われたくない……めぐがいない人生なんて考えられないって……」

「じゃあ私の前にいた進はほんとの進じゃなかった？」

「ほんとのっていうか……」

必死で頑張ってた……杏樹さんとの距離を持つことを

俺だけのめぐにしたいという独占欲とか

俺だけを愛してほしいって言う願望を　アイツは必死に隠していた。

」

私は目を閉じてあの日

進が私に言ったことを思い出していた。

「愛してる……って最後に言った……」

「うん…その言葉を必死で隠していたから……」

「でも自分も束縛されたくないって言って 遊んでたよ……」

「それはその願望を埋めるためには仕方がなかった。

自分も辛くて杏樹さん以上に愛せる女を探してたんだと思う。

この辛さから逃げ出したい

そう言ってたから……」

私は進をそこまで追い詰めていたんだ。

「そんな時に出会ったのが 今回進がのめりこんだ女
杏樹さんに少し似てたんだ

初めて店に来た時 俺たちもそう思った。

瞳というその女に 進はきっと杏樹さんを重ねたんだと思う。

瞳はそんな進の心の隙に入りこんで

いいように進をコントロールしたんだと思う……。」

「警察の調べで 進から覚せい剤の反応も出たということで
その女の周辺を調べて 逮捕したらしい……」

オーナーが静かにそう言った。

「覚せい剤……」

「だからアイツを怖がらないでほしいんだ……。一番見せたくない姿を杏樹さんに見せてアイツほんとかわいそすぎる。

薬が…そしてアイツの鬱積された杏樹さんへの愛が破滅したんだと思うんだ。」

「怖がらないでいい？」

「アイツは君を愛してたから……。だからいままで必死で

アイツが築上げたものを忘れないでほしいんだ……。

杏樹さんも辛いと思うけど……

憎んでたんじゃない…愛してたんだ……。

だから……許してやってほしい……。

本音で俺たちはアイツと付き合いってきた。

酔うとアイツはいつも杏樹さんを愛してるって言って

酔い潰れた……。

そんなアイツと俺たちは付き合い合ってきた……

だからこうやって杏樹さんに伝えたいと思ったんだ。」

ヒロトの言葉は 悲しく心に響いていく……。

怖がらないでいい

「怖がられたら…アイツめっちゃ気の毒すぎるから……」

目を閉じて……でも……

「でも…忘れられないの……」

真っ赤に染まった進も…めっちゃくちなぐられて
殺されそうになった恐怖感も……

おまえのせいだって言われた…あの表情のない顔も
怖くて…怖くて……」

「時間がかかってもいいよ……。

ただそれだけ覚えておいて……。

杏樹さんの悪夢が少しでも和らぐかもしれない……」

私はうなずいた。

「ありがとう・・・」とヒロトに言った。

さまよう心 三話

ヒロトの言葉通り その日から悪夢は少しずつおさまった。

その反対に今度押し寄せたのは
私が進を追いつめたという 罪悪感だった。

おねえちゃん死の原因も
進の自殺も

彼の人生をめちゃくちやにしたのも私

今度は恐ろしい夢から
自分のせいで死んでしまった怖さに変わっていった。

私のせいなんだ…その答えしか今は見つからなかった。

進の墓参りに行きたい
そう言うと母がオーナーに連絡を取ってくれて

彼の墓参りにいくことにした。

「大丈夫？ ママついていなくても…」
母が心配そうに言った。

「大丈夫よ。初音さんがいるもん……。
それよりもう仕事に戻っていいよ。
でも早くだけ…帰ってきて……。」夜が怖かった。

一人でいる暗闇が恐ろしくてたまらなかった。

仕事で来れなかった母に変わって
初音さんと会社の人二人と進の墓参りに行った。

墓はおねえちゃんと同じ霊園だった。
私は車イスに乗って
霊園の中を散歩がてらあるいた。

「お天気いいですね」初音さんが言った。

「おねえちゃんのお墓も……」

「そうですね。おねえさまもよろこびますよ。」

そして偶然にも同じ入り口の一番左奥が進の墓だった。

進の墓に美しい花を飾って 好きだったビールを置いて
手を合わせた。

ごめんね・・・

「私ね…他の人を愛せないから……

私の愛する人は…一人だけなの……。

許してね……進がそんなに辛い思いしてるなんて
思ってもいなかったよ。ごめん……

いつも一緒にいたら楽しくて…笑ってばかりいたから……
ひどいことして…ごめんね…」

あの日の進の言葉を思い出した。

「ごめんなさい……」

私は耐えきれず涙が流れた。

慌てて初音さんが駆け寄ってきて

「帰りましょ・・・また会いに来てあげましょうね・・・」

子供をあやすように私の髪の毛を撫ぜた。

初音さんが車いすを押していると 急に車いすが動かなくなつて

「あら・・・ちよつと・・・何・・・」

私は車いすから立ち上がる力もなくて

「車に行つて会社の人呼んできます。」と言つた。

「どうかしたんですか？」

はつらつとした明るい声が聞こえた。

「あ…急に動かなくなって…」初音さんが説明していたら

その人が車輪のところを見てくれて

「これ…壊れてますね。」と言った。

「あ…どうしよう…あの…駐車場に人がいるので
すぐに呼んできますから…すみませんがその間…ちょっと
見てもらえますか？」

「いいですよ。」その人は言った。

「おじょうさま　すぐ戻りますからね。」

初音さんが小走りに駐車場に向かって走っていった。

「寒くないですか？」その人はおっていたパーカーを
私の膝にかけてくれて

私はやっと顔をあげて…その人の顔を見つめた。

浅黒い肌に くしゃくしゃな髪の毛
そして白い歯

体のがっちりとした人……。

「……ぐ……み……?」

空耳か私の名前を呼んだ気がした。
むこう側にあるおねえちゃんのお墓には 美しいアイスバーグが飾
ってあった。

誰か…来たんだ……

こんな時期外れに 誰が来たんだろう……。

「恵美……?」

私はゆっくりとその人の方に顔を向けた。

「あ
・
・
・
・
・
・
・
」

時が
・
・
・
・
・
時が
・
・
・
・
止ま
つた
・
・
・
・
。

さまよう心 四話

心臓が止まってしまいそうだった。

「恵美…だよ…な？」

私は下を向いた。

一番今の姿を見られたくない人だった。

会いたくて会いたくて

胸をこがした人に この情けない姿を見られたくなかった。

「どうしたんだ？ 歩けないのか？」

私は耳をふさいだ。

「恵美？」 彼の声が私を責めてるように感じる。

もっとキレイでハツラツとして…

彼に後悔させたかった。

私を捨てたこと………

だけど彼はそんな私に恋をして。

その時やっと 彼はおねえちゃんから解放されて

私を一番愛してるって抱きしめてくれる

ずっとずっと・・・その空想だけが私の幸せな時間だった。

全ては彼に再会するためだけに

私は私の輝ける場所を探してきたのに・・・

こんな情けない姿を見られなくなかった

「何が…あった？ ケガしたのか？」

「やめて……やだ……」 私はパニックになった。

「めぐ……？」 彼は困惑したように私の名前を呼んだ。

あなたがテレビで自分の人生は素晴らしいって語ってた時
私は暴力を受けて

そのうえ暴行されていた……。

あなたの声を聞きながら

暴行でも・・・あなたに抱かれてると錯覚した……。

そしてまたあなたの名を呼んで

進を絶望させて……進は首を切って……

その返り血の味を私は覚えている……。

サイテーだな……

進の墓から真っ赤な血に染まった進が言った。

「キャ~~~~~~~~ッ!!!! 助けてええ~~~~
誰か……誰か~~~~あ~~~~」

私はパニック状態になった。

その様子を見て 彼が茫然と立っていた。

「おじょうさま~~~~!!!!」 会社の人と初音さんが飛んできて

「大丈夫ですよ…落ち着いて…ね…落ち着いて…」
そう言って私の髪の毛をゆっくり
落ち着かせるように言った。

「はぁ…はぁ…」 心臓が苦しい……。

彼を探しにいていた片方の心が行き場をを失くしている。

彼を見つけたら心は一つに戻るはずだった。

「失礼します。」

会社の人が私を抱き上げて もう一人の人が車いすをたたんだ。

「おじょうさま参りましょう。」

私は会社の人の肩に顔を埋めた。

彼の顔が見られなかった・・・。

やっと会えたのに…………。

心を見つけたのに……

絶望した…………。

全ての生き甲斐を一瞬にして失ったような気がして…………
私の心は明るい光さえ感じなくなった。

さまよう心 五話

死にたい

私はそう思うようになった。

生きる気力を失った私は
食事さえとれずに衰弱していた。

きつとあと二週間・・・・・・・・

この状況が続けば 私は楽になると思った。

「めぐ・・・・お願いだから食べて・・・・・・・・」

母が泣いても

父が叱っても・・・・・・・・

ただうつろに寝たり起きたりを繰り返して
とうとうまた入院した。

悪夢の変わりにおかしな夢ばかり見た。

彼の夢が多かった。
悲しい夢

気持ち悪がられて 罵られる夢

キレイな女の人に取りられる夢

そのたびに私は泣いていた。
夢か現実か私にはわからなくなってしまった。

点滴の針を抜いてしまうから
体を固定された。

介護士と母と初音さんが24時間そばにいて私を監視した。

「ママ……」

「どうしたの？めぐ……」母は私の手を握った。

「お願い…死なせて……」

もうこの世に想い残すこともなくなった…」

「何言ってるの。まだ21だよ。

これからきつと新しい人生が見つかるかもしれないでしょ？」

「もういいんだもん……」

彼以外の人を好きになれないから進を
殺しちゃったんだもん。」

ママはため息をついた。

「どうして姉妹で同じ男を愛するの？
あの男じゃなきゃダメなの？」

「運命だから・・・」

おねえちゃんも私も彼を愛する運命だったんだよ。」

私は顔をおさえた。

「ママ…ごめんね……」。

言う事効かないで……………」。

「どうしてなんだろうね……」

静かな時が私と母の間を過ぎていく……………。

陽之介きつと驚いただろうな

失望したかな

あの時私を捨てて正解だって想ってるだろうな……………。

「死にたいよ・・・」

涙が伝わって枕に落ちていった。

私の言葉だけが病室に虚しく響く。

さまよう心 六話

生きる気力がないって　こんなに毎日が長いんだ。

長くて長くて

これから何年何時間こんな時を過ごすのだろう…。

きつと人を二人・・・おねえちゃんの子供もいれて三人

死に導いた私が受ける長い罰なのか……

自分で手を下したわけじゃないけど……

導いた責任は大きい……

私はきつと地獄行きかな……。

そんな私が人を愛して結ばれることを夢見てるから
罰が下されただよね……

そんな資格ないって……

それも私のせいで大きく人生を変えてしまった彼と
結ばれる夢なんか見てるから……

彼との空想だけが私の幸せな時間だった。

それさえも奪われたら
自分の人生に何の未練もなかった。

夢さえ見るなって罰か・・・。

彼にこんな情けない姿を見られて

こんな姿だけは見られなくなかった。

彼に会う時は 輝いてる私でいたかった
だから頑張ってきたのに……

話しかけられても
答えるのが面倒になった。

私の意識は自分の中だけで生きている
長い長い苦痛な時間

どこを間違ったからこんな人生になったんだろう

そればかり考えていた

巻き戻しをしてそしていつも答えは

おねえちゃんと彼の出会いだった。

あの時 風船に執着しなかったら

どうなっていたんだろう

おねえちゃんと彼はお互いを見ることもなく
すれ違って……

私たちはこんなに辛い人生を送らなくてもよかったのかもしれない。

いつも

いつも

同じことばかり……

バカみたいに考えている……

「おじょうさま……今日はお散歩に行きましようね。
空は青くて 気持ちがいいですよ。」

初音さんが言った。

されるがまま・・・病院の中庭をゆっくり車いすで歩いた。

太陽の日差しが暖かった。

夏か・・・

私は日差しの強さに目を閉じる。

さまよう心 七話

「いいお天気ですね」

恵美おじょうさまは 夏が大好きでしたね。
もう空が真っ青でしょう？」

初音さんは私に話しかけながら車いすを押す。

私も空を見上げて夏を感じた。

少しだけ気分がよかった。

青は大好きな色だった。

濃けば濃いほど心が癒される・・・。

車いすの子供と目が合った。

人懐っこい目が私に微笑んでくれたけど

私は顔の筋肉が強張ってうまく笑えなかった。

そういえば私…どのくらい笑ってないだろ

「あらゝ可愛いおじょうちゃんねゝ
二歳くらいかしらゝこんにちわゝ」

初孫が生まれた初音さんが
膝を折って子供に声をかけた。

子供は満面の笑みを浮かべていた。

モデルのような本当に可愛い赤ちゃんで
私もその子にくぎ付けになっていた。

「あ．．．小山内．．．さん？」車いすを押している女の人と言
った。

私は驚いて 顔をあげた。

山岸先生？．．．

「小山内さん！？どうしたの！？」

驚いた様子の山岸先生が私を覗き込んだ。

私は顔をそむけた。

「私も子供が病気なの……。
それでここに入院してるのよ……。
もうずっと……こうしてここで季節を感じてるの。」

「おじょうさまのお知り合いですか？」初音さんが聞いた。

「ええ……高校の時 小山内さんとは
関わりがなかったのですが一応教師だったんです。」

山岸先生は少し疲れた顔で笑った。

「あら……おじょうさまの……」初音さんが頭を下げた。

「可愛いおじょうちゃんだこと」

山岸先生の子供はニコニコ笑って私を見ていた。

初音さんは自分も孫がいることもあって
先生の子供と遊びだした。

「彼・・・帰ってきてるの知ってた？」 先生の言葉にドキンとした。

「テレビで見たけど ほんと輝いてたわ・・・。
彼が子供たちに囲まれて笑ってるの見たら・・・ほんとに
彼は人生を楽しんでるってことがわかったわ。
あんな彼を見てたら 彼の選択は間違ってたんだってやっと
わかった・・・」

私はその言葉を聞きながら青い空を見上げた。

「ここで見てた彼は・・・いつもなにかを憎んでて
関わりすぎると氷のように心を閉ざして・・・
だけど・・・この間見た彼は 格好はワイルドだったけど
熱さが伝わってきた・・・きっと幸せなのよね・・・。
私は彼を幸せにはできなかったってことよね・・・。」

私もだっていいいの？

「娘が病気だって知って 自分の選んだ道が間違いだったのかって
いつも悩んでいる。私が間違わなかったら娘は
こんな小さな体に針を刺される毎日じゃなかった・・・
だって生まれてこなかったんだもん・・・。
クヨクヨしたって仕方ないんだけどね・・・」

小さな体で治療に耐えてる姿見るたびに胸が潰されそうになる……」

先生は悲しそうに笑った。

初音さんがあやすと女の子は声を上げて笑った。

脇にぶらさがっている点滴に 針を固定する包帯が痛々しかった。

「それでもこの子は生きたいって言ってるんだもんね…

私の選んだ道…私の可愛い娘…

だから…笑ってなくっちゃ私も……

彼を見てそう思ったわ。」

先生の話を聞いてたら泣きたくなった。

女の子はにっこにっこ笑って 病気だなんて思えない笑顔だった。

「先生……」私はようやくやっと声を出せた。

「ん？」山岸先生はニツコリ笑って私を見た。

「愛する人がいるって幸せなことですね……。

娘さんはママの笑顔のため

ママは娘さんの笑顔のため……

一緒に頑張ってるんだもん……」

「そうね……。

自分の命より大切な宝物だから……」

「娘さんの笑顔最高ですね……」

「うん…ほんと……」

先生はそう言っていると泣き出してしまった。

私もこらえきれずに泣いてしまった。

青い空が……

先生の子供の笑顔が　少しだけ私を癒してくれた。

さまよう心 八話

「ママ・・・」

私はベットの横に座って居眠りする母に話しかけた。

「ん？何どうかした？」

母は慌てて私の顔を見た。

「帰っていいよ・・・。
仕事大変なんでしょう？」

ひさしぶりにまともな話しのできる娘に
驚いたのか

母はにっこりと笑った。

「大丈夫よ・・・。ごめんね・
もっというあげたいのに……。
こんな時間しかいらなくて……」

「ごめんなさい・・・悪い娘で。」

「何を言うの・・・。
大切な娘なんだから・・・。」

私の方こそあなたが我慢してるの気づかなくて
いつもあなたを一人にできて・・・。」

「今日は…高校の先生に会ったの
子供が病気でずっと入院してるんだって……
すごく可愛い子でなんか…癒された……。」

「そう……。」

「今日は長く外にいたから疲れちゃった…。
早く寝るから…ママも私が寝たらすぐ帰って
家でゆっくりしてね。」

「ありがとう」

ママはそう言っていると私の背中を優しくなぞた。

そのまま私は眠りについて……

夢を見ていた。

青い空の下で私は走っていた
彼のように子どもたちに囲まれて走っていた。

笑ってる私

そんな夢を見るのは久しぶりだった。

目がさめかけた時・・・病室のベッドの明かりが目に入った。

しくじった・・・まだ朝じゃない・・・

私は寝つく時 暗闇が怖かった。

誰かがいないと夜眠ることができなくて

薬飲んだのに……

ガッカリしながら目を開けると

私の目のまえに・・・彼がいた。

「え？私…まだ夢見てるの？」

思わずそう口走った。

彼は笑いながら私の額に手を置いた。

「やだ．．．なんでここにいるのよ．．．」
私は顔まですっぽりと布団をかぶった。

「帰って．．．」
会いたくなかったのに．．．どうして来たの？
同情なら いらない．．．お願い．．．帰って．．．」

心臓が苦しくなった。

心がもう片方を呼んでいる．．．

「お願い．．．こんな情けない姿．．．
忘れて．．．見なかったことにして．．．」
それが私にとっての一番の願いだから．．．」

息切れして胸が苦しくなった。

会いたかった・・・世界で一番会いたかった

そう言って抱きついたら

一瞬だけでもこの闇の世界から解放されるのに…………

「うん・・・」そう言って彼は優しく微笑んだ。

山岸先生の言った通り彼は少し変わった気がした。

帰らないで

その瞬間　さまよっていた心が欠片が
一つに戻った気がした。

「帰って…………」もう一度言った。

帰らないで…………心が叫んだ…………。

「わかったよ」そう言った彼に少し傷ついた。

どっちなの？

でも彼は・・・席を立たなかった・・・。

さまよう心 九話

「言ってることわかんないの？帰ってって言ってんの。」

布団をすっぽりかぶって私は大声を出した。

「恵美が寝るまでいるよ。
寝たら帰るから……。」

「今 起きたばかりだから……
いいの……。帰って下さい……。」

悲しかった。
会いたかった人がすぐ手の届くところにいるのに
もう一人の私が

これ以上惨めになりたいの？と問いかける。

静かな時が流れる。

私は布団から少しすきまを作って彼を盗み見た。

?? ??

彼の姿はなかった。

あ…帰っちゃったんだ……

ものすごいガツカリして泣きそうになった。

もう二度と会いに来てくれないかもしれない…

こんなにこんなに愛してるのに……

でもわかったんだ。

私が彼を愛すると彼が不幸になるってこと……。

今 彼が輝いているならその輝きを奪うようなことはしたくないから……

私は幸せになっちゃいけないけど
彼が来てくれただけでも・・・
顔を見れただけでも・・・

私に触れてくれただけでも…幸せ…だから…

涙が流れた・・・。

愛してるよ…あなたしか愛せないけど…
あなたに愛される資格がないから…

生きる気力もなかったのに…彼に会ったら
切なくてもときめいて

そして心が一つになった。

私の欠けた心はきつとすぐに彼を見つけて
彼に寄り添っていたんだと信じてる……。

しばらく泣いて…

嗚咽がおさまったら大きな深呼吸をした。

「ふーーーーっ」体もブルツと震えた。

それから私は布団から顔を出して 外の空気を吸った。

大丈夫だよ…彼の顔だけでも見られてよかった……
それだけでも……幸せだったから……

顔を出して フツと人の気配を感じた。

驚いて振り向くと 窓のところで彼が私を見ていた。

「あ……な……な……んで……？」私は驚いて手を口に当てた。

彼がゆっくり私の方に向かって歩いてきた。

私は首を振った。

彼が接近してきたら 姿が見えなくなるくらい首を振った。

嗚咽を必死に手でおさえた。

次の瞬間・・・彼の胸の中に私はいた。

厚い胸板が 私の想いを全部引き受けてくれた気がした。

「帰って…って…言ったの…に…。」

私の涙は彼の逞しい胸に溶けて消えた。

会いたかった・・・彼に抱きしめてもらうこの瞬間を
ずっとずっと夢に見てきたから……

今だけ・・・今だけ・・・

この愛する人の胸の中で幸せをかみしめていいですか？

この胸から離れたら

もう彼を求めたりしないから・・・。。。

愛する人の 逞しい胸の中で・・・

私はつかのまの幸せな夢を見ていた・・・。。。

さまよう心 十話

彼の温かさに生命の力をもらった気がした。

「俺の胸の中で…何人もの幼い命が幕を下ろしたんだ。
生きたい…生きたい…

その想いが俺のここにたくさん
の力になってくれている。

恵美もきつとその力を感じてくれていると思う……。」

だから…生命の力を感じているんだ……。

しばらくその見えない力に包まれて
いつまでもこの胸の中にいたいけれど……

「同情なら…これが最後にして……」

憎たらしいこと言ってる

もうこれ以上 私にかかわらないように……

静かになごりおいしい温かい胸から顔を離した。

「あなたがいなくなった日で私の恋は終わってる…。
新しい恋もしたし…
だから…これ以上私を混乱させないで……。」

彼の目が見れなかった。

「恵美…生きてるって素敵なことだよ。
恵美の目が絶望してたから…
俺のこの力で元気にしたかった…
きつとこの力がおまえを立ちなおさせてくれる…」

彼にとっての私はいつまでも
白いうさぎなんだよね

改めて自分の位置を確認した。

「うん…ありがとう
もう大丈夫だから…安心して……。」

また外国に戻るんでしょう？」

「うん…もう少しここでいろんな活動をして
戻るつもりだよ……。」

「そっか……。」

先生……輝いてるね……。
よかったよ……。」

「ありがとう……。」

今　すごく充実してるんだ。

あっちでは…ひどい状況だけれど……

でも誰かに必要とされているってことが

俺を変えてくれてるのかもしれない……。」

私だって必要としてたけどね

私にはあなたが…生きる源だよ……
多分このまま　生きていくとしたら
きつと…

「もう大丈夫……。」

私と先生はもう住むところも違うんだもん……
お互いそれぞれの……ところに戻ってただけだよ、ね、」

「大丈夫か？」

彼が心配そうに聞いた。

彼が心配してくれるだけでも……
幸せだと思おう……。」

「うん……。ありがとう……。」

看護師が顔を出した。

「消灯ですよ。」

彼が慌てて

「はい 今帰ります。」と言った。

帰らないで・・・・・・・・

もう二度と来ないで・・・・・・・・

私の心が分裂している。

「じゃあ・・・・・・・・帰るな・・・・・・・・。」

私は布団をかぶった。

「さよなら・・・・・・・・。」

きっと彼が帰ったら 私は泣くだろう・・・・・・・・。

こんなに切なさが残るなら・・・・・・・・
会わなければよかった・・・・・・・・。

幸せを感じた後の地獄が怖かった。

私は朝まで泣いた……。

抱きしめられた幸せは……彼がいなくなると
切ない思い出に変わった……。

生きる力はまた……絶望感に変わっていく……。

欠けた心 一話

「先生…輝いてるよ……。」

俺は病院を振り返りながら 夜の街を歩いた。

恵美と偶然に千夏の墓のそばで会った時

俺は千夏が

俺に何かを求めているんだと思った。

恵美は俺を見て 半狂乱になった。

ショックだった。

太陽のように明るく元気だった恵美の
変わり果てた姿に茫然とした

俺がいない間に何があったのか……。

俺を拒否する恵美

でもどうしても・・・恵美の様子が気になった。

「あの・・・以前・・・お目にかかりましたか？」
後にいた女の人に声をかけられた。

「あ・・・病院で・・・」 見覚えのある顔に頭をさげた。

俺はその人に連絡先を書いて

「時間がある時 お話を聞きたいんです・・・。」

その人は

「喜んで」と品よく笑った。

それから数日後 連絡をもらって話を聞くことができた。
その人の名前は初音さん

「先生？でしたよね？」

「当時はそうでした。今は海外の教育復興のために
日本を離れてましたが今回は活動報告のために
戻っていました、」

「まあ素晴らしいお仕事ですね。」

「あの…恵美さん…病気なんですか…？」

「そうですね…心の病…が体よりも悪くて…
いつ死んでもおかしくない状態です……。」

初音さんの話を聞いて俺の心は
悲鳴をあげた……。

「今は…生きる氣力を失くして 食事もしない
何かがしたいという氣力もない…死なせてくれと泣くばかりです。」

「そんなことが……」

恵美にあった惨状を想像しただけで俺はたまらなくなった。

「あの……聞きづらいことなんですけど…
先生はもしかしたら…こんなさんでは…ないですか？」

俺は動揺して持っていたカップを落としそうになった。

「俺を…知ってるんですか？」

「あ…やっぱり…恵美おじょうさまに取り乱し方が普通じゃなかったし…あの時お見舞いに来てくれた時ももしかしたら……と思ってました。

おじょうさまは…小さい頃からって言っても

本人の記憶に残る前からあなたが好きでいらしたんですよ。」

「俺が知ってる恵美は

最初はヨチヨチ歩きで……最後に会ったのは
小学校に上がる前だったから……」

「最後の頃は断片的な記憶はあるようでしたけど
千夏さまがため息をつくくらいでした。

こんたに弟がいたらよかったなって……」

めぐは可愛いけど こんただけはあげられないから……」

お小さい頃は愛らしかったですが

今では想いつめられて空回りしている気がします。」

「そうだったんですか……」

初音は寂しそうに言った。

「恵美おじょうさまを…助けて下さい…」

きつとあなた以外の人には無理だと思います。

あそこで二人を合わせてくれたのは

きつと千夏おじょうさまだと思います……

あなたに会わなければ…

おじょうさまは間違いなく死に近づいたと思います……

まだ忘れられてません……

あなた以外の人を愛せなくて…

進さんを自殺に追い込んだのかもしれない……

きつとおじょうさまは

そんな責任を自分に押し付けているんだと思います……」

「俺のせいです……」

「誰のせいでもありません。

人の心なんて一人一人違うのですから

ただ…ここで再会したことが何かの意味を持つとしたら
どうか救ってください……」

私はどんなことにも手を貸します……」

じゃないと間違いなく

恵美おじょうさまは死にます……。

千夏おじょうさまには愛がたくさんありました……。

でも恵美おじょうさまには想う欠けた心しかないのです……。」

初音さんは何度も俺に頭をさげて

「助けて下さい」そう言った。

欠けた心 二話

抱きしめた恵美は 今にも壊れそうだった。

俺は逃げてないか？

自分に問いかける。

なんで…恵美会いに行つて 抱きしめた？

自分の理想に生きることと美学を感じて
偽善者な心で恵美を抱きしめたのか？

わかってるんだ……。

ほんとはわかってるんだ。

ただ俺は 逃げてるだけ
その現実から逃避するいいわけを……

あの時恵美には伝えられなかった。

恵美を愛し始めていた……。

千夏しか愛さないってそう言っただけで恵美を泣かせてきたのに

俺はいつの間にか

恵美という一人の女に強く惹かれ出してたんだ。

そんな自分が許せなかった……。

今までの自分の生き方に俺は酔ってたのかもしれない

悲劇のヒロイン

じゃなくて悲劇の中で生きたい男

あの時

今さら恵美を愛してるとはとても言えなかったし

自分を愛しながら命を落とした千夏を
忘れることだけは絶対に嫌だった。

俺の心は二つにぐちゃぐちゃに割れた。

千夏に似てる恵美を最初は…求めて抱きしめた。
千夏のようなキラキラと光った
大きな黒い瞳

そしてキスをするとう溶けてしまいそうな熱い唇

耳が苦手なところも……

恵美といると千夏という錯覚を覚えて
それが楽しかったんだ。

だけど…いつのころか恵美が千夏の面影から
分裂した。

今抱しめているのは 千夏なんだと
言い聞かせないと

恵美は千夏の変わりにならなくなった。

俺の心に住み着いた千夏じゃない
他の女が…俺を翻弄し始める……。

恵美が泣くたびに 心が痛んで……

そこから逃げようとする俺と
抱しめてキスしたい俺がいた。

俺自身が 二つに分かれて…さまよいだした。

白いうさぎはいつの間にか 美しい女になっていた。

俺は自分を決めかねて…逃げたんだ……。

恵美を宙ぶらりんにして 逃げた俺が……
こんなことになった恵美に……
何をしてやれるんだろうか……。

同情だったらやめて……

恵美が言った。

これから俺は…恵美をどうしたいのか……

中途半端な気持ちじゃないのか・・・

壊れそうな恵美を抱きしめてまた手を緩めたら
きつと恵美は壊れてしまうだろう……。

両親との柵もある・・・。

俺も俺自身と向き合わなければ 何も始まらないから・・・

欠けた心 三話

初音さんと連絡を取り合って 恵美の様子を聞いていた。

さらに心の状態が不安定になっていると……

俺に会ったことできつと

恵美を不安定にしてしまったことはわかっていた。

あの時 恵美から逃げたことを

きちんと伝えなければ行けないと思っていた。

しかしその前に俺にはやることがあった。
インターフォンを鳴らす。

緊張感で一杯になっていた。

「はい……」

「溝端と言います……。」

相手の声が一気に固くなったのがわかった。

しばらくして玄関のドアが開いて

「どうぞ」と恵美の母親が立っていた。

俺を上から下まで一瞬でとらえた視線がさらに緊張させる。

リビングでは恵美の父親が新聞を読んでいた。

俺が

「失礼します。」と言うと

父親は目がねを外して座りなおした。

「どうぞ。」父親は自分の向かい側に俺を座らせて

お茶を運んできた母親が隣に座るまで

息苦しい静けさの糸の張った時間だった。

「すみません……。突然……。」「俺は深呼吸をしてからそう言った。

「どういう御用件かしら？」相変わらず冷たい瞳の母親

「もっと早く来なければいけませんでした。

だけど：俺自身も避けたかった だけど：恵美さんに会って
恵美さんを愛してることに気がついていたのに……
ここに来ることや千夏を裏切るんじゃないかとか
そんなことを考えて：俺は三年前 逃げました。」

「何言ってるの？ あなた千夏だけじゃなくて恵美にも？」

母親はとうとう甲高い声になって俺を睨みつけた。
何度この声に傷つけられただろう……

そんなころを思い出していた。

「千夏と出会ったのは恵美が飛ばしてしまった
風船をとってくれと泣いていたのがきっかけでした。

三人の出会いには：時を超えて運命だったのではないかと思っています。

」

「運命って勝手なこと言わないでよ。

千夏を奪って：恵美まで：どうしてあなたみたいな男に
ひっかかってしまうのかしら……」

母親は立ちあがって千夏の仏壇のある和室に消えた。
しばらくして線香の匂いがしてきた。

「恵美に会ったのかな…」父親が言葉を発した。

「千夏の墓参りを終わらせて…そこで恵美に会いました。」

「どう思った？」

「正直驚きました……。何があったのか……病気なのか事故なのか……。」

「君は娘のことをどう想っているんだ？」

「今回 こっちに帰ってきて…恵美に会うつもりでした。だけど…恵美をどうしようとかどうしたいとか…それを決めかねていたのは正直なところです。」

あの時 恵美の前から逃げたのは…恵美を愛してることに気づいたからです。

ただ俺の中で あの時はまだあなたたちに壊されるだろう恐怖や千夏を裏切るのかと問うもう一人の自分の間で悩み抜きました。

俺なんかより恵美にはもっと似合いの男ができて

きっと幸せになれるんじゃないかとも思いました。けどそれは…ただ逃げるためのいいわけだったんです。」

「恵美が反抗し始めて俺たちは本当に困った。

今までいい子で俺たちの前で笑ってた恵美の心の底にあったものを知った時 俺たちは戸惑ったんだ。

愛されたことなんかない 自分を見ながら千夏を思い出していたことも

あの子にはお見通しだったんだな・・・。

そんなつもりもなかった……。

ただ恵美がいつも素直で明るくて…わがまま一つ言わなかったからあたりまえになって傷つけてしまっていたんだ……。」

恵美の父がうつむいた。

「僕も…恵美に千夏を重ねていました。

何度もそれを指摘されて……最初のうちは…千夏の変わりにするつもりでした。」

「親でも戸惑うくらい恵美は千夏にソックリだからな……。

千夏の年を追うごとに…俺たちは千夏との思い出ばかり思いだして恵美には何もしてやってなかった……

卒業して恵美が出て行っても 責められるのがつらくて放置していたんだ。

親として何もしてやっでなかつたつていう現実を……」

父親はそう言ふと立ちあがつて

大きな窓の外を眺めた。

欠けた心 四話

「恵美が夜の街で働いていることを知って愕然とした。社員を数名行かせて 恵美の店に客としていかせて どんな仕事をしているのか…見に行ってもらったが 社員が口を揃えて言った

『プライドをもったいい仕事をしています』と・・・。

どんな会話にもついて行けてあれはかなりの勉強をしていると…それを聞いて安心した。

恵美のやりたいようにさせてやろうと……。」

母親がやってきて

俺のお茶を入れ替えてくれた。

「自分の目の前で人が死ぬのを見るのは…俺たちには想像もつかないことだ……。

それもその男と恵美には関係があった……。

発見された時 恵美は男の返り血を浴びて失神していたと心配して見に行ってくれたオーナーが

発見してくれなかったら…そう思うとぞっとした。

激しい暴行を受けたようで体の損傷もひどかったけれど心の損傷はもっと深い……。

男の死への責任や…目に焼きついた恐ろしい光景で恵美は眠ることへの恐怖感と

生きることへの気力も失っている……。

俺たちがやっと親らしいことをしてやれるようになっても一向に恵美の心を開くことはできないんだ。

このままの状態が続くと衰弱が進んでさらによくないことになる

医者からそう告げられても：俺たちは無力なんだ。
もう：愛する者を失いたくない……」

父親は俺の向かいの席に戻って俺をまっすぐに見つめた。

「君が：君の存在が恵美を救ってくれるなら：
俺は君に全てを任せたいと思っている。」

「あなた！！何を言うの！？」母親が立ちあがった。

「黙れ！！」厳しい声が母親を座らせた。

「俺たちが無力なのをおまえもわかってるだろう？
恵美を失いたくない：おまえだってそうだろう……」

もう俺たちは間違いを犯してはいけないんだ。

運命に逆らって恵美をこんなことにしてしまった……。

彼が：恵美を救ってくれるなら：

もう彼にすぎるしかない……。

恵美にとって何が幸せなのか……。」

母親が泣きだした……。

「君も俺たちを憎んでいるだろう？」

君のおとうさんが自殺したのは俺たちが君への報復のために
仕組んだ末のことだった……。

俺たちも君の存在を憎んで恨んで……

人間としてのルールを忘れてしまったのかもしれない……。

君にも言い分はあるとは思うが……。」

「もう……すんだことです……。

父には虐待されながら育てられて……それこそ

恨みと憎しみの中で僕は生きてきました……。

でも……長い時間をかけて父と和解ができて……それもきっと

千夏との愛が俺を変えてくれたからだと思ってます。

あなたたち夫婦への憎しみは

俺を悔しさと挫折を跳ね返す根源になってくれたと思ってます。

この気持ちじゃなかったら……俺はきっとどうしようもない人生を
送っていたと思ってます……。

俺の人生は あなたたち家族によって変えられました。」

「今は何をしてるんだい。」

「海外で貧しい国の子供たちに勉強を教えています。

目を覆いたくなるくらいの現状ですが……子供たちの笑顔が宝です。

俺の選択は間違っではないけれど……

だけど……恵美から逃げたことだけは……後悔しています……。

あの時もっと強い気持ちだったら

恵美はあんなことにはならなかった。
自分だけ満足した毎日を送っていたことが許せないです。」

涙がいきなりポロっとおちた。

「許されるなら…恵美を僕にください。
運命にもう逆らいたくはありません。

きつと千夏も…それを願って俺と恵美を墓の前で
会わせてくれたんだと思います。

早く…恵美を救ってくれと……。」

父親が俺の手を強く握った。

「頼む……。もう君しかいない……。

恵美を…失いたくない…。

俺の目の前で弱っていく恵美を見てるのが辛いんだ……。」

父親の目も涙で濡れていた。

傍らで立ちつくす母親が

「お願いします……。」と言った。

長い間閉ざされてきた針のついた壁がスーッと姿を消した瞬間だった。

病院からの電話で

恵美がいなくなったと知らされて

俺たちは頭の中が真っ白になった。

欠けた心 五話

恵美の父親の車で俺たちは病院に駆け付けた。

医師が

「いつものように静かに横になっていたようなんですが…
まさか歩いて出ていったとは……」

歩く気力もなかったから
まさか抜け出すなんて思ってもいなかったと
看護師も動揺していた。

「今 病院中を探しています。」

「あの子…まさか…まさか……」 母親がそう言うのと倒れかけた。

俺はとにかくどこかを探そうと病室を飛び出した。

どこだ……

どこだ……

とにかく階段を駆け上がった。

降りてくる職員とすれ違った。

「いなかったんですか？」

「はい。」職員はそのまま駆け降りていった。

俺も降りようとしたけど・・・

今日の空の青さを見たいと思った。

そこで少し考えよう・・・。。。

頭を冷やして・・・。

屋上に出ると真っ青な空が広がっていた。

俺にいる国の空はもっともっと青い

ふと遠くを見ると柵によじ登ろうとしている恵美が
視界に入った。

俺は力なく柵にぶら下がっては落ちる恵美の細い手に
安心して静かに近寄っていった。

「恵美・・・・・・・・。」

恵美は飛びあがって俺を振りかえった。

「あ・・・・・・・・。」

「何してるんだ？」

「……空を見に来たの……。」

夢で最近見るんだよね……。

青い空の下で楽しそうにしている私……。

空に近いところから見ようと思って……。

だけど疲れちゃって……。

お願い：手を貸して・・・・・・・・。」

手を差し伸べる恵美を抱き上げて
柵に掴ませた。

「ありがとう・・・・・・・・。」

「みんなが探してるんだぞ。」

「さっき来た人も大声で私の名前呼んでたわ。
ベンチのところで ひっくりかえったから
死角になったのかもね・・・・・・・・。」

恵美が俺のシャツにすがった。

「会わなかったことにして……。
見なかったことにして……ここから私を飛ばせてほしいの……。」

「何言っただよ……どうかしてるぞ。」

「やっとここまでたどり着けたの…

ベットの中で舌を噛み切ろうとするんだけど……

どうしても怖くて……お願い…一生のお願い……

手伝って……ここから空に向けて押し出してくれるだけでいいから…

お願い……もう…楽になりたいの……

あなたが押してくれたらきつと天国に行けるよ……

そこにたどり着いたらもう…そこを離れないから……

先生……お願い……お願いします……。」

恵美が俺にすがった。

「青い空の下で笑ってたんだ。

めっちゃ楽しそうだった私……。」

髪の毛が太陽の日を浴びて金髪に光っている。

「わかった……飛んだ先にずっといるんだな。

そこに行けばおまえは幸せになって

笑って暮らすんだな……。」

俺は必死で訴える恵美にそう言った。

「先生……手伝ってくれるの？
先生が手伝ってくれるなんて…サイコーに幸せ……」

大きな黒い瞳から
ダイヤモンドが零れ落ちた。

「行くぞ……。」

俺は軽々と持ち上げられるようになってしまった
恵美の体をふわっと宙に持ち上げた。

青い空と恵美が一瞬一体化してとけてしまいそうだった。

欠けた心 六話

青空に溶け込みそうになった恵美は笑った。

そして静かに目を閉じたから

俺はそのままゆっくりと俺の胸に抱きしめた。

「バカか……。そんなことするわけないだろう……。」

「先生……お願い……。」

もう……私一杯一杯なの……。

全てが面倒になって……ここに来るのも
大変だったの……。」

俺の胸から顔をあげようとする恵美をまた
引き寄せて強く抱きしめた。

「同情ならやめて……。」

「愛してる……。」

一瞬恵美は言葉を失ったようだった。

「今…今さら…やめて…!!!!」

恵美は俺から離れようともがく。

「ちゃんとメシ食ってないから…力何にもないじゃん…」

俺はバサバサになった髪の毛をかきあげて
真っ赤になった耳にキスをした。

「せんせ…!!!!」

「もう…絶対に離さない…」。

これからずっと俺がおまえを守るから…」。

悪い夢を見るなら

楽しい夢を見られるように

おまえを楽しませるから…」。

俺のそばにいてほしい…」。

「なんで…私が哀れだから

自分に嘘つくことなんてしないで……。
おねえちゃんが忘れられない……。それがあなたでしょ？」

恵美の声は涙ぐんでいた。

「違うよ……。」

俺はわかってたんだ……。。

おまえを恵美を愛してしまった自分が

悪いことをしてるようで

逃げたんだ……

勇気がなかったおまえのす全てを引き受ける勇気も……」

「やめて……」

私が死のうとしてるから出まかせ言ってるんでしょ。

その場限りの嘘ならもういいよ……。

先生は胸を張って歩いてほしいの……。

私のために……何かを犠牲するならイヤ……

後で絶対後悔するから……

あなたもきつとこうかいするとき

その時が辛い……。。

好きな人の重荷や足手まといになるのだけは

絶対にイヤだから……。」

か細いけどハッキリと俺の前で言い放つ。

「俺だって

後悔はしたくないんだ……。

あの時俺にもっと勇気があったら……

恵美にこんな辛い思いさせなくてよかったのに……」

「うそつき……。

優しい嘘なんて悲しいだけだよ……。

先生が……忘れるわけじゃないじゃん……おねえちゃんを……」

恵美の声がかすれた。

「やっぱり嫌なの……。

おねえちゃんの変わりでいいなんて言ったのは

強がりだから……。

先生には無理だよ……。

私のために嘘つかないで……。」

恵美はもううんざりという顔をした。

「先生……私疲れちゃった……。

寝たい……病室に連れて行って……。」

恵美はそう言っていると俺の胸に倒れ込んだ。

欠けた心 七話

階段を降りていく間に恵美は寝息を立ててしまった。

それだけ体力がないんだろう……。

恵美は子供のようにスヤスヤと眠ってしまった。

「恵美……」恵美の母親が駆け寄ってきた。

「死のうとしてました……。」「俺が言くと恵美の母親は床に座り込んだ。

「どうしたら……あの子を救えるんだろう……。」「あなたに会ったら考え直したの?」

「いいえ……。

俺への不信感で一杯です。

仕方ないです……俺は一度逃げたんだから……。時間がかかって……。わかってもらえるように……。話して行きます。」

そうさ

逃げた罰だ……。

俺はこれから恵美の心を取り戻すために
頑張っていこう……。

特別病棟の個室に入院している恵美に
付きそうことした。

付添い用のベットを入れてもらった。

点滴で眠らされてる恵美の顔は死人のように白かった。

時折 息をしているのか心配になって
恵美の口元に耳をあてて呼吸を確認した。

このまま死んでしまったら……

そんな想像をしてしまうくらい恵美は無表情だった。

「やだ：絶対：死なせないからな……。」

細い指に指をからませてみた。

入学式の時　すぐに絡まった視線は最初は千夏によく似た恵美だった。

そのうち恵美の存在が少しづつ大きくなってはきたけれどそれを認めるのが怖くて

恵美のことを必死に千夏と思いこませた。

傷ついた恵美が泣くたび　胸がざわついた。

「誰を見てるの？」

恵美の気持ちは痛いほどわかっていた。

「恵美を見てるよ。」

わざとに冷たく冷静に答える。

「うそつき……」

恵美は悲しそうに目を伏せる。

俺の心の中は罪悪感でいっぱい
そんな恵美を抱き寄せる。

「おねえちゃんの変わりなんでしょう・・・」

「そうだよ・・・」

俺は俺を愛してくれる恵美に対して
ひどいことをたくさんしてきたように思った。

「おまえにわかってもらえるためには
どうしたらいい？」

目を開けない恵美に声をかけた。

「今度は俺がおまえのために・・・できること・・・
なんでもしてやるからな……。
おまえが愛してくれたことを・・・それ以上にして返してやるからな。」

┐

ひさしぶりに触れた恵美の唇は 乾いてカサカサになっていた。

欠けた心 八話

「ん…ん……」

パソコンを持ち出して来て仕事をしていると
恵美が起き出した。

俺は静かにそばに行って
目覚めを待った。

額にかかる髪の毛を整えてやると体をくねらせた。

そして眠れる森の美女は静かに目を覚ました。

「せ…せん…せ？」

「おはよう…今日の夢はどうだった？」

「どうして…ここにいるの？」

「どうしてだと思う？」

「わかんないから…聞いてんのよ……」

「生きている……」

さっきまでの死んだような眠りに
何度も不安に陥っていた俺は
恵美の目覚めが待ち遠しかった。

「今日からここに泊めてもらうんだ、
ホテル代もバカにならないし…かまわないだろう？」

「何を考えてるんですか…
私を混乱させて楽しいですか？」

「そばに…いたいんだ……。」

「ほら…同情してる……」

恵美は背中を向けた。

「同情…？それでも一緒にいたいさ…」

もう無理強いはしないでおこう

「やめてよ…先生の前にはたら惨めだもん
どうしてわかってくれないの……」

恵美は泣き出した。

「こんなボロボロな体で…
先生に見られたくない……」

「俺はその心の方が悲しい……」

恵美の額に手をおいた。

「心を早く…元気にしたい…
体はそれからでもいいだろう…
恵美のそばにいさせてくれ…。」

大きな瞳からは次から次へと涙がこぼれる。

「私には資格がないの…
もう先生に愛される資格も
それ以上に愛することさえ…もうできない…
だからこれ以上惨めで情けない思いさせないで…
愛する人がこんなにそばにいるのに
もう愛せない私を混乱させないでよ…。」

「俺もあの時…資格がないって思ったよ…
だから…逃げ出したんだ。
恵美に何も言わないで…
あの時の俺と同じだな…。」

「違うよ…。
私は悪魔なんだから…。」

先生が好きで好きで おねえちゃんにとられたくなくて
あんなに小さかったのに
先生から預かった手紙を親に聞こえるように
読んだんだよ…きつと…
時間さえ告げてあげてれば…
こんなにこじれなかった。
先生はおねえちゃんと子供と…
私は先生に似た人を探しているはず…
私が先生の人生をめちゃくちゃにしたんだよ」

涙で目がおぼれている。

俺はその涙に口づけをした。

恵美の心の味が染みわたった。

欠けた心 九話

鳴咽の響く部屋はもう真っ赤な夕日が入って来た。

「明日も青空が見られるね。
一緒に見ようよ……。」

「先生……」

「これからもずっとずっと……
二人で空を見よう……。」

「バカじゃない？」

恵美は鳴咽に混じった声でそう言った。

「俺と一緒に生きていこう。」

恵美が大きな目をさらに大きくして

「やめてよ…」と言う。

「おねえちゃんのこと忘れられないくせに……私を千夏だと思って抱くんでしょう？」

無理…私には無理……

そんなこと言う資格ないのに……

でも無理なの……」

「あの時…三年前のあの時

すでにあの時 もう恵美は俺の中で恵美だった。

だけど千夏を裏切っているようで

そんな自分を許せなくて…いつも葛藤していた。

千夏を愛するなら必死に恵美を千夏の変わりにと

思いこませていたけど……

俺の中で生きて抱きしめられて

まっすぐに愛をぶつけてくれる恵美は…

俺にとって一番の存在になっていったんだ…。

だけどそれは千夏を裏切ってるという

罪悪感と紙一重だったんだ……。

俺もマジ辛かった……。

恵美のまっすぐな愛がいつの間にか俺を

一人の健康な男にした……。」

恵美の嗚咽は止まらなかった。

「おまえが学と仲良くしているのが
余計に耐えられなくて

嫉妬している自分を軽蔑した。

あの中で恵美に似合うのは学のような子だと
思ったし…それがいいと

必死になって思うようにしてたけど…

俺には資格がないからって……

その葛藤から俺は逃げたんだ……。

愛してる女を置き去りにして……そして
忘れようと必死だったけど……」

恵美を抱きしめた。

「忘れられなかった。

向こうの青い空を見ながら

恵美に見せてやりたいとか…子供たちの
笑顔が最高に可愛くて

恵美にも教えてやりたい……

星がきれいだと

一緒にみたいって……

離れても想うのは恵美だった……。」

「先生……」

「こっちに來て…会いたいと思ってたけど
今さら会う資格なんてないって…
だけど千夏の墓で恵美に再会したのは
きつと千夏が会わせてくれたからだと思った。
都合のいい考えかもしれないけれど
千夏も俺と恵美を許してくれてるって感じたんだ……。」

骨ばった恵美を強く抱きしめた。

「あの時俺にまっすぐ愛を注いでくれたように
かたくなだった俺の心がいつしか
恵美で一杯になったように
これからは俺がその愛以上のものを
恵美に注いでいきたい……。
そうさせてくれ……。
もう間違いたくないんだ……。
俺の人生に必要なものが…足りないものが
やっとわかったから…
時間をかけてゆっくり…
恵美の心を元気にしたい……。」

恵美は子供のように声を上げて泣き出した。

「う……う……う……。」

「愛してる・・・。

愛してる・・・。

何千回でも・・・何万回でも

恵美のために・・・そう言える・・・。

運命なんだ・・・。

あの出会いの日から

俺と恵美が結ばれる運命だったから・・・

今がある・・・。

違うか？」

「待って…ヒック…ヒック…

私はまだ…言っていないこと…ある…ヒック…」

恵美は俺の胸に顔を埋めて

「私は…二回も…赤ちゃんを…赤…ちゃ…

母親としても…ヒック…女としても…ヒック…人間としても…」

その後の言葉をかき消すように

俺は恵美の乾いた唇を奪った。

「ン……………」時折苦しげに恵美が唇をずらすけれど

息を吸おうとしてる恵美の唇をまた奪った。

「んっ…センセ…」

俺たちの愛に名前をつけるとしたら・・・
それは

激愛

だと…思った…。

二人のなかの全てが溶け合うように
唇が感じ合う。

愛してると・・・

欠けた心はお互いの心が合わさったように一つになった。

「もう…離さない……。」

「陽之介……」

恵美が先生と言わなくなった。

それが返事だと俺は確信した。

「幸せになろうな……みんなの分……
きつと応援してくれる……」

激しいキスはいっつか 甘いキスとなり 乾いた恵美の唇が
柔らかく潤いだしたのを感じた。

欠けた心 十話

木々が真っ赤に染まる霊園を恵美の歩幅に合わせて
ゆっくり歩いた。

少しずつリハビリを初めて
最近やっと少し歩けるようになったが
まだ本調子でじゃないのと足の筋力がおちていて
少し歩くだけで疲れてしまい
ゆっくりと歩いては少し休んでを
繰り返しながら

千夏の墓についた。
来る途中で花束を二つ買った。

千夏の好きだった白いアイスバグを
恵美が飾って
もうひとつの花束を足元においた。

入れ忘れたのかな

俺は墓石をきれいなタオルでふいた。

二人で揃って手を合わせた。

「千夏：千夏はこれを望んでいたんだよね……。これが正解でいいんだよね……。」

俺は恵美の肩を引き寄せて

「恵美を愛してるよ……。」と言った。

恵美は俺の横顔を見ていたけど

「幸せになってもいい？」と千夏に聞いた。

俺はとてもおだやかな気持ちになっていた。

きつと千夏は喜んでくれている

それが勝手な解釈でも自分勝手な思い込みでもなんでもいいんだ。

それから

「ここに…進…のお墓があるの。
一緒に行ってくれる？」

恵美はそう言った。

そして千夏の墓より奥のほうを指差して

「進にも…伝えたい……。」

そう言った。

もうひとつの花束を抱えて

恵美はゆっくり歩き出した。

俺はその後をついていった。

そして奥の墓の前で恵美が立ち止った。

「進……私がずっとずっと
忘れられなかった人だよ……。」

私も幸せになってもいい？進を追い詰めたのに…
私だけ幸せになっていい？」

恵美の体がブルブルと震えた。

「進を愛せなくてごめんなさい……。」

私は…彼のことずっとずっと好きだったの……。切なくて泣いてばかりいたけど……。いい？」

そう言うのと泣き出した。

「進の血の味を忘れないわ……。」

ずっと夢の中に出てきて…怖くて眠れなかったけど最近ね…笑ってる夢を見るの……。

進もいたよ……。

青い空の夢……。

私も希望を持って生きていいよね……。」「

俺は涙をぼろぼろこぼす恵美を抱き寄せた。

「こんなに…こんなになるまで

悩み思い続けてきたんだ。

きつとわかってきているよ……。」「

俺は進の墓に手を合わせた。

俺が幸せにするから……

もう…許してくれ

すべての責任は俺なんだ……。

二人の墓を後にして……俺は恵美にこの言葉を言った。

「俺についてきてほしい……。

早く元気になって 一緒に暮らそう……。

恵美に見せたいものがたくさんあるんだ……。

ここよりもっと青い空と……

純真無垢な子供たちの笑顔

それから手が届きそうな星の海……。

だけど…環境がいいとは言えないから……

早く元気になれ……。」

恵美の目がキラキラと光っていた。

「はい……。

もう絶対……離れません……。」

俺は恵美を強く抱きしめた。

もうけっして 間違えない・・・。

やっと俺たちの運命のレールが重なったんだから……………。

繋がれる手 一話

今日の夢も怖くなかった。

陽之介と一緒にいてくれるようになった

私は不思議なことに悪夢から解放された。

目が覚めると

下の寝づらそうな簡易ベットで片足出して寝ている。

昨日P Cにメールがきていたのを後から見てしまった。

早く戻ってきてほしいというメールだった。

陽之介がなんて送ったのかは

わからないけれど

ずいぶんここに足止めさせていた。

まだ私は一緒について行けるほどの

体力は戻ってなくて

今までだらけていた体は

筋肉が落ちて

簡単にできたことができなくなっている。

リハビリを頑張りましょう

主治医に言われて 陽之介も一緒になって
付き合ってくれていた。

幸せだよ……。

愛する人がいつも手の届くところにいる

「陽之介……」

「ん？」

「呼んでみただけ……」

「なんだくくあく」陽之介が笑う。

以前の冷たさは今の 彼にはなかった。

彼の冷たさは私を排除しようとしていたからだったのかな……。

「私は大丈夫だから…一度戻って見たら？」
本当は言いたくなかったけど

大人になってそう言った。

陽之介は驚いた顔をしたけど

「恵美と離れたくない……。」「と言った。

私もだよ……。

「でも…向こうで子供たち待ってるんでしょ？」

陽之介の顔が曇った。

「だけど…もう恵美を置いていきたくない。

気には…なってるけれど……

今 俺の一番大切なものは恵美だから……。」「

嬉しかった。

陽之介の胸に顔を埋めた。

「早く元気になろう……。」「

陽之介の大きな手が私の頭を撫でてくれた。

満ち足りた時間

愛する人からの愛の言葉が一杯で

私は生きる気力を取り戻して

生きたい

と思うようになってきた。

早く一緒に 陽之介の大事な仕事場を見たい

だけどなかなか体力は簡単には戻らなかった。

焦る私に

陽之介が優しく囁く……。。

「大丈夫だよ…きっと元気になるよ…」

陽之介の愛に抱かれて

心も体も少しずつ回復していった。

繋がれる手 二話

一緒にいる幸せに酔いしれながら
だけど

陽之介が今 行なくてはいけないところは
ここではない……。

それはわかってる

だけど私と陽之介は同じ気持ちだった。
離れるのが不安だった。

今 離れたら

また…間違いが怒りそうで…怖かった。

不安さに胸がつぶされそうになる……。

だけど……

陽之介は 今とても困ってる気がした。

一緒にいるだけが…愛じゃない……
手は繋げなくても 心が繋がってれば
離れていても…平気……

今は 私はついていくことができない。

いつ…いけるのかも…正直自信もなかった。
遊びに行く所じゃないんだ

そばにいたい
離れたくないけれども

やりがえのある仕事に出会って輝いている陽之介

陽之介が輝く場所はここではない……

「陽之介……」

「ん？」

「私なら…もう大丈夫だよ……。」

陽之介が私を抱きしめた。

「わかってるよ。大丈夫だよ……。
俺はここにいろよ。」

陽之介は私を抱きしめた。

「もう…行って……。
離れてても…今度は心が繋がっているから
大丈夫だよ。」

陽之介の手に力がこもる。

「陽之介が行ってる間 リハビリ一生懸命やって
葉きちゃんと飲んで：頑張ってるから：

陽之介が行くところへ一緒にいけるように
頑張ってるから……

迎えに来て……。」

「やだ……離れたくないんだ……。
残して行けない……。」

「私だって：私だって同じ気持ち……。
離れるのが怖いよ……。

離れたらまた：一緒にいらなくなる気がして……
怖いよ……。」

「俺……ずっと考えてたんだ……。

もう……向こうに行かないよ……。」

陽之介の言葉に驚いた。

「先生に言われたんだ……。

今の恵美をあの環境に連れていくのは難しいだろうって……
だから俺……ここにしようと思う。」

陽之介の気持ちがうれしかった。
本当に・・・すごく・・・嬉しかった
・・・。

繋がれる手 三話

「同情しないでって言ったよね。

足手まといになるの嫌だって言ったよね。

陽之介の人生の重荷になりたくない……。」

わざとに冷たく言った。

陽之介は泣きそうな顔をした。

「恵美……。

そういうことじゃないんだ……。

離れたくないんだ……。」

ママに叱られている子供のような顔

「私だって……。

でもそんな途中はんばでいいの？

もう怖いことないよ……。

心は繋がってるんだから……私たちはいつも一緒だよ。
だから……陽之介のやりたいことをして……。」

陽之介は下を向いていた。

「恵美がいないところに俺の居場所なんかない。」

「子供みたいなこと言わないで。

そういうとこ嫌いよ…。」

益々困った顔の陽之介が めっちゃ可愛かった。

「気が済むまで やってきて。

もしかしてその頃私の体調もよくなって

向こうにいったって暮らせる自信がついたなら…

迎えに来て…。」

それまで…私は私のできることをしながら

陽之介が迎えに来るのを待ってるから…。」

「本当？

ちゃんと待ってくれてるか？

嘘ついていなくなったりしないか？」

「いなくなんかならないよ。

私は…ずっとずっとこの日を待ってたんだもん……。
ちゃんとガンバるから……。」

陽之介もケガしたり危なことしないでね……。私が待ってるっていつも思っていてね……。」

「ありがと……。」

恵美は俺よりずっと年下なのに……

いつも俺を支えてくれるんだな……。

俺は何かしてあげてるんだろうか……?」

私は陽之介の唇に触れた。

「あなたの存在が私の全てです……。」

「愛してる……」

陽之介の冷たい唇が同じ熱さになるには時間がかからなかった。

熱い甘いキス……

二人の決意の口づけだった。

繋がれる手 四話

陽之介の戻る日がせまってきた。

自分で望んだことだったけど
やっぱりさびしかった。

病室の中に 陽之介が溶け込んでいたから
複雑だったけど
私は必死にこらえた。

「メールをしよう。必ず夜と朝はチェックするから…」

そういうと私の病室に小さなPCを持ち込んだ。

設定をしている後姿に
涙が出そうになってこらえた。

笑って送ってやろう

それが私の目標だから……

「小山内さん」主治医が入って来た。

「おはようございます。」

「溝端さんからお話があった外泊の件ですがいいですよ。最近ずいぶん頑張ってるから。二日間くらいなら大丈夫ですよ。薬はしっかり飲んでくださいね。」

私は訳がわからなくて驚いていた。

「ありがとうございます。」

陽之介は子供のようにはしゃいだ。

先生はそう言っていると病室から出ていった。

「どういう事？」

「外泊くく外泊くくく」

陽之介が私を抱きしめた。

胸がキュンとしてドキドキした。

「やゝ!! なんかエッチなんだから……」

でも…私は自分の体が急に心配になった。

「あ…でも自信ない……こんなに痩せちゃって……」

「恵美はエッチだな……」。

そればっかじゃないよ……ってか…それがメインかも……」

陽之介が肩を揺らして笑った。

私もドキドキして頬をおさえた。

「楽しみにしてろっ」 陽之介が頬にキスした。

次の日 朝一で私は レンタカーで迎えにきた
陽之介とドライブに出かけた。

車の中からいろんな風景を見ていたら
本当に華やいだ。

愛する人とみる風景は何に勝るものではない。

それから山のそばにたった大きなホテルの横にある
コテージに向かう。

「うわ…すごい……。」

「夕食は向こうでたべるんだよ。」

「本当？なんて素敵なんだろう…。」

コテージに入ると
すぐベットに入れられた。

「疲れてないもん…時間がもったいない…」
私が体を起こそうとすると

「あとがあるんだから…
少し休みなさい……。」

陽之介の手が私の目を優しく閉じさせて
甘い甘いキスをした。

やっぱりつかれていた私はそのまま少し眠ってしまった。

夢・・・

おねえちゃんが笑ってる……

進も出てきた……

陽之介も出てきてみんなが笑った……

幸せな夢を見て

私はゆっくり目を開けた。

「おじょうさま、お目覚めですか？」

私を覗き込む初音さんに驚いて飛び起きた。

繋がれる手 五話

「初音さん！？一体…どうしたの？
あれ？彼は？どこに行ったの？」

「溝端さんはちょっと御用ができたので
私が変わりに…おじょうさま目を開けられたんですね。
それではお出かけしましょう…」

「え？ちょ…待って…
彼は？どこにいるの？」

私は慌てて陽之介を目で探す。

「すぐにお会いできますから。
参りましょう」

初音に手を引かれて外に出るとホテルの車が待っていた。

何が何だかわからなくて
ホテルに連れていかれて

大きなお部屋に入れられた。

「初音さん・・・何？どうしたの？」

「大丈夫ですって・・・」

おじょうさま：おめでとうございます。」

初音がそう言っているとハンカチで
目がしらをおさえた。

「何が？何言ってるの？」

私は頭が真っ白だった。

その真っ白な頭の中に飛び込んできたのは
真っ白なウエディングドレスだった。

「え・・・！！？うつそ〜お！？」

それから何が何だか考える暇もなく
たくさん的人数の人が現れて私は人形のように
されるがままになっていた。

ドレスを着せられて
状況がわかってきた。

「もしかして・・・？」

初音を振りかえると初音はハンカチで涙をふきながら
うん うん とうなずい。

そして大きな鏡を私の前に持ってきた。

鏡の中にいるのは

真っ白な豪華なドレスに身を包んだ
美しい私だった・・・。

「あ……私？」

「おキレイですよ…………。
お人形見たいですね…………。」

そばにいる人たちが口ぐちにそう言ってくれた。

「溝端さんもまた好きになってくれますよ。」

汚れた私には絶対に似合わないと思っていた

「うっそ……」私は両手で口をおさえた。

本当にキレイだった。

自分で言うのもおかしいけど……
すごく美しい私が立っていた。

「恵美……」

鏡の視界の中に愛する人が立っていた。

真っ白なタキシードに身をつつんだ
陽之介は

王子さまに見えた。

「バカ：何にも言ってくれないから……
ビックリしたよ……。」

私の声は涙声になっていた。

「迎えに参りました」陽之介が車いすを私の隣においた。

「めっちゃ：めっちゃキレイだよ。」

今まで見たものの中で一番：キレイだよ。」

その言葉に涙がポロリと落ちた。

繋がれる手 六話

陽之介の押してくれる車いすに座って
私は感動していた。

「いつの間に？」

「驚かせたかったんだ〜ビックリしただろう？」

「うん…すごく…」

「まだ…まだ…驚くよ……。」

「え？」

ホテルの人に

「よろしくお願いします。」

そう言うと 陽之介はチャペルのドアを開けて入っていった。

「え……。」

「新郎様はあちらでお待ちになりますから……」

ってことは私は一人で入場なのね…。

その時だった

「では…おねがいます。」

ホテルの人の声がして私は振り向いた。

そこには燕尾服を着た父が立っていた。

「パ…パパ………?」

「きれいだぞ。すごくきれいだぞ。」

「もしかしたら……賛成してくれたの?」

「あたりまえだ。

娘の幸せを願わない親はいないだろう……」

「ママは？」

「待ってるよ。」

彼の誠実さに：おまえをまかせたんだ。

いい男だな。

それに気づくまで：ひどいことをしてしまった。

もっとちゃんと向き合ってれば……

でも：これが運命なんだよな。

きつと千夏も喜んでくれているから……

幸せにしてもらいなさい。」

涙がまた落ちた。

「お嫁さん：お化粧が落ちてしまいますよ。」

ホテルの人がまたファンデーションを叩いてくれた。

「では：新郎さまもお待ちかねですから……」

父が車いすを押そうとした時
私が

「パパと一緒に歩きたい」と言った。

「大丈夫か？」父が心配した顔をした。

「パパとヴァージンロード歩いて

彼のところに行きたい。」

私は立ちあがった。

扉が開いて オルガンの音

まっすぐ前には キリストさまと神父様

その前には 愛する陽之介の姿

参列者の席には 母が……。

その後の席には 初音と……それから
志摩ちゃんや真紀子……

数人の高校生の時仲良しだった仲間が6人来てくれた。

「キャ～～～!!!!」

みんなが手を叩いてくれた。

嬉しかった……。

こんなに幸せなことはきっと一生忘れない
絶対忘れない……。

足元がもつれるけど そのたびに父がしっかり支えてくれる

「ありがとうパパ……。」

ママの横を通り過ぎる時 私は母に抱きついた。

「ありがとうママ……。」

母は声をあげて泣いた。

そして陽之介に父が 「よろしくおねがいます。」 と言って
私の手を陽之介の手と

しっかり握らせて頭を下げた。

私は 溝端 陽之介の妻になることを
神の前で誓った。

愛し抜くことを
みんなの前で誓った。

真っ白なベールをあげて 陽之介と見つめ合った。

繋がれる手 七話

「夢を見てるみたい……」

私は目を閉じた。

「これからはこの夢を見なさい……。」

陽之介は私の洋服を一枚一枚脱がしていった。

全裸になった私が月明かりに照らされて
私は慌てて手で体を隠した。

「やだ…恥ずかしい……
痩せっぱっちでしょ……」

「美味しいもの食べたら
すぐ前のようにプクプクするから」

そう言って静かに私の手をおろした。

「キレイだよ……。」

「ありがとう……。」

今日の私のこと忘れないでね。

一緒に暮らしてだらしなくてきたなくなつて
それでも今日の私を覚えていてね。」

「どんな恵美だって忘れないよ。

これから見る新しい恵美が楽しみだよ。」

陽之介の冷たい唇が

私の熱い唇に合わさった。

「恵美……恵美……

あいしてる……あいしてる……」

陽之介はそう言って私を愛してくれた。

私は何度も何度も

陽之介の名前を呼んで

陽之介はそのたびに返事をしてくれた。

快感の中を探る手を

陽之介がしっかりと握ってくれて

「一緒に…行こう…」と言った。

私と陽之介は一つになった。

あの頃の悲しい行為とは違う
恵美という私を愛してくれている

そんな確信ができる行為だった。

私が目を開けた時
陽之介の顔が見えた。

「素敵だったよ……。」

恥ずかしくて目をそらした。

「こら・・・どうして目をそらす？」

「だって恥ずかしいんだもん……」

「しばらくまた抱けないから……今夜と明日は寝かさないぞ」

陽之介はそう言って

「あはは」と笑った。

私は

「期待してるよ。」と言った。

「ありがとう・・・」

親に・・・大変だったでしょう・・・」

「いいや…。恵美のこと愛してるんだよ。
それがよくわかった

ご両親の宝物だから俺は大切に扱うよ。」

「友達まで呼んでくれて……」

「今頃 みんなはホテルで楽しんでるよ。
ご両親がプレゼントしてみんな一泊してるよ。」

「ホントに？」

「初音さんは娘さんご夫婦と孫さんと
楽しんでるし」

「素敵だわ」

私は陽之介の胸に顔を埋めた。

「早く元気になれよ。
すぐにでも迎えにくるからさ。
ちゃんとご両親の言う事聞いて 初音さんから
料理も習っておいてよ、」

「はいはい」

二日間の素敵な時間は甘く濃厚に過ぎていった。

愛を囁き合い 確かめ合い

陽之介の胸の中で眠り 目覚める・・・。

今週末…出発を控えている陽之介との
しばしの別れの時間が寂しくないように

二人でその時間分を共有し合った。

繋がれる手 八話

病院に戻る前に

婚姻届を役所に提出して
私の名前は 溝端 恵美 に変わった。

夢のようだった。
ずっとずっと好きだった人

結ばれることを絶望していた人

それでも忘れられなかった人

その人が私の隣で微笑んでいた。

二日間愛され続けた余韻が体中に残っていた。

「病院に戻ったら ゆっくり休めよ。」

私がクスッと笑うと
陽之介は信号待ちの間に頬にキスをした。

「バカップルじゃん」私が笑う。

病室に戻ると 溝端 恵美に名前が変わっていた。

私たちは顔を見合せて笑ってしまった。

楽しい時間も来週の今頃はお互い一人の
時間を過ごすことになっている。

ふとそれを思い出すと泣きそうになるけれど
笑顔 笑顔：

陽之介を心配させないように
絶対に笑顔で送り出すんだ。

それが妻としての最初の役目
夫を仕事に送り出す

それが私のすぐになければいけない試練だった。

考えるだけで

涙が出そうになる。

鼻の奥がツンとして・・・痛くなる・・・。

だけど 泣いたりなんかしたら
陽之介が心配してしまうから・・・
私は明るく元気に 陽之介を安心させて・・・

出発してから泣けばいい

だってこんな幸せなプレゼントを送ってくれたんだもん。

時間ばかりが目に入って 眠る時間ももったいなかった。

きっと陽之介も同じ気持ちなの
が 手にとるようにわかる。

私たちは笑顔で 笑って 笑って

陽之介の出発の日を迎えた。

「空港には行かないからね……。」

「うん…。その代わり
帰ってくる時は迎えに来てくれよ。」

「いつ？」

「そうだな。片付けばしょっちゅう帰るよ。」

「ダメだよ。お金がもったいないからね。
旦那様には一杯働いてもらわなくっちゃ。」

「さすが主婦だな。」

「ケガだけ…病気だけ…しないでね。
危ない場所には行かないでね……。」

治安の不安定な国だから　それが心配だった。

「わかってる。」

俺だけの体じゃないからさ……。

一年に一回は絶対帰ってくるから
長い休みもらってさ……。」

「一回……」鼻がツンとしたから気持ちを入れ替える。

「待ってるよ。」

そのまえに私が元気になったらね……
迎えに来てね。」

「それまで落ち着く場所を探しておくよ。」

携帯が鳴って父から迎えに来ていると電話が入った。

「じゃあ……行ってくるよ。」

いい子にして……待ってろよ……。」

熱いキス……とろけそうになった。

「ありがとう……。」

俺を送り出してくれて……。辛い思いさせてごめん……。」

「妻として夫の仕事をサポートするのは
あたり前でしょう。

いってらっしゃい……。。」

陽之介は荷物を持って

「いってきます。」と元気に言った。

「いってらっしゃい。」

私は元気に満面の笑顔で送り出した。

繋がれる手 九話

それから二時間後だった。

父から電話がきて

「今 離陸したよ。

おまえの分まで ママと飛行機が見えなくなるまで
見送ってきたよ。」

それまで我慢していたものがプチッと音を立てた。

「うん…ヒック…ヒック…

無事に…ヒック…出発したのね…ヒック…」

「偉かったな。

カレ褒めていたよ。

恵美は立派な妻ですって……。」

嬉しくて寂しくて

どっちで泣いてるのかわからないけど
なんとか泣かずに

送り出したという清々しい気持ちだった。

「頑張るよ

絶対に元気になって：早く彼のところに行きたいから。」

「頑張りなさい。」父が優しい声で言った。

その夜は 朝まで泣いた。

さっきまであった陽之介の荷物がなくなってしまった
この病室がとってもさびしかった。

次の朝 もう泣かないことを誓った。

それからいつもの毎日に戻った。

進んでリハビリに参加して 戻ってきても自分でできることをやっていた。

薬もきちんと飲んだ。

少しづつだけど悪い数値も正常に戻りつつあった。

毎晩メールがきていた。

その中に真っ青な空の写真があった。

「恵美に見せたい」陽之介の写真をPCの壁紙にかえた。

自分のできることは
早く元気になること

自分の足でしっかり歩けること

体力をつけること……。

それからしばらくして退院して実家に戻った。

初音さんに家事を習って
料理を教わった。

それなりに楽しい毎日を過ごしていた。

作った料理の写真をメールで送ったり
陽之介からリクエストのあった料理を習ったり

充実していた。

おねえちゃんの遺影にまっすぐむきあえるように

「ありがとう

おねえちゃんが彼と私を再会させてくれたって
思ってるよ……。」

私は遺影のおねえちゃんの年をいつの間にか追いこしていた。

「これからは恵美だよ。

おねえちゃんにそっくりじゃない

誰も知らない恵美になって年を重ねていくわ。」

陽之介に会う日まで

あと何日あるだろう……。

今夜もメールで愛を囁きあおう……。

会えない時間は 愛を育ててくれる・・・。
どんなにお互いが大切なのかを 教えてくれる……。

繋がれる手 十話

小説本文 青い空の下

私は洗濯物を干しながら
真っ青な空を見上げている。

この空はずっと繋がっているんだよね……。

父や母 初音さんに……友達に……そして陽之介に……

私に……。

「ただいま〜」

慌てて下を見ると 愛おしい人の笑顔があった。

「おかえりなさい。」

私は大慌てで階段を飛び降りる。

私は玄関のドアを開けて 陽之介に抱きついた。

玄関先で熱いキスを交わして
やっと家の中に入ってくる。

そして大きな声で

「ただいま~~~~あ!!!!」と叫んだ。

「キャ~~~~ッ!!」黄色い声とともに現れた我家の三人の息子たち

「パパ~~~~お帰り~~~~」

陽之介の逞しい脚にまとわりついて 三人が思うままに
体にぶらさがってリビングに入ってくる。

「こらゝパパ疲れてんのよゝゝ」

離れなさいよゝゝ」その中をかき分けて私が陽之介に抱きついた。

「あゝゝずるいゝゝゝ」三人からの猛烈なブーイングの中で　もう一度短いキス

「俺もゝゝ俺もゝゝ」三人にせかされて

陽之介は三人を抱き上げてキスをしまくった。

そして私も三人にキスの嵐をお見舞いしてやる。

しばらく家の中はキャーキャーと大騒ぎ

やっと三人が　陽之介から離れて遊びだすのを待って
私は彼の大きな手を掴んだ。

「会いたかったよ…」

「俺も・・・ずっと恵美のこと考えてたよ…」

しっかり手を繋いだ。

「愛してるよ。」

三人が一斉に私たちの方を見てまた駆けつけて
小さな手が加わって しっかり5人で手を繋いだ。

大切な私の宝物だよ…………。

繋がれる手 十話（後書き）

終わりました〜おつきあいいただいたみなさま 感謝します〜。

貴重な感想をいただいたみなさま ありがとうございます。

できましたらまた…いただけたら嬉しいです〜。

主人公をずい分苦しめてしまいました…

苦しい分だけ

願いが叶うのは素敵なことです。

それがうまく文にかけたかどうかは…ちょっと不安であります。

このサイトで出した初めての作品です。

これからもどんどん出していくつもりでいますので
応援していただいただけたら幸いです〜。

サイトを訪れてくれる 読者さんも増えてきて励みになりました。

これからお付き合いお願いします〜

途中予約していた話を変更したのに

編集を実行を押さなかったばかりに…
変更前の話で行ってしまいました。
話が合わなかったと思います。
ご迷惑かけた方…ごめんなさい…

2011・1・12

L a v i a

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7468o/>

激愛

2011年1月19日12時34分発行